

大正七年二月六日印刷

大正七年二月九日發行

正 誤

頁	表	欄	行	誤	正
6	略説	1	12	北海→61近畿區17.64	北海道→7.64近畿區→7.64
9	"	2	37	9.01%	9.01 $\frac{0}{100}$
13	"	2	3	487%	487 $\frac{0}{100}$
28	"	1	5	電氣通信機	電氣通信機
73	"	1	14	5.19 $\frac{0}{100}$	5.19%
35	23	10	56	27.1	29.1
131	89	10	12	324,537	324,650
168	115	1	53	鐵釘(金器ヲ脱セサル)レ一	鐵釘(金器ヲ脱セサル)
168	115	1	54	ル	レール
171	116	5	47	"	哥
178	117	5	11	"	斤
178	117	5	41	斤	"
189	118	5	5	英領亞米利加	加拿大
242	152	4	3	275,710	272,710
243	153	說明中		大正三年度	大正四年度
250	160	表 題		過 其 自 失 他 殺	過 自 其 失 殺 他
250	160	2	15	1,724	1,124
274	188	1	12	同四十五年大正元年	同四十五年大正元年度
283	201	2	12	2,488	2,480
284	201	2	60	2,488	2,480
289	205	表 題		金額費戻 費戻	金額戻戻 繰戻
342	296	2	50	4,06,2064,068	4,063,204,068
386	340	4	9	2,854	1,854
386	340	3	8	4,251	3,251
393	350	16	12	240,953	340,953
532	468	說明中		第五二四表	第四八四表
542	495	1	21	市谷 "	豊多摩 "
644	579	5	7	4,382	6,320
646	581	10	17	—	1
646	581	10	18	—	—
675	622	說明中		「本表漁獲物概算額ニハ捕鯊ヲ含 マス」ハ消	
679	628	表 題		大正四年	大正五年
680	630	6	12	262,884	162,884
680	630	6	13	24,700,160	24,600,160
681	630	3	38	46,769	36,769
681	630	3	54	2,374,246	2,384,246
681	630	3	59	74,465,839	74,365,839
681	630	3	62	74,556,805	74,456,805
701	671	6	1	4,663	4,633
701	671	6	13	38,041	38,011
702	673	自至	11 } 13 } 16 }	— — —	3,303,133.22
726	722	5	16	238,589	233,589
752	780	12 } 13 }	12 } 13 }	甘藷(地瓜)、落花生ノ收穫高ニ 單位支那斤ヲ脱ス	
755	787	1	17	動物	動物

局

次 郎

町六番地

九番

三 郎

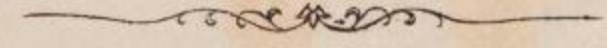
町四番地

刷 所

丁四番地

電話京橋一千五百四十七番

內閣統計局編纂



日本帝國第三十六統計年鑑

大正七年一月刊行



緒言

統計年鑑ハ行政各部ノ統計ヲ本局ニ蒐集シ之ヲ其ノ種類ニ依リテ數十科目ニ分類シ帝國全般ノ形勢ヲ大觀スルノ目的ヲ以テ編纂シタルモノニシテ明治十五年以降年々公刊シ今ヤ第三十六年鑑ヲ出スニ至レリ

行政各部ノ統計ヲ公刊シテ廣ク社會ニ頒布スルニ於テハ全般ニ亘レル統計年鑑ハ唯其ノ梗概ヲ記載スルニ止メテ可ナリト雖本邦官府統計ハ一般社會ニ頒布セラル、モノ甚尠ク國民ハ統計年鑑ニ依リテ始メテ行政各部ニ關スル統計ヲ知ルヲ得ルノミ、故ニ統計年鑑ノ編纂方法ハ自ラ歐米諸國ト異リ各廳統計中一般社會ノ知ルヲ要スル事項即チ其ノ社會統計ニ屬スル部分ハ努メテ之ヲ記載シ且既往ノ推移ヲ明示センカ爲ニ成ルヘク多ク累年ノ數ヲ列記シ以テ覽者ヲシテ遺憾ナカラシメシコトヲ期シタリ而シテ第三十六年鑑ハ其ノ科目ヲ分ツコト總テ三十八ナリ

統計年鑑ノ記載事項ハ學術ノ進歩ニ伴ヒ世運ノ推移ニ鑑ミ常ニ之カ更正ニ努メ以テ實社會ノ活用ニ適セシメサルヘカラス故ニ本局ニ於テハ隨時各科目ノ更正ニ就テ審査攻究ヲ怠ラス、即チ第三十六年鑑ニ於テハ全編ニ亘リテ繁冗ヲ芟除シ事ヲ簡明ナラシメタルモノ尠ナカラス

地方別ニ記載セル事項ハ之ヲ統計區畫別又ハ之ニ準スヘキ區畫別ニ排列シタリ、但其ノ區畫ノ要計ハ二三科目以外ニハ之ヲ記載セス、

歐米文明國ノ統計書ニハ其ノ内容ノ梗概ヲ記述シ卷頭ニ掲ケ以テ覽者ノ活用ニ便スルヲ常トス、然ルニ本邦ノ諸統計書ハ從來殆ト此ノ事ナク單ニ數字表ヲ掲クルニ止メタリ我統計年鑑モ亦然リ、是本邦ノ諸統計カ實社會ト乖離スルモノアルノ一原因ニシテ寔ニ局ニ當ル者ノ遺憾トスル所ナリキ、仍テ第三十六年鑑ハ其ノ内容ニ就テ主任各統計官ヲシテ梗概ヲ記述セシメ之ヲ卷頭ニ掲ケタリ、但各科目中各廳ノ根本調査方法ニ就キ遺憾ナキ能ハサルモノアリ隨テ計數ノ正否疑ハシキモノナキヲ保セスト雖今ハ各廳ノ報告ニ信ヲ措キ記述セシメタリ、匆卒ノ起草ニシテ推敲ノ時ナク精粗統一ヲ闕クモノ多ク從テ不完全ノ譏ヲ免レサルヘシト雖庶幾クハ以テ活用ノ一助ト爲スニ足ラン乎

大正六年十二月

內閣統計局長 牛塚虎太郎 識

內閣統計局圖書



日本帝國二十六年十二月

大正五年一月廿一日



凡 例

本編ハ各官、公署ノ報告書類並是等ヨリ蒐集セル材料ニ就キ其ノ必要ナル事項ノ計數ヲ轉載
摘録シ又ハ若干集計ヲ施コシテ編纂セリ而シテ其ノ比例、平均等ニ至リテハ右報告等ヨリ轉載
セルモノ之アリト雖多クハ本局ニ於テ算出シタル所トス

本編ニ掲クル諸種ノ事項ハ之ヲ綜合シテ三十八科目ト爲セリ即次ニ示ス所ノ如シ

- | | | |
|---------------|-----------------|-------------|
| 1. 土地 | 14. 交通 | 27. 監獄 |
| 2. 氣象 | 15. 通信及郵便爲替貯金事業 | 28. 陸軍 |
| 3. 人口 | 16. 貨幣及度量衡 | 29. 海軍 |
| 4. 農業 | 17. 銀行及金融 | 30. 財政 |
| 5. 家畜及家禽 | 18. 保險 | 31. 爵位勳章及褒章 |
| 6. 山林及狩獵 | 19. 官廳使用現業員共濟組合 | 32. 議員選舉 |
| 7. 漁業及製鹽 | 20. 教育及慈惠 | 33. 官吏公吏及恩給 |
| 8. 鑛業 | 21. 災害 | 34. 北海道 |
| 9. 工業及賃金 | 22. 衛生 | 35. 朝鮮 |
| 10. 外國貿易 | 23. 教育 | 36. 臺灣 |
| 11. 內國商業及會社 | 24. 社寺及教會 | 37. 樺太 |
| 12. 産業組合及同業組合 | 25. 警察 | 38. 關東州 |
| 13. 電氣事業及瓦斯事業 | 26. 裁判及登記 | |

以上ノ内北海道科ニハ主トシテ府縣ト例ヲ異ニセル同道特種ノ事項ヲ掲載シ其ノ他ハ府縣ノ
事實ト共ニ之ヲ他ノ各科ニ分載セリ之ニ反シテ朝鮮、臺灣、樺太及關東州ニ關スル事項ハ各科
ヨリ分離スヘカラサルモノ、外一切之ヲ各科ニ掲載セスシテ朝鮮ニ關スル事項ハ朝鮮科ニ臺灣
ニ關スル事項ハ臺灣科ニ樺太ニ關スル事項、關東州ニ關スル事項ハ亦各其ノ科ニ全部ヲ掲載セ
リ蓋シ朝鮮以下四科ニ屬スル材料ハ府縣ト其ノ調査及表章ノ方法ヲ異ニスルモノ往々之アルヲ
以テナリ

本編各科ニ於ケル各項ノ事實ニシテ其ノ概要ニ屬スルモノハ遠ク既往ニ遡リテ累年ノ數ヲ列
舉シ其ノ最近年ニ係ルモノ即主トシテ大正五年又ハ同四年ニ係ルモノハ概ネ土地、時及各種ノ
事項ヲ細別掲載セリ

本編ニ於テ全國ト稱スルハ主トシテ北海道及三府四十三縣ニ屬スル事實ナリト雖往々朝鮮、
臺灣、樺太ノ各植民地全部若ハ其ノ一部ヲ包含スル場合之ナキニアラス要スルニ是等ハ孰モ次
表ニ於テ其ノ地方別ヲ掲クルヲ以テ其ノ異同ヲ識別シ得ヘシ

土地ノ區別ニ依ル事項ヲ掲クル場合ニ於テ其ノ土地配列ノ順位ハ隣接地方相互ノ現象ヲ對照比較スルニ便ナラシメンカ爲東北ニ位スル地方ヨリ西南位ニ在ル地方ニ向テ順次配列シ而シテ特ニ重要ナリト認メタル事實ハ數地方ヲ一團トセル區域(統計區畫)ノ要計ヲ掲出セリ但シ氣象科裁判及登記科等其ノ他二三ノ科目中土地ノ配列右ノ例ニ依ラスシテ各科特有ノ配列ニ依レルモノ亦之アリ

上記統計區畫各區ニ屬スル地方ハ次ニ示ス所ノ如シ

1. 北海道
2. 東北區—青森縣 岩手縣 秋田縣 山形縣 宮城縣 福島縣
3. 關東區—茨城縣 栃木縣 群馬縣 埼玉縣 千葉縣 東京府 神奈川縣
4. 北陸區—新潟縣 富山縣 石川縣 福井縣
5. 東山區—長野縣 岐阜縣 滋賀縣
6. 東海區—山梨縣 静岡縣 愛知縣 三重縣
7. 近畿區—京都府 兵庫縣 大阪府 奈良縣 和歌山縣
8. 中國區—鳥取縣 島根縣 岡山縣 廣島縣 山口縣
9. 四國區—德島縣 香川縣 愛媛縣 高知縣
10. 九州區—大分縣 福岡縣 佐賀縣 長崎縣 熊本縣 宮崎縣 鹿兒島縣
11. 沖繩縣

本編諸表標題及表中ニ某年又ハ某年度ト書スルハ一周曆年間及一周年度間ノ事實ニシテ某年某月某日ト書スルハ該日現在ノ調査ナリ

本編實數ノ單位ハ概ネ「石」「圓」「斤」「貫」「反」「畝」「哩」「鎖」等ニ止メ以下ノ端數ハ之ヲ切捨テ又ハ四捨五入セリ高級數位ノ計數ハ往々千ヲ以テ單位トシ以下ヲ省キタルモノアリ又零ヲ以テ示スハ其ノ數量一位ニ達セサルモノナリ

本編中人口ニ對スル比列ノ算出ニ於テ人口調査ノ結果ニ依ル現住人口ハ調査ノ方法上ヨリ起レル誤謬ヲ包含スルヲ以テ之ヲ訂正セル乙種現住人口(乙種現住人口ノ由來及性質ハ畧説人口科ノ部ニ詳ナリ)ヲ用ヒタリ但シ乙種現住人口調製以前(明治十七年以前)ノ各年及全國ノ事實ニ屬スルモノ及本籍人口ニ依ラサルヘカヲサルモノハ本籍人口ヲ用ヒタリ

本編ニ掲クル計數ノ出所ハ之ヲ「計數出所目錄」トシテ其ノ書目ヲ舉ケ尙精密ナル計數ヲ知ラントスル者ノ便ニ供セリ

本編中貿易諸表其ノ他往々外國ノ度量衡ヲ用フルモノアリ彼我ノ對照ヲ示セハ次ノ如シ

度量衡比較及合數

メートル法

度	
耗 [ミリメートル] (メートルノ千分ノ一) 3.30000
厘 [センチメートル] (メートルノ百分ノ一) 3.30000
粉 [デシメートル] (メートルノ十分ノ一) 3.30000
米 [メートル] 3.30000
秆 [キロメートル (千メートル)] 550.000 9.10.000

量

耗	ミリリットル (立方センチメートル)(リットルノ千分ノ一) 0.055435
厘	[センチリットル] (リットルノ百分ノ一) 0.55435
粉	[デシリットル] (リットルノ十分ノ一) 0.55435
立	[リットル] (升ノ二千四百〇一分ノ千三百三十一) 0.55435

衡

耗	[ミリグラム] (キログラムノ百萬分ノ一) 0.26667
厘	[センチグラム] (キログラムノ十萬分ノ一) 2.66667
粉	[デシグラム] (キログラムノ一萬分ノ一) 2.66667
瓦	[グラム] (キログラムノ千分ノ一) 2.66667
耗	[キログラム] (貫ノ十五分ノ四) 0.26667

日本採用ヤード、ポンド法

度

吋	[インチ] (ヤードノ三十六分ノ一) 0.83820
---	--------------------	---------------

呎	[フート] (ヤードノ三分ノ一) 1.00584
碼	[ヤード] (尺ノ一萬二千五百分ノ三萬七千七百十九) 3.01752
鎖	[チェーン] (二十二ヤード) 66.38544
哩	[マイル] (千七百六十ヤード) 5310.835
		町間尺 14.45.0.835 里 0.40979

量

瓦倫	[ガロン] (升ノ五萬分ノ十萬四千九百二十三) 2.09846
夸	[オンス] (ポンドノ十六分ノ一) 7.56000
封度	[ポンド] (貫ノ三千二百二十五分ノ三百七十八) 120.9600

衡

噸	[トン] (二千二百四十ポンド) 270.9504
以上ハ農商務省中央度量衡檢定所編纂ノ度量衡比較表ニ據ル		
哩	[マイル] 16.975
佛噸	 266.6667
擔	[ピコル] 100

合數

哥	(グロツス) 144
打	(ダズン) 12

東京商會
會議所
圖書之印

目錄概覽

科 目	略說ノ頁	表號	統計表ノ頁
I. 土 地	1—2	1—7	2—9
II. 氣 象	2—3	8—9	10—19
III. 人 口	3—11	10—49	20—81
IV. 農 業	11—15	50—57	82—95
V. 家畜及家禽	15—16	58—69	96—104
VI. 山林及狩獵	16—18	70—74	105—110
VII. 漁業及製鹽	18—21	75—81	111—123
VIII. 鑛 業	21—22	82—88	124—130
IX. 工業及賃金	22—29	89—109	131—160
X. 外國貿易	29—32	110—124	161—203
XI. 內國商業及會社	32—34	125—136	205—225
XII. 產業組合及同業組合	34—35	137—138	226—229
XIII. 電氣事業及瓦斯事業	35—36	139—150	230—241
XIV. 交 通	36—40	151—190	242—275
XV. 通信及郵便爲替貯金事業	40—42	191—212	276—293
XVI. 貨幣及度量衡	42—43	213—218	294—298
XVII. 銀行及金融	43—50	219—319	300—364
XVIII. 保 險	50—51	320—321	366—371
XIX. 官廳使用現業員共濟組合	51—52	322—332	372—376
XX. 救育及慈惠	53—54	333—338	377—383
XXI. 災 害	54—55	339—341	384—387
XXII. 衛 生	55—56	342—350	388—396
XXIII. 教 育	57—60	351—401	397—447
XXIV. 社寺及教會	60—61	402—408	448—453
XXV. 警 察	61—63	409—420	454—464
XXVI. 裁判及登記	63—72	421—475	466—514
XXVII. 監 獄	72—76	476—495	515—542
XXVIII. 陸 軍	76—79	496—509	543—555
XXIX. 海 軍	79—81	510—522	556—567
XXX. 財 政	81—87	523—567	568—633
XXXI. 爵位・勳章及褒章	87—88	568—577	635—642
XXXII. 議員選舉	88—90	578—584	643—649
XXXIII. 官吏公吏及恩給	90—91	585—598	650—663
XXXIV. 北海道		599—605	664—666
XXXV. 朝 鮮		606—665	668—696
XXXVI. 臺 灣		666—744	698—738
XXXVII. 樺 太		745—769	739—747
XXXVIII. 關東州		770—815	749—767

日本帝國第三十六統計年鑑

略 説

I. 土 地

本邦ノ極南ハ臺灣阿緞廳至厚里七星岩南端(北緯 21.45度)ニシテ極北ハ千島國占守郡アライト島北端(北緯 50.56度)ナリ、又極東ハ千島國占守郡占守島東端(東徑 156.32度)ニシテ極西ハ澎湖廳水按沙花嶼西端(東徑 119.18度)ナリ。故ニ本邦ハ南北 29.11緯度、東西 37.24徑度間ニ在リ、朝鮮ノ亞細亞大陸ノ半島ナルト、樺太ノ露領ト接續セルトフ特別トシ、本州、四國、九州、北海道、臺灣ノ五大島及之ニ附屬セル430有餘ノ小島ヨリ成ル。

【面積】 大正六年首現在ノ本邦全版圖ノ面積ハ 43,458方里ナリ此ノ中内地ノ面積ハ 24,794方里ニシテ總面積ノ 57.05%ヲ占ム。本邦領土發展ノ狀勢ヲ略叙セシニ、明治二十七年マテ上記内地ノ面積アルニ過キサリシカ、二十八年ニ臺灣及澎湖島ヲ領有シテ 2,332方里ヲ増シ、三十九年ニ樺太ヲ得テ又 2,209方里ヲ増シ、更ニ四十三年ニ韓國ヲ併合シテ 14,123方里ヲ加ヘタリ。然レハ二十七年現在ノ面積ヲ百ト爲シテ指數ヲ求ムレハ臺灣領有後ハ 109ニ、樺太領有後ハ 118ニ、韓國併合後ハ 166餘ニ當レリ。

世界陸地ノ總面積 8,951,462方里(佛國ノ調査ニ基キ換算ス)ニ對スル本邦總面積ハ 4.86%ニ當リ、内地ノ面積ハ 2.77%ニ當ル。又亞細亞ノ總面積 2,708,846方里(前同斷)ニ對スル本邦ノ總面積ハ 16.04%内地ノ面積ハ 9.15%ニ當レリ。歐米諸國(植民地ヲ除ク)ヲ我方里ニ換算スレハ大貌列強 20,467方里、佛蘭西 34,783方里、伊太利 18,583方里、獨逸 35,063方里、奧地利匈牙利 40,551方里、歐洲露西亞 333,362方里、北米合衆國 508,292方里ニシテ、之ガ本邦内地ノ面積百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、大貌列強ハ 82.5佛蘭西ハ 140.3伊太利ハ 74.9獨逸ハ 141.4奧地利匈牙利ハ 163.6歐洲露西亞ハ 1,344.5北米合衆國ハ 2,050.1ニ當レリ。

【行政區劃】 大正五年末現在ノ内地ノ行政區劃 1道 3府 43縣及 636郡ハ前年ト異ル所ナク、市ハ 74市ニシテ前年ニ比シ 3市ヲ増シ、町ハ 1,307町ニシテ前年ニ比シ 11町ヲ増シ、村ハ 10,911村ニシテ前年ニ比シ 9村ヲ減シタリ。

内地ノ面積ハ地方別ニ見レハ北海道ノ最大ナルヲ特別トシ、之ニ次テ大ナルハ岩手縣ニシテ福島、長野、新潟、秋田、岐阜、山形、青森等ノ諸縣ハ其ノ大ナルモノニ屬ス、又最モ小ナルハ大阪府ニシテ香川縣之ニ次キ、東京府及沖繩、神奈川、佐賀ノ諸縣ハ其ノ小ナ

ルモノニ屬セリ。
 【民有地】 大正六年一月一日 現在ノ内地ニ於ケル民有地ノ總反別ハ 1,817萬町ニシテ總面積ノ 47.1%ニ當リ、此ノ比例數ヲ既往ニ比スルニ三年前ノ大正三年ヨリハ 2.4%高ク、八年前ノ明治四十二年ヨリハ 6.9%高ク、十三年前ノ明治三十七年ヨリハ 9.1%高シ。即チ年ヲ逐フテ民有地ハ遞増スルナリ。又此ノ民有地ヲ有租免租ニ依リテ別チ分節比例ヲ求ムレハ有租地 83.0%免租地 5.3%免租年期地 11.7%ナリ。既往ニ比スルニ有租地ノ比例數ハ年毎ニ低下スルモノ、如クナルモ、是畢竟免租年期地ノ增加ニ由ル比例上ノ影響ナリトス。

大正六年首現在ノ民有有租地ヲ地目別ト爲セハ田 290萬町、畑 242萬町、宅地 39萬町、山林 799萬町、原野及牧場 185萬町、其ノ他ノ地 3萬町ナリ。之カ民有々租地總數ニ對スル分節比例ヲ求ムレハ田 19.22%、畑 16.05%、宅地 2.57%、山林 52.98%、原野及牧場 8.96%、其ノ他ノ地 0.22%ニ當ル、又之ヲ總面積ニ比スルニ、田ハ 7.5%、畑ハ 6.3%宅地ハ 1.0%、山林ハ 20.7%、原野及其ノ他ノ地ハ 3.6%ナリ。此ノ總面積ニ對スル比例數ヲ既往ニ比スルニ田、畑、山林共ニ増加シ、就中山林ハ其ノ増加稍著明ナリ。併シナカラ人口増加ノ度ハ是等民有地ノ増加度ニ超越シ、大正五年末人口ニ對スル六年首ノ反別ハ田 5畝8步、畑 4畝12步、宅地 21步、山林 1反4畝14步ニシテ、之ヲ明治二十一年ノ同一比例ノ田 7畝、畑 5畝22步、宅地 29步、山林 1反8畝14步ナルニ比スレハ其ノ差決シテ大ナラストセス。

獨逸帝國統計年鑑ノ收載スル所ニ依リ、歐米諸國ノ總面積ニ對スル農用地ノ面積比例ヲ算出スレハ、大貌列強ハ 77.20%(1913年)伊太利ハ 76.25%(同上)、佛蘭西ハ 69.53%(1912年)、獨逸ハ 64.84%(1900年)、奧地利匈牙利ハ 52.54%(1912年)、歐洲露西亞ハ 40.80%(1887年)、北米合衆國ハ 25.14%(1910年)、ナリ。之ニ基キ農用地ノ面積ヲ(本邦ノ反別ニ)算出シ、各調査年ノ人口ヲ以テ除シ、人口ニ對スル農用地ノ反別ヲ出セバ、大貌列強ハ 3反2畝23步、伊太利ハ 6反2畝4步、佛蘭西ハ 9反4畝26步、獨逸ハ 5反4畝23步、奧地利匈牙利ハ 6反6畝8步、歐洲露西亞ハ 2町2反3畝26步、北米合衆國ハ 2町1反4畝28步ニ當レリ。茲ニ所謂農用地ハ農耕地ニ外牧場、花

園及遊園、葡萄園ヲ含ムカ故ニ之ヲ本邦ノ田畑合計ト比較スルハ不倫ナリ、仍テ田畑ニ加フルニ牧場及原野ノ面積ヲ以テシ人口ニ對スル比例ヲ求ムレハ、即チ一反2款2歩ナル係數ヲ得、是ヲ以テ上記各國ノ係數ト嚴密ニ同性質ナリト言フ能ハサレトモ、我カ農政上一顧ニ値スルモノアルヲ信ス。

大正六年ニ於ケル地方別總面積ニ對スル田畑合計ノ民有耕地反別ノ比例ハ、最も高キヲ埼玉縣ノ39.9%トシ、大阪府ノ38.4%之ニ次キ、千葉縣ノ35.8%、茨城縣ノ35.0%、福岡縣ノ33.4%、神奈川縣及愛知縣ノ共ニ31.8%ナル等其ノ高キモノニ屬シ、最も低キハ北海道ノ0.5%ニシテ和歌山縣ノ9.8%之ニ次キ、岩手縣ノ10.0%、岐阜縣ノ11.0%、秋田縣ノ11.6%、青森縣ノ12.4%、山形縣

ノ12.9%等其ノ低キモノニ屬セリ。

大正六年首ノ民有免租地ヲ地種別ニ見ルニ、既往ニ比シ増加著シキモノハ學校敷地、鐵道用地及軌道用地、保安林、道路及水道用地トス。

大正六年首ノ民有免租地ヲ地種別ニ見ルニ、既往ニ比シ免租年期地ハ總數ニ於テ少シク減シタリ、是新開地及造林地ハ寧ロ少シク増加シタルモ荒地ノ減シタルニ由ル。輕租年期地亦總數ニ於テ少シク減シタリ、是地目變換地及耕地整理地ノ地價据置地ノ少シク増加シタルモ、低價地、開墾地及開拓地ノ減シタルニ由ル、又特別免租年期地ナル北海道特別年期地ハ少シク増加シ、同東京市區改正條例ニ依ル下附地ハ依然増減ナシ。

II. 氣 象

大正五年ノ氣象ヲ略述スレハ下ノ如シ。

【氣壓】海面ノ度ニ更正セル一年平均氣壓ハ、支那方面ニ於テ高ク764耗ニ上リ、臺灣方面ニ於テ低ク759耗以下ナルアリ、九州以北ハ概ネ761耗以上ナルモ東海ノ一部ニハ其ノ以下ノ地アリ、北海道樺太ニ於テハ760耗ニ下リタル地アリタリ。又之ヲ月別ニ見レハ一月最も高ク八月最も低キコト各地概ネ一様ニシテ、其ノ高低ノ差最も大ナルハ大連ノ15.4耗、長崎ノ114.4耗ニシテ最も小ナルハ青森ノ3.7耗ナリ。

【氣溫】一年平均氣溫ハ臺灣、琉球ニ於テ22度以上24.4度ヲ示シ、累年平均ヨリ僅ニ高ク、九州、四國、中國、近畿、東海ハ概ネ15—16度ニシテ累年平均ヨリ多少高位ニ在リ、東山ノ遠海地方及關東ハ11度以上14度ヲ超ヘタル地アリ、是亦累年平均ヨリ高ク、裏日本ニ於テハ金澤以南ハ14度ヲ下ラス、伏木以北ハ13—14度ナリ東北地方ハ表裏共ニ11度、北海道ハ概ネ6度ニシテ樺太ハ5度ニ達セス、支那ハ中江蘇ノ3.4度ヨリ漢口ノ16.1度、杭州ノ16.3度ナルアリ、是等ノ地ハ概ネ累年平均ヨリ高ケレトモ、亦往々累年平均ヨリ低キ地アリ。月別ノ平均氣溫ヲ見レハ、臺北及高知ニ於テハ冬ノ各月ノ平均ヨリ高ク夏ノ各月ハ平均ト殆ト差ナカリシガ、本州ニ於テハ表日本モ裏日本モ四季ノ各月ヲ通シテ平均ヨリ高ク、殊ニ北海道及樺太ハ却テ夏季ノ各月ニ高キノ觀アリキ。併シナカラ本年ノ氣溫ガ平均ニ比シテ著シキ高度ヲ示シタルニアラス、即チ各測候所ニ於ケル最高極ハ既往ノ各年ヲ超越シタルモノナキニ依リテ之ヲ知り、又最低極ノ既往ノ各年ヲ超越シタルモノナキニ依リテ甚シキ嚴寒ナカリシヲ知ル、要スルニ一般ニ氣候溫和ナリシナリ。又日々最高平均氣溫及同最低平均氣溫ニ就テ見ルニ、各地一般ニ各月最高平均ハ平均ヨリ高ク、最低平均モ亦平均ヨリ高カリキ。夫故ニ氣溫ノ平均較差ハ平均ニ比シ大ナルコト少ナカリシナリ。

但シ本年ノ氣溫ガ概シテ平均ヨリ高カリシハ秋初マテノコトニシテ仲秋以後ハ其ノ度合一般ニ低下セルモノ、如シ。

【濕度】一年平均ヲ以テ見レハ、各地概ネ70—80%間ニ在リ、80%ヲ超ヘタルハ臺灣及沖繩ノ四五地、東海ニ於テハ銚子、石卷遠海地ニ於テハ八木、高山、筑波山、裏日本ニ於テハ境、宮津、舞鶴、福井、秋田、北海道ニ於テハ北部及東海岸ノ數地及沙那、樺太ニ於テハ大泊、敷香等ニシテ、敷香ノ83%ヲ最大トス。又朝鮮ニ於テハ60%若クハ70%以上ナルアリ、支那亦然リ。要スルニ臺灣ノ南部、沖繩ノ南部、九州、四國ノ大部分、近畿地方、奥羽ノ北部、北海道、樺太及朝鮮、支那ノ各地ハ平均ニ比シテ過乾ノ狀ニ在リ、其ノ他ノ各地ハ過濕ノ狀ヲ呈セリ。又各月ノ平均濕度ヲ平均ニ比スレハ冬ヨリ春ニカケテ過乾ナリシ地多ク、夏ヨリ秋ヲ經テ冬ニ至ルマテ過濕ナリシ地多キカ如シ。即チ一年平均ニ於テ過乾ナリシ地ハ春ノ過乾ノ度強ク、夏秋ノ過濕少ナカリシ地ニシテ、又過濕ナリシ地ハ、春ノ過乾著シカラスシテ、夏秋ノ過濕強カリシニ因ルカ如シ。

【日照時】一年平均ノ可照時數ニ對スル百分比比例ヲ見ルニ、裏日本ノ各地及遠海地方ノ數地ニ30—40%ノ地アレトモ、多クハ40%以上ニシテ臺灣、沖繩ノ各地、瀬戶内海地方、北海道ノ數地、朝鮮支那ニ於テハ50%以上ノ地多ク、臺灣、朝鮮、支那ニハ60%以上ノ地アリタリ。之ヲ月別ニ見ルニ、各地區々ニシテ一様ナラサレトモ概シテ平均ニ比シ七、八、九月ニ日照比例高キ地多ク、一月及三月ニ高キ地ニ次テ多シ。

【降水量】一年ノ總量ニ據レハ、臺灣ノ東部、琉球、九州ノ一部、四國、紀伊、駿遠、房總等直接ニ黑潮ノ影響ヲ受クル地方及遠海地方ニシテ初次ニ水蒸氣ノ衝撞スヘキ障壁アル近江、美濃、飛驒、甲斐等並ニ裏日本ノ各地ニ於テハ2,000耗以上ノ降水アリ、就中八丈島ノ4,425耗ヲ最多トシ、3,000耗以上ノ地亦尠ナカラス、又臺

灣ノ西部、北海道、樺太、朝鮮ノ北部、北支那ハ一帶ニ1,000耗以下ノ降水アリタルノミニシテ、就中少キハ澎湖島ノ328耗ナリ。而シテ之ヲ平均ニ比スルニ、一般ニハ、本年ノ降水量高ク、唯上記降水量少ナカリシ地ノミニ平均ヨリ少ナカリシカ如シ。又之ヲ月別ニ見ルニ、本年ノ降水殊ニ著シク平均ヨリ高カリシハ二月ニシテ、四月六月之ニ次キ、此ノ中間ナル五月ハ寧ロ平均ヨリ少キ地多ク、七月八月亦然リ、而シテ九月ノ多雨期ニ至リテモ平均ト大差ナカリシカ、十月ニ至リテ俄然降水多ク、十二月モ亦稍多カリキ。

【風】一年ノ平均方向ニ據レハ、北寄りノ風最も多ク、南寄りノ風最も少ナシ、臺灣、琉球、朝鮮、滿洲、支那ニ於テハ北乃至北東風多ク、北海道ニテハ西風多ク、本州ハ北寄りノ風多キモ東北地方及四國ニテハ南寄りノ風亦少ナシトセス。一年ノ平均速度ハ沿海地及高地ニ於テ概ネ5米/秒、其ノ他ノ地ハ2—4米/秒ナリ。又之ヲ月別ニ見ルニ、北寄りノ風多キ地方ト雖夏季ニハ南寄りノ風多ク、西風多キ地ニ於テハ夏季ニ東風多キニ至ル。

【天氣日數】快晴日ノ一年總數ハ臺灣ノ西部、九州ノ南部、四國ノ南部、東海ノ各地、遠海地方ノ中近畿及東山ノ首部ニ於テハ40—50日乃至50日以上アリ、朝鮮、滿洲、支那ニ於テハ50日以下ナルハ無ク、天津ニ於テハ145日ノ快晴ヲ見タリ。又之ヲ月別ニ見ルニ支那、滿洲、朝鮮及本州ノ表日本各地ニ於テハ概シテ年ノ首尾ニ於テ快晴多ク、夏季ニ少ク、裏日本ノ各地、北海道ノ西北部及樺太ハ夏季ニ快晴多シ。

III. 人 口

甲、人口ノ靜態

【總數】大正二年末調査ノ帝國人口總數71,799,465人ニシテ、之ヲ別テハ内地人(即チ本籍人口)58,362,682人、朝鮮人15,169,928人、臺灣人3,265,169人、樺太人1,691人ナリ。之ヲ總數ニ對スル分節比例ト爲セハ内地人743.22%、朝鮮人211.28%、臺灣人45.48%、樺太人0.02%ニ當ル、故ニ總數ノ約四分ノ三ハ内地人ノ占ムル所ニシテ他ノ四分ノ一ハ朝鮮人臺灣人及樺太人ナリトス。1910年及11年ノ人口調査ニ基キテ推計シタル世界ノ總人口(佛國ノ調査ニ依ル)ハ162,333萬人ナリ。之ニ對シ本邦ノ總人口ハ44.23%ニ當リ、内地ノ本籍人口ハ33.49%ニ當ル。又前同様ニ推計シタル亞細亞洲ノ總人口ハ80,254萬人ニシテ之ニ對スル本邦總人口ハ89.44%内地本籍人口ハ66.48%ニ當レリ。世界ノ獨立國ノミニ就テ人口(推計ヲ含ム)ノ多キモノヲ擧ケレハ支那30,062萬人(推計)、歐洲露西亞13,403萬人(1910年推計)、北米合衆國9,197萬人(1910年)、獨逸6,493萬人(1910年)、次ハ本邦内地ノ本籍人口ニシテ實ニ世界ノ第五位ニ居リ、本邦以下ノ大國ハ奧地利匈牙利5,136萬人

疊天日ノ一年總數ハ遠海地ナル高山、水澤、裏日本ノ各地及八丈島ニ於テハ平均ノ如クニ200日以上ニ上リ、朝鮮、滿洲、北支那ニ於テハ是亦平均ト大差ナク70日以内ナリキ。又之ヲ月別ニ見ルニ、恰モ快晴日數ト反對ニ、表日本ニ於テハ年ノ中央ハ疊天多ク、裏日本ノ各地ニ於テハ年ノ首尾ニ疊天比較的多シ。

降水日ノ一年總數ハ琉球、八丈島、中央遠海地、裏北日本ノ各地、北海道ノ西部ニ於テ200日以上ニ上リ、支那ノ渤海沿岸ニ於テハ100日以下ニシテ天津ノ71日ヲ最少トス。之ヲ平均ニ比スレハ多數ノ地方ニ於テ降水日少シク多ク、又之ヲ月別ニ見レハ裏日本ノ各地ニ於テハ八月降水日最も少ク、表日本ノ各地ニ於テハ之ニ反シテ六、七、八月ニ降水日多シ。

暴風日ハ一年ノ總數ニ於テ100日以上ナルモノ少ナカラス、就中北海道及沿海地方ニ於テハ200日以上ニ上レルモノアリ、之ヲ平均ニ比スレハ一般ニ暴風日多キカ如シ。又之ヲ月別ニ見レハ、一般ニハ秋季ニ暴風日少キカ如キモ臺北、大阪、北海道、樺太等ニ於テハ九月ニ暴風日最も多カリキ。

要スルニ氣壓ニ大ナル變化ナク、氣溫ハ一般ニ平均ヨリ高ク、仲秋以後少シク低下シタレトモ初夏ヨリノ氣溫ハ正シク過高ナリシカ如シ、又濕度ハ過乾ナリシ地無キニアナサレトモ過濕ナリシ地多ク、降水量ハ一般ニ高ク殊ニ初春ト秋末ニ於テ著シカリシカ如シ。

(1910年)、大貌列國4,522萬人(1911年)、佛蘭西3,919萬人(1911年)、土耳其3,702萬人(調査年不詳)、伊太利3,467萬人(1910年)、伯刺西兒2,112萬人(調査年不詳)、西班牙1,995萬人(1910年)、墨其西古1,506萬人(1910年)アリ、之ヲ世界ニ於ケル千萬人以上ノ人口ヲ有スル獨立國トス。

【人口增加率】本邦ノ人口增加率ハ甚タ高シ。本籍人口ハ近キ二回ノ調査間ニ於テ人口千ニ付一年平均14.78%增加率ヲ有ス。臺灣人增加率モ亦略ホ之ニ近ク14.60%ヲ示セリ(朝鮮ト樺太トハ一様ニ論シ難キモノアルヲ以テ省ク)歐洲諸國ニ於テハ其ノ率概ネ本邦ヨリ低ク獨逸ハ14.2%奧地利ハ8.9%大貌列國ハ8.7%、英虞蘭威爾斯ノミハ10.4%、匈牙利ハ8.2%伊太利ハ6.4%佛蘭西ハ0.6%ニ當リ、唯羅馬尼亞ノ15.1%塞耳維亞ノ16.6%ノミニ本邦ヨリ高シ。北米合衆國ハ他國ヨリ人口ヲ吸收スル國柄タケニ其ノ率19.0%ナリ。

【密度】内地ノ面積一万里ニ付本籍人口ハ2,152人、朝鮮ノ面積

一方里=付朝鮮人ハ 1,074人、臺灣ノ面積一方里=付臺灣人ハ 1,400人、樺太ノ面積一方里=付樺太人ハ 0.77人ナリ。更ニ之ヲ現住人口(内地ハ甲種ヲ用フ)ニ依リテ算出スレハ、内地ハ面積一方里=付 2,224人、朝鮮ハ同 1,098人、臺灣ハ同 1,520人、樺太ハ夏季同 31人、冬季同20人ニ當レリ。而シテ之ヲ他國ト比較センカ爲、面積ヲメートル系統ニ換算シ、一平方軒ノ現住人口ヲ算出スレハ、内地ハ141、朝鮮ハ 71、臺灣ハ 99、樺太ハ夏季 2、冬季 1ニ當リ、即チ内地ノ密度ハ世界列國中白耳義ノ 252(1910年)英虞蘭威爾斯ノ 239(1911年)和蘭ノ 171(1909年)ニ次キ、實ニ世界ノ第四位ニ居リ、伊太利ノ 121(1911年)獨逸ノ 120(1910年)ニ超越セリ。又奧地利ノ 95(1910年)瑞西ノ 91(1910年)ハ以テ我カ臺灣ト比スヘク、佛蘭西ノ 74(1911年)丁抹ノ 71(1911年)、匈牙利ノ 64(1910年)ハ以テ我カ朝鮮ト比スヘキモノナリ。要スルニ本邦内地ノ密度ハ世界稀ニ見ル所ニシテ、臺灣、朝鮮モ亦其ノ密度甚タ低カラス、所謂成熟シタル邦國中ニ算入スヘキ密度ヲ有ス。

【男女】 大正二年末調査ノ内地本籍人口ヲ男女ニ別テハ男 26,964,586人、女 26,398,096人ニシテ、女百ニ付男 102.15ニ當ル、此ノ比例數ハ朝鮮人ニ於テハ 107.83、臺灣人ニ於テハ 108.61、樺太人ニ於テハ 100.36ナリ。即チ我カ版圖ニ於テハ總テ男ノ數女ニ超過シ、殊ニ臺灣、朝鮮ニ於テ甚シ。之ヲ歐洲ノ事實ニ觀スルニ、其ノ殆ト總テハ本邦ト反對ニ女ノ數男ニ超過シ、女ノ百ニ對スル男ハ英虞蘭威爾斯 93.67(1914年)、歐洲露西亞 96.33(1897年)、伊太利 96.44(1911年)、佛蘭西 96.57(1911年)、奧地利匈牙利 97.20(1910年)、獨逸 97.43(1910年)等ナリ。唯獨リ北米合衆國ハ本邦ト同様ニ男ノ數超過シ 106.03(1910年)ノ比例ヲ呈ス。惟フニ男女ノ數ニ斯カル差違ヲ生スル原因ハ、出生死亡ト移出轉入トニ男女均シカラサルモノアルニ因ルモノニシテ、本邦ト歐洲トノ異ナル主原因ハ、彼此男女ノ死亡ノ甚タ異ナルカ爲ニシテ、北米ト歐洲ト異ナルハ、彼ハ人口移出多ク是ハ轉入多キ爲ナルカ如シ。

【年齢】 大正二年末調査ノ本籍人口ヲ年齢別ト爲シ、總數ニ對スル分節比例ヲ算出スレハ、十五歳未満ノ幼齡者ハ 34.94%、十五歳以上六十歳ノ中年者即チ生産年齢者ハ 56.27%、六十歳以上ノ老齡者ハ 8.79%ナリ。此ノ比例數ヲ既往ニ比スルニ、幼齡者ハ増シ中年者ハ減シ老齡者又増ス、幼齡者ノ増スハ出生率ノ增高ニ原因スヘク、中年者ノ減スルハ他ニモ原因アルヘキモ幼齡者ノ増加ノ影響ヲ主ナル原因ト爲スヘク、老齡者ノ増スハ未タ其ノ原因ヲ詳ニセス。此ノ年齢別分節比例ヲ歐米ノ數國ト比セシニ、英虞蘭威爾斯(1911年)ハ幼者 30.64%、中年者 64.16%、老者 5.20%、佛蘭西(1911年)ハ幼者 25.76%、中年者 61.67%、老者 12.57%、獨逸(1910年)ハ幼者 34.05%、中年者 60.92%、老者 5.03%、奧地利(1910年)ハ幼者 34.84%

中年者 59.88%、老者 5.28%、伊太利(1911年)ハ幼者 33.84%、中年者 59.34%、老者 6.48%、露西亞(1897年)ハ幼者 38.54%、中年者 57.21%、老者 4.22%、北米合衆國(1910年)ハ幼者 32.07%、中年者 63.46%、老者 4.29%ナリ。由是觀之、本邦ノ幼齡者ノ比例數ハ獨逸、奧地利ト略ホ同ク、露西亞ノ如ク甚タシク高カラス、佛蘭西及英虞蘭威爾斯ノ如ク甚タ低カラス、又老齡者ハ佛蘭西ノ如ク甚タシク高カラサレトモ而モ他國ニ超越シテ高ク、而シテ中年者ハ他ノ諸國ニ見サル低位ニ在リ、是決シテ等閑ニ視ルヘカラサル現象ナリ。

【配偶ノ有無】 大正二年末調査ノ本籍人口ヲ配偶ノ有無ニ依リテ別チ、總數ニ對スル分節比例ヲ求ムレハ、有配偶ノ男女共ニ各 17.14%即チ其ノ計 34.28%、無配偶ノ男ハ 33.39%、女ハ 32.33%、其ノ計 65.72%ナリ。此ノ比例數ヲ既往ニ比スルニ有配偶者ハ漸次減少シ無配偶者ハ増ス。是前項ノ年齢別ト關聯セル現象ニシテ出生數ノ増加ニ依ル幼年無配偶者ト、老齡者モ亦増加スルニ依ル老齡寡ノ増加ニ基ツクモノナラン。而シテ此ノ事實ニ比センカ爲、歐洲ニ於ケル男女ヲ合セタル有偶者ノ同一比例數ヲ舉示スレハ、英虞蘭威爾斯(1910年)ハ 36.39%、佛蘭西(1911年)ハ 42.63%、獨逸(1910年)ハ 35.78%、奧地利匈牙利(1910年)ハ 36.97%、伊太利(1911年)ハ 33.33%、露西亞(1897年)ハ 39.07%ナリ。佛蘭西ノ頗ル高キハ幼齡者ノ少キニ依ル比例上ノ關係ナルヘク、露西亞ハ出生數多キ國ナルニモ拘ハラズ有配偶者ノ比例數高キハ注意スヘク、其ノ他ノ諸國亦皆本邦ヨリモ此ノ比例數高シ、是ハ素ヨリ複雑ナル原因ノ働キニ由ルモノナルヘシト雖、本邦ノ都會等ニ於テ近來所謂内縁ノ夫妻ナル者益々多キニ至ルコトモ亦自ラ法律上ノ有配偶者比例ヲ低カラシムルノ原因ナルヘシ。

【現住人口】 現行ノ人口調査方法ニ依ル内地現住人口ハ、各市町村ノ本籍人口ニ其ノ市町村ノ出入寄留人員並ニ兵營軍艦及監獄ニ在ル人員ヲ加除シテ得タルモノニシテ、之ヲ專門的ニ甲種現住人口ト稱ス、此ノ現住人口ハ朝鮮、臺灣、樺太及外國ニ在留スル者ヲ除外シタルモノナルカ故ニ、其ノ總數ハ本籍人口ヨリ少ナルヘキ筈ナリ。然ルニ大正二年末調査ノ現住人口ハ 55,131,270人ニシテ本籍人口ヨリ多キコト 1,768,588人ナリ、若シ夫之ニ公知ノ朝鮮、臺灣、樺太及外國ノ在留者約 40萬餘人ヲ加フレハ甲種現住人口ノ本籍人口ヲ超過スルコト約 220萬人ニ當ル。斯ノ如キハ要スルニ入寄留ノ重複ト出寄留ノ脱漏トニ基スルモノニシテ人口移動ノ頻繁ナル今日ニ於テハ國勢調査ノ施行ヲ俟ツニアラサレハ此ノ誤謬ヲ匡正スルノ策ナシ。仍テ内閣統計局ハ甲種現住人口ニ加工ヲ施シ一種ノ現在人口ヲ推計シ之ヲ乙種現住人口ト名ケ、地方別觀察ノ基本ニ供スルコトニ爲セリ、此ノ乙種現住人口モ亦素ヨリ姑息ノ推計ニ過キト雖、之ヲ甲種現住人口ニ比スレハ比較的事

實ニ近キモノト推測セラル、其ノ加工方法下ノ如シ。

一、出入寄留ノ差引上入寄留ノ超過ハ出寄留者ノ出寄留額ヲ怠ルニ依リテ出寄留ニ脱漏アルト入寄留者ノ退去額ヲ怠ルニ依リテ入寄留ニ重複アルトニ基ツクモノトス、但シ出寄留額ノ脱漏ト入寄留額ノ重複トカ何程アルヘキヤハ知ルヘカラスト雖、要スルニ雙方ニ誤謬アリト假定ス。

二、次ニ各府縣ニ就テ此ノ脱漏重複カ何程アルヤハ之ヲ知ルヘカラスト雖、各府縣委ク此ノ脱漏重複アルモノト假定ス。

三、次ニ出入寄留ノ多キニ從ヒ雙方同一ノ程度ヲ以テ脱漏重複モ亦多キヲ加フルモノト假定ス。

四、依テ各府縣ノ出入寄留數ニ脱漏重複ヨリ生スル全國ノ誤謬ヲ按分シ、先ツ各府縣ノ誤謬ヲ算出セリ。

五、次ニ右算出ノ誤謬ヲ某縣ノ甲種現住人口ヨリ控除シテ茲ニ其ノ縣ノ乙種現住人口ヲ算出セリ。其ノ算式下ノ如シ

$$\text{某縣甲種} - \frac{\text{全國入} - \text{全國出}}{\text{全國入} + \text{全國出}} \times (\text{其ノ縣入} + \text{其ノ縣出})$$

然ルニ人口調査ヲ行ヒタル年以外ニハ此ノ推計法ヲ施コス能ハサルカ故ニ、前二回ノ調査年ニ於テ算出セル乙種現住人口ヲ對比シ、其ノ間ニ於ケル一箇年ノ幾何學的人口增加率ヲ算出シ、之ヲ近キ調査年ノ乙種現住人口ニ乘シ、遞次各年ノ人口ヲ推計ス、大正三年ノ例ヲ示セハ下ノ如シ。

某縣大正二年乙種 $\times \frac{\text{其ノ縣大正三年乙種}}{\text{其ノ縣大正二年乙種}}$ = 其ノ縣大正三年乙種
此ノ乙種現住人口ノ大正二年末調査ニ就テ人口ノ地方分布ヲ見ルニ、北海道ハ總數ノ 31.19%、東北區ハ 106.17%、關東區ハ 187.04%、北陸區ハ 77.08%、東山區ハ 60.19%、東海區ハ 96.16%、近畿區ハ 128.23%、中國區ハ 96.87%、四國區ハ 61.46%、九州區ハ 145.57%、沖繩縣ハ 10.04%ニ當レリ。而シテ是等各地方ノ面積一方里ニ對スル人口ノ密度ヲ見ルニ、最も高キハ關東區ノ 4,763人及近畿區ノ 4,581人ニシテ、之ニ次ク東海區ハ 3,449人、沖繩縣ハ 3,385人、九州區ハ 2,883人、四國區ハ 2,754人、中國區ハ 2,573人、北陸區ハ 2,496人、東山區ハ 1,768人、東北區ハ 1,323人最も低キ北海道ハ 271人ナリ。之ヲ歐洲ニ比スルニ東海近畿ノ二區ハ獨逸聯邦中ノ稠密

國ナル索遜ト伯仲ノ間ニ在リ、東海區ト沖繩縣ハ一國トシテ最稠密ナル白耳義ヨリ少シク低キノミ、最も低キ北海道スラ瑞典ヨリ遙ニ高ク、芬蘭ニ殆ト倍セリ。而シテ此ノ人口ヲ以テ算出セル全國ノ密度ハ一方里ニ付 2,134人ニ當ル。

【現住戸數】 大正二年末調査ノ現住戸數ハ 9,720,436戸ニシテ此ノ戸數ト乙種現住人口トヲ以テ算出シタル平均一戸ノ人口ハ 5.44人ナリ。此ノ比例數ヲ地方別ニ見ルニ、最も高キハ東北區ノ 6.70人、之ニ次クハ九州區ノ 5.79人及北陸區ノ 5.72人ナリ、最も低キハ近畿區ノ 4.91人ニシテ中國區ノ 5.05人之ニ次キテ高ク、關東區ハ 5.21人ナリ。之ヲ要スルニ平均一戸ノ人口ハ概シテ北ニ高ク南ニ低ク(九州ハ破格)、大都會ヲ包有スル地ニ低ク、然ラサル地ニ高キカ如シ。

【占居狀態】 大正二年末調査ノ現住人口(甲種)ニ依リ、階級ヲ設ケテ市町村數ヲ見ルニ 2,001—5,000人ノ人口ヲ有スル町村最も多ク總市町村數ノ 61.38%ヲ占ム、而シテ是等各階級市町村ニ占有スル人口ヲ算出シテ總數ニ對スル分節比例ヲ求ムルニ、2,001—5,000階級最も高クシテ 44.16%ニ當リ、5,001—10,000階級之ニ次テ 21.95%ニ當リ、2,000以下ノ總テヲ合セテ 6.28%ニ當レリ。故ニ本邦現時ノ人口ハ村落ニ中心ヲ有スルコト明ケシ。併シナカラ文化ノ進歩ニ伴フ人口ノ都會集中ノ現象モ亦本邦ニ認メラル、所ニシテ、明治二十六年ニ於ケル 50,001以上ノ人口ヲ有スル都會ノ占居人口ハ總人口ノ 7.06%ナリシカ、同三十一年ニハ 9.40%ト爲リテ 1.54%ヲ増シ、同三十六年ニハ 11.44%ト爲リテ 2.04%ヲ増シ、同四十一年ニハ 13.31%ト爲リテ 1.87%ヲ増シ、大正二年ニハ 14.13%ト爲リテ 0.82%ヲ増シタルニ依リテモ知ラル、ナリ。

【都會人口】 大正二年末調査ノ市區ノ人口ヲ五年前ナル明治四十一年末ノ調査ニ比スルニ、人口 100,000以上ヲ有スル大都會ニ於テハ吳市最も増加著シク、名古屋市之ニ次キ、神戸市、廣島市、金澤市第三位ニ在リ、50,001—100,000ノ中都會ニ於テハ札幌區、門司市最も著シク豊橋市、岐阜市之ニ次キ、下ノ關市、横須賀市、靜岡市、福岡市、鹿兒島市等其ノ増加見ルヘキモノアリ、50,000以下ノ市區ハ其ノ増加甚タ著シカラス、唯奈良市、小倉市ノ高キモノアルノミ。

乙、人口ノ動態

茲ニ掲ケル人口動態統計ハ内地ニ本籍ヲ有スル者及其ノ内地ニ在ル者ニ係カル事實ニシテ、朝鮮人、臺灣人、樺太人及朝鮮、臺灣、樺太ノ現在人ニ係カル事實ハ別ニ朝鮮、臺灣、樺太ノ部ニ之ヲ掲載ス

【婚姻】 大正二年中ノ本籍人ノ婚姻ハ 432,782件ニシテ、同三年ハ 454,741件ナリ、之ヲ各年末人口ニ比スレハ其ノ千ニ付二年ハ 8.11三年ハ 8.40ニ當ル、此ノ二年ノ歩合ハ前年ニ比シ 0.11低ク、

三年ノ歩合ハ二年ニ比シ 0.29高シ。近年本邦ノ婚姻歩合ハ明治四十一年ノ最高歩合アリテヨリ年々下降シ、大正二年ニ此ノ低位ヲ示セシカ、同三年ハ上昇セリ。惟フニ此ノ上昇ハ大正四年ヨリ實施セラルヘキ戸籍法改正ニ因スルモノナルヘシ。歐洲ニ於テハ近年一般ニ婚姻歩合低下シ、英虞蘭威爾斯ハ 7.95(1914年)、佛蘭西ハ 7.50(1913年)、獨逸ハ 7.70(1913年)、奧地利ハ 7.14(1912年)、伊太利ハ 7.01(1914年)ナリシカ、大戰勃發後一時ニ增高セシモノ、如ク、

1915年英國ノ統計ニ依レハ英虞蘭威爾斯ハ 9.75ニ上リ、前年ヨリ高キコト 1.80ヲ示シ、蘇格蘭ハ 7.60ニ上リ前年ヨリ 0.56高ク、愛爾蘭モ 5.55ニ上リ、前年ヨリ 0.15高ク、濠洲聯邦モ 9.10ニ進ミ前年ヨリ 0.35高ク、其ノ他ニウ・ゼーランド¹モ、英領印度モ同様ナリ、而シテ中立國ニ於テハ何等此ノ影響ナキモノ、如シ、斯ノ如キハ從來ノ事例ニ背馳セル注目スヘキ現象ナリ。

現在人ノ婚姻歩合ハ本籍人ヨリ少シク高ク、大正二年ハ 8.15ニ當リ、同三年ハ 8.44ニ當ル、此ノ歩合ヲ地方別ニ見ルニ、大正二年ニ於テ最モ高キハ東北區ノ 9.03ニシテ北陸區ノ 8.96之ニ次キ、又最モ低キハ近畿區ノ 7.24ニシテ、九州區ノ 7.59之ニ次ク、又大正三年ハ北陸區ノ 8.93最モ高ク、東北區ノ 8.78四國區ノ 8.77之ニ次キ、最モ低キハ沖繩縣ノ 7.59ニシテ、北海ノ 61近畿區 17.64之ニ次ケリ。概シテ此ノ歩合ハ東北ニ高ク西南ニ低ク、又大都會ヲ包有スル地ニ低シ。婚姻ヲ種類別ト爲シ、總數ニ對スル各年ノ分節比例ヲ求ムレハ、大正二年ハ普通婚姻 90.78%、婿取婚姻 9.22%、同三年ハ普通婚姻 90.90%、婿取婚姻 9.10%ナリ。此ノ婿取婚姻ノ中、入夫婚姻ハ大正二年ハ 2.87%、同三年ハ 2.90%ニシテ、婿養子縁組ハ大正二年ハ 6.35%同三年ハ 6.20%ニ當ル、之ヲ既往ニ比スルニ普通婚姻ハ概シテ増加ノ傾向アリ、婿取婚姻ノ中入夫婚姻ノ減少ハ著明ナレトモ婿養子縁組ハ減少遅々タリ。但シ大正三年ノ入夫婚姻ノ趨勢ニ反セルカ如キハ、此ノ婚姻數ニハ停滯セル屈出ノ頻發セル特例アルカ爲カ、地方別ニハ入夫婚姻ハ概シテ東山、東海、北陸、近畿ノ諸區ニ高ク、婿養子縁組ハ東北區最モ高ク、關東區稍高シ。夫妻ノ婚姻年齡ハ、本邦ニ於テモ漸次早婚減シ晩婚増スノ傾向アリ。即チ夫バ二十歳以上三十歳者最モ多ク婚姻シ、之ヲ二分スレハ二十五歳以下ノ比例漸次低下シテ二十五歳以上者ノ比例上昇ス、又妻ハ二十歳以上二十五歳者最モ多ク婚姻シ、其ノ前階級ノ比例ハ低下シ、後階級ノ比例ハ上昇シ來レリ。然ルニ大正二年ハ此ノ傾向俄然トシテ變シ、早婚者増シテ晩婚者減スルノ異觀ヲ呈セリ。是ハ此ノ一年ニ於ケル一時ノ變動カ將タ何等カ因由スル所アリテノ現象カ注意ヲ要スル事實ナリ。

【離婚】 本籍人ノ離婚數ヲ各年末ノ人口千ニ比例スレハ、大正二年ハ 1.12大正三年ハ 1.11ナル歩合ヲ得、此ノ歩合ハ嘗テヨリ低下シ來レル所ニシテ、之ヲ明治三十一年以前ニ比スレハ殆ト半ハニダニ足ラス。

大正二年中ノ現在人ノ離婚歩合ハ 1.13ニシテ同三年ノ歩合ハ 1.12ナリ、共ニ本籍人ノ歩合ヨリ少シク高シ。此ノ歩合ヲ地方別ニ見ルニ其ノ高低婚姻ノ歩合ト殆ト一致シ、東北ニ高ク西南ニ低ク、大都會ヲ包有スル地ニ低シ、是婚姻多キ地ハ自ラ離婚多キニ因ルナリ。離婚ヲ其ノ種類ニ依リテ別チ總數ニ對スル各年ノ分節比例ヲ

求ムレハ、妻カ夫ノ家ヲ去ル離婚即チ普通婚姻ノ惡結果ニ陥リタル者ハ大正二年ニ 85.72% 同三年ニ 85.74% 夫カ妻ノ家ヲ去ル離婚即チ婿取婚姻ノ惡結果ハ大正二年ニ 11.49%、同三年ニ 11.49%、其ノ他大正二年ノ 2.79%、同三年ノ 2.77%ハ離婚者雙方ノ婚家ニ留マレ離婚ナリ。之ニ由テ觀レハ婿取婚姻ハ之ヲ普通婚姻ニ比シテ如何ニ惡結果ヲ來タスコト多キカヲ知ルヘク、而シテ妻ノ家ヲ去ル離婚ノ東北地方ニ多キヲ見レハ、殊ニ其ノ關係ノ適切ナルヲ思ハルナリ。又離婚者ノ夫婦關係繼續期間ヲ見レハ、大正二年ハ滿五年マテノ者總數ノ 62.70%、同三年ハ 61.94%ナリ、若シ夫滿一年マテノ者ハ大正二年 17.47%、同三年 17.12%ニ當ル、斯ノ如キ早期離婚ノ多キコトハ他國ニ見サル所ニシテ、以テ本邦ニ輕卒ノ婚姻少ナカラサルコトヲ知ルヘク、寔ニ遺憾多シト謂フヘシ。

【生産】 大正二年中ノ本邦人ノ生産(出生)數ハ 1,778,106人ニシテ、同三年中ハ 1,832,158人ナリ之ヲ各年末人口ニ比スレハ、其ノ千ニ付大正二年ハ 33.3同三年ハ 33.8ニ當ル。此ノ大正二年ノ歩合ハ前年ニ比シテ僅ニ 0.1低ク、既往ノ最高率ナル明治四十四年ノ 34.1ヨリハ0.8低ケレトモ、而モ明治四十年以前ニハ嘗テ見サル高率ナリ。況ンヤ大正三年ハ又 0.5ヲ上昇シテ四十四年ノ最高ヨリ低キコト僅ニ 0.3ナルノミ。惟フニ本邦ノ生産歩合ハ起伏シナカラモ上昇シテ明治四十四年ニ最高點ニ達シ、爾來下降ノ歩調ヲ取り、大正三年ニ至リテ再ヒ上昇セリ、今後如何ノ趨向ヲ取ルカ注目スヘシ。歐洲ニ於テハ 1870年代ヨリ殆ト總テ國ニ於テ生産率ノ減耗著シク、今ヤ極度ニ達シ、佛蘭西ノ如キハ人口千ニ付 18.0(1914年)ト爲リ、死亡率ノ 19.6ヨリハ低キコト 1.6ナルヲ見ル、斯ホトニ甚シカラストモ英虞蘭威爾斯ハ 22.0(1915年)和蘭ハ 26.2(1915年)獨逸ハ 27.5(1913年)伊太利ハ 31.1(1914年)ニシテ、之ヲ 1870年代ニ比スレハ各國共ニ其ノ差決シテ少ナラサルナリ。而シテ歐洲ニ於ケル此ノ狀態ヲ文化ノ進歩ニ伴フ必然ノ現象ナリト爲ス者アリ、然ラハ本邦カ尙未タ此ノ悲運ヲ見サルハ文化ノ進歩未タ彼カ程度ニ達セサルカ爲カ。

大正二年中ノ現在人ノ生産歩合ハ 33.2、同三年ハ 33.7ニシテ、共ニ本籍人ノ歩合ヨリ少シク低シ。此ノ歩合ヲ地方別ニ見レハ、特殊ノ事情アル北海道ヲ別トシ、大正二年ハ東北區ノ 36.5最モ高ク、北陸區ノ 36.4之ニ次ク、低キモノハ沖繩縣ヲ別トスレハ中國區ノ 29.2最モ低ク、九州區ノ 29.8之ニ次キ。又大正三年ニ於テモ北海道ト沖繩縣トヲ除外スレハ北陸區ノ 36.9最モ高ク、東北區ノ 35.9之ニ次キ、最モ低キハ中國區ノ 30.1ニシテ九州區ノ 30.8之ニ次ケリ。茲ニ於テモ東北ニ高ク西南ニ低クシテ婚姻ニ見タルト同一ノ狀勢アリ、婚姻多キ地ニ生産多キコトモ亦明カナル因果關係ナルヲ示セリ。而シテ關東區ハ大正二年ニ 33.8同三年ニ 34.8、近畿區ハ大

正二年ニ 31.0、同三年ニ 31.4ニシテ、大都會ヲ包有スル地ニハ生産少キコトモ亦認メラルレトモ、其ノ生産少キ度合ハ婚姻少キ度合ヨリモ甚タシカラス、斯ノ如キハ都會生活ハ生産力ヲ減耗ステフ事理ニ反スルカ如キモ、本邦ノ都會ニ所謂内縁ノ夫妻多キニ想倒スレハ、是亦必スシモ矛盾ノ事實ナリト爲シ能ハサルカ如シ。

大正二年中ノ生産數ヲ男女ニ別テハ、男 897,824人女 759,617人ニシテ、又同三年中ノ生産數ハ男 925,855人女 882,547人ナリ。此ノ女百ニ對スル男ノ比例ハ大正二年 104.4ニシテ同三年ハ 104.9ナリ、之ヲ既往ノ各年ニ比スルニ大差ナシ。又生産數ヲ其ノ身分ニ依リテ別チ總數ノ分節比例ヲ求ムレハ、大正二年ハ嫡出子 91.1%庶子及私生子 8.9%同三年ハ嫡出子 91.2%庶子及私生子 8.8%ナリ。此ノ庶子及私生子ノ比例數ヲ既往ニ比スルニ少シク低下セリ。

【死産】 大正二年中ノ現在人ノ死産數ハ 147,769ニシテ同三年ハ 145,692ナリ。之ヲ年末人口ニ比スレハ其ノ千ニ付大正二年ハ 2.79同三年ハ 2.71ナリ。之ヲ既往ニ對スルニ明治三十四五年頃ニ死産頗ル高ク 3.42ノ歩合ヲ見シカ、爾來漸々返テ降り茲ニ至レリ。併シナカラ之ヲ歐洲ニ比スレハ尙甚タ高ク、獨逸佛蘭西ニ比シ殆ト三倍ス。死産ノ歩合ヲ地方別ニ見レハ、關東區最モ高ク大正二年ハ 3.60同三年ハ 3.52、東北區之ニ次キ大正二年ハ 3.41同三年ハ 3.18ナリ。死産ハ生産ニ比シ男ヲ分娩スルコト多キヲ常トス、即チ大正二年ノ死産ハ女百ニ付男ノ比例 113.3同三年ハ 114.5ニシテ、生産ノ同比例數ヨリ男ノ多キコト二年ハ 8.9三年ハ 9.6ナリ。又死産ハ生産ヨリモ私生子(庶子ヲ含ム以下同シ)ニ多キヲ常トス、即チ大正二年ノ嫡出子分娩百中生産 93.4%死産 6.6%同三年ハ生産 93.6%死産 6.4%ナルニ、私生子分娩百中ニハ大正二年生産 82.1%死産 17.9%ニシテ、同三年生産 82.7%死産 17.3%ナリ。又生産百中ニハ大正二年ハ嫡出子 91.1%私生子 8.9%、同三年ハ嫡出子 91.2%私生子 8.8%アリテ、死産百中ニハ大正二年ハ嫡出子 77.0%私生子 23.0%、同三年ハ嫡出子 77.2%私生子 22.8%アルニ依リテモ明カナリ。

【死亡】 大正二年中ノ本籍人ノ死亡ハ 1,038,723人ニシテ大正三年ハ 1,115,770人ナリ、之ヲ年末人口ニ比スルニ其ノ千ニ付大正二年ハ 19.5同三年ハ 20.6ナリ。此ノ大正二年ノ歩合ハ前年ニ比シテ 0.5低ク、近年ノ最高率ナル明治四十二年ノ 21.9ヨリ年々低下シテ茲ニ至レリ。然ルニ大正三年ハ再ヒ上昇シテ四十三年ニ次ク高率ヲ示シ、前年ヨリ高キコト實ニ 1.1ナリ。由來本邦ノ死亡歩合ハ、急性傳染病ノ流行甚シカリシ當時ニ於テ屢高カリシカ、一時靜平ト爲リ、近年復高低著シキモノアリテ、稍低下ノ傾向ヲ示セシカ、今ヤ更ニ斯ノ如キ高低ヲ現セリ、今後果シテ如何ノ趨勢ヲ

取ルカ。大正二年ノ低下ハ明治二十一年以降始メテ見タル所、其ノ原因ハ後段述フルカ如キ一時的自然關係ニ因ルモノト認メラル。歐洲諸國ニ於テハ生産歩合ノ減耗ト同時ニ此ノ死亡歩合モ亦著シク低下シ、生産歩合ノ減耗甚シキニモ拘ハラズ却テ自然増殖率ノ増高シタル邦國モアルナリ。即チ死亡歩合ノ最低キ和蘭ハ人口千ニ付 12.4(1915年)ヲ示シ、英虞蘭威爾斯ハ 14.0(1914年)ナリシカ其ノ翌年ハ戰爭ノ影響アリテカ 15.7ト爲リ、獨逸ハ 15.0(1913年)佛蘭西ハ 19.6(1914年)奧地利ハ 20.5(1912年)伊太利ハ 17.9(1914年)北米合衆國ハ 13.5(1915年)ノ低位ニ達セリ。

現在人ノ死亡歩合ハ大正二年 19.4同三年 20.5ニシテ、本籍人ニ於ケルヨリモ少シク低シ。此ノ歩合ヲ地方別ニ見ルニ、最モ高キハ北陸區ノ大年二年 21.9同三年 23.2ニシテ、二年ハ關東區ノ 20.2之ニ次キ、三年ハ近畿區ノ 21.3之ニ次ケリ、又沖繩縣ヲ別トシテ最モ低キハ九州區ノ大正二年 17.8同三年 19.5ニシテ、二年ハ中國區ノ 18.5之ニ次キ、三年ハ東海區ノ 19.6之ニ次ケリ、是ニ於テモ大體ニハ東北ニ高ク西南ニ低ケレトモ、例ヘハ東北區ノ二年ニ 19.6三年ニ 20.3ヨリモ北陸區ノ兩年共ニ遙ニ高キカ如キ、所ヲ異ニスルニ依リ特殊ノ原因ノ働クモノアリテ此ノ原則ヲ攪亂シ、又大都會ヲ包有スル關東區ハ二年ニ第二位ニ居リ、近畿區ハ三年ニ第二位ニ居ルニ徴シ、死亡ハ他ノ動態ニ反シ都會ニ於テ寧ろ高キモノナルコトヲ認メラル。

死亡數ヲ男女ニ別テハ大正二年ハ男 521,210人女 506,042人、同三年ハ男 559,337人女 542,473人ナリ、此ノ女百ニ付男ノ比例ハ大正二年ハ 102.0同三年ハ 103.1ニ當ル。又此ノ死亡數ヲ各性ノ人口ニ比例スレハ其ノ千ニ付大正二年ハ男 19.6女 19.3、同三年ハ男 20.7女 20.4ノ歩合ヲ得、此ノ各性死亡歩合ハ嘗テ男高ク明治三十七年以降一時女少シク高ク、今ヤ錯綜シテ一上一下シ、此ノ兩年ハ男少シク高シ、併シナカラ歩合高キ北陸區ノ諸縣及大都會ヲ包有スル地方ニ於テハ此ノ兩年ト雖女ノ歩合高シ。是ハ各地同一原因ノ働キニ由ルカ將タ異ナル原因ノ働キニ由ルカ、抑亦或ル地方ニ於テハ男女ノ人口ニ錯誤アルニ由ルカ歟フヘシ。

月別死亡率一年平均一日ノ死亡千ニ付各月平均一日ノ死亡比例ト爲シテ見ルニ、大正三年ハ年々ノ定型タル二山二谷ヲ現シ、例ニ依リ夏ノ山ハ著シク高キモ唯九月ノ早クモ低下シタルヲ異ナリト爲スノミ、然ルニ大正二年ハ大ニ異型ヲ呈シ、冬山モ夏山ト殆ト高サ均シクシ、寧ろ冬山ハ高所多キニ依リテ夏山ヨリモ大ナリ。斯ノ如キハ大正二年ノ夏季ハ一般ニ氣温低ク、爲ニ炎暑ノ候ニ多ク見ル所ノ死亡原因ノ働キヲ減シ、夏山ヲ形成スヘキ死者ヲ少クセルカ故ニシテ、此ノ結果ハ一ヶ年ヲ通シタル死亡歩合ノ低下ヲ見ルニ至レルナリ。而シテ翌大正三年ハ月別定型常ニ復スル

ト共ニ死亡歩合ハ一額ニ上昇セリ、其ノ九月早クモ低下ヲ見シハ、九月ニ入りテ急ニ氣温ノ低下シタルニ由ルナラン。

大正二年及同三年ノ男女死亡數ヲ年齢別ト爲シ、各性總數ニ對スル年齢ノ分節比例ヲ求メテ比較スレハ、一歳未満者ハ男ノ比例高ク、一歳以上四十歳マテ女ノ比例高ク、四十歳以上七十五歳マテ男ノ比例高ク、七十五歳以上再ヒ女ノ比例高キコト兩年共ニ同シ。幼者ノ男死亡多ク老者ノ女死亡多キハ各國共通ノ状態ナレトモ、少年、青年、壯年ニ於テ女ノ死亡多キノ一事ハ、他國ニ多ク見サル本邦ノ惡ムヘキ特徴ナリ。

大正二年中ノ生産千ニ付一歳未満ノ死亡所謂乳兒死亡比例ハ 15.2ニシテ前年ヨリ低キコト 2ナリ、又同三年ノ同一比例ハ 15.9ニシテ前年ヨリ高キコト 7ナリ。此ノ比例數ハ嘗テ本邦ニ於テ甚タ低カリシカ、漸次昇騰シテ明治四十二年ニハ遂ニ 166ノ高位ニ達シ、爾來又降りテ大正二年ニ至リ、大正三年ハ再ヒ上昇セリ。但シ此ノ高低ノミヲ以テ直ニ本邦乳兒ノ健康如何ヲ連斷スルハ非ナリ、要スルニ此ノ比例數ハ、生産歩合ノ高低ニ追隨シ、寧ロ彼ヨリモ高低ノ著シキモノナルニ注意セサルヘカラス。試ニ之ヲ地方別ニ見レハ概シテ生産歩合ノ高カリシ東北地方ニ此ノ歩合ノ高キヲ認メ得ヘシ。歐洲ニ於ケル此ノ比例ハ嘗テ頗ル高キモノアリシカ、今ヤ甚タ低下セリ、是彼ノ生産減耗ノ影響モ與リテカアルヘキモ、各國カ銳意乳兒ノ保護ニ努メタル功ニ歸セサルヘカラス。即チ英、蘭、威、爾、斯、ハ 110(1915年)佛、蘭、西、ハ 78(1912年)獨、逸、ハ 151(1913年)伊、太、利、ハ 137(1913年)和、蘭、ハ 87(1915年)等ナリ。之ヲ四十餘年前ニ比スレハ隔世ノ感アリト謂フヘシ。

大正二年中ノ死亡數ヲ死亡原因別ト爲シ各性人口一萬ニ比例スルニ、男女共ニ最も多キハ下痢腸炎ニシテ、男ハ肺炎之ニ次キ女ハ肺結核之ニ次ク、第三位ハ男ニ在リテハ肺結核ナレトモ女ニ在リテハ肺炎ナリ、腸膜炎ト腦出血トハ男女共ニ少ナカラサレトモ而モ昔日ノ如ク多カラス、老衰ハ女ニノミ多ク、先天性弱質ハ男殊ニ多シ、是男ニ幼者ノ死亡高ク女ニ老者ノ死亡多キ所以ナリ、大正三年モ略ホ前年ニ似タレトモ、一般ニ死亡歩合高キヲ異ナリトシ、其ノ最も多キハ男女共ニ下痢腸炎ニシテ男ノ第二位ハ肺炎女ハ肺結核ナリ、第三位ハ男ニ於テハ肺結核女ニ於テ肺炎ナリ、又男女ヲ合セタル比例數ニ依リテ既往ニ比スルニ、大正二年ハ麻疹及百日咳ヲ除ク他ノ急性傳染病皆低ク、肺結核及其ノ他ノ結核性疾患亦低ク、下痢腸炎ト胃ノ疾患トヲ合セタル胃腸病亦大ニ低ク、小兒ノ胃腸病ヲ多ク包含セリト認メラル、腸膜炎モ亦嘗テ見サル低位ニ居リ、其ノ他衰弱ニ依リテ斃ル、者及炎暑ノ候ニ死フ促サル、者多クハ既往ニ比シテ低シ、是月別死亡ノ場合ニ言ヘルカ如キ本年ノ死亡歩合ヲ低メタル原因ノ主ナルモノナリ。然ルニ大正

三年ハ前年ニ比シ殆ト總テノ死亡原因ニ因ル死亡數増加シ、就中下痢腸炎ノ如キ將タ腸膜炎ノ如キ著シク増加セリ、又脚氣死亡モ多ク殆ト四十二年ノ多數時ニ近キモノアリ、其ノ他腸チフスモ赤痢モ多カリシハ應ニ本年ノ自然的關係カ前年ト正反對ニ夏季ノ炎熱強カリシニ因セルナルヘシ、又年々其ノ數ヲ増シツ、アル腎臟炎ハ本年モ増加ス、然ルニ夏季ノ暑氣ニ追隨シテ多キヲ加フヘク想像セラルル結核性疾患カ此ノ年ニ於テ増加ヲ見サリシハ注意スヘキ現象ナリ。

【自然増殖率】大正二年中ノ本籍人ノ出生(生産)死亡ノ差ハ 739,383人ニシテ之ヲ年末人口ニ比スレハ其ノ千ニ付 13.8ナリ。之ヲ此ノ年ニ於ケル人口ノ自然増殖率トス。此ノ率ヲ既往ニ比スルニ未ダ嘗テ見サル高度ヲ示セリ、是本年ノ生産力僅ニ前年ヨリ低カリシノミニシテ、死亡ハ天候ノ然ラシムル所アリテ二十五年來始メテ見ル低度ヲ示シタル年ナリシカ爲ナリ。然ルニ大正三年ニ於ケル出生死亡ノ差ハ 716,388人ニシテ、之ヲ人口千ニ比スレハ 13.2ナル自然増殖率ヲ得テ、之ヲ前年ニ比スルニ 0.6ノ減ナリ、斯ノ如キハ出生歩合前年ニ比シテ増高シタレトモ、而モ死亡歩合ノ増高著シカリシニ由ルナリ。又此率ヲ現在人ニ就テ算スルニ本籍人ニ等シク、大正二年ハ 13.8大正三年ハ 13.2ナル係數ヲ得。之ヲ地方別ニ見ルニ、大正二年ハ北海道ト沖繩縣トノ兩極ヲ除外シ、東海區最も高ク、東北區之ニ次キ、中國區最も低ク、近畿區之ニ次ケリ。又大正三年ニ於テハ北海道ノ最高極ナルコト前年ト異ナラサレトモ、最低極ハ沖繩縣ニアラスシテ中國區ニ在リ、之ニ次クモノハ近畿區ニシテ沖繩縣ハ低キモノ、第二位ナリ、高キハ北海道ニ次クモノハ東海東北ノ二區トス。而シテ自然増殖率ハ其ノ高キモ低キモ生産ニ高低アルカ爲ナルヨリハ、死亡ニ高低アルカ爲ナルコト、之ヲ動搖セシムル力大ナルモノアルカ如シ。

【生命表】國民ノ生命ニ關スル研究ハ人口統計上主要ノモノニ屬シ、其ノ應用亦極メテ廣シ、公衆ノ保健衛生ヲ管掌スル行政官、技師官、人口動態統計研究者、醫師、社會學者、保險家、統計家及特ニ國民保健ノ改善ヲ念トスル者ニ對シ要ナルハ勿論、損害賠償等法律上ノ目的及年金、恩給金、養老金等ノ計算ニ關クヘカラサルモノトス、本局曩ニ其ノ當時ノ材料ニ據リ日本人ノ生命ニ關スル研究ヲ公ニセシカ、更ニ大正二年ヨリ既往五ヶ年ノ事實ニ依レル計算ニ著手シ、今其ノ結果ヲ得タルヲ以テ其ノ要數ヲ掲載ス。算出ノ方法ニ至リテハ前ニ刊行セシ書中ニ收ムル所ニ同シ。

本表ハ各年齢(一歳未満ハ日齡又ハ月齡別)ニ屬スル人口ニ就キ生存者、死亡者及其ノ死亡率並完全平均命數、死力ノ五項ヲ掲載ス、各項ニ就キ概説スレハ、生存者トハ同一時期ニ生レタル男女各十萬人ヲ假定シ、各年齢毎ニ次關ノ死亡者ヲ控除シタル殘數ヲ

謂フ。死亡者トハ右假定人口十萬人中ノ各年期ニ於ケル死亡數ヲ謂フ。死亡率トハ男女各年齢ニ於ケル生存者一人ニ對スル當該年齢ノ死亡割合ヲ謂フ。但シ本表示所ノ比例數ハ始メ算出シタルモノヲ一定ノ方式ニ從テ加工(補整ト云フ)ヲ施コシタルモノナルカ故ニ、右期間ニ於ケル死亡割合ノ其ノ儘ヲ示スモノニアラスシテ推測死亡率ナリ。

完全平均命數トハ、各年齢人口ノ將來生存スヘキ豫定年數ヲ謂フ。例之二歳ノ男子ハ今後五十三歳ヲ生存シ得ヘキ豫定トナルカ故ニ、五十五歳ニシテ死亡シ、十歳ノ女子ハ今後四十八歳生存シ得ヘキ豫定トナルカ故ニ、五十八歳ニテ死亡スルモノナルコトヲ示ス、但シ實際ハ是等豫定年數ニ至ラスシテ死亡スル者アリ、或ハ豫定年數ヲ經過シテ死亡スルモノアルヘシト雖、統計上ニ於ケル標準命數ヲ示スモノナリ。

死力トハ、各年齢人口ノ死亡率ハ高低一様ナラサルモ、此ノ高低ハ年齢一歳ヲ限度トシテ確然變化スルモノニアラス、時ノ經過ト共ニ漸次増減スルモノナリ、此ノ理ヲ推シテ各年齢ニ達シタル現在瞬間ニ於テ死亡ノ危險程度ヲ數量ヲ以テ示シタルモノナリ。即チ其ノ數ノ高キ程危險性大ナルナリ。

今死亡率及完全平均命數ニ就キ、前回調査ノ結果ト比較シ著明ノ部分ヲ叙述スレハ次ノ如シ。即チ死亡率ヲ局第二表(明治三十二年乃至同三十六年ノ死亡ニ依ルモノ)ト比較スレハ、零歳ニ於テハ男高キコト 0.01546ニシテ此ノ男ハ局第二表ヨリ高キコト 0.00364、女モ亦同ク高キコト 0.00412、十歳ニ於テハ女高キコト 0.00076、之ヲ局第二表ニ比スルニ男ハ 0.00011低ク、女モ 0.00019低シ、二十歳ニ於テハ女高キコト 0.00185、之ヲ局第二表ニ比スルニ男ハ 0.00057高ク、女モ 0.00108高シ、三十歳ニ於テハ女高キコト 0.00195ニシテ局第二表ニ比スレハ男ハ 0.00015低ク、女モ 0.00031低シ、四十歳ニ於テハ女高キコト 0.00107ニシテ局第二表ニ比シ男ハ 0.00081低ク、女モ 0.00072低シ、五十歳ニ於テハ男高キコト

0.0050ニシテ、局第二表ニ比シ男ハ 0.00135低ク、女モ 0.00090低シ、六十歳ニ於テハ男高キコト 0.00828ニシテ局第二表ニ比シ男ハ 0.00223低ク、女モ亦 0.00195低シ、斯クテ最高年ニ至ルマテ男ノ率高ク、男女共ニ局第二表ヨリ低シ。之ニ由テ觀レハ局第二表時ト局第三表時ニ於テ死亡率ノ動搖ハ、最幼年ハ局第三表時死亡率增高シ、少年ニ至リテ少シク減少シ、青年再ヒ增高シ、壯年ヨリ高年ニ至ルマテ減少セリ、而シテ局第三表時ノ男女ノ關係ハ最幼年ニ男高ク、少年ヨリ青年、壯年ヲ過キ初老ニ至ルマテ女高ク、初老ヨリ最高年マテ男高シ。又完全平均命數ヲ見ルニ、零歳ノ女ハ男ヨリモ 0.51高ク、局第二表ニ比シテハ男ハ 10.28高キモ女ハ 0.09低ク、十歳ニ於テハ男ノ高キコト 0.27ニシテ、局第二表ニ比シテハ男ハ 0.58高ク、女モ 0.20高ク、二十歳ニ於テハ女ノ高キコト 0.63ニシテ局第二表ニ比シテハ男ハ 0.72高ク、女モ 0.64高ク、三十歳ニ於テハ女ノ高キコト 1.43ニシテ局第二表ニ比シテハ男モ女モ 0.91高ク、斯クテ最老年ニ至ルマテ女ノ率高ク、局第二表ト比シテハ男女共ニ高シ。之ニ由テ見レハ本邦人ノ平均命數ハ之ヲ局第二表時ニ比シテ一般ニ延長セリ、唯零歳ノ女ノミハ僅カナレトモ短縮セリ。齊ニ零歳ノ女カスク異況ヲ呈スルノミナラス、局第二表ニ於テハ各歳總テ女ノ平均命數ハ男ニ超過シタリシニ、局第三表ニ於テハ一歳以上十四歳マテハ女ノ平均命數ハ男ヨリモ短カシ、斯ノ如キハ嘗テ伊太利(一歳以上十六歳)及匈牙利(一歳以上三十四歳)ニ於テ見タル所ニシテ、決シテ佳良ナル徴候ニアラス。零歳ノ平均命數ハ女高ク男低キヲ常トス、是男ニ夭折者多クシテ女ニ長壽者少ナカラサルニ因ス、歐洲ニ於テハ多クハ三歳以上女ノ平均命數高ク、唯伊太利及匈牙利ノミ女ノ高キコト一歳以下ナリ。而シテ本邦モ亦伊、匈ノ班ニ列セサルヘカラス、殊ニ局第二表ニ於テハ 0.88ノ差アリシモノ今ヤ局第三表ハ上記ノ如クニ 0.51ニ減縮セリ、是亦本邦ノ生命表ニ於ケル甚タ悦ハシカラサル一特徴ナリ。

丙、在外本邦人及在留外國人

【在外本邦人】大正四年六月三十日調査ノ在外本邦人ノ總數ハ 397,256人ナリ。此ノ總數ニ對スル在留地別ノ分節比例ヲ其ノ高キモノヨリ舉クレハ、滿州ノ 263.80%第一位ニ居リ、北米合衆國ノ 252.52%之ニ次キ、布哇ノ 243.54%第三位タリ、此ノ三地ハ本邦人ノ在留者最も多キモノニシテ、第四位以下ハ遙ニ下レリ、即チ布哇ニ次クハ支那本部ノ 62.41%、伯刺西爾ノ 41.67%、加拿陀ノ 33.44%ニシテ、又一段下リタルヲ秘露ノ 17.03%、比律賓群島ノ 15.61%、露領亞細亞ノ 12.60%ト爲シ、次ノ階級ヲ馬來半島及英領[ボルネオ]ノ 9.62%、蘭領東印度ノ 9.59%、海峽殖民地ノ 8.26

%佛領[ニューカレドニア]ノ 7.29%、濠州聯邦ノ 6.75%ト爲ス、歐洲ハ其ノ總テヲ合セテ 3.06%ナルノミ、英領香港ハ 3.68%、英領印度モ 2.60%ナルノミ、佛領印度支那、暹羅ノ如キハ殆ト數ニ上ラス、墨其哥ハ既往ノ事實ニ徵スルニ約 7%ノ在留者アルヘキ管ナルモ報告ナシ。北米合衆國中最も多ク本邦人ノ在留スルハ[カリフォルニア]州ニシテ實ニ總數ノ 180.36%ニ當リ、北米在留者ノ 71.43%ヲ占ム、之ニ次クハ[ワシントン]州ニシテ總數ノ 38.58%、北米在留者ノ 15.28%ニ當ル、[オレゴン]州ハ總數ノ 9.01%、北米在留者ノ 3.57%ニ當リ、[ニューヨーク]州ノ[ニューヨーク]

市ハ總數ノ 6.01%、北米在留者ノ 2.38%ニ當レリ、而シテ其ノ他ノ各州ノ在留者ハ之ヲ合計シテ總數ノ 13.56%、北米在留者ノ 7.34%ニ相當ス。

外國在留本邦人ヲ男女ニ別テハ、男 238,407人女 133,139人男女不詳 25,710人ナリ。此ノ男女不詳者ハ北米(ニューヨーク)市在留者ノ全部ト伯刺西爾移民ノ一半ト北米カリフォルニア州在留者ノ一部ニシテ、之ヲ其ノ總數ノ分節比例ト爲セハ伯刺西爾 51.85%、カリフォルニア州 38.87%、(ニューヨーク)市 9.28%ニ當ル。此ノ不詳者ヲ除キ在外本邦人ノ男女ノ分節比例ニ求ムルニ男 64.17%、女 35.88%ニシテ海外移出者ニ男多キヲ知ル。然ルニ之ヲ在留地別ニ見レハ、其ノ比例甚タ不同ニシテ寧ろ女ノ在留者男ヲ 超過セル地アリ。試ミニ各地在留者ノ總數(男女不詳ヲ除ク)ニ對スル男ノ比例數ヲ其ノ少キモノヨリ擧ケレハ、英領印度 49.66%、馬來半島及英領ボルネオ 51.66%、露領亞細亞 52.81%、滿洲 53.70%、蘭領東印度 54.04%、支那本部 55.12%、英領香港 56.58%、海峽殖民地 57.50%、布哇 59.34%、伯刺西爾 59.66%、濠洲聯邦 62.54%以上ハ平均以上ニ女ノ多ク在留スル地ニシテ 以下記スル所ハ男ノ多ク在留スル地ナリ、即チ加拿陀 72.14%、北米合衆國 79.76%、比律賓群島 83.72%、秘露 84.88%、歐洲 86.35%、佛領(ニューカレドニア) 99.90%ナリ。而シテ北米合衆國ニ於テ(カリフォルニア)州ハ 80.44%、(オレゴン)州ハ 78.42%、(ワシントン)州ハ 73.53%其ノ他ノ各州合計ハ 87.62%ナリ。之ニ由テ觀レハ東洋各地ニ於テハ女ノ在留者ノ比例高ク、米國ニ於テハ其ノ比例低シ、此ノ東洋ノ女ノ在留者中ニハ彼ノ厭フヘキ業ヲ營ム者ノ包含スルコトヲ思フヘク、而シテ布哇及伯刺西爾在留者ノ女ノ平均以上ナルハ有配偶者ノ多キニ因ルモノナランカ。

在外本邦人ノ職業別ニ見ルニ、大體ニ於テ東洋各地ニ在ル者ハ商業及雜業ニ従事スル者多ク、米國布哇ニ在ル者ハ農業ニ従事スル者多シ。今主ナル在留地ニ就テ各性ノ總數ニ對スル職業別ノ分節比例ヲ見ルニ、營口、遼陽、奉天、鐵嶺、牛莊及其ノ附近ニ於テハ農業及漁業男 1.35%女 1.24%、工業及鑛業男 15.78%女 13.56%、商業及交通業男 64.52%女 60.18%、公務及自由業男 10.01%女 10.48%、其ノ他ノ有業者男 7.31%女 13.29%、無職業者男 1.03%女 1.25%ニ當リ、商業及交通業過半ヲ占ム。長春、吉林、哈爾濱、齊齊哈爾及其ノ附近ニ於テハ農業及漁業男 1.09%女 0.68%、工業及鑛業男 13.77%女 7.99%、商業及交通業男 67.74%女 46.88%、公務及自由業男 9.77%女 7.17%、其ノ他ノ有業者男 5.26%女 31.11%、無職業者男 2.37%女 6.16%ニ當リ、男ハ略シ奉天方面ノ狀態ニ似タレトモ女ハ大ニ異ナリ、商業及交通業モ工業及鑛業モ大ニ減シ其ノ他ノ有業者大ニ増加セリ、奉天方面ニ於テモ

女ハ男ヨリモ其ノ他ノ有業者多カリシカ、長春方面ニ至リテハ實ニ男ノ六倍ニ上レリ、而シテ此ノ其ノ他ノ有業者中ニ賣春婦及其ノ類似業者ヲ包含スルコトニ注意セサルヘカラス。更ニ關東州ヲ見ルニ、農業及漁業ノ男 2.05%女 1.66%、工業及鑛業ノ男 19.53%女 17.37%ハ前二方面ト大差ナケレトモ、商業及交通業ハ男 17.69%女 14.42%ニ大減シタリ、是前二方面ニハ南滿洲鐵道會社從事員ノ多數ヲ包含シタルモノナリシカ、關東州ハ本邦人ノ在留者多ク職業漸ク複雑ナルニ由リテ其ノ影響大ナラサルカ爲スルハ減少シタルナルヘク、公務及自由業ノ男 12.34%女 13.16%ニシテ稍多キモ茲ニ都督府在ルニ由ルナラン、而シテ其ノ他ノ有業者ハ男 46.47%女 51.39%ノ多數ニ上リ、女ノ厭フヘキ業者ノヨナラス、男ノ所謂雜業著シク多キモ亦注意スヘキ現象ナリ、無職業者ハ男 1.92%女 2.00%ニ當ル。次ニ馬來半島ヲ見ルニ、農業及漁業ハ男 33.31%女 5.00%、工業及鑛業ハ男 16.27%女 4.41%、商業及交通業ハ男 32.01%女 9.93%、公務及自由業ハ男 5.62%女 2.25%、其ノ他ノ有業者ハ男 11.34%女 76.25%、無職業者ハ男 1.45%女 2.16%ナリ、此ノ中男ノ農業ハ殆ト全部護謨栽培者ニシテ、其ノ商業ハ雜貨商及旅人宿下宿料理店多ク、女ハ各業者ノ比例數ヲ低クカラシムルマテニ其ノ他ノ有業者ノミ多ク、僅ニ高キ商業中ノ大多數ハ料理店ナルニ注意スヘシ。比律賓群島ニ於テハ農業及漁業ハ男 37.04%女 12.18%、此ノ農業中ニハ多數ノ麻挽業ヲ包含シ、漁業中ニハ採貝業多シ、工業及鑛業ハ男 33.29%女 19.89%、此ノ工業ノ大多數ハ土木建築業ナリ、商業及交通業ハ男 20.15%女 21.69%茲ニモ旅人宿下宿料理店最モ多ク、之ニ次クハ雜貨商ナリ、公務及自由業ハ男 0.87%女 4.66%、其ノ他ノ有業者ハ男 8.65%女 41.58%ニシテ、賣春婦及其ノ類似業者ノ最モ多キヲ遺憾トス。次ニ布哇ニ於テハ農業及漁業最モ多ク男 68.45%女 63.62%ニシテ其ノ過半ハ耕地勞働者ナリ、工業及鑛業ハ男 3.66%女 5.43%、商業及交通業ハ男 14.40%女 19.06%、公務及自由業ハ男 1.02%女 1.46%、其ノ他ノ有業者ハ男 12.47%女 10.42%ニシテ數字ノ上ニテハ比較的真面目ナルカ如シ。加拿陀ニ於ケル在留者ノ職業モ亦略布哇ニ似タルモノアリ、農業及漁業ハ男 62.73%女 63.30%、工業及鑛業男 9.46%女 10.22%、商業及交通業男 16.59%女 17.24%、公務及自由業男 0.81%女 1.24%、其ノ他ノ有業者男 10.31%女 8.00%、無職業者男 0.09%女無シ、鑛業從事者少シク多キヲ布哇ニ異ナリト爲スノミ。北米合衆國中(カリフォルニア)州ヲ見ルニ、是亦大體ニハ布哇及加拿陀ト同ク農業及漁業男 55.97%女 60.46%、工業及鑛業男 7.66%女 5.59%、商業及交通業男 17.63%女 19.57%、公務及自由業男 1.14%女 1.70%、其ノ他ノ有業者男 16.84%女 12.64%、無職業者男 0.77%女 0.03%ナリ。

【在留外國人】 大正五年末現在ノ在留外國人ハ男 12,312人女 5,998人計 18,310人ニシテ大正二年ヲ頂點トシ一時少シク減少セシカ、本年ハ僅ニ増加セリ。之ヲ國籍別ト爲セハ支那最モ多數ニシ

テ總數ノ 64.82%ヲ占メ、英吉利之ニ次キ 12.68%、北米合衆國 9.22%、獨逸 3.72%、佛蘭西 2.30%、露西亞 1.44%等其ノ多キモノニ屬セリ。

IV. 農 業

【作付反別】 大正五年ノ稻ノ作付反別ハ 3,072,129町ニシテ此ノ中 87.34%ハ水稻、12.66%ハ陸稻ナリ。又水稻中ノ 91.16%ハ粳、8.84%ハ糯ニ屬ス。水稻ノ作付反別ヲ同年首ノ田ノ總反別ニ比スルニ其ノ 102.2%ニ當リ田ノ總反別ヨリ多キコト 2.2%ナリ、是北海道年期地中ノ田カ田トシテ總反別ニ加ハラサルニモ拘ハラズ稻ノ作付アリタルニモ因ルヘク、又本年ニ入リテ後、新田ノ開發セラレタルモノアリタルニモ因ルナルヘシ。大正二年ニ終ル五年平均ノ稻ノ作付反別ヲ百ト爲シ本年ノ各指數ヲ求ムルニ、粳ハ 102.5、糯ハ 100.1、陸稻ハ 126.1ニ當リ皆増加セリ、就中陸稻作付ノ著シキ増加ハ一般ニ新田ヨリモ新畑ノ開發多ク、且ツ免租新開地並ニ輕租ノ開墾地及開拓地等ノ未タ畑ニ編入セラレシテ早既ニ陸稻ノ作付ヲ爲スモノアルニモ由ルナラン。又糯ノ作付甚タ増加セサルハ其ノ需用ノ比較的少キニ制セラレタルモノナルヘシ。大正五年ノ麥ノ作付反別ハ大麥 570,599町、稈麥 685,585町、小麥 531,094町ニシテ大麥ノ作付ハ漸次減少ノ傾向アリ、稈麥ハ増減不定、小麥ハ増加ス。即チ大正二年ニ終ル五年平均ヲ百ト爲シ本年ノ各指數ヲ求ムルニ大麥ハ 92.9、稈麥ハ 99.8、小麥ハ 110.4ニ當ル。小麥ノ作付ノミスク増加スルハ較近其ノ需用著シク増加シタルニ由ルナルヘク、大麥稈麥ノ作付減シ若クハ不定ナルハ其ノ理由詳カナラサレトモ、大麥ニ於テハ綠肥ノ裏作多キヲ加フルコトモ一原因ナルヘク、農家ノ生活徒ラニ向上シ、爲ニ麥食ニ代フルニ米食ヲ以テスル者漸ク多キニ至レルコトモ一原因トシテ念ハサルヘカラス。米麥以外ノ主要農作物ノ作付反別ハ大正四年ノ事實ヲ掲ク、而シテ之ヲ大正二年ニ終ル五年平均ニ比スルニ大豆、小豆、粟、稗ハ共ニ減少シ、黍、蕎麥、王蜀黍ハ共ニ増加セリ、甘藷モ亦増加シ、馬鈴薯ハ殊ニ著シク増加ス。又特用農作物ニ於テハ菜種(蠶蠶)ノ作付減少シ、葉煙草ハ増加セリ。次ニ大正五年ノ桑ト茶トノ作付反別ヲ見ルニ茶ハ 48,938町、桑ハ 465,866町ニシテ大正二年ニ終ル五年平均ヲ百ト爲シタル指數ヲ求ムルニ、桑ハ 104.5ニシテ増加シ、茶ハ 99.7ニシテ減少ノ傾向アリ。桑ノ作付ノ増加ハ寧ろ當然ノコトナレトモ、茶ノ作付ノ減少ハ製茶高ノ年々増加シ其ノ輸出量亦敢テ減セサルニ反スル奇異ノ現象ナリ。或ハ思フ、今ヤ製茶業ハ益專門ト爲リ、非專門ノ茶園ハ漸次他ノ農作ニ供用セラレ、作付反別ノ全體トシテハ寧ろ減少セルニモ拘ハラズ、專門的ノ所産ハ却テ増加スルモノニアラサルカ尙攷フヘシ。

上記主要農作物作付反別ヲ地方別ニ見ルニ、各地方ノ耕地面積ニ廣狹ノ不同アルカ故ニ素ヨリ正シキ比較ナラサレトモ、稻ハ新潟縣最モ多ク茨城、千葉二縣之ニ次キ、福岡、兵庫、愛知、秋田、福島ノ諸縣ハ其ノ多キモノニ屬ス。但シ陸稻ノ作付多キハ茨城、栃木、鹿兒島、千葉ノ諸縣トス。大麥ハ埼玉、茨城ノ二縣最モ多ク千葉、栃木、群馬、岩手、静岡、宮城ノ諸縣亦多ク、稈麥ハ熊本縣最モ多クシテ福岡、鹿兒島、廣島、愛媛、兵庫ノ諸縣亦多ク、小麥ハ茨城縣最モ多ク福岡、栃木、熊本、群馬、埼玉、岡山、兵庫、千葉諸縣亦多シ、要スルニ大麥ハ主トシテ東部ニ稈麥ハ主トシテ西部ニ多ク、小麥ハ東西ヲ通シテ畑多キ地ニ多シ。大豆ハ北海道ニ最モ多ク茨城、岩手、埼玉、宮城、新潟、熊本ノ諸縣ニ多ク、小豆モ亦北海道ニ最モ多ク熊本、新潟、茨城、埼玉ノ諸縣ニ多シ。粟ハ熊本縣著シク多ク鹿兒島縣之ニ次キ岩手縣第三位ニ居リ、稗ハ岩手縣頗ル多ク青森縣之ニ次キ北海道及岐阜、栃木ノ二縣其ノ多キモノニ屬シ、黍ハ北海道最モ多ク愛知、千葉、岐阜三縣相次テ多ク、蕎麥モ北海道最モ多ク鹿兒島縣之ニ次キ青森、千葉、岩手、長野ノ諸縣ニ多ク、玉蜀黍モ亦北海道ニ最モ多ク愛媛、高知、熊本、山梨、宮崎諸縣ニ多シ。甘藷ハ鹿兒島縣ヲ第一トシ沖繩長崎二縣之ニ次キ熊本、千葉、愛媛、埼玉諸縣ニ多ク、馬鈴薯ハ甘藷ニ反シ北海道ヲ第一トシ青森、福島、宮城、岩手、新潟、秋田諸縣ニ多シ。菜種ハ北海道最モ多ク福岡、三重、鹿兒島、愛知諸縣ニ多ク、葉煙草ハ茨城、栃木、鹿兒島ノ三縣最モ多ク岡山、徳島、神奈川ノ三縣次テ多シ。桑ハ長野、福島ノ二縣最モ多ク群馬、埼玉、山形ノ三縣之ニ次キ愛知、岩手、岐阜、山梨、茨城ノ諸縣ハ其ノ多キモノニ屬シ、茶ハ静岡縣最モ多ク鹿兒島、三重、熊本、茨城、京都、福岡ノ諸府縣ニ多シ。

【收穫高】 大正五年ノ米ノ收穫高ハ 5,845萬石ニシテ之ヲ別テハ粳米 5,219萬石、糯米 470萬石、陸米 156萬石ナリ。此ノ收穫高ヲ稻ノ作付反別ニ比スルニ粳米ハ一反ニ付 1.94石、糯米ハ同 1.81石、陸米ハ同 1.21石、米ノ總體ハ 1.90石ニ當レリ。此ノ收穫高ハ既往ニ於テ稀ニ見ル豊作ニシテ試ニ大正二年ニ終ル五年平均ニ比スルニ粳米ハ一反ニ付 0.21石、糯米ハ同 0.29石、陸米ハ同 0.34石、米總體ハ同 0.21石ノ增收ナリキ。又此ノ米總體ノ一反當リ收穫高ヲ地方別ニ見ルニ、香川縣ノ 2.53石最モ高ク、大阪府奈良縣ノ共ニ 2.42石之ニ次キ、佐賀縣ノ 2.32石、兵庫縣ノ 2.31石、

愛媛縣、滋賀縣ノ共ニ 2.28石等其ノ高キモノニ屬セリ、又最モ低キハ沖繩縣ノ 1.04石、北海道及茨城縣ノ共ニ 1.46石ニシテ埼玉縣ノ 1.51石、福島、栃木二縣ノ共ニ 1.54石、東京府ノ 1.59石等其ノ低キモノニ屬セリ。然ルニ同年ニ於ケル各地農事試驗場ノ稻作收穫量ヲ見ルニ、其一反當リハ上記香川縣ハ 2.86石、大阪府(畿内支場)ハ 3.13石、奈良縣ハ 3.20石、佐賀縣ハ 3.08石、兵庫縣ハ 3.34石、愛媛縣ハ 3.09石、滋賀縣ハ 2.89石ニシテ又北海道ハ 2.12石、茨城縣ハ 2.15石、埼玉縣ハ 2.68石、福島縣ハ 2.47石、栃木縣ハ 2.66石、東京府ハ 1.77石ニ當レリ。素ヨリ農事試驗場ハ最善ノ方法ヲ盡クセルモノ之ヲ以テ一般農家ノ成績ト比較スルコトトハ不倫ナリト雖、而モ彼此ノ間最モ其ノ差ノ大ナラサル香川縣東京府スラ一割ノ相違アリ、其ノ差ノ大ナルモノニ至リテハ三ト二トノ比ナルアリ、斯ノ如キハ一般農家ノ努力尙未タ足ラサルカ爲カ、將々其ノ調査ノ完全ナラサルモノアリテ眞實ノ數ヲ得サルニ由ルカ、尙致フヘシ。

大正五年ノ麥ノ收穫高ハ大麥 956萬石、裸麥 792萬石、小麥 587萬石ニシテ之カ作付一反別反當リハ大麥 1.68石、裸麥 1.16石、小麥 1.11石ニ當リ、大正二年ニ終ル五年平均ニ比シ大麥ハ 0.10石、裸麥ハ 0.02石、小麥ハ 0.09石ノ増收ニシテ平年ヨリ少シク豊作ナリキ。此ノ麥收穫高ヲ地方別ニ見ルニ、大麥ハ宮城縣ノ 2.42石最モ高ク、埼玉縣ノ 2.27石之ニ次キ、其ノ他大阪府ノ 2.18石、栃木縣ノ 2.12石、茨城縣ノ 2.09石、群馬縣ノ 2.04石等其ノ高キモノニ屬シ、最モ低キハ沖繩縣ノ 0.41石ニシテ鹿兒島縣ノ 0.77石之ニ次キ、秋田縣ノ 0.81石、新潟縣ノ 0.87石、福岡縣ノ 0.91石、北海道ノ 0.94石等其ノ低キモノニ屬ス。然ルニ是等諸縣ノ農事試驗場ニ於ケル同年ノ大麥ノ收穫高ハ宮城縣 2.58石、埼玉縣 3.69石、(大阪府調査ナシ)栃木縣 2.84石、茨城縣 3.39石、群馬縣 3.26石、秋田縣 1.95石、新潟縣 2.36石、福岡縣 2.44石(沖繩縣、鹿兒島、北海道ノ調査ナシ)ニシテ是亦米ニ於ケルカ如ク其ノ差大ナリ、裸麥ハ宮城縣ノ 1.90石最モ高ク、長野縣ノ 1.86石之ニ次キ、其ノ他香川縣ノ 1.66石、栃木、埼玉二縣ノ共ニ 1.64石、群馬縣ノ 1.62石等其ノ高キモノニ屬シ、最モ低キハ秋田縣ノ 0.50石ニシテ、沖繩縣ノ 0.55石之ニ次キ、新潟縣ノ 0.67石、北海道ノ 0.73石、鹿兒島縣ノ 0.78石等其ノ低キモノナリ、而シテ又是等諸縣ノ農事試驗場ニ於ケル裸麥ノ收穫高ヲ見レハ(宮城縣ハ調査ナシ)長野縣ハ 1.55石、香川縣 2.14石(栃木縣調査ナシ)埼玉縣 2.65石、群馬縣 2.56石(秋田沖繩、新潟三縣及北海道ニ調査ナシ)鹿兒島 1.56石ニ當リ、長野縣ハ出穂前ノ過乾ニ依リ破格アリタレトモ是亦其ノ收穫量ニ格段ノ差アリ。小麥ハ香川縣ノ 1.66石最モ高ク、廣島縣ノ 1.48石之ニ次キ、其ノ他宮城縣ノ 1.46石、兵庫縣ノ 1.41石、岡山縣ノ 1.3

9石、大阪府ノ 1.34石、奈良縣ノ 1.33石、徳島縣ノ 1.32石等其ノ高キモノニ屬シ、最モ低キハ沖繩縣ノ 0.33石ニシテ、秋田縣ノ 0.46石之ニ次キ、其ノ他新潟縣ノ 0.67石、山形縣ノ 0.68石、鹿兒島縣ノ 0.71石、山口縣ノ 0.73石等其ノ低キモノニ屬ス、而シテ是亦農事試驗場ノ收穫高ヲ舉クレハ、香川縣ハ 2.26石、廣島縣ハ 1.87石、宮城縣ハ 2.04石、兵庫縣ハ 2.22石、岡山縣ハ 1.72石(大阪府ハ調査ナシ)奈良縣ハ 1.83石、徳島縣ハ 1.80石(沖繩縣ハ調査ナシ)秋田縣ハ 1.68石、新潟縣ハ 1.47石、山形縣ハ 1.67石、鹿兒島縣ハ 1.69石、山口縣ハ 2.26石ノ收穫アリテ其ノ差決シテ渺ナカラス、以上麥ノ收穫モ亦一般農家ノ努力充分ナラサルモノアルカ、否レハ調査ノ方法ニ不備ナルモノアルニ由ルカ、注意スヘキ事實ナリ。

大豆ノ大正四年中ノ收穫高ハ 381萬石ニシテ其ノ作付一反別反當リハ 0.81石ナリ、之ヲ大正二年ニ終ル五年平均ニ比スルニ、其ヨリ高キコト 0.09石ナリ。小豆ノ收穫高ハ 95萬石ニシテ一反當リハ 0.73石ナリ、之ヲ上記五年平均ニ比スルニ 0.10石ノ増收ナリ。粟ハ 208萬石ノ收穫ニシテ其ノ一反當リ 1.23石、之ヲ五年平均ニ比スレハ 0.12石ノ増收ナリ。稗ハ 85萬石ノ收穫ニシテ一反當リ 1.57石、之ヲ五年平均ニ比スレハ 0.68石ノ大增收ナリ。黍ハ總收穫高 41萬石ニシテ其ノ一反當リハ 1.20之ヲ五年平均ニ比スレハ 0.10石ノ増收ナリ。蕎麥ハ總收穫高 126萬石ニシテ一反當リハ 0.81石、之ヲ五年平均ニ比スレハ 0.04石ノ増收ナリ。玉蜀黍ハ總收穫高 79萬石ニシテ一反當リ 1.34石、之ヲ五年平均ニ比スレハ 0.12石ノ増收ナリ。甘藷ハ 105,563萬貫ノ總收穫高ニシテ其ノ一反當リハ 343貫アリ、之ヲ五年平均ニ比スレハ 23貫ノ増收ナリ。馬鈴薯ハ總收穫高 25,476萬貫ニシテ其ノ一反當リハ 278貫ト爲リ、之ヲ五年平均ニ比スレハ 18貫ノ増收ナリ。菜種ハ 88萬石ノ總收穫高アリ其ノ一反當リハ 0.72石ト爲リ、五年平均ニ比シ 0.02石ヲ減ス。葉煙草ハ 1,311萬貫總收穫アリ一反當リハ 43貫ニシテ五年平均ニ比シ 4貫ノ増收ナリ。以上ノ事實ニ徴スレハ唯一ノ菜種ヲ除クノ外總テノ農産物ハ本年較ナカラサル増收ヲ見タリ、殊ニ之ヲ地方別ニ見ルニ、大豆ハ富山縣及大阪府ノ共ニ一反當リ 1.23石ナルヲ最多トシ、奈良縣ハ 1.22石、香川縣ハ 1.09石、石川縣ハ 1.07石ナリ。小豆ハ奈良縣ノ 0.96石最モ多ク、大阪府ハ 0.95石、北海道ハ 0.93石ナリ。粟ハ熊本縣ノ 1.64石ヲ最多トシ、栃木、大分、長崎ノ三縣ハ 1.57石ナリ。稗ハ千葉縣ノ 2.32石最モ多ク、茨城縣ハ 2.04石、栃木縣ハ 2.03石ナリ。黍ハ滋賀縣ノ 2.74石群ヲ抽キテ高ク、埼玉縣ハ 1.88石、茨城縣ハ 1.54石、栃木縣ハ 1.48石ナリ。蕎麥ハ大阪府ノ 1.29石最モ多ク、北海道ハ 1.16石、静岡縣 1.16石ナリ。玉蜀黍ハ千葉縣ノ 2.25石最モ多ク、徳島縣ハ 1.87石、

栃木縣ハ 1.85石、茨城縣ハ 1.71石、北海道及埼玉縣ハ共ニ 1.66石ナリ。甘藷ハ沖繩縣ノ 517貫最モ多ク、群馬縣ハ 435貫、静岡縣ハ 433貫、山梨縣ハ 422貫、千葉縣ハ、402貫ナリ。馬鈴薯ハ千葉縣ノ 357貫最モ多ク、群馬縣ハ 345貫、北海道ハ 305貫、茨城縣ハ 302貫ナリ。菜種ハ埼玉縣ノ 1.47石最モ多ク岩手縣ハ 1.18石、和歌山縣ハ 1.09石、千葉、山梨、香川ノ三縣ハ共ニ 1.08石ナリ。葉煙草ハ福井縣ノ 73貫最モ多ク、静岡縣ハ 68貫、愛知縣ハ 63貫、千葉縣ハ 62貫、滋賀縣ハ 61貫ナリ。以上ハ一反當リノ高キ地ヲ舉ケタルモノニシテ、之ヲ以テ直ニ其ノ地ノ産額ノ多寡ヲ推想スル能ハス、往々ニシテ多産地ハ却テ一反當リ收穫ノ低キコトアリ

試ニ米以下ノ各農産物ニ就テ最多産地ノ二三ヲ舉クレハ、水稻ハ新潟最モ多ク全國總産額ノ約 52%ニ當リ兵庫縣ハ約 45%、福岡縣ハ約 42%、山形縣及岡山縣ハ共ニ約 32%ニ當ル、此ノ中新潟縣ハ一反當リ收穫ハ全國平均ヨリ低シ、水稻ハ茨城縣最モ多ク、全國總産額ノ約 210%ヲ占メ、栃木縣之ニ次キ約 150%、鹿兒島縣約 100%、千葉縣約 90%ニ當ル、此ノ中鹿兒島縣ノ一反當リハ平均ヨリ低シ、大麥ハ埼玉縣最モ多ク全國總産額ノ約 115%ヲ占メ、茨城縣約 100%、千葉縣約 70%、栃木縣約 67%、群馬縣約 62%ニ當リ、一反當リハ皆平均以上ノ收穫アリ。裸麥ハ廣島縣最モ多ク、全國總産額ノ約 73%ニ當リ、熊本縣ハ約 71%、愛媛縣ハ約 67%、兵庫縣ハ約 65%ニ當ル、此ノ中熊本縣ハ一反當リノ收穫全國平均以下ニ居ル。小麥ハ茨城縣最モ多ク約 95%ニ當リ、福岡縣ハ約 61%、兵庫縣ハ約 55%、群馬縣、栃木縣及岡山縣ハ共ニ約 54%ニ當リ、一反當リハ皆平均以上ナリ。大豆ハ北海道最モ多ク約 211%ニ當リ、茨城縣ハ約 65%、岩手縣ハ約 55%、千葉縣ハ約 59%、宮城縣ハ約 45%ニ當リ、茨城縣ハ一反當リ平均ト等位ニシテ岩手縣ハ平均ヨリ少シク低シ。小豆モ亦北海道ニ最モ多ク産シ全國總産額ノ約 434%ヲ占メ、熊本縣ハ約 40%、茨城縣ハ約 34%、新潟縣ハ約 33%、千葉縣ハ約 29%ニ當ル、此ノ中茨城、新潟、熊本三縣共ニ一反當リ收穫ハ全國平均ヨリモ低シ。粟ハ熊本縣最モ多ク産シ全國總産額ノ約 244%ヲ占メ、鹿兒島縣之ニ次キ約 153%其ノ他大分縣ハ約 54%、岩手縣ハ約 50%、長崎縣ハ 47%ニ當ル、此ノ中岩手縣ハ一反當リ收穫平均ヲ距ツルコト迥ニ低シ。稗ハ岩手縣最モ多ク産シ全國總額ノ約 397%ヲ占メ、青森縣之ニ次キ約 142%ニ當リ、北海道ハ約 84%、栃木縣ハ約 73%ニ當ル、岩手縣ノ一反當リ産額ハ全國平均以下ナリ。黍ハ北海道ノ産額最モ多ク全國總産額ノ 543%ヲ占メ、愛知縣約 44%、東京府約 35%、岐阜縣約 30%ニ當ル、此ノ中岐阜縣ハ一反當リ收穫全國平均ヨリ少シク低シ。蕎麥ハ北海道最モ多ク産シ全國總産額ノ約 203%ニ當リ、鹿兒島縣ハ約 75%、青森縣ハ約 64%、茨城縣ハ約 60%、

宮崎縣ハ約 56%、岩手縣ハ約 53%ニ當ル、岩手、宮崎、鹿兒島ノ三縣ハ其ノ一反當リ收穫ハ全國平均ヨリ低シ。玉蜀黍モ亦北海道ニ最モ多ク産シ全國總産額ノ約 487%ヲ占メ、愛媛縣ハ約 92%、熊本縣ハ約 45%、高知縣ハ約 44%、山梨縣ハ約 41%ニ當ル、此ノ中愛媛、高知、熊本ノ三縣ハ其ノ一反當リ收穫ハ全國平均以下ナリ。甘藷ハ沖繩縣最モ多ク全國總産額ノ約 143%ニ當リ、鹿兒島縣モ亦多ク約 136%ニ當リ、其ノ他長崎縣ハ約 86%、千葉縣ハ約 58%、熊本縣ハ約 57%、愛媛縣ハ約 38%、宮崎縣ハ約 35%、埼玉縣ハ約 33%ニ當ル、愛媛、熊本、宮崎、鹿兒島ノ四縣ニ於ケル一反當リ收穫ハ全國平均以下ニ在リ。馬鈴薯ハ北海道ノ産額最モ多ク全國總産額ノ約 560%ヲ占メ、青森縣ハ約 57%、宮城縣ハ約 42%、岩手縣ハ約 28%、新潟縣ハ約 24%、秋田縣ハ約 23%、ニ當ル、青森、岩手、宮城、秋田、新潟ノ五縣ハ皆其ノ一反當リ收穫ハ全國平均以下ナリ。菜種ハ北海道ニ最モ多ク産シ全國總産額ノ約 158%ニ當リ、福岡縣モ亦多ク約 142%ニ當リ、鹿兒島縣ハ約 92%、三重縣ハ約 91%、滋賀縣ハ約 71%、愛知縣ハ約 51%ニ當ル、此ノ中滋賀、愛知、三重、鹿兒島ノ四縣ハ其ノ一反當リ收穫ハ平均ヨリ低シ、葉煙草ノ産額ハ栃木縣ノ全國總産額ニ對スル約 152%、茨城縣ノ同約 148%最モ多ク、鹿兒島縣ハ約 98%、福島縣ハ約 79%、徳島縣ハ約 77%ニ當ル、栃木、福島、鹿兒島ノ三縣ハ其ノ一反當リ收穫ハ全國平均以下ニ在リ。

歐洲大戰前ニ於ケル各國ノ農産統計ヲ見ルニ、小麥ノ産額ハ歐洲露西亞及高加索(1913年)ノ 2,280萬噸最モ多ク其ノ作付一畝ノ平均收穫高ハ 910斤ナリ、(畝ハ「ヘクタール」略字ニシテ我約一町餘ニ當リ、斤ハ「キログラム」略字ニシテ我約 267匁ニ當ル)之ニ次クハ北米合衆國(1913年)ノ 2,078萬噸、作付一畝平均收穫 1,020斤、其ノ他佛蘭西(1912年)ハ 910萬噸(1畝平均收穫 1,380斤)、加奈太(1913年) 631萬噸(1畝 1,410斤)伊太利(1913年) 584萬噸(1畝 1,220斤)亞爾然丁(1912-13年) 540萬噸(1畝 780斤)獨逸(1913年) 466萬噸(1畝 2,360斤)匈牙利(1913年) 455萬噸(1畝 1,280斤)等ヲ多シト爲ス。又大麥ハ歐洲露西亞及高加索ノ 1,214萬噸最モ多ク(1畝平均收穫 990斤)北米合衆國ノ 388萬噸(1畝 1,280斤)之ニ次キ、其ノ他獨逸ノ 367萬噸(1畝 2,220斤)匈牙利ノ 181萬噸(1畝 1,440斤)奧地利(1912年) 171萬噸(1畝 1,600斤)西班牙(1912年)ノ 131萬噸(1畝 980斤)等ヲ多シト爲ス。又裸麥ハ歐洲露西亞及高加索ノ 2,469萬噸(1畝 850斤)最モ多ク、獨逸ノ 1,222萬噸(1畝 1,910斤)之ニ次キ、其ノ他奧地利ノ 297萬噸(1畝 146斤)匈牙利ノ 134萬噸(1畝 1,190斤)佛蘭西ノ 124萬噸(1畝 1,030斤)北米合衆國 105萬噸(1畝 1,020斤)等其ノ多キモノニ屬ス。馬鈴薯ハ獨逸ノ 5,412萬噸(1畝 15,860斤)最モ多ク、歐洲露西亞及高加索ノ 3,469萬噸(1畝

7,440 疋)之ニ次キ、其ノ他佛蘭西ノ 1,508 萬噸(1 窟 9,610 疋)地地利ノ 1,254 萬噸(1 窟 10,020 疋)北米合衆國ノ 902 萬噸(1 窟 6,080 疋)匈牙利ノ 597 萬噸(1 窟 7,540 疋)愛爾蘭(1,913 年) 1380 萬噸(1 窟 16,120 疋)等其ノ多キモノニ屬セリ。是等産額ノ多寡ハ其ノ國ノ廣袤ニ依リテ差アルコト勿論ナレトモ此ノ斷片ノ數字モ亦其ノ國々ノ農業一斑ヲ推スルノ料トナスヘク、又一窟ニ對スル收穫ノ多寡ノ如キハ其ノ國々ノ農業組織ニ應シテ素ヨリ一概ニ論スヘキモノニアラサレトモ、亦以テ自ラ省ミルノ料ト爲スヘシ。而シテ本邦ノ 1913 年ニ於ケル作付面積 1 窟ニ對スル收穫ハ小麥 1,440 疋、大麥 1,940 疋、裸麥 1,520 疋、馬鈴薯 10,050 疋ナリト云フ(獨逸ノ計算ニ依ル)。

【養蠶】 大正五年中ノ養蠶戶數ハ總數 1,765,937 戶ニシテ、前年ニ比シ 92,477 戶ヲ増セリ。此ノ増加ハ前年ノ百ニ對スル 105.5%ニ當ル。本年ノ總養蠶戶數中春蠶飼養戶數ハ 84.6%ニ當リテ前年ノ百ニ對スル 103.9ニ増加シ、夏蠶養蠶戶數ハ 29.9%ニ當リテ前年ノ百ニ對スル 96.2ニ減シ、秋蠶飼養戶數ハ 75.5%ニ當リテ前年ノ百ニ對スル 112.0ニ増加セリ。是ニ謂フ養蠶戶數トハ春夏秋蠶ヲ通シテ若クハ春蠶秋蠶ヲ若クハ春蠶ノミ等モ角モ一季ニテモ養蠶シタル戶數ニシテ、春蠶飼養戶數トハ春蠶ノミ又ハ他季ノ養蠶ト共ニ春蠶ヲ飼養シタル戶數ノ謂ヒニシテ他ノ秋蠶夏蠶モ亦同シ、故ニ養蠶戶數ノ中 15.4%ハ春蠶ヲ飼養セサリシ養蠶戶數、70.1%ハ夏蠶ヲ、24.5%ハ秋蠶ヲ飼養セサリシ家ナリ。春蠶飼養戶數ハ既往ニ於テ甚タ大ナラサル差ヲ以テ増減セシカ、概シテ増加ノ傾向アリ、夏蠶飼養戶數ハ春蠶ヨリモ其ノ差大ナル増減アリテ近キ既往ハ減少ニ傾ケリ、秋蠶飼養戶數ハ嘗テ甚タ振ハス夏蠶以下ニ在リシカ年一年毎ニ増加シ其ノ歩調頗ル長足ノ概アリ。養蠶戶數ヲ地方別ニ見ルニ長野縣最モ多ク全國總數ノ約 90%ニ當リ、埼玉縣ノ約 58%、愛知縣ノ約 57%ニ次キ、岐阜縣ノ約 48%、福島縣ノ約 47%、群馬縣ノ約 44%、茨城縣ノ約 37%、静岡県ノ約 34%、山梨縣ノ約 33%、三重縣ノ約 32%、新潟縣ノ約 30%ニ當レリ。又春蠶飼養戶數ハ大體ニ養蠶戶數ト一致シ、長野縣最モ多ク全國總數ノ約 76%ニ當レリ、埼玉縣ノ約 62%、愛知縣ノ約 61%、群馬縣ノ約 48%、岐阜縣ノ約 47%、福島縣ノ約 46%、静岡県ノ約 39%、茨城縣ノ約 38%、山梨縣及新潟縣ハ共ニ約 35%ニ當リ、其ノ飼養全國ニ涉リテ平等ナリ、夏蠶飼養戶數ハ長野縣最モ多ク全國總數ノ約 198%ヲ占メ、愛知縣ノ約 115%ニ次キ、岐阜縣ノ約 73%、福島縣ノ約 51%、滋賀縣ノ約 47%、山形縣ノ約 40%、新潟縣ノ約 37%、三重縣ノ約 35%、福井縣ノ約 33%、高知縣ノ約 32%ニ當リ、春蠶ニ比スレハ甚タ不平等ナリ。秋蠶飼養戶數モ亦長野縣第一位ニ居リ全國總數ニ對スル約 99%ヲ占ム、愛知縣

ハ約 67%、埼玉縣ノ約 61%、群馬縣ノ約 55%、岐阜縣ノ約 53%、福島縣ノ約 50%、茨城縣ノ約 40%、山梨縣ノ約 36%、三重縣ノ約 35%、静岡県ノ約 34%ニ當レリ。斯ノ如ク春夏秋蠶ニ於テ各府縣ノ飼養戶數ニ差アル所以ノモノハ、其ノ地方ニ於ケル地理及氣象上ノ自然關係ノ然ラシムルモノ最モ重大ノ原因ナルヘシト雖、亦一面ニハ各地方ノ舊慣ニ泥ミテ新事ヲ敢テセサル守舊者アルト他ノ一面ニハ其ノ反對ニ新事ヲ趁フニ急ナル者アルニモ由ルナランカ。

大正五年ノ蠶種播立枚數ハ合計 5,757,414 枚ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 425,091 枚ノ増加ニシテ、養蠶戶數一戸ニ付平均 3.3 枚ニ當ル。播立蠶種ヲ種別スレハ春蠶 42.3%、夏蠶 11.0%、秋蠶 40.7%ニ當リ、之ヲ大正二年ニ終ル五年平均ノ春蠶 52.5%、夏蠶 13.1%、秋蠶 34.4%ニ比スレハ、春蠶夏蠶ノ播立ノ減少ナル夫タケ秋蠶播立ノ増加セルヲ見ル、惟フニ是ハ本邦蠶業ノ趨勢ニシテ、春蠶飼育ヲ以テ唯一ノ養蠶業ナリト做セシ時代ハ業ニ既ニ經過シ、副業ノ小規模養蠶モ漸ヲ追フテ増加ノ傾向アレトモ夫ニモ優リテ專業ノ養蠶ノ多キヲ加フルニ至レル爲ナラン、試ニ既往ニ於ケル養蠶戶數一戸ニ付平均播立枚數ヲ見ルニ、明治三十二年ヨリ同三十六年ニ至ル五年平均ハ 2.6 枚ニシテ、次ノ同四十一年ニ終ル五年平均ハ 2.9 枚ト爲リ、又次ノ大正三年ニ終ル五年平均ハ 3.0 枚ト爲リ、今ヤ實ニ 3.3 枚ニ進メリ、而シテ春蠶モ夏蠶モ其ノ播立枚數ハ分節比例ト爲シテコソ減少ノ觀アレトモ、其ハ秋蠶播立枚數ノ著シキ増加ニ由ル比例上ノ誤差ニシテ實數ハ共ニ増加シツ、アルナリ、若シ夫秋蠶播立ノミ著シク増加スル所以ノモノハ即チ蠶業經營カ專業的ニ進メルノ兆ニシテ、養蠶技術ノ發達ハ此ノ發育迅速ナル夏蠶秋蠶ノ飼育ヲ等閑ニ見ス、而モ桑園經營上秋蠶ヲ有利ナリト爲スコトモ亦當然ノ結果ナルヘケレハナリ。

蠶種播立枚數ヲ地方別ニ見テ全國總數ニ對スル分節比例ヲ算スルニ長野縣ノ約 185%最モ高ク群馬縣ノ約 112%ニ次キ其ノ他埼玉縣ノ約 81%、愛知縣ノ約 98%、福島縣ノ約 69%、山梨縣ノ約 62%、岐阜縣ノ約 51%、等其ノ高キモノニ屬ス。春蠶ノ播立枚數ヲ同一比例ト爲シテ見レハ是亦長野縣ヲ第一位ト爲シ約 109%ヲ占メ、群馬縣ノ約 106%ニ次キ、埼玉縣ノ約 79%、福島縣ノ約 66%、山梨縣ノ約 60%、愛知縣ノ約 50%、茨城縣ノ約 42%、岐阜縣ノ約 38%、静岡県ノ約 37%ナリ。又秋蠶ノ播立枚數ヲ同一比例ト爲シテ見レハ、是亦長野縣最モ高ク約 155%ヲ占メ、群馬縣ノ約 108%ニ次キ、愛知縣ノ約 77%、埼玉縣ノ約 76%、山梨縣ノ約 56%、福島縣ノ約 49%、岐阜縣ノ約 47%、茨城縣ノ約 46%、静岡県ノ約 38%ニ當リ、同一縣ニ於テモ彼此ノ間ニ比例數ノ大小ヲ異ニシテ其ノ順位ノ相違ヲ來ス所以ノモノハ即

チ地方ヲ異ニスルニ依リテ蠶業經營ノ同シカラサルモノアルニ由ルナリ。

蠶業ノ收穫ナル産額高ハ課税ノ關係上、眞實ノ數ヲ得難キコト他ノ農産物數量ノ信シ難キ夫ヨリモ更ニ信シ難シ、假ニ公知ノ數ニ就テ言ヘハ、大正五年ノ産額總額ハ 5,708,463 石ニシテ前年ニ比シ實ニ 1,061,035 石ノ增收ニ當リ、養蠶戶數一戸ニ付平均ハ 3.2 石ニシテ未タ曾テ見サル豊收ナリ。又之ヲ播立蠶種平均一枚ニ對スル比例ヲ求ムルニ春蠶ハ 1.10 石夏蠶ハ 0.97 石秋蠶ハ 0.87 石ニシテ共ニ既往ニ於テ嘗テ見サル豊收ナリキ。

【果實】 果實ノ收穫モ亦甚タ信ヲ措キ難キモノ、一ナリ。假ニ公知ノ數ニ依リテ見レハ、大正四年ノ梅實産額ハ 41 萬石餘ニシテ之ヲ地方別ニ見レハ埼玉縣ノ産額最モ多ク全國總數ノ約 81%ヲ占メ、東京府ノ約 66%ニ次キ、其ノ他茨城縣ノ約 49%栃木縣ノ約 43%、福島縣ノ約 37%等ヲ多産ノ地ト爲ス。桃實ノ全國總産額ハ 1,212 萬貫ニシテ之ヲ地方別ニ見レハ岡山縣ノ全國總産額ニ對スル約 148%ヲ最高トシ、神奈川縣ノ約 72%ニ次キ、大阪府ノ約 68%、香川縣ノ約 57%、福島縣ノ約 46%、群馬縣ノ約 43%等ヲ多産ノ地ト爲ス。梨實ノ全國總産額ハ 2,234 萬貫ニシテ之ヲ地方別ニ見レハ静岡県ノ全國總産額ニ對スル約 94%ヲ最高トシ、新潟縣ノ約 60%、愛媛縣ノ約 58%、茨城縣ノ約 57%、福島縣ノ約 54%、奈良縣ノ約 53%、神奈川縣ノ約 48%等ヲ多産ノ地ト爲ス。柿實ノ中生柿ノ總産額ハ 4,791 萬貫ニシテ之ヲ地方別ニ見レハ、長野縣最モ高ク全國總産額ノ約 80%ニ當リ、兵庫縣ノ約 54%ニ次キ、福

島縣ノ約 53%、新潟縣ノ約 50%、宮城縣ノ約 39%、岡山縣ノ約 37%等ヲ其ノ多産地ト爲シ、干柿ハ總産額 341 萬貫ニシテ之ヲ地方別ニ見レハ、福島縣最モ高ク全國總産額ノ約 116%ニ當リ、長野縣ノ約 90%ニ次キ、愛媛縣ノ約 72%、廣島縣ノ約 57%、宮城縣ノ約 43%等ヲ多産ノ地ト爲ス。苹果ノ總産額ハ 706 萬貫ニシテ、之ヲ地方別ニ見レハ青森縣最モ高ク全國總産額ノ約 577%ヲ占メ北海道ニ次キ約 168%ニ當リ、秋田縣ノ約 57%、山形縣ノ約 43%、長野縣ノ約 40%等ヲ多産地ト爲ス。葡萄ノ總産額 453 萬貫ニシテ、之ヲ地方別ニ見レハ全國總産額ニ對シ約 149%ナル山梨縣ヲ最高トシ、長野縣ノ約 104%ニ次キ、岡山縣ノ約 73%、東京府ノ約 56%、新潟縣ノ約 55%、廣島縣ノ約 42%、千葉縣ノ約 40%等ヲ多産地ト爲ス。柑橘類中蜜柑ノ總産額 4,179 萬貫ニシテ、之ヲ地方別ニ見レハ全國總産額ノ約 260%ナル和歌山縣ヲ最高トシ、静岡県ノ約 176%ニ次キ、大阪府ノ約 103%、神奈川縣ノ約 64%、愛知縣ノ約 51%、廣島縣ノ約 48%等ヲ多産地ト爲シ、レネアールオレンジノ總産額 230 萬貫ニシテ之ヲ地方別ト爲セハ廣島縣ノ全國總産額ニ對スル約 158%ヲ最高トシ、和歌山縣ノ約 136%ニ次キ、愛媛縣ノ約 127%、静岡県ノ約 74%、高知縣ノ約 56%、大分縣ノ約 54%等ヲ多産地ト爲シ、夏橙ノ總産額 1,123 萬貫ニシテ、之ヲ地方別ニ見レハ愛媛縣ノ全國總産額ニ對スル約 208%ヲ最高トシ和歌山縣ノ約 184%ニ次キ、廣島縣ノ約 73%、兵庫縣ノ約 61%、大阪府ノ約 59%、大分縣ノ約 54%、福岡縣ノ約 53%等ヲ多産地ト爲ス。

V. 家畜及家禽

【家畜】 大正四年末現在ノ家畜ハ、牛 1,387,922 頭、馬 1,579,517 頭、山羊 97,396 頭、綿羊 2,768 頭、豚 333,276 頭ナリ。之ヲ同年末ノ乙種現住人口ニ比スルニ其ノ千ニ付牛 25.49 頭、馬 29.01 頭、山羊 1.79 頭、綿羊 0.05 頭、豚 6.12 頭ニ當ル。此ノ人口比例數ヲ外國ニ比較スルニ、英吉利(1913 年調)ニ於テハ牛 156.17 頭、馬 38.30 頭、山羊不詳、綿羊 467.95 頭、豚 57.42 頭ニ當リ、佛蘭西(1912 年調)ニ於テハ牛 370.89 頭、馬 81.26 頭、山羊 35.52 頭、綿羊 415.33 頭、豚 174.12 頭ニ當リ、獨逸(1912 年調)ニ於テハ牛 305.11 頭、馬 68.38 頭、山羊 51.56 頭、綿羊 87.74 頭、豚 331.44 頭ニ當レリ。各國其ノ事情ヲ異ニスルニ由リテ各畜ニ多少アレトモ、之ヲ本邦ニ比スレハ何レモ格段ノ差アリ、本邦ノ家畜及家禽統計ニ幾何ノ信スヘキ價值アリヤ疑ハシト雖、假ニ之ヲ實際ニ近キモノトスレハ、本邦畜産ノ振ハサル定ニ甚シト謂フヘシ。

大正四年末現在ノ家畜ヲ明治四十一年ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、牛ハ 111.21、馬ハ 105.69、山羊ハ 116.85、綿

羊ハ 67.76、豚ハ 117.05ニ該當ス。之ニ依リテ此ノ七年間ニ於ケル増減ヲ見ルニ一年平均牛ハ 15.89%、馬ハ 15.10%、山羊ハ 16.69%、豚ハ 16.72%増加シ、綿羊ノミ 46.06%減少セリ。然ルニ佛蘭西ニ於テハ 1907 年ト 1912 年トノ前後ノ調査間ニ於テ、一年平均牛ハ 10.84%、馬ハ 8.24%増加シ、山羊ハ 1.76%、綿羊ハ 11.36%、豚ハ 2.62%、減少シ、又獨逸ニ於テモ同期間ニ於テ馬ノミ 8.20%増加シタレトモ、牛ハ 4.44%、山羊ハ 9.00%、綿羊ハ 49.34%、豚ハ 2.02%減少シタリ(英吉利ハ近キ兩回ノ調査ニ完全ノ比較ヲ爲シ得サルモノアリテ比較セズ)。佛獨ノ此ノ増減ハ自ラ特殊ノ原因アルヘキカ故ニ、直ニ本邦ト比較シ能ハサルモノアレトモ、而モ亦本邦ノ家畜ノ増加力ハ必スシモ鈍キニアラサルヲ知ルヘク、而シテ尙上記ノ如ク振ハサルモノハ其ノ原數ノ低キニ因ルナリ。

【家禽】 大正四年末現在ノ家禽ハ、鶏 22,845,745 羽、鶯 371,527 羽ナリ。之ヲ同年ノ乙種現住人口ニ比スルニ其ノ千ニ付鶏 419.65 羽、鶯 4.99 羽ニ當ル。此ノ現在數ヲ明治四十一年ニ比シ、其ノ

百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、鶏ハ 118.07、鶯ハ 111.90ニ該當シ、之ニ依リテ七年間ノ増減ヲ見ルニ一年平均鶏ハ 16.87%、鶯ハ 15.99%増加セリ。

大正四年末現在ノ家畜及家禽ヲ地方別ニ見ルニ、牛ノ最も多キハ廣島、岡山、兵庫、鹿児島、鳥根、大分、長崎ノ諸地方ニシテ、馬ノ最も多キハ北海道、熊本、岩手、福島、宮崎、秋田ノ諸地方ナリ、山羊ハ沖繩、鹿児島ノ二地方其ノ大部ヲ占メ、綿羊ハ栃木、鹿児島、北海道、岩手ノ諸地方ニ稍見ルヘキ數アルノミ、豚ハ沖繩、鹿児島ノ二縣ニ頗ル多ク之ト比スルニ足ラサレトモ神奈川、茨城、千葉等關東地方ニ稍多シ。又家禽ノ中鶏ハ全國一般ニ飼養スルモ就中千葉、愛知、鹿児島、茨城ノ諸地方ニ多ク、鶯ハ大阪、千葉最も多ク埼玉、新潟ノ各地方ニ稍多シ。

【牛】大正四年末現在ノ牛ヲ細觀スルニ、其ノ牝ハ 925,952頭、牡ハ 461,990頭ニシテ、牝百ニ付牡 49.89ニ當ル。上記ノ歐洲三國ニ之ヲ比スルニ、獨逸ノ牝百ニ付牡 84.41ニシテ牡少ナケレトモ佛蘭西ハ此比例 102.77、英吉利ハ 152.47ニシテ、共ニ牡多シ、是本邦牛畜ノ一特徴ニシテ、食用牛飼養ノ振ハサルニ因スルナキカ尙攷フベシ。而シテ此ノ牝牡ノ關係ヲ推移シテ明治四十一年ノ同一比例ニ比シテ觀察スルニ牝ノ比例 2.57低ク即チ牝彌カ上ニ少シク增多シタルハ注意スヘキ現象ナリ。次ニ牛ヲ種類別ト爲セハ、内國種 938,050頭、外國種 16,576頭、雜種 433,296頭ニシテ之ヲ總數ノ分節比例ト爲セハ、内國種 67.59%、外國種 1.19%、雜種 31.22%ニ當ル、此ノ分節比例ヲ明治四十一年ノ同比例ニ比スレハ、内國種 1.31%、外國種 0.69%ヲ減シ、雜種 2.00%ヲ増シタリ。又種牡牛ハ逐年増加シ、此ノ年ノ年末現在ハ 6,433頭ニシテ、之ヲ種類別ト爲セハ、雜種々牡牛漸次減少シ、内國種々牡牛増加ノ傾向アリ。乳牛ノ年末現在數ハ 53,566頭ニシテ是亦増加ノ趨勢著明ナリ。次ニ牛ノ動態ヲ見ルニ、大正四年中ノ出產數ハ 197,822頭ニシテ、之ヲ年末現在牛ノ總數ニ比スレハ其ノ百ニ付 14.25ニ當リ、既往ノ平均出產比例ニ比較スレハ稍高シ、又之ヲ年末ノ牝牛數ニ比スレハ其ノ百ニ付 21.36ニ當レリ。大正四年中ノ牛ノ斃死數ハ 16,580頭、同屠殺數ハ 277,980頭ナリ。之ヲ年末現在牛ノ總數ニ比スレハ、其ノ百ニ付斃死 1.19、屠殺 20.03ニ當リ、此ノ兩者ヲ合スレハ 21.22ニシテ、出產比例ヨリ高キコト 6.97ナリ。是ハ此ノ一年ニ限レル事實ニアラスシテ、累年略々相似タリ。斯ノ如クニシテ尙牛ノ増加スル所以ノモノハ果シテ何ニ因スルカ、今之ヲ明カ

ニスルニ由ナシ。

【馬】次ニ大正四年末現在ノ馬ヲ細觀スルニ、其ノ牝ハ 885,781頭、牡ハ 644,741頭ニシテ、牝百ニ付牡 72.79ニ當リ、之ヲ明治四十一年ノ同一比例ニ比スルニ、牡ノ比例 4.30ヲ減シ、是亦牝ノ増加ヲ示セリ。次ニ馬ヲ種類別ト爲セハ、内國種 894,041頭、外國種 17,242頭、雜種 619,239頭ニシテ之ヲ總數ノ分節比例ト爲セハ、内國種 56.60%、外國種 1.09%、雜種 42.31%ト爲リ、之ヲ明治四十一年ノ同一比例ト比較スルニ、内國種ハ 26.60%ヲ減シ、外國種ハ 0.28%、雜種ハ 26.32%ヲ増シタリ。僅ニ七年間ニシテ内國種ト雜種トニ斯クハ著シキ増減アリシカ、今其ノ原因ヲ審ニセス。又種牡馬ハ一時稍増加セシカ本年ハ少シク減少シ、年末現在ハ 5,355頭ト爲レリ。而シテ其ノ種類別ハ外國種ノミ増加ス。次ニ馬ノ動態ヲ見ルニ、大正四年中ノ出產數ハ 118,538頭ニシテ之ヲ年末現在馬ノ總數ニ比スレハ、其ノ百ニ付 7.50ニ當リ、既往ノ平均出產比例ニ較スルニ僅ニ高シ、又之ヲ年末ノ牝馬數ニ比スレハ其ノ百ニ付 13.33ニ當レリ。大正四年中ノ馬ノ斃死數ハ 34,416頭、同屠殺數ハ 59,969頭ニシテ之ヲ年末現在馬ノ總數ニ比スルニ、其ノ百ニ付斃死 2.18、屠殺 3.80ニ當リ、此ノ兩者ヲ合スレハ 5.98ト爲リ、出產比例ヨリ低キコト 1.52ナリ、即チ馬ハ其ノ百ニ付 1.52ノ自然増加ヲ爲セリ。

【牛乳】大正四年末現在ノ搾乳場ハ 5,509ヶ所ニシテ、之ニ飼養スル成牛乳牛ハ 43,645頭ナリ。此ノ搾乳場ニ於テ大正四年中ニ搾取セシ乳量ハ 299,180石ニシテ、其ノ價額ハ 7,695,899圓トス。此ノ事實ニ依リ成牛乳牛ノ平均三分一カ泌乳期ニ在ルモノトスレハ、一頭ノ一日平均泌乳量ハ 5升6合ニ當リ、一搾乳場ノ搾取乳量ハ一日平均 1斗4升8合ナルノミ。

【屠殺】大正四年末現在ノ屠場ハ 527ヶ所ニシテ、此ノ屠場ニ於テ食用ノ目的ヲ以テ屠殺セルハ成牛 265,729頭、犢 12,251頭、馬 59,969頭、豚 278,465頭ナリ、此ノ屠畜頭數ヲ明治四十一年ト比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、成牛ハ 191.74、犢ハ 248.00、馬ハ 105.86、豚ハ 139.38ニ當リ、其ノ増加ノ趨勢著シキヲ見ル。

【獸疫】大正四年中發生セル家畜傳染病ハ、炭疽、牛 225頭、馬 123頭、豚 2頭、氣腫疽、牛ノミ 187頭、馬ノ假性皮疽 10頭、豚コレラ 1頭、狂犬病、犬 1,336頭、牛 17頭、馬 65頭、豚 4頭、貓 2頭ナリ。

VI. 山林及狩獵

【森林及原野】大正四年度末森林ノ總反別ハ 1,864萬町ニシテ、之ヲ全國ノ總面積ニ比スレハ 48.34%ニ當ル、又原野ノ總反別ハ 3

64萬町ニシテ、全國總面積ノ 9.44%ニ當レリ。斯ノ如ク森林ニ富メル邦國果シテ何處ニカアル、總面積ニ對スル森林面積ノ瑞典(1

911年) 52.69%、芬蘭(1911年) 50.72%ノ歐洲ニ比ナキ所ニシテ、歐洲露西亞(1887年)サヘ 32.59%ニシテ換地利(1912年)ノ 32.61%ト共ニ森林多キ邦國ノ稱アリ、獨逸(1900年)ハ 25.89%、匈牙利(1912年)ハ之ヨリモ多ク 27.54%ナリ、佛蘭西(1912年)ノ如キハ 18.67%、白耳義(1895年)ハ 20.00%、伊太利(1913年)ハ 15.92%ニシテ稍相近キモノニ屬シ、和蘭(1912年)ノ 7.97%、西班牙(1912年)ノ 9.63%、丁抹(1912年)ノ 8.55%ハ同階級ニ在ルモノ、英虞蘭威耳斯(1913年)ノ 5.05%ニ至リテハ最も少キモノ、一タリ、北米合衆國(1910年)ノ廣漠タル地ニ森林ハ唯 28.56%ノミ、南米ノ智利(1913年)ハ 23.81%ナリ、英領印度(1911—12年)ハ更ニ少クシテ 13.12%ニ當ル。斯ク證シ來レハ本邦ノ如ク森林ニ富メルハ蓋シ稀ナリ。惟フニ本邦ノ森林ハ必スシモ立木地ヲ謂ヒニアラスシテ、地目トシテ森林ト稱スルモノ、中ニハ無立木地ヲモ包含シ、雜木林ハ勿論包含シ、磊々タル急峻ノ崖地モ亦森林面積中ニ算セラレ、ノ奇觀アリ、近時幾分ノ整理ヲ見タルモ尙且ツ之ヲ以テ歐洲諸國ト正シキ比較ヲ爲シ能ハサルモノ多シトス。

大正四年度末(御料林ハ曆年末ノ調査ナレトモセ技ニハ假ニ混同シテ計算セリ)ノ森林反別ヲ其ノ所有者ニ依リテ分テハ、御料林 7.06%、國有林 39.32%、公有林 15.35%、社寺有林 0.59%、私有林 37.68%ニ當ル、此分節比例ヲ明治四十一年末ニ就テ見ルニ、御料林ハ 9.49%、國有林ハ 53.00%、公有林ハ 10.08%、社寺有林ハ 0.41%、私有林ハ 27.02%ナリキ。此ノ兩比例ヲ比較スルニ最も強ク減少シタルハ國有林ニシテ、御料林モ減少シタレトモ國有林ノ如ク甚シカラス、最も強ク増加シタルハ私有林ニシテ、公有林モ社寺有林モ亦増加シタリ、斯ノ如キハ國有林、御料林ニ整理行ハレタルコトモ重キ理由ナレトモ、拂下其ノ他事由ニ依リテ所有者ノ變更アリタルト、地目ノ變換セラレタルモノ尠ナカラサリトニ原因スル大ナリ。

御料林ノ約 67%ハ北海道ニ存シ、約 120%ハ長野縣ニ在リ、其ノ他靜岡縣ニ約 62%、岐阜縣ニ約 39%、山梨縣ニ約 23%、愛知縣ニ約 21%、群馬縣ニ約 18%アルヲ多シト爲ス。國有林モ亦北海道ニ多ク存シ總數ノ約 44%ヲ占ム、而シテ岩手縣ノ約 59%、青森縣ノ約 58%、福島縣ノ約 56%、秋田縣ノ約 54%、山形縣ノ約 47%等其ノ多キモノニ屬セリ。公有林ハ長野縣最も多ク約 94%ニ當リ、岐阜縣ノ約 69%之ニ次キ、山梨縣ハ約 50%、兵庫縣ハ約 47%、京都府ハ約 43%、福島縣及新潟縣ハ共ニ約 41%ニ當リ其ノ多キモノニ屬セリ。社寺有林ノ最も多キハ兵庫縣ノ約 72%ニシテ、滋賀縣ノ約 61%之ニ次キ、靜岡縣ノ約 51%、岐阜縣ノ約 50%、岡山縣ノ約 49%、長野縣及鳥根縣ノ共ニ 41%等其ノ多キモノニ屬ス。私有林ハ全國ニ布置スレトモ、而モ尙多クノ不同

アリ、福島縣ノ約 49%ヲ最も多キモノトシ、廣島縣ノ約 48%次テ多ク、岐阜縣ノ約 45%、岩手縣ノ約 44%、鳥根縣ノ約 43%、北海道ノ約 39%、靜岡縣ノ約 37%、兵庫縣ノ約 34%、高知縣ノ約 33%、和歌山縣ノ約 31%等其ノ多キモノナリ。又原野ハ北海道ニ最も多ク全國總數ノ約 101%ニ當リ、岩手縣ハ約 73%秋田縣ハ約 72%、福島縣ハ約 66%、長野縣ハ約 65%、靜岡縣及岐阜縣ハ共ニ約 28%ニ當レリ。即チ森林モ原野モ北海道ヲ最も多シト爲シ、之ニ次クモノハ東北地方及信飛地方ニシテ、近畿以西ニ於テハ其ノ存スルモノ、多クハ私有若クハ公有ナリ。

【保安林】大正四年度末ノ保安林ハ 269,941箇所ニシテ、其反別 1,273,569町ナリ、之ヲ明治四十一年度末ニ比スルニ、箇所ハ其ノ百ニ對スル 129.6ニ當リ、反別ハ同ク 145.5ニ當ル、然レハ保安林ハ其ノ箇所モ増加シタレトモ、反別ノ増加殊ニ著シト爲ス。保安林ヲ其ノ所有者ニ依リテ分テハ、箇所トシテハ私有林ニ最も多ク、總箇所ノ 81.2%ヲ占メ、公有林之ニ次キ 14.2%、社寺有林 2.5%、國有林 2.0%、御料林 0.2%ニ當リ、反別ニ於テハ國有林ニ最も多ク、即チ 47.4%ニ當リ、公有林之ニ次キ 33.4%、私有林 17.5%、御料林 1.0%、社寺有林 0.6%ナリ。私有林ハ其ノ性質上人寰ニ近キモノ多キニ依リテ、土砂杆止等ノ必要ナル部分多カルヘクシテ保安林ニ編入セラレタル箇所多キモ、何レモ小區域ニ止マリテ反別少ク、國有林ハ人寰ニ遠キモノ多キタケニ箇所ハ多カラサレトモ其ノ反別ハ廣シ、公有林ハ國有林ト私有林トノ中間ノ性質ヲ帶フルカ故ニ、箇所トシテハ私有林ニ次ク第二位ニシテ、反別トシテハ國有林ニ次ク第二位ナリ。

保安林ノ箇所ヲ其ノ種類ニ依リテ分チ見ルニ、土砂杆止林最も多ク總數ノ 53.4%ニ居リ、之ヲ所有者ニ分テハ私有林ノ箇所最も多ク、公有林之ニ次キ、社寺有林又次ク、第二ハ水源涵養林ニシテ總數ノ 23.4%ニ當リ、是亦私有林最も多ク、公有林之ニ次キ、又次クモノハ國有林ナリ、第三ハ魚附林ニシテ 6.4%ニ當リ、是亦所有者ノ順位水源涵養林ニ同シ、第四ハ防風林ニシテ 4.2%ニ當リ、所有者ノ順位魚附林ニ同シ、第五ハ飛砂防止林ノ 3.1%ニシテ、是モ所有者ノ順位魚附林ニ同シ、第六ハ風害防備林ニシテ 3.0%ニ當リ、所有者ノ順位同斷ナリ、第七ハ風致林ニシテ 2.7%、第八ハ水害防備林ニシテ 2.4%、第九ハ積雪防止林ニシテ 1.2%、第十ハ墜石防止林 0.2%、第十一ハ航行目標林、第十二ハ公衆衛生林ニシテ共ニ 0.1%ナリ。

保安林ノ箇所ヲ地方別ニ見レハ、岡山縣最も多ク全國總數ノ約 192%ニ當リ、岐阜縣之ニ次キ約 109%、福井縣約 103%、長野縣約 63%、群馬縣約 54%、廣島縣約 44%、滋賀縣約 42%、石川縣約 54%等其ノ多キモノナリ。而シテ又反別ニ就テ之ヲ見レハ、

北海道ノ約 267%最モ多ク、岐阜縣ノ約 135%、山梨縣ノ約 88%、長野縣ノ約 62%、山形縣ノ約 58%、岡山縣ノ約 45%、福井縣ノ約 41%等其ノ多キモノニ屬ス。即チ保安林編入ノ箇所ハ其ノ地形上必要ナル地ヲ擇フコト勿論ナレトモ、之ヲ反別ヨリ見レハ自然ニ森林多キ地方ニ保安林ノ反別廣キヲ見ルナリ。

【森林植栽】 大正四年度中ニ植栽ヲ行ヒタル森林ハ 158,669町ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 23,205町ヲ増シタリ、此ノ植栽反別ヲ森林ノ總反別ニ比スレハ 8.6%ニシテ前年ノ同一比例 7.2%ナルニ比スレハ 1.4%ノ増植ナリ。又此ノ總反別ニ對スル植栽反別ノ比例ヲ各所有別ニ見レハ、御料林ハ 3.5%、國有林ハ 4.9%、公有林ハ 13.5%、社寺有林ハ 16.2%、私有林ハ 11.1%、ニ當レリ。御料林及國有林ノ植栽比例ノ低キハ、私有林、公有林等ノ如ク、斫伐多カラサルカ爲カ、若シ今日ノ植栽比例ヲ以テ推セハ、御料林ハ約三百年ニシテ更新一周シ、國有林ハ約二百年餘ニシテ更新一周シ、公有林ハ約七十年餘、社寺有林ハ約六十年、私有林ハ約九十年ニシテ更新一周スル割合ナリ、惟フニ御料林 國有林ノ總反別中ニハ前ニモ言ヘルカ如キ地目ノ森林ニシテ實ハ植栽ニ適セサル急峻ノ地ヲ包含スルコト多カルヘク、從テ植栽比例ノ低キモノナランモ、此ノ比例ノミヲ以テ見レハ更新植栽ノ甚タ緩慢ナルヲ思ハサルヘカラス。

【森林伐採】 大正四年度中ノ森林伐採價額ニ依リテ示セハ 6,562,492圓ニシテ前年度ニ比シ 1,298,021圓ヲ減シタリ。此ノ伐採價額ヲ森林ノ總反別ニ比スルニ百町ニ付平均 352圓ニ當リ、前年度ノ同一比例 356圓ナルニ比スレハ 4圓ヲ減ナリ。又此ノ伐採價額比例ヲ各所有者ニ就テ見ルニ、御料林ハ百町ニ付 169圓、國有林ハ同 88圓、公有林ハ同 127圓、社寺有林ハ同 807圓、私有林ハ同 747圓ニ當ル。森林ノ伐採ハ林業終局ノ目的ニシテ而シテ又森林保護ノ一要素タリ、若シ之カ適正ヲ失センカ、實ニ森林經濟

VII. 漁業及製鹽

【漁船】 大正四年末ノ漁船總數ハ 395,589艘ニシテ、内 2,516艘ハ動力ヲ有スルモノ、此ノ動力ヲ有スルモノハ、中 175艘ハ蒸氣機關ヲ有スルモノニシテ、他ハ發動機ヲ有スルモノトス。動力ヲ有セサル漁船中最モ多キハ五噸又ハ五十石未滿ノ小船ニシテ、五噸又ハ五十石以上ハ僅ニ 3.2%ナルノミ。漁船ハ本年ヨリ新ナル様式ニ依リ調査セラレタルモノナルヲ以テ既往ノ比較ヲ缺ク。

漁船數ヲ地方別ニ見ルニ、動力ヲ有セサル漁船ハ北海道最モ多ク全國總數ノ約 153%ヲ占メ、長崎縣之ニ次キ約 69%、山口縣ハ約 46%、千葉縣約 43%、兵庫縣約 31%、三重縣約 30%、新潟縣約 29%、大分縣約 28%等ヲ多シト爲シ、又動力ヲ有スルモノ

上ニ損失ヲ招來スルノミナラス、或ハ國土ノ保安上ニ容易ナラサル影響ヲ及ホスナリ。故ヲ以テ濫伐ノ弊ナキヲ期スル共ニ、伐採遅徐ヨリ來ル損失ノ虞ナカラシムコトヲモ亦期セサルヘカラス。上記大正四年度ノ伐採比例ニ於テ社寺有林私有林ノ頗ル高ク、國有林公有林乃至御料林ノ甚タ低キカ如キ、果シテ何レカ適正ヲ得タルモノナリヤ、敢テ識者ノ戒懼ヲ望ムナリ。

【森林被害】 大正四年度中ニ受ケタル森林ノ被害ハ反別 52,003町ニシテ、前年度ニ比シ 5,286町ヲ減シ、此ノ被害價額ニ見積レハ 816,975圓ト爲リ、此ノ價額ヲ前年度ニ比スルニ 1,233,945圓ノ減ニシテ、本年度ノ被害ノ甚タ輕カリシヲ覺フ。即チ森林ノ總反別ニ對スル被害反別ハ 2.8%ニ當リ、被害反別一町ノ平均被害價額ハ 15圓71錢ニ當レリ。

【狩獵】 大正四年度中ニ狩獵免狀ヲ下付シタルハ 77,974人ニシテ、前年度ニ比シ 5,619人ヲ減シタリ。此ノ狩獵免狀ノ中銃器ヲ用キサル甲種免狀下付ハ 7,018人ニシテ前年度ニ比シ 166人ヲ減シ、銃器ヲ用ニル乙種免狀下付ハ 70,956人ニシテ前年度ニ比シ 5,453人ヲ減シタリ。此ノ甲種免狀下付ヲ地方別ニ見ルニ岐阜縣最モ多ク全國總數ノ約 200%ニ當リ、長野縣之ニ次キ約 88%、石川縣ハ約 86%、愛知縣ハ約 72%、千葉縣ハ約 61%、山形縣ハ約 49%ニ當リ其ノ多キモノニ屬セリ。又乙種免狀下付ヲ地方別ニ見レハ、福島縣最モ多ク全國總數ノ約 42%ニ當リ、長野縣ノ約 38%、新潟縣ノ約 37%、兵庫縣ノ約 36%、静岡県及熊本縣ノ共ニ約 34%、鹿児島縣ノ約 33%、北海道ノ約 32%、東京府ノ約 31%、宮城縣ノ約 30%、岡山縣及山口縣ノ共ニ約 29%等其ノ多キモノニ屬セリ。甲種免狀下付數ハ地方ヲ異ニスルニ依リテ其ノ多少ニ大ナル懸隔アレトモ、乙種免狀下付數ハ概シテ各地方ニ平等的ナリ、是甲種狩獵ハ乙種狩獵ノ如ク遠距離遊獵ノ便少キカ故ニ、其ノ下付者ノ住地ノ情況ニ依リ限局セラレ、モノアルニ依ルナランカ。

ハ静岡県最モ多ク全國總數ノ約 136%ニ當リ、三重縣約 107%、茨城縣約 97%、岩手縣約 79%、高知縣約 67%、鹿児島縣約 52%、和歌山縣約 50%ニ當リ其ノ多キモノニ屬ス。

【水産物】 大正四年ノ主ナル水産物ノ數量及價額ヲ舉クレハ、眞鱈ハ年々其ノ漁獲量ヲ増加シ、大正四年ハ約 6,152萬貫ノ魚獲アリ、前年ヨリ多キコト約 548萬貫餘、而シテ總價額ハ約 645萬圓ニシテ前年ヨリ約 23萬圓餘ノ減ナリ。眞鱈ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ長崎縣約 94萬圓最モ多ク、北海道約 81萬圓、石川縣約 73萬圓、山口縣約 65萬圓、千葉縣新潟縣ノ共ニ約 23萬圓等ヲ多シト爲ス。背黑鱈モ亦年々其ノ漁獲量ヲ増加シ、大正四年ノ漁獲約 2,535萬貫

アリ之ヲ前年ニ比スレハ約 211萬貫ノ減收ナリ、又其ノ總價額ハ約 323萬圓ニシテ是亦前年ニ比スルニ約 48萬圓ノ減ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、千葉縣約 79萬圓最モ多ク、廣島縣山口縣ハ共ニ約 24萬圓、愛媛縣約 21萬圓、静岡県約 20萬圓トス。鱈ノ漁獲モ年々増加シ、本年ハ漁獲數量約 1,921萬貫ニシテ、前年ニ比シ約 487萬貫ノ增收ニ當リ、總價額ハ約 845萬圓ニシテ前年ニ比シ約 76萬圓ノ増ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ鹿児島縣約 137萬圓、静岡県約 135萬圓最モ多ク、茨城縣約 69萬圓、高知縣ノ約 63萬圓、福島縣約 55萬圓等ヲ多シト爲ス。鯖モ亦年々漁獲ヲ増シ、本年ハ漁獲數量約 1,047萬貫ニシテ前年ニ比シ約 62萬貫ノ增收ニ當リ、其ノ總價額ハ約 270萬圓ニシテ前年ニ比シ約 3萬圓ヲ減セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、福井縣約 30萬圓最モ多ク、鹿児島縣約 22萬圓、島根縣約 21萬圓、長崎縣約 19萬圓、静岡県約 18萬圓山口縣約 15萬圓等ヲ多シト爲ス。鮪ノ漁獲ハ増減不定ニシテ本年ハ漁獲數量約 397萬貫ナリ、之ヲ前年ニ比シ約 40萬貫ヲ減シ、其ノ總價額ハ約 272萬圓ニシテ前年ニ比シ約 26萬圓ヲ減ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ静岡県約 52萬圓最モ多ク高知縣約 29萬圓和歌山縣約 22萬圓、宮城縣及千葉縣ノ共ニ約 21萬圓、茨城縣約 18萬圓等ヲ多シト爲ス。鰯ノ漁獲ハ漸次増加シ本年ハ漁獲數量約 726萬貫ニシテ前年ニ比シ約 113萬貫多ク、其ノ總價額ハ約 455萬圓ニシテ前年ニ比シ約 19萬圓ヲ増ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ神奈川県約 78萬圓、宮崎縣約 77萬圓、高知縣約 74萬圓最モ多ク、之ニ次テ多キハ静岡県約 38萬圓、富山縣及三重縣ノ共ニ約 258萬圓等ナリ。鰯ノ漁獲ハ不定ナレトモ本年ハ漁獲數量約 209萬貫ニシテ前年ニ比シ 58萬貫多ク、其ノ總價額ハ約 69萬圓ニシテ前年ニ比シ約 18萬圓ヲ増セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ山口縣約 18萬圓最モ多ク、岩手縣約 6萬圓、千葉、宮崎、茨城三縣ノ共ニ約 4萬圓等ヲ多シト爲ス。鯛ノ漁獲モ増減不定ナレトモ本年ハ漁獲數量約 520萬貫ニシテ前年ニ比シ約 78萬貫多ク、其ノ總價額ハ約 565萬圓ニシテ前年ニ比シ約 62萬圓ヲ増セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ、山口縣約 107萬圓最モ多ク、長崎縣約 55萬圓、福岡縣約 44萬圓、兵庫縣約 40萬圓、島根縣及愛媛縣ノ共ニ約 39萬圓、大分縣約 27萬圓等ヲ多シト爲ス。黒鯛モ亦年々漁獲數量ニ動搖アリ本年ハ約 83萬貫ノ漁獲ニシテ前年ニ比シ約 8萬貫多ク、其ノ總價額ハ約 82萬圓ニシテ前年ニ比シ約 6萬圓ヲ増セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ廣島縣約 12萬圓、福岡縣約 11萬圓最モ多ク、愛知縣約 8萬圓岡山縣兵庫縣山口縣ノ共ニ約 5萬圓等ヲ多シト爲ス。鯉ハ一時大ニ漁獲量ヲ増セリ本年ハ漁獲量約 145萬貫ニシテ前年ニ比シ約 21萬貫少ク、其ノ總價額ハ約 78萬圓ニシテ前年ニ比シ約 12萬圓ヲ減ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ茨城縣約 18萬圓最モ多ク、

福島縣約 13萬圓、千葉縣約 11萬圓、宮城縣約 7萬圓等ヲ多シト爲ス。鰒モ近年漁獲量不定ナリシカ本年ノ漁獲量ハ約 1,067萬貫ニシテ前年ニ比シ約 204萬貫多ク、其ノ總價額ハ約 194萬圓ニシテ前年ニ比シ約 22萬圓ヲ増セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ北海道約 71萬圓最モ多ク兵庫縣約 11萬圓、福井縣約 10萬圓、石川縣福島縣及宮城縣ノ共ニ約 9萬圓等ヲ多シト爲ス。鱈ハ漸次其ノ漁獲ヲ減スル傾向アリ、本年ハ漁獲數量約 103萬貫ニシテ前年ニ比シ約 6萬貫少ク、其ノ總價額ハ約 105萬圓ニシテ前年ニ比シ約 10萬圓ヲ減ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ香川縣約 18萬圓最モ多ク、神奈川県約 12萬圓之ニ次キ、岡山縣静岡県ノ共ニ約 9萬圓、山口縣約 8萬圓等ヲ多シト爲ス。鱈モ近年漁獲量不定ニシテ本年ハ漁獲數量約 1006萬貫アリ、之ヲ前年ニ比シ約 271萬貫少ク、其ノ總價額ハ約 102萬圓ニシテ前年ニ比シ約 2萬圓ヲ増ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ北海道ノ約 63萬圓最モ多ク、山形縣約 11萬圓、石川縣約 10萬圓、青森縣約 6萬圓等ヲ多シト爲ス。鮭(スケトウタラ)モ漁獲量増減不定ナリシカ本年ノ漁獲數量約 648萬貫ニシテ前年ニ比シ約 234萬貫多ク、其ノ總價額ハ約 57萬圓ニシテ前年ニ比シ約 7萬圓ヲ増ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ新潟縣約 24萬圓最モ多ク、北海道約 15萬圓、富山縣約 14萬圓ヲ多シト爲ス。文籃魚(トビウロ)モ年々ノ漁獲量不定ナレトモ本年ハ漁獲數量約 203萬貫ニシテ前年ニ比シ約 62萬貫多ク、其ノ總價額ハ約 52萬圓ニシテ前年ヨリ約 1萬圓ヲ減ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ沖繩縣約 13萬圓最モ多ク、東京府鹿児島縣ノ共ニ約 10萬圓之ニ次キ島根縣約 4萬圓、鳥取縣約 3萬圓等ヲ多シト爲ス。牡蠣ハ年々其ノ漁獲量ヲ増加ス、本年ノ漁獲數量約 776萬貫ニシテ前年ニ比シ約 153萬貫多ク、其ノ總價額ハ約 56萬圓ニシテ前年ニ比シ約 12萬圓ヲ増ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ佐賀縣約 21萬圓最モ多ク廣島縣約 11萬圓、静岡県約 5萬圓、熊本縣約 3萬圓等ヲ多シト爲ス。蛤ハ年々其ノ漁獲量ヲ減ス、本年ノ漁獲數量約 111萬貫ニシテ前年ニ比シ約 30萬貫少ク、其ノ總價額ハ約 14萬圓ニシテ前年ニ比シ約 3萬圓ヲ減ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ千葉縣約 3萬圓、三重縣約 2萬圓ヲ多シト爲ス。烏賊モ亦年々其ノ漁獲量ヲ減ス、本年ハ約 121萬貫ノ漁獲アリ、之ヲ前年ニ比スレハ約 20萬貫ヲ減ス、其ノ總價額ハ 324萬圓ニシテ前年ニ比シ 124萬圓ヲ減シタリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ福岡縣約 8萬圓最モ多ク、熊本縣及廣島縣ノ共ニ約 5萬圓、愛知縣及山口縣約 4萬圓等其ノ多キモノナリ。柔魚(スルメ)ハ年々其ノ漁獲ヲ増加シ來リシカ本年ハ著シク少ク漁獲數量約 1,339萬貫ニシテ前年ニ比シ約 816萬貫ヲ減ス、其ノ總價額ハ約 324萬圓ニシテ之ヲ前年ニ比シ約 124萬圓ヲ減ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ北海道約 79萬圓最モ多ク、長崎縣ノ約 59

萬圓之ニ次キ、鳥根縣約 20萬圓、神奈川縣約 19萬圓、青森縣約 16萬圓、山口縣約 13萬圓、福井縣及静岡縣ノ共ニ約 11萬圓等其ノ多キモノニ屬ス。鮪モ漸次其ノ漁獲量ヲ増加シ、本年ノ漁獲ハ約 325萬貫ニシテ前年ニ比シ約 14萬貫ヲ増加シ、其ノ總價額ハ約 109萬圓ニシテ前年ニ比シ約 11萬圓ヲ増ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ兵庫縣ノ約 21萬圓最モ多ク、廣島縣約 10萬圓、岡山縣及愛知縣約 8萬圓等ヲ多シト爲ス、鱒(鮭ヲ含ム)ハ年々漁獲ヲ増セルニモ拘ハラズ前年ハ著シク不漁ナリシカ、本年ハ稍復舊シタリ、即チ其ノ漁獲數量約 779萬貫ニシテ總價額ハ約 192萬圓ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ新潟縣約 71萬圓、北海道約 55萬圓、山口縣約 28萬圓等其ノ多キモノニ屬ス。鮭ハ年々漁獲ヲ増加シ、本年ノ漁獲數量ハ約 426萬貫ニシテ前年ニ比シ約 195萬貫ヲ増シ、其ノ總額ハ約 209萬圓ニシテ前年ニ比シ約 80萬圓ヲ増ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ北海道約 106萬圓、新潟縣約 67萬圓、山口縣約 6萬圓、宮城、岩手、山形三縣各約 5萬圓等ヲ多シト爲ス。秋刀魚(サンマ)ハ其ノ漁獲不定ニシテ本年ハ漁獲數量約 541萬貫前年ニ比シ約 23萬貫ヲ増シ、總價額ハ約 123萬圓ニシテ前年ニ比シ約 13萬圓ヲ増ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ茨城縣約 50萬圓、千葉縣約 27萬圓、三重縣約 12萬圓、静岡、和歌山、福島三縣各約 8萬圓等ヲ多シト爲ス。鰯ハ年々其ノ漁獲ヲ増加シ本年ノ漁獲數量ハ約 11,932萬貫ニシテ前年ニ比シ約 1,106萬貫ヲ増シ、其ノ總價額 815萬圓ニシテ前年ニ比シ約 232萬圓ヲ減セリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ北海道約 784萬圓殆ト全部ヲ占メ青森縣約 64萬圓之ニ次テ多シ。以上及其ノ他ノ漁獲物ニ對スル 本年中ノ總價額見積リハ約 9,484萬圓ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ約 22萬圓ノ減ナリ。本年ハ概シテ豐漁ナルモノ多カリシニモ拘ハラズ、單價ノ低廉ナルモノ亦少ナカリシカ 爲斯カル結果ヲ來セルカ如シ。而シテ此ノ總價額ヲ地方別ニ見レハ北海道ノ約 1,658萬圓最モ多ク、長崎縣約 468萬圓、山口縣約 456萬圓、静岡縣約 440萬圓、千葉縣約 440萬圓高知縣及神奈川縣共ニ約 320萬圓、新潟縣約 311萬圓等其ノ多キモノニ屬セリ。

【水産製造物】 節類ニ於テハ鰯節ハ年々其ノ製造高ヲ増加シ、大正四年ハ約 313萬貫ヲ製造シ前年ニ比シ約 95萬貫ノ増ナリ、此ノ總價額ハ約 842萬圓ニシテ前年ニ比シ約 170萬圓ヲ増ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ鹿児島縣約 145萬圓、静岡縣約 160萬圓高知縣約 88萬圓、岩手縣約 81萬圓、福島縣約 59萬圓、愛媛縣約 56萬圓等ヲ多シト爲ス。鮪節ハ製造高増減不定ニシテ 本年ハ少キ年ナリ、即チ約 10萬貫ヲ製造シ其ノ價額約 24萬圓ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ宮城縣約 7萬圓高知縣約 6萬圓等ヲ多シト爲ス。素乾類ニテハ鰯ノ製造高ハ年々増加シ來リシカ 本年ハ柔魚ノ不漁

ナリシ爲其ノ産額ヲ減セリ、即チ製造高約 279萬貫ニシテ前年ニ比シ約 158萬貫ヲ減シ、其ノ總價額ハ約 319萬圓ニシテ 前年ニ比シ約 178萬圓ヲ減ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ北海道約 95萬圓、長崎縣約 82萬圓、大分縣約 20萬圓、青森縣約 17萬圓、岩手縣約 15萬圓等ヲ多シト爲ス。又身鰯ハ年々其ノ製造高ヲ増シ、本年ハ約 311萬貫ニシテ前年ニ比シ約 10萬貫ヲ増シ、其ノ總價額ハ約 115萬圓ニシテ前年ニ比シ約 8萬圓ヲ増ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ、殆ト全部北海道ノ産ニシテ其ノ他山形石川 二縣ニ僅ニ産スルノミ。以上ノ他ノ素乾類中鰯節ハ年々増加シ本年ノ産額約 13萬貫其ノ價額約 18萬圓、鰯節ハ産額不定本年ハ不作ニシテ約 67萬貫其ノ價額約 47萬圓、田作モ亦産額不定本年ハ不作ニシテ約 44萬貫其ノ價額約 28萬圓、鰯ハ産額減少シ本年ハ約 60萬貫其ノ價額約 26萬圓ナリ。鹽乾類ニ於テハ眞鰯(脊黒鰯ヲ含ム)ハ概シテ製造高増加スレトモ本年ハ約 213萬貫ニシテ前年ニ比シ約 24萬貫少ク、其ノ價額モ約 83萬圓ニシテ前年ニ比シ約 21萬圓減シタリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ長崎縣約 24萬圓最モ多ク、千葉縣約 13萬圓三重縣約 11萬圓、富山縣熊本縣山口縣ノ共ニ約 5萬圓等ヲ多シト爲ス。其ノ他ノ鹽乾類ハ年々減少シ、本年ハ約 13萬貫製造シ、其ノ價額ハ約 8萬圓、鰯ノ製造高不定ニシテ本年ハ約 35萬貫製造シ其ノ價額約 17萬圓、鰯ノ概シテ増加シ本年ハ約 10萬貫製造シ、其ノ價額ハ約 5萬圓ナリ。煮乾類ニ於テハ、眞鰯(脊黒鰯ヲ含ム)製造高少シク減少ノ傾向アリ、本年ハ約 474萬貫製造シ 前年ヨリ少キコト約 79萬貫ナリ、其ノ價額ハ約 314萬圓ニシテ是亦前年ヨリ約 47萬圓ヲ減ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見レハ廣島縣約 48萬圓千葉縣約 38萬圓、山口縣約 26萬圓、愛媛縣約 21萬圓、大分縣約 20萬圓、愛知縣約 19萬圓、兵庫縣約 18萬圓等ヲ多シト爲ス。其ノ他ノ煮乾類ニテハ、海參ハ近年減少シ本年ハ約 15萬貫ヲ製造シ其ノ價額約 46萬圓、貝柱ハ年々増加シ本年ハ約 44萬貫製造シ其ノ價額約 121萬圓、鰯ハ近年増減ナク本年ハ約 10萬貫製造シ、其ノ價額約 49萬圓、鰯ハ製造約不定ナルモ近年ハ甚シキ増減ナク本年ハ約 68萬貫製造シ其ノ價額約 103萬圓ナリ。鹽物類ニ於テハ、鮭ハ甚シキ増減ナカリシカ本年ハ約 238萬貫ヲ製造シ前年ノ倍以上ニ當ル、其ノ價額ハ約 209萬圓ニシテ是亦前年ニ三倍ス、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ新潟縣ノ約 141萬圓最モ多ク、北海道約 65萬圓之ニ次テ多シ。鰯ハ殆ト隔年ニ製造高多ク、本年ハ恰モ多製ノ年ニ相當シ約 499萬貫製造シ、前年ノ四倍ニ當リ、其ノ價額ハ約 250萬圓ニシテ是亦前年ノ七倍以上ナリ、此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ新潟縣約 205萬圓北海道約 40萬圓ヲ最モ多シト爲ス。其ノ他ノ鹽物類ハ、眞鰯ハ近年減少シ本年ハ約 135萬貫製造シ其ノ價額約 32萬圓、鰯ハ近年減少シ本年ハ約 152萬貫製造シ其ノ價額約 58萬

圓ナリ。澁海苔ハ本年ノ産額貫ヲ以テ算ヘタルモノ約 20萬貫ニシテ前年ヨリ約 5萬貫ヲ減シ、帖ヲ以テ算ヘタルモノ約 372萬帖ニシテ前年ノ殆ト四分一ナリ、其ノ價額ハ約 140萬圓ニシテ前年ニ比シ約 41萬圓少シ。肥料ハ概シテ年々製造高ヲ増シタレトモ本年ハ少シク減シ、控粕(糠及鰯)約 2,460萬貫其ノ價額約 736萬圓、鰯約 458萬貫其ノ價額約 104萬圓、其ノ他約 637萬貫其ノ價約 146萬圓ナリ。以上及其ノ他ノ水産製造物ヲ合セ本年中ノ總價額ハ約 5,335萬圓ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ約 117萬圓ノ増ニシテ。此ノ總價額ヲ地方別ニ見レハ北海道ノ約 1,584萬圓最モ多ク、新潟縣ノ約 377萬圓、長崎縣ノ約 308萬圓、静岡縣ノ約 282萬圓、千葉縣ノ約 250萬圓、鹿児島縣ノ約 206萬圓、宮城縣ノ約 162萬圓、高知縣ノ約 151萬圓等ヲ其ノ多キモノト爲ス。

【水産養殖】 大正四年末現在ノ水産養殖場ハ 96,230箇所ニシテ其ノ面積ハ約 168百萬坪、即チ一養殖場ノ平均面積ハ 1,746坪ニ當ル、今之ヲ十年前ナル明治三十八年ニ比スルニ養殖場數ハ當年ノ百ニ對スル本年ハ 542.9ニシテ約五倍半ト爲リ、又三十八年ノ一養殖場ノ平均面積ハ 276坪ナリシカ故ニ本年ノ平均ニ比スレハ六分ニタニ足ラス。即チ水産養殖場ハ密ニ其箇所ノ増加著シキノミナラス、其ノ規模モ亦甚タ大ト爲レルヲ知ルヘシ。然ルニ此ノ養殖場ニ於テ收穫物ノ價額ヲ見ルニ大正四年ハ約 496萬圓ニシテ一養殖場ノ平均ハ約 52圓ニ當レリ、而シテ十年前ノ此ノ收穫物價額ノ平均ハ一養殖場ニ付約 137圓ニ當レリ。是ニ由テ見レハ水産養殖場ハ其ノ箇所モ増加シ 規模モ擴張セラレタルニモ拘ハラズ、其ノ收益ハ寧ろ甚タ減少シタルコト、爲ルナリ、是多クハ其ノ設立日淺クシテ尙收益ヲ見ルニ至ラサルカ爲カ、將タ他ニ的確ナル理由アルカ尙攷フヘシ。

【製鹽】 大正四年度ノ鹽製造人員ハ 10,883人ニシテ前年ニ比シ 46人ヲ減シ、從業人員ハ 51,816人ニシテ是亦前年ニ比シ 2,909人

VIII. 鑛

【鑛區】 大正四年末現在ノ稼業鑛區ハ 1,715箇所ニシテ其ノ總坪數ハ 616,433,000坪ナリ。外ニ休業鑛區 3,592箇所アリ、其ノ總坪數ヲ 658,319,000坪トス。即チ總鑛區ノ箇所ノ分節比例ヲ求ムレハ稼業 32.88%休業 67.12%ニ當リ、又坪數ノ分節比例ヲ求ムレハ稼業 48.36%休業 51.64%ニ當レリ。此ノ鑛區箇所ヲ十年前ノ明治三十八年ニ比シ、其ノ百ニ對スル大正四年ノ指數ヲ求ムレハ稼業鑛區ハ 71.91休業鑛區ハ 116.47ニ當リ、又鑛區坪數ノ同一指數ヲ求ムレハ稼業鑛區ハ 147.93休業鑛區ハ 154.70ニ當レリ。是ニ由テ觀レハ近ク稼業鑛區ノ合併盛ニ行ハレタルヲ知ルヘク、而シテ又休業鑛區ノ許可ヲ得タルモノ甚タ夥ナカラサルヲ知ルヘシ。

ヲ減シタリ。又鹽田ノ反別ハ 5,883町ニシテ前年ニ比シ 22町ヲ減シ、煎熟釜數ハ 6,639個ニシテ前年ニ比シ 169個ヲ減シ、鹽製造高ハ 99,527萬斤ニシテ前年ニ比シ 2,291萬斤ヲ減シタリ。斯ク列記シ來レハ本邦ノ製鹽事業ハ 退縮スルカ如クナルモ、仔細ニ觀察スレハ必シモ然ラス、明治三十九年度ヨリ 今年度ニ至ル十年間ノ平均製鹽高ハ一年度 99,725萬斤ニ該當シ、本年度ハ此ノ平均ヨリ 199萬斤即チ僅ニ 2%ヲ減シタルノミ、而モ此ノ十年度ヲ二分シ前五年年度後五年年度トノ二平均ヲ算出シ比較スルニ、前五年年度ノ平均ハ 98,194萬斤ニシテ後五年年度ノ平均ハ 101,256萬斤ナルニ微シテ其ノ退縮スルモノニアラサルヲ知ラル、ナリ。然ルニ製造人員ヲ見ルモ年々減少シ、三十九年度ノ百ニ對スル本年度ハ 37.0ニ當リ約三分一ニ近ク減少シ、從業者モ亦年々減少シ 三十九年度ノ百ニ對スル本年度ハ 42.4ニ當リ半ハニタニ該ラス、鹽田ノ反別モ減少シ、三十九年度ノ百ニ對スル本年度ハ 71.7ニ當リ三分ノ二以上四分ノ三弱ト爲レリ、煎熟釜數モ三十九年度ノ百ニ對スル本年度ハ 41.2ニ當リ從業員ノ減數ト略ホ相似タリ。斯ノ如キハ惟フニ製鹽事業ノ統一行ハレ、製造人ノ減少ヲ見ルト共ニ、製造技術年々ニ發達シ、鹽田モ煎熟釜モ 將タ從業員モ之ヲ減シテ尙所要ノ鹽ヲ製造シ得ルニ至レルモノナランカ、試ニ鹽田一町ニ付製鹽高ヲ見ルニ、三十九年度ハ 11,439斤ナルニ本年度ハ 16,917斤ヲ示シ、百ニ對スル 147.2ニ當リ、又煎熟釜一個ニ對スル製鹽高ハ、三十九年度ハ 58,160斤ナルニ本年度ハ 148,792斤ヲ示シ百ニ對スル 255.8ニ當リ、又從業員一人ニ對スル製鹽高ハ三十九年度ハ 7,707斤ナルニ本年度ハ 19,200斤ヲ示シ百ニ對スル 249.1ニ當レルニ由リテ之ヲ察セラル、ナリ。製鹽高ヲ專賣支局別ニ見ルニ阪出(香川縣)ノ 29,294萬斤(總量ノ約 29.5%)最モ多ク、三田尻(山口縣)ノ 17,781萬斤(約 17.9%)神戸(兵庫縣)ノ 12,888萬斤(約 14.0%)廣島(廣島縣)ノ 11,379萬斤(約 11.5%)等其ノ多キモノニ屬ス。

業

稼業鑛區ヲ鑛種ニ依リテ別ツニ、金屬山ニ於テハ 二種以上ノ鑛種ヲ產生スルモノ多ク、最モ多キハ七種ヲ產生スルモノアリ、今各鑛種毎ニ延數ト爲メ其產生山ヲ算スルニ 金屬山ニ於テハ銅最モ多ク 596箇所アリ、銀之ニ次キ 424箇所、金又之ニ次キ 372箇所、鉛 107箇所、亞鉛 101箇所、硫化鐵 62箇所ニシテ鐵ハ唯僅ニ 38箇所ナルノミ。又非金屬山ニ於テハ石炭最モ多ク 524箇所アリ、石油之ニ次キ 176箇所、亞炭 91箇所、硫黃 57箇所ナリ。概近世ノ注目ヲ惹ケル重石ノ稼業鑛區ハ 19箇所ニシテ水鉛ノ稼業鑛區ハ 13箇所ナリ、此ノ二者ヲ前年ニ比スルニ重石ハ 7箇所ヲ増シ、水鉛ハ 5箇所ヲ増シタリ。

大正四年末ノ砂鐵區ハ稼業河川 112箇所此ノ延長 116里 17町其ノ他鐵區 307箇所其ノ坪數 21,371,000坪ナリ。又休業鐵區ハ河川 489箇所延長 485里16町其ノ他ノ鐵區 697箇所坪數 38,492,000坪ナリ。是亦鐵種ヲ延數ト爲シ稼業鐵區ノ數ヲ算スルニ、砂金河川 61箇所其ノ他 99箇所、砂鐵河川 49箇所其ノ他 215箇所、砂錫河川 2箇所其ノ他 1箇所ナリ。

【鐵夫】 大正四年六月末日現在ノ鐵夫ハ 290,084人ニシテ此ノ中 86,359人ハ金屬山ニ屬シ 193,142人ハ石炭山ノ鐵夫トス。各種鐵山ノ鐵夫ノ平均一人一箇年ノ勞役日數ヲ算スルニ 金屬山ハ 288日、石炭山ハ 219日、石油山ハ 289日、其ノ他ノ非金屬山ハ 231日、鐵山全體ノ平均ハ 241日ニ當レリ。

【鐵產物】 大正四年中ノ鐵產物ハ概シテ 豐産ナリシカ如シ。就中金ハ 2,212貫ノ採収量ニシテ管テ見ザル巨額ニ達シ、銀モ亦採収量豐ニ 42,470貫ヲ得タリ。銅ハ本邦主要ノ鐵產物ニシテ此ノ年ノ産額 12,569萬斤ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ 825萬斤ノ增收ニ當リ、大正二年ニ終ル五箇年平均ニ比シ 3,319萬斤ノ增收ニ當レリ。鉛ハ 794萬斤ヲ産シ前年ヨリ多キコト 34萬斤ニ當リ。錫ハ63萬斤ヲ産シ前年ヨリ多キコト 47萬斤ニシテ約四倍ノ增收ニ當リ。[アンモ]ノ如キ 1,387萬斤ヲ産シ前年ノ僅ニ55千斤ナルニ比スヘクモナキ多額ノ産出アリ。亞鉛ハ大正三年以後本邦ニ於テ製鍊スルニ至レルモノ而モ長足ノ進歩ヲ爲シ此ノ年ノ産額 3,522萬斤トス。獨リ鐵ハ甚タ振ハス 2,216萬貫ヲ産シタレトモ之ヲ前年ニ比シ 184萬貫ヲ減セリ。重石、水鉛、滿庵等ハ鐵石トシテ産出ス共ニ著シク増加ス。石炭モ亦本邦主要ノ鐵產物ナリ此ノ年ノ産額ハ 2,049萬佛噸ニシテ前年ニ比シ 180萬佛噸ヲ減セリ。石油ハ益々多額ニ産シ其ノ量 257萬石ナリ。硫黃モ鐵石硫黃ヲ合スレハ殆ト前年ニ均シキ産額アリ。鐵產物ノ産額ヲ正シク外國ト比較セントコトハ困難ナレトモ、其ノ大概ヲ比スルニ金ハ[アフリカ]洲各國合計約 29萬斤ニシテ最モ多ク、北米ニテハ合衆國約 15萬斤、墨其古約 4萬斤、加奈太約 14千斤ニシテ之ニ亞キ共ニ本邦約 9千斤ノ比ニアラス、歐洲ニ於テハ露西亞ノ約 5萬斤ヲ除ク外本邦ノ如ク多産ナルハ無シ。銀モ亦北米合衆國約 188萬斤、墨其古約 246萬斤、加奈太約

IX. 工業及賃金

【官營工場】 大正五年度末現在ノ諸官廳直轄工場ハ總數 83箇所ニシテ前年度末ニ比シ 2箇所ヲ増シタリ。是等ノ工場ニ於ケル原動機ノ臺數ハ 6,137臺ニシテ其ノ馬力ハ合計 324,527馬力ナリ。此ノ臺數ヲ種類別ト爲セハ蒸氣 9.34%電氣(發電機トモ) 89.20%其ノ他 1.46%ニ當リ、又其ノ馬力ハ蒸氣 41.55%電氣 56.99%其ノ他 1.46%ニ當ル。此ノ分節比例ヲ五年前ノ明治四十四年度末ニ比

102萬斤ニ多ク産シ濠洲(約 52萬斤)之ニ亞ケリ、歐洲ニ於テハ獨逸(約 19萬斤)本邦(約 17萬斤)ヨリ少シク多ク西班牙(約 13萬斤)本邦ヨリ少シク少シ。銅モ亦北米(合衆國約 566千噸、墨其古約 73千噸、加奈太約 34千噸)最モ多ク本邦(約 76千噸)ハ北米ニ次ク多産國ナリ英吉利(約 63千噸)モ亦本邦ヨリ少シ。石炭ハ本邦(約 2.049萬噸)甚タ多キニアラサレトモ而モ英吉利(約 27億噸)ノ十三分一獨逸(約 26億噸)ノ十二分一佛蘭西、約 4千萬噸)ノ二分一ニ足ラス地地利(約 1,800萬噸)ニ少シク優レルノミ。石油ハ北米(合衆國約 29百萬噸)ノ如キ露西亞(約 9百萬噸)ノ如キ多産國ト比スヘカラサレトモ、而モ本邦(約 26萬噸)ハ世界ノ第八位ニ居リ秘露(約 24萬噸)ト伯仲ノ間ニ在リ殆ト獨逸(約 14萬噸)ニ倍セリ。鐵ニ至リテハ殆ト顔色ナク(本邦約 85千噸)北米(合衆國約 1,60百萬噸)ノ約七百分一獨逸(約 33百萬噸)ノ百分一佛蘭西(約 19百萬噸)英吉利(約 14百萬噸)ノ約二百分一乃至百五十分一ナルノミ。是本邦ノ最モ、苦痛トスル所ナルヘシ。

大正四年ノ鐵産額ヲ地方別ニ見ルニ、金ハ茨城、鹿兒島、秋田、新潟、岩手ノ諸地方ニ多産シ、銀ハ茨城、秋田、栃木、青森、兵庫ノ諸地方ニ多産シ、銅ハ茨城、秋田、栃木、愛媛、岡山、岩手ノ諸地方ニ多産シ、亞鉛ハ兵庫、岐阜、岡山、山口ノ諸地方ニ多産シ、鐵ハ岩手縣ノミ多ク北海道、鳥取、廣島、島根ノ諸地方ニ少シク産シ、重石ハ山口、茨城、岐阜ノ諸地方ニ産シ、水鉛ハ富山、兵庫、島根ノ諸地方ニ産シ、石炭ハ福岡、北海道最モ多ク、福島、佐賀、長崎、山口、茨城等亦之ヲ多産シ、石油ハ新潟最モ多産シ秋田之ニ次テ多産ス。

大正四年ノ鐵山ノ變災ハ 143,868回ニシテ前年ヨリ少キコト 8,153回ナリ。此ノ變災ノ大多數ハ石炭山ニ起レルモノニシテ總數ノ 72.06%ヲ占メ、金屬山ハ其ノ 25.25%ニ當リ、其ノ他ノ非金屬山 2.69%ニ當ル。變災ノ最モ多キハ坑内ノ變災ニシテ總數ノ 77.15%ハ是ナリ。而シテ坑内ノ變災中最モ多キハ落磐ニシテ坑内ノ爲ノ負傷之ニ次キ、捲揚坑道ニ於テモ多クカラサル負傷者ヲ出セリ。此ノ年ニ於ケル死亡者ハ鐵夫 751人其ノ他 96人、重傷者ハ鐵夫 565人其ノ他 55人ナリ。

スルニ、同年ノ臺數ハ蒸氣 43.89%電氣 54.49%其ノ他 1.62%ニシテ其ノ馬力ハ蒸氣 67.57%電氣 32.04%其ノ他 0.39%ナリ。即チ僅ニ五年後ニ於テ電氣原動機カ如何ニ 蒸氣原動機ヲ壓シテ之ニ代ハレルカ、又電氣原動機カ如何ニ強大トナレルカ 多言ヲ要セスシテ明カナリ。

大正五年度末ノ官營工場ノ職工ハ男 124,240人女 15,950人計

140,190人、此ノ職工員數ヲ五年前ノ明治四十四年度末ニ比スルニ其ノ百ニ對スル指數男ハ 127.6女ハ 199.1ニ當ル、以テ官營工場ノ漸次大ニ爲セルヲ知ルヘク、而シテ女職工ヲ用ニヘキ 部面ノ擴張セラレタルヲ知ルヘシ。是等職工ノ一日平均給料ハ(男女合算ヲ除ク)男 81錢女 40錢ニシテ之ヲ五年前ノ明治四十四年度ニ比スレハ男ハ 6錢女ハ 9錢ヲ増額セリ。又是等職工ノ一ケ年度間ノ平均就業日數ハ男 310日女 306日ニシテ之ヲ明治四十四年ニ比スレハ男ハ 5日ヲ減シ女ハ 24日ヲ増セリ、又平均一日ノ就業時間ハ男 10.8時女 9.9時ニシテ之ヲ四十四年ニ比スレハ男ハ 0.4時女ハ 0.2時ヲ増セリ、即チ知ル官營工場ニ於ケル男女ノ勞働率カ 漸次相接近シ來ルコトヲ。

官營各工場ニ就テ職工一日平均ノ給料ヲ見ルニ 男ニ於テハ海軍各工場平均ノ 83錢ヲ最高トシ陸軍各工場平均 81錢ニ次キ、逓信省工場ノ 80錢、鐵道院ノ 76錢相次第シ印刷局ノ 60錢造幣局ノ 59錢最モ低シ、又女ハ海軍 45錢最モ高ク陸軍 42錢ニ次クコト男ニ同ク、鐵道院 37錢印刷局 30錢造幣局 28錢相次第シ、逓信省ノ 21錢最モ低シ、製鐵所ハ男女ヲ分タス總平均額 65錢ナリ。

又官營工場ノ一ケ年就業日數ハ男ニ於テハ海軍工場ノ 321日最モ多ク、鐵道院ノ 314日之ニ次キ、陸軍ノ 311日製鐵所ノ 306日ト次第シ、印刷局ノ 301日造幣局ノ 300日最モ少シ、女ニ於テハ海軍ノ 313日最モ多ク造幣局ノ 311日之ニ次キ製鐵所 306日印刷局 301日陸軍 300日ト次第シ鐵道院ノ 297日最モ少シ、逓信省工場ハ男女ヲ分タス總テ通シ 313日ナリ。又平均一日ノ就業時間ハ男ニ於テハ製鐵所ノ 12.0時最モ長ク女ニ於テハ陸軍ノ 11.0時最モ長シ。

【一般工場】 官營工場ヲ除キタル一般工場中職工徒弟十人以上ヲ有スル工場ハ大正四年末ニ於テ 16,809箇所アリ、之ヲ前年ニ比スレハ 253箇所ヲ減シタリ、斯ノ如キハ小工場ノ併合其ノ他ニ由ル一時ノ現象ニシテ、一般ノ趨勢トシテハ工場ノ増加駁々トシテ進ニ年一年毎ニ其ノ數ヲ多クス、即チ五年前ナル 明治四十三年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ 124.3ニ當リ、僅々五年ノ間ニ約四分ノ一ヲ増加セル有様ナリ。此ノ工場ヲ原動力ヲ用ニルモノト否トニ依リテ分テハ原動力ヲ用ニルモノ 63.6%用キサルモノ 36.4%ニ當リ、之ヲ五年前ノ原動力ヲ用ニルモノ 49.8%用キサルモノ 50.2%ニ比スレハ、此ノ五年間ニ於テ畜ニ工場數ノ増加セルノヨナラス、規模ノ大ヲ爲セルヲ知ルヘキナリ。是等工場ニ於ケル職工ノ員數ハ男 350,976人女 559,823人計910,799人ニシテ、計ノ前年ヨリ増加セルコト 56,835人ナリ、即チ工場數ノ減少ハ決シテ工業ノ退縮セルニアラサルコトヲ 知ルヘシ。此ノ職工員數ヲ五年前ノ明治四十三年ニ比シ、其ノ各百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、男

ハ 127.8女ハ126.5ニ當リ、男職工ノ増加ハ官營工場ト殆ト同ク、女職工ハ官營工場ノ如ク男ヲ 超過シテ増加セス、僅ニ男ヨリ少ク増ハセリ、要スルニ一般工場ハ男女殆ト 同等ニ増加シ、官營工場ノ如ク女職工ヲ要スル部面ノミ著シク 増加セサリシナリ。原來官營工場ハ女職工少ク今日ト雖男 88.69%ニ對スル女 11.38%ノ少數ナルニ、一般工場ハ男 38.55%ニ對スル女 61.47%ニシテ女適ニ多シ、然レハ一般工場ハ業ニ既ニ女職工ヲ要スル 部面ノ發達著シカリシナリ、故ニ今日男女ノ増加カ官營工場ト 歩調ヲ一ニセサリシコト敢テ怪ムニ足ラサルナリ。

一般工場ニハ職工ノ他ニ勞働人夫アリ、其ノ員數男 89,240人女 11,631人計 50,871人ニシテ年々其ノ員數ヲ減少ス。即チ五年前ノ明治四十三年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ男ハ 35.3女 31.6ニ當レリ。

一般工場ノ職工一人一日ノ平均賃金ハ十四歳以上男 56錢女 26錢十四歳未満男 22錢女 16錢ナリ。之ヲ五年前ニ比スルニ十四歳以上男ハ 6錢女ハ 2錢十四歳未満男ハ 4錢女ハ 2錢ノ増加ナリ。概シテ一般工場ハ官營工場ヨリ賃金低ク其ノ 増率モ十四歳以上ノ男ノヨ官營工場ノ男ニ均シク其ノ他ハ 適ニ低シ、是一般工場ハ技術拙劣ナル者モ尙從事シ得ル 餘地アレトモ、官營工場ハ一般工場ニ比シテ技術ノ熟達ヲ要スル者多キカ 爲カ、又或ハ思フ一般工場ハ私人ノ經營ナルカ故ニ課税ノ關係上其ノ 事業ヲ過小ニ報告スルノ弊アリ、爲ニ職工賃金ノ如キモ實際ヨリ 少額ニ報告スルモノ無シト言フ能ハス、其ノ結果カ何等ノ顧慮ナク 眞實ヲ報告スル官營工場トノ間ニ格段ノ差違ヲ 生スルニアラサルナキカ、疑ヲ存シテ後放ヲ待タント欲ス。

一般工場ノ一年間就業日數ハ男女ヲ通シ 299日ニシテ、之ヲ五年前ニ比シ 2日ヲ増セリ、又之ヲ官營工場ニ比スルニ其ノ何レヨリモ少シ。又平均一日ノ就業時間ハ 11時ニシテ五年前ト異ナルコト無ク、官營工場ニ比シテハ少シク長シ。

大正四年末ノ一般工場ヲ其ノ種類ニ依リテ分テハ染織工場 50.01%機械及器具工場 8.48%化學工場 10.93%飲食物工場 14.14%雜工場 15.88%特別工場 1.06%ナリ、之ト比較センカ爲五年前ナル明治四十三年ノ同一分節比例ヲ算出スルニ 染織工場 54.53%機械及器具工場 7.19%化學工場 10.80%飲食物工場 12.70%雜工場 12.42%特別工場 2.36%ニ當レリ、而シテ各種工場ノ明治四十三年ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 染織工場ハ 114.0機械器具工場ハ 146.7化學工場ハ 125.8飲食物工場ハ 138.4雜工場ハ 154.0特別工場ハ 55.3ニ當レリ。斯ク觀シ來レハ特別工場ヲ他ノ總テハ増加シ、機械及器具工場之ニ次キ飲食物工場第三位ニ 在リ。茲ニ減少

職工ハ 3,155人ト爲レリ、其ノ産額ハ生蠶約 175萬貫晒蠶約 151萬貫ニシテ生蠶ハ減少ノ傾向アリ 晒蠶ハ増加ス、木蠶製造家ハ福岡縣 286戸佐賀縣 214戸愛媛縣 208戸ヲ多シト爲シ、其ノ産額ハ生蠶ハ福岡縣ノ約 78萬圓愛媛縣ノ約 38萬圓大分縣ノ約 28萬圓ヲ多シト爲シ、晒蠶ハ兵庫縣ノ約 85萬圓福岡縣ノ約 49萬圓愛媛縣ノ約 29萬圓ヲ多シト爲ス。酒類ノ醸造家ハ 12,217戸ニシテ漸次減少シ五年前ノ百ニ對スル指數 85.4ニ當リ、併シナカラ其ノ産額ハ取テ減少スルコトナク約 424萬石ニ上リ五年前ノ百ニ對スル指數 102.5ナリ、酒類醸造家ノ最モ多キハ兵庫縣ノ 803戸福岡縣ノ 508戸山口縣ノ 499戸大分縣ノ 466戸廣島縣ノ 462戸長野縣ノ 452戸岡山縣ノ 451戸ニシテ、産額ノ最モ多キハ兵庫縣ノ約 62萬石福岡縣ノ約 23萬石廣島縣ノ約 17萬石京都府ノ約 16萬石愛知縣ノ約 14萬石新潟縣ノ約 13萬石等ナリ。麥酒ハ其ノ製造戸數漸次減少シテ 8戸ト爲リタルモ、其ノ産額ハ益々増額シ約 35萬石ト爲レリ、即チ産額ハ五年前ノ百ニ對スル 221.6ニ當レリ。酒精及酒精含有飲料ハ其ノ製造戸數稍減シテ 259戸ト爲リ、而モ産額ハ益々上リテ 24.159石ト爲レリ。醬油醸造家モ減少著シク 12,942戸ト爲レルモ其ノ産額ハ 260萬石ニ上リ五年前ノ百ニ對スル指數 118.1ナリ、醬油醸造家ハ 岡山縣 688戸廣島縣及兵庫縣共ニ 637戸山口縣 556戸岐阜縣福岡縣共ニ 522戸千葉縣 512戸長崎縣 506戸等ヲ多シト爲シ、其ノ産額ハ 千葉縣約 44萬石愛知縣約 18萬石兵庫縣及香川縣共ニ約 15萬石福岡縣約 10萬石岡山縣約 9萬石ヲ多シト爲ス。工業藥品製造家ハ年々増加シ 戸數 468戸職工 5,115人ト爲リ五年前ノ百ニ對スル指數ハ 戸數 214.7職工 196.4ニ當リ、其ノ産額ハ殊ニ本年ニ至リテ突然増額シテ約 1,672萬圓ト爲リ五年前ノ三倍以上トナレリ、斯ノ如キハ惟フニ 時局ノ影響與リテ大ナルモノナラン。石鹼ノ製造モ亦發達シ 戸數 252戸職工 2,096人ト爲リ、其ノ産額ハ約 858萬圓ト爲レリ、之カ五年前ノ百ニ對スル指數ハ 戸數 130.6職工 150.6産額 205.1ニ當リ、其ノ發達ノ著明ナルヲ見ル。粗製樟腦及樟腦油モ頗ル發達シ 戸數 4,241戸從事職工 9,992人ト爲リ、産額ハ粗製樟腦約 256萬斤樟腦油約 300萬斤ト爲リ、産額ハ五年前ニ比シテ倍セリ、而シテ此ノ製造家ハ鹿兒島縣ノ 1,375戸熊本縣ノ 558戸福岡縣ノ 417戸ヲ最モ多シト爲ス。薄荷ノ製造家モ頗ル増加シ 戸數 8,242戸從事職工 16,216人其ノ産額取卸薄荷約 64萬斤薄荷腦約 38萬斤薄荷油約 43萬斤ト爲リ、何レモ五年前ニ比スレハ約三倍ト爲レリ。薄荷製造家ハ北海道ノ 7,619戸山口縣ノ 527戸ヲ最モ多シト爲ス。製鹽ハ近年甚シク衰頽セシカ 本年ニ至リ時局ノ影響ニ依リ突如トシテ増加セリ、即チ 戸數 9,391戸從事職工亦 12,987人ト爲リ産額ハ鹽約 100萬貫葉約 202萬貫ニシテ 其ノ價額ハ鹽約 131萬圓葉約 306萬圓ト爲リ、價額ハ五年前ノ百ニ對スル 366.9ニ上レリ、

藍ノ製造家ハ 宮城縣ノ 1,993戸最モ多ク 鹿兒島縣 1,611戸徳島縣 1,459戸等多モノナリ、而シテ其ノ産額ハ徳島縣ノ約 342萬圓最モ多ク岐阜縣及埼玉縣ノ共ニ約 12萬圓ヲ多シト爲ス。漆液ノ製造モ亦近年衰頽セルモノ、一ナリ 戸數 681戸ニシテ産額ハ約 47萬圓ナリ。漆器ハ其ノ製造家取テ減少セシ 6639戸ニシテ僅少ナレトモ増加セリ、職工ハ 20,401人ニシテ明ニ増加ス、而シテ産額ハ約 978萬圓ニシテ五年前ノ百ニ對スル指數 124.3ヲ示セリ、是亦單價ノ騰貴ニモ依ルヘシト雖事業ノ衰退ヲ見サルヲ知ルヘシ、漆器ノ製造家ハ静岡縣 814戸石川縣 776戸最モ多ク、其ノ産額ハ石川縣約 139萬圓静岡縣約 115萬圓最モ多シ。燐寸ハ製造戸數 189戸ニシテ近年減少シタルトモ事業ハ取テ衰退セシ 職工 21,357人ヲ算シ、五年前ノ百ニ對スル 118.8ニ當リ、産額ハ數量約 59,085萬打金額約 227萬圓ニシテ數量ハ五年前ト略同一ニシテ金額ハ殆ト倍セリ。機械製麥粉ハ製造家 15,208戸ニシテ甚シキ増減ナリ、其ノ産額モ多少増加ノ傾向アリテ大差ナシ。澱粉製造モ 戸數ハ 79,291戸ニシテ大差ナキモ其ノ産額ハ本年突然増額シテ約 7,234萬貫ト爲リ 殆ト前年ニ倍セリ。寒天製造ハ 戸數 358戸職工 3,997人ニシテ共ニ多少ノ増加ヲ爲シ、産額ハ約 44萬貫ニシテ前年ヨリ下レルモ其ノ價額約 248萬圓ニシテ既往ニ見サル増加ヲ爲セリ。雜詰ハ製造戸數少シク減シテ 672戸ト爲リ、職工モ亦減シ、産額ハ約 485萬圓ニシテ前年ヨリ減スルコト約 92萬圓ナリ。製茶戸數ハ 1,134,838戸ニシテ年々ノ増加著シク五年前ノ百ニ對スル指數 117.7ニ當リ、其ノ産額ハ約 912萬貫價額約 1,633萬圓ニシテ 之カ五年前ノ百ニ對スル指數ハ數量 109.5價額 120.1ニ當リ、事業ノ退縮セサルト共ニ單價ノ騰貴ヲ認メラル。製茶戸數ヲ地方別ニ見ルニ 鹿兒島縣ノ 103,831戸最モ多ク廣島縣ノ 87,054戸熊本縣ノ 64,501戸大分縣ノ 59,700戸 宮崎縣ノ 58,080戸山口縣ノ 55,182戸静岡縣ノ 54,797戸岐阜縣ノ 52,781戸等其ノ多キモノニ屬シ、其ノ産額ハ静岡縣ノ約 645萬圓最モ多ク、三重縣ノ約 141萬圓京都府ノ約 96萬圓埼玉縣ノ約 67萬圓茨城縣ノ約 64萬圓滋賀縣ノ約 58萬圓奈良縣ノ約 56萬圓等ヲ多シト爲ス。蠶表製造家ハ 87,435戸莫産及花産製造家ハ 22,305戸アリ、前年ト調査ヲ異ニスルカ故ニ比較ノ便ナキモ甚タ振ハサルモノ、如ク、蠶表、莫産及花産ヲ合セタル産額ハ約 810萬圓ニシテ之カ五年前ノ輸出向百ニ對スル指數ハ 80.2ナリ、蠶表ノ製造家ハ大分縣ノ 20,673戸最モ多ク鹿兒島縣 10,400戸岡山縣 9,652戸廣島縣 9,357戸等ヲ多シト爲シ、莫産及花産ノ製造家ハ福岡縣ノ 5,594戸廣島縣ノ 3,336戸沖繩縣ノ 1,701戸鹿兒島縣ノ 1,135戸等ヲ多シト爲ス、又蠶表ノ産額ハ廣島縣ノ約 151萬圓大分縣ノ約 120萬圓岡山縣ノ約 66萬圓最モ多ク、莫産及花産ハ岡山縣ノ約 112萬圓廣島縣ノ約 51萬圓福岡縣ノ約 50萬圓ヲ多シト爲ス。麥稈眞田及經木眞田ノ製造

戸數ハ 93,176戸ニシテ少シク減少セリ、之ヲ地方別ニ見ルニ 香川縣ノ 54,044戸岡山縣ノ 32,204戸最モ多シ、又其ノ産額ハ約 126萬圓ニシテ岡山縣ノ約 54萬圓香川縣ノ約 36萬圓ヲ最モ多シト爲ス。マニラ麻眞田ハ其ノ製造戸數及従事人員ヲ詳ニセス、之カ産額ハ約 818萬圓ニシテ地方別ニハ 神奈川縣ノ約 272萬圓東京府ノ約 134萬圓兵庫縣ノ約 60萬圓石川縣ノ約 56萬圓愛知縣ノ約 50萬圓静岡縣ノ約 49萬圓ヲ多シト爲ス。刷子及刷毛ノ製造家ハ 552戸ニシテ從事職工ハ 4,239人アリ、共ニ近年ノ増加著シク、其ノ産額ハ商磨用約 376萬打其ノ他約 105萬打此ノ價額商磨用約 166萬圓其ノ他約 173萬圓ニシテ商磨用ハ左マテニ増加セサレトモ 其ノ他ノ刷子類ハ著シク増加セリ。釦製造ハ 763戸ニシテ其ノ増加著シク、從事職工亦頗ル増加シ 6,281人ヲ算ス、其ノ産額ハ約 325萬圓ニシテ五年前ノ百ニ對スル指數 123.8ニ當リ、釦製造ハ大阪府ノ 257戸奈良縣 221戸最モ多ク之カ産額モ大阪府ノ約 158萬圓奈良縣ノ約 52萬圓ヲ最モ多シト爲ス。

【發明特許、實用新案、意匠、商標登録】 大正四年中ノ發明特許出願數ハ 6,359件ニシテ前年ヨリ少キコト 131件、其ノ特許數 1,782件中内國人ノ出願ニ係ルモノ 1,470件外國人ノ出願ニ係ルモノ 312件ニシテ之ヲ前年ニ比スルニ内國人ハ 186件ヲ増シ外國人ハ 228件ヲ減セリ。實用新案登録ノ出願數ハ 15,738件ニシテ前年ヨリ少キコト 1,409件、其ノ登録數ハ 4,200件中内國人 4,195件外國人 5件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 内國人 295件ヲ増シ外國人 4件ヲ減ス。意匠登録ノ出願數ハ 3,662件ニシテ 前年ニ比シ 206件ヲ減シ、其ノ登録數ハ 1,663件中内國人 1,662件外國人 1件ニシテ之ヲ前年ニ比シ内國人 359件外國人 15件ヲ減ス。商標登録ノ出願數ハ 13,214件ニシテ之ヲ前年ニ比シ 1,891件ヲ増シ、其ノ登録數ハ 6,912件中内國人 6,447件外國人 465件ニシテ之ヲ前年ニ比シ内國人 199件外國人 125件ヲ減セリ。發明特許及實用新案登録ノ趨勢ヲ知ランカ爲近キ十年間ヲ二分シ 明治三十九年ヨリ同四十四三年ニ至ル前五年ト同四十四年ヨリ 大正四年ニ至ル後五年トヲ比スルニ發明特許ノ出願數ハ前五年 26,223件後五年 33,352件ニシテ前五年ノ百ニ對スル後五年ハ 127.2ニ當リ、出願數ノ近ク劇増セルヲ見ルヘク、而シテ内國人ニ係ル特許數ハ前五年ハ 6,395件後五年ハ 6,981件ニシテ前五年ノ百ニ對スル後五年ハ 109.2ニ當リ、是モ亦増加シタルトモ出願數ノ増加ニ若カス、出願ニ對スル特許ノ比例ハ(假ニ内國人ノミヲ算ス)前五年ハ 24.39%後五年ハ 20.93%ニ當リ、即チ出願件數ノ増加ト共ニ特許件數モ増加シタルトモ、而モ其ノ出願件數中ニハ特許ニ値セサルモノモ亦甚ダ多カリシヲ知ラル。實用新案モ略ホ之ニ同ク、前五年ノ出願數ハ 53,105件後五年ハ 76,372件ニシテ前後五年ノ百ニ對スル後五年ハ 143.8ニ當リ、

是亦出願ノ劇増セルコト 特許以上ナリ、而シテ其ノ内國人ニ係ル登録數ハ前五年 18,127件後五年 18,972件ニシテ前五年ノ百ニ對スル後五年ハ 104.7ニ當リ、實ニ出願數ノ増加ニ若カサルノミナラス特許ノ同一指數ヨリ更ニ低シ、此ノ出願ニ對スル登録ノ比例ハ前五年ハ 34.13%後五年ハ 24.84%ニ當リ是亦登録ニ値スルモノ漸ク減少セルヲ見ルヘシ。併シナカラ 此ノ事實ヲ見テ直ニ本邦人ノ發明力ヲ枯渴セルカ如ク看做スハ非ナリ、何トナレハ世ノ進歩ニ伴ヒ發明ニ對スル審査ノ標準モ亦上リ 特許比例ノ低下スヘキハ當然ノコトナレハナリ、故ニ發明ノ 特許比例並ニ實用新案ノ登録比例カ今日以上彌カ上ニモ昂上センコトハ希フ所ナレトモ、而モ之カ低キハ審査精撰ノ結果ナリトスレハ、今日ノ如ク出願數ノ劇増ハ即チ本邦人ノ發明力ノ發露ニシテ 寔ニ悦フヘキノ兆ナリト謂フヘキナリ。

大正四年ノ内國人ノ出願ニ係ル發明ノ特許數ヲ種類別ト爲セハ機械工業ニ關スルモノ 709件化學工業ニ關スルモノ 371件電氣工業ニ關スルモノ 160件家具及被服類 230件ナリ、又内國人ノ出願ニ係ル實用新案ノ登録數ヲ種類別ト爲セハ機械工業ニ關スルモノ 1,495件化學工業ニ關スルモノ 182件電氣工業ニ關スルモノ 208件家具及被服類 2,360件ナリ。是ニ由テ見レハ發明特許ハ機械工業ニ關スルモノ 48.23%化學工業ニ關スルモノ 25.24%電氣工業ニ關スルモノ 10.88%家具及被服類 15.65%ニ當リ、實用新案ハ機械工業ニ關スルモノ 35.64%化學工業ニ關スルモノ 3.16%電氣工業ニ關スルモノ 4.96%家具及被服類 56.24%ニ當レリ。發明特許ハ機械工業ニ關スルモノ最モ多ク、化學工業ニ關スルモノ之ニ次キ、電氣工業ニ關スルモノ最モ少シ、實用新案ハ之ト異ナリ、家具及被服類最モ多ク、機械工業ニ關スルモノ之ニ次キ、化學工業ニ關スルモノ最モ少シ、是ハ發明ト新案トノ性質上ヨリ應ニ然ルヘキコトナルヘシ。此ノ特許ノ件數中機械工業ニ關スルモノハ中最モ多キハ諸製造器機約 104%織機及織方約 58%百工用具約 56%測定器約 55%織綴機及編綴方約 54%車輛約 51%農具約 45%等ニシテ、化學工業ニ關スルモノ、中ニハ 化學雜工約 144%化學藥品及化學製品約 116%塗料約 89%纖維處理法約 88%燻約 69%染色約 65%等ヲ多シト爲シ、電氣工業ニ關スルモノ、中ニハ 電信電話及電氣通信機約 275%最モ多ク、電氣調節及電氣分配裝置約 263%之ニ次キ發電機及電動機約 119%電氣傳導及絕緣裝置約 75%電燈約 69%等ヲ多シト爲シ、家具及被服類ノ中ニハ文具約 117%治療具約 100%最モ多ク、織物及編物約 44%履履及其ノ裁方、家具及建具、庖厨具、點燈具、衛生具等各約 39%教育具、金庫及鎖鑰、溫水罐、煖爐等各約 35%ヲ多シト爲ス。又實用新案ノ機械工業ニ關スルモノニ於テハ農具約 161%車輛約 92%諸製造器械約 64%百工用具約 53

%測定器約 46% 養蠶用具約 45% 裁縫機及刺繡機約 44% 等ヲ多シト爲シ、化學工業ニ關スルモノニ於テハ煤約 220% 製鹽約 100% 化學雜工約 85% 蒸餾約 69% 等ヲ多シト爲シ、電氣工業ニ於テハ電燈約 328% 電氣調節及電氣分配裝置約 221% 電氣傳導及絕緣裝置約 97% 電氣雜工約 77% 電信電話及氣氣通信機、電氣鐵道各約 48% 等ヲ多シト爲シ、家具及被服類ニテハ文具約 131% 遊戲具約 107% 庖厨具約 56% 家具及建具約 55% 履履及其ノ裁方約 45% 容飾具及理髮具約 44% 等ヲ多シト爲ス、以上ノ事實ハ以テ本邦發明界ノ一斑ヲ知ルノ料ト爲スニ足ラン。

【諸備賃金】 諸備賃金ハ各職業共ニ年々上昇シ、近キ既往ニ於テ大正二年ヲ最高トシ、翌三年ニ低下シ、本年ハ又概シテ低下セリ斯ノ如キハ素ヨリ複雑ナル社會事情ニ原因スルモノナルヘシト雖、諸物價就中米價ノ低落ハ之ヲ誘フニ有カナリシモノアルヲ思フナリ。今各業ニ就テ之ヲ見ルニ、大工ハ普通賃金(以下皆同シ) 83.5錢ニシテ明治三十三年ヲ百ト爲シタル指數(以下之ヲ單ニ指數ト云フ) 155.6ニ當リ前年ヨリ低キコト 2.5錢ナリ、此ノ低落ハ全國一般ニ通シタルモノナレトモ殊ニ東北地方ニ強カリシモノ、如ク、關東及近畿ニ於テ殆ト低下セサル地方モアリタリ。左官ハ 87.3錢ニシテ指數 157.4ニ當リ前年ニ比シ 1.2錢ノ低下ナリ、即チ大工ノ低下ヨリ少シク弱シ、此ノ低下ハ主トシテ東北ノ一部北陸及九州等ニ強ク現ハレタル事實ニシテ關東近畿等ニハ低下セサル地方モアリ小樽、青森、京都、神戸、徳島等ニ於テハ寧ロ上昇セリ。石工ハ 97.5錢ニシテ指數 160.7ニ當リ前年ヨリ 3.8錢低下セリ、是亦東北、北陸地方ニ於テ強ク低下シタル爲ニシテ、小樽、横濱、神戸、福岡、長崎等ハ寧ロ上昇シ、其ノ他關東ノ諸地等ニ於テハ低下セサルモアリタリ。木挽ハ 83.0錢ニシテ指數 156.6ニ當リ前年ヨリ 1錢低シ、此ノ低下ハ北陸及近畿地方ノ低下ニ基クモノニシテ東北及關東ハ多クハ高低ナク函館、秋田、青森、宇都宮、大阪、徳島ノ如キハ寧ロ上昇セリ。家根職ハ 85.8錢ニシテ指數 158.6ニ當リ前年ヨリ低キコト 1.2錢ナリ、此ノ低下ハ東北ノ一部北陸近畿等ノ低下ニ基クモノニシテ關東及四國九州ハ多クハ異動ナク小樽、青森、東京、金澤、徳島、長崎、熊本ハ寧ロ上昇セリ。瓦葺職ハ 100.5錢ニシテ指數 171.2ニ當リ前年ヨリ 3.5錢低シ、是亦東北ノ一部及北陸ノ低下ニ因ルモノニシテ關東及中國地方ニ低下セルハ少ク、小樽、青森、金澤、京都、徳島、長崎ハ上昇セリ。煉瓦積職ハ 104.5錢ニシテ指數 166.7ニ當リ前年ト増減ナシ、北海道、東北ノ北部、關東、北陸、東海、東山各低下シタルトモ東北ノ西部、中國、四國、九州等ハ増減ナク、横濱、新潟、神戸、長崎等ハ上昇セリ。煉瓦製造職ハ 73.8錢ニシテ指數 164.4ニ當リ前年ヨリ低キコト 1.0錢ナリ、此ノ低下ハ北陸地方ノ低下ニ基ク、京都及名古屋ハ前年ヨリ高シ。墨刺職ハ 79.0錢

ニシテ指數 168.1ニ當リ前年ヨリ 1.0錢高シ、北陸、東山、東海、近畿地方ハ多ク低下シタルトモ東北、關東、中國、四國、九州ニ異動ナキ地多ク、而モ函館、小樽、青森、金澤、神戸、長崎、熊本ハ上昇セルニ依リテ斯クハ上昇セリ。建具職ハ 76.8錢ニシテ指數 151.0ニ當リ前年ヨリ 5.0錢ヲ減ス、此ノ大減ハ東北、關東、北陸、東海、東山、近畿、四國ノ各地多クハ低下シ 中國、九州ニ異動ナキ地アレトモ夫スラ少ク、小樽、横濱、金澤ハ破格ニ上昇セリ。經師職ハ 78.8錢ニシテ指數 158.0ニ當リ前年ニ比シ 2.5錢ヲ増セリ、是ハ北陸及四國ニ低下シタルノミニシテ他ハ概ネ異動ナク、小樽、青森、水戸、横濱、近畿ノ各地及長崎、熊本ハ増加セルニ基クナリ。指物職ハ 77.0錢ニシテ指數 154.0ニ當リ前年ヨリ低キコト 2.5錢ナリ、是ハ北陸東海、近畿ニ低下スルコト強キニ原因スルモノニシテ小樽、青森、秋田、水戸、横濱、廣島等ハ寧ロ増シ、九州ノ各地ハ増減無シ。桶職ハ 67.8錢ニシテ指數 158.1ニ當リ前年ヨリ低キコト 1.5錢ナリ、東北、北陸、四國、九州ニ於テ皆低下シ關東、近畿ハ増減無キモノ多ク、横濱、金澤、大阪ハ上昇セリ。下駄職ハ 59.0錢ニシテ指數 147.5ニ當リ前年ヨリ低キコト 0.5錢ナリ、各地區々ニ増減アリ、東海、近畿、四國、九州ノ各地ハ概ネ上昇シタルトモ東北、北陸、關東ニ低下シタル地多カリキ。靴職ハ 73.0錢ニシテ指數 155.3ニ當リ前年ニ比シ 1.2錢高シ、東北ハ概ネ下降シタルトモ函館、青森ハ上昇シ、關東ハ増減ナク水戸ノミ上昇シ、北陸ノ新潟、金澤ハ著シク上昇シ、近畿ニ於テモ京都、大阪ハ上昇シ、中國ハ低下シ四國、九州ニ於テハ徳島、長崎ノミ上昇セリ。馬具職ハ 71.8錢ニシテ指數 153.2ニ當リ前年ニ比シ 2.7錢ヲ減ス、此ノ低下ハ東北及近畿ノ低下ニ基ク、關東ハ多ク増減ナク、北陸モ東海モ亦然リ、上昇シタルハ青森、富山、大阪ノミナリ。車製造職ハ 70.5錢ニシテ指數 151.1ニ當リ前年ヨリ低キコト 2.3錢ナリ、此ノ低下ハ東北、關東及近畿ノ低下ニ依リテ生ス、中國、四國、九州ハ増減ナキ地多ク、上昇シタルハ函館、青森、横濱、新潟、名古屋、徳島等ナリ。和服仕立職ハ 69.0錢ニシテ指數 176.9ニ當リ前年ヨリ高キコト 5.7錢ナリ、此ノ上昇ハ關東、北陸、東海、近畿及中國ノ上昇ニ基クモノニシテ低下シタル東北ノ各地ノミナリ。洋服仕立職ハ 83.5錢ニシテ指數 142.4ニ當リ前年ヨリ 0.8錢ヲ減セリ、東北、北陸ニ於テハ却テ上昇シタルトモ關東、近畿、四國、九州等ニ低下多キニ由リテ僅ニ低下セリ。袋物職ハ 62.8錢ニシテ指數 143.2ニ當リ前年ニ比シ 0.7錢ヲ低下セリ、本職ハ關東、近畿ニノミ多シ、其ノ上昇シタルハ金澤ノミ、他ハ増減無キカ僅ニ低下セルカノミナリ。染物職ハ 52.0錢ニシテ指數 179.3ニ當リ前年ヨリ 1.0錢ヲ増セリ、東北、北陸、四國等ニ上昇セル地多キニ依リテ斯クハ上昇セリ。綿打職ハ 46.8錢ニシテ指數 127.0ニ當リ前年ヨリ低キコト 7.5錢ナリ、此ノ大低下ハ全國ヲ通

シタル低下ノ趨勢ニ驅ラレタルモノニシテ 上昇セルハ新潟ト高知ノミナリ。鍛冶職ハ 69.0錢ニシテ指數 143.8ニ當リ前年ヨリ低キコト 4.5錢ナリ、此ノ低下ハ東北、北陸、近畿、九州ノ低下ニ基クモノニシテ、上昇シタルハ小樽、青森、松本、名古屋、廣島、徳島等ナリ。鋳職ハ 64.8錢ニシテ指數 152.4ニ當リ前年ヨリ 0.5錢低シ、増減區々ニシテ小樽、青森、金澤、名古屋、下ノ關等ニ上昇シタルトモ近畿、九州ノ低下強クシテ斯クハ少シク減少セリ。鑄物職ハ 69.8錢ニシテ指數 148.9ニ當リ前年ニ比シ 4.0錢ヲ減ス、此ノ低下ハ東北、北陸、關東、近畿、九州ノ低下ニ基クモノニシテ、小樽、横濱、金澤、名古屋、松江、徳島、熊本等ハ上昇シタルトモ而モ大勢ハ低下セリ。陶器轉職ハ 65.8錢ニシテ指數 173.7ニ當リ前年ヨリモ 1.0錢ヲ増セリ、本職ヲ有スル地少ク、而シテ東京、横濱、金澤、神戸ニ上昇アリタルニ依リテ上昇セリ。塗師職ハ 70.8錢ニシテ指數 146.8ニ當リ、前年ヨリ高キコト 2.3錢ナリ、此ノ上昇ハ主トシテ近畿、關東ノ上昇ニ由ルモノニシテ東北ハ低下シ北陸、中國、四國、九州ハ増減ナキ地多カリキ。油絞職ハ 59.0錢ニシテ指數 163.9ニ當リ、前年ヨリ低キコト 1.8錢ナリ、此ノ低下ハ近畿、中國、四國、九州ノ低下ニ由ルモノニシテ北陸ハ寧ロ上昇シ、東北ハ増減無キモノ多シ。紙漉職ハ 45.0錢ニシテ指數 140.6ニ當リ前年ヨリ低キコト 0.3錢ナリ、東北及近畿ハ其ノ上昇ヲ見ダレトモ關東、九州等ニ低下セルモノアリテ斯ク僅ニ低シ。煙草刺職ハ 68.5錢ニシテ指數 160.5ニ當リ前年ヨリ低キコト 1.5錢ナリ、名古屋、京都等ニ於テハ上昇シタルモノアレトモ一般ノ低下ニ依リテ斯ク低下セリ。活版植字職ハ 60.8錢ニシテ指數 174.3ニ當リ前年ヨリ高キコト 0.8錢ナリ、是ハ東北ニ於テハ低下シタルトモ近畿、四國、九州ニ於テ増シタルモノアルニ由リテ上昇セリ、關東ハ概シテ増減ナカリキ。販摺職ハ 54.5錢ニシテ指數 161.8ニ當リ前年ト増減無シ、東北ニ増シタルモノ減シタルモノアリ近畿、中國、九州ニ増シタルモノアリシモ關東、北陸等多クハ増減ナキ地多シ。船大工ハ 95.8錢ニシテ指數 153.6ニ當リ前年ヨリ高キコト 3.8錢ナリ、北陸、近畿、四國、九州等概ネ低下シタルトモ東北ハ總テ著シク上昇シタルニ由リテ斯ク上昇セリ。植木職ハ 82.5錢ニシテ指數 162.7ニ當リ、前年ニ比シ 0.3錢低シ、是ハ東北及近畿ノ低下ニ由ルモノニシテ他ノ多クハ増減ナク横濱、金澤、徳島ハ寧ロ上昇セリ。日傭農作男ハ 45.5錢ニシテ指數 153.3ニ當リ前年ヨリ低キコト 1.8錢ナリ、此ノ低下ハ東北、東海、近畿ノ低下ニ由ル。日傭農作女ハ 28.8錢ニシテ指數 152.6ニ當

リ前年ヨリ 1.2錢ヲ減セリ、是亦日傭農作男ト略ホ同斷ニシテ而モ四國モ低下セリ。養蠶男ハ 46.0錢ニシテ指數 148.4ニ當リ前年ヨリ低キコト 3.5錢ナリ、是ハ上昇シタル地ナク關東、東海、九州ノ低下シタルニ由ル。養蠶女ハ 27.0錢ニシテ指數 142.1ニ當リ前年ヨリ 1.0錢低シ、是ハ東海、四國、九州ニ低下アリテモ上昇シタルモノナシ。蠶絲繰女ハ 32.8錢ニシテ指數 165.0ニ當リ前年ヨリ低キコト 2.0錢ナリ、是ハ松本、名古屋、高知等ニ於テ上昇シタルトモ中國、九州ニ低下アリテ斯ク低下セリ。機織男ハ 45.8錢ニシテ指數 139.4ニ當リ前年ヨリ 0.3錢高シ、各地多クハ増減無キモ名古屋ト熊本ノミ上昇セリ。機織女ハ 30.3錢ニシテ指數 150.0ニ當リ前年ヨリ増スコト 1.8錢ナリ、低下セルハ東京、京都、徳島、熊本ノミ、他ノ多クハ増減ナキカ若クハ多少ノ上昇ヲ爲セリ。菓子製造職ハ賄付 47.0錢ニシテ指數 156.7ニ當リ前年ヨリ 1.0錢高シ、關東ノ一部ト北陸ニ於テ低下シタルトモ他ノ多クハ増減ナク近畿及中國ニ稍強ク上昇セリ。漁夫ハ 59.0錢ニシテ指數 151.2ニ當リ前年ヨリ 0.8錢低シ、東北ノ各地及新潟ハ上昇シタルトモ他ノ多クハ多少ノ低下ヲ爲セリ。米搗ハ 40.8錢ニシテ指數 136.6ニ當リ前年ヨリ 0.3錢低シ、青森ノミ上昇シ關東、近畿、中國ハ低下セリ。日傭人夫ハ 55.3錢ニシテ指數 148.6ニ當リ、前年ヨリ 1.0錢低シ、東北、北陸、四國ハ低下シ關東、東海、近畿、中國ハ増減ナク、上昇シタルハ東京、金澤、松本、福岡、熊本ナリ。月傭酒造稼人(杜氏)ハ賄附 18圓14.0錢ニシテ指數 166.3ニ當リ前年ヨリ高キコト 81.2錢ナリ、是ハ東北、四國、九州ニ上昇セルニ由ルモノニシテ關東、近畿ニハ増減ナク北陸ハ低下シタルモアリタリ。月傭醬油造稼人ハ賄附 11圓54.5錢ニシテ指數 185.7ニ當リ、前年ヨリ高キコト 68.5錢ナリ、東北、北陸、近畿、中國、四國、九州、皆上昇セリ。月傭僕ハ賄附 4圓97.0錢ニシテ指數 184.1ニ當リ前年ヨリ高キコト 36.7錢ナリ、低下シタルハ東京ト金澤ノミ他ハ概ネ増減ナキカ若クハ多少ノ上昇セリ。月傭婢ハ賄附 3圓12.5錢ニシテ指數 200.6ニ當リ前年ヨリ高キコト 82.8錢ナリ、低下シタルハ青森ト京都ノミ、他ノ多クハ上昇セサルハ増減無シナリ。農作年傭男ハ賄附 53圓70.5錢ニシテ指數 167.2ニ當リ前年ヨリ低キコト 18.8錢ナリ、青森、秋田、大阪ハ低下シ、徳島、長崎ハ上昇シ其ノ他ハ増減無シ。農作年傭女ハ賄附 32圓54.0錢ニシテ指數 190.7ニ當リ前年ヨリモ 35.0錢高シ、低下シタルハ大阪ノミニシテ秋田、徳島、長崎ハ上昇シ其ノ他ハ總テ増減無シナリ。

X. 外國貿易

大正五年中、本邦内地ニ於ケル輸出入物品總價額ハ、1,923,724,599圓ニシテ、内、輸出 1,153,187,560圓、輸入 770,537,039圓、差引輸

出超過 382,650,521圓ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ、總額ニ於テ約 649百萬圓、輸出 423百萬圓、輸入 225百萬圓ヲ増加セリ、從テ輸出超

過ノ増加額 198百餘萬圓ナリトス。茲ニ注目スヘキハ、前年ノ輸出超過ハ更ニ其ノ前年ニ比シ、輸出ノ増加ト、輸入ノ減少ト、相俟テ起リタルニ、本年ニ於テハ輸出輸入共ニ前年ヨリ増加シテ、而モ此ノ輸出超過ヲ來シタルコト是ナリ、右輸出金額ヲ、帝國内地現住人口ニ比例スルニ、人口一ニ付輸出ハ 20圓88錢、輸入ハ 13圓95錢ニ當リ、前年ニ對シ、輸出ハ 7圓48錢、輸入ハ 3圓93錢ノ増加ヲ示ス。

我外國貿易ノ統計ハ、古クヨリ其ノ材料ヲ有シ、本書ニ於テモ明治元年ヨリ累年ノ數ヲ掲出セリ、今其ノ數ヲ見ルニ、此ノ間ニ於テハ、本位貨幣不統一ノ時代モアリ、又明治三十年ノ根本的幣制改革等モアリテ、素ヨリ一概ニ論斷シ難キ點アリト雖、貿易ハ年々著シキ増進ヲ示シ、殊ニ最近ニ至ルニ從ヒ其ノ速度ヲ加フルニ似タリ、即チ明治元年輸出入ヲ合シテ總額僅ニ 2,600萬圓ナリシモノ、同九年十年ノ交ニ至リテ恰モ其ノ二倍 5,000萬圓ト爲リ、更ニ十年ヲ經テ明治二十年、二十一年ノ境ニ至リテ其ノ倍額 1億圓ト爲リ、次ニ二十七年ニ至リ更ニ其ノ倍 2億圓ニ達シ、次テ僅ニ二年ヲ隔テ、三十年ニハ復タ 4億圓ニ上リ、爾來進歩ノ度稍々緩ナルノ 觀アリシモ、三十八九年ニ至リ其ノ倍額 8億圓ヲ突破シタリ、斯クテ總額ノ多クナルニ從ヒ更ニ其ノ倍ニ達スルノ期ハ漸ク遠シト見エシカ、最近大正四年ニ至リ更ニ倍額ヲ超越シテ 19億圓ニ上レリ。此ノ如ク我貿易ハ大體著シキ 増進ヲ示スモ、細カニ年々ノ數ヲ見ルトキハ、必スシモ年々遞次増加ヲ示スニアラス、前年ヨリ後年ノ減額シタル年無キニアラス、即チ明治四年、七年、十年、十四年、十六年、十七年等ハ何レモ 前年ニ對シ少シク減少セリ、其後三十二年モ亦前年ヨリ減少ノ數ヲ示ス、併シナカラ之レ恐ラクハ 三十二年ノ減少ト言ハノヨリ、寧ろ三十年及三十二年ハ 日清戰後企業勃興ニ依ル輸入ノ殷盛ト、三十年幣制ノ改革ニ依ル 秤價ノ高率ト相俟テ兩年異常ノ多額ヲ現出シタルニ主トシテ是由リ、之ニ加フルニ、右ノ反動三十二年ニ至リテ現レタル爲メナルヘシ、四十一年、四十二年ニ減少シタルモ亦日露戰爭後ノ經濟上ノ結果現象同様ニ現ハレタルモノト察セラル、最近大正三年ニ於テ 貿易俄ニ減退セルハ言フマテモナク 今回ノ大戦役勃發ノ際一時貿易途絶若ハ變調ノ結果ニ外ナラス。次ニ累年輸出入ノ差ヲ見ルニ明治元年ハ輸出超過ヲ以テ初マリシモ、二年以後十四年迄ハ、僅ニ九年ヲ一ノ例外トスル外、常ニ輸入超過ヲ示シ十五年ヨリ二十六年迄ハ、二十一年、二十三年ノ二回ヲ例外トシ、多ク輸出超過タリ、爾來四十一年ニ至ル十五年間ハ、恒ニ輸入超過ヲ以テ繼續シ、殊ニ二十九年、三十年、三十一年及三十三年、三十八年等ノ超過ノ多額ノ如キハ、人ヲシテ少カラズ寒心ニ堪エサラシムルモノアリキ、四十二年、四十三年ノ兩年漸ク轉シテ輸出超過ト爲リシニ、四十四年以後再ヒ輸入超過ト爲リ、

而モ其ノ額逐年増加ノ趨勢アリシカ、今回ノ大戦ニ入リシ以來著シク輸出超過ヲ呈スルニ至リタリ。

大正五年帝國ノ貿易ハ、右ノ外、尙朝鮮ニ 35,835,348圓、臺灣ニ 47,082,511圓アリ、共ニ前年ニ比シ著シク増加シ、其額前者ハ 9百餘萬圓、後者ハ 18百餘萬圓ノ數ヲ示ス、而シテ臺灣ニ於テハ、内地ト等シク前年ニ引續キ輸出超過貿易トナリ、本年ニ於テ 16百餘萬圓ノ額ニ上ル、朝鮮ニ於テハ今尙輸入超過貿易タルモ 其額漸ク減少シ本年ニ於テ僅ニ 8百餘萬圓ニ止マルニ至レリ。以上朝鮮及臺灣ノ貿易額中ニハ該地ト 内地又ハ植民地相互間ノ移出入ノ數ヲ含マス。

前記内地貿易額中ニハ、輸出ニ 25,719,442圓、輸入ニ 14,109,129圓ノ在外公館用品、外國艦船用品、博覽會出品、外國航行内國船船用品(以上輸出)御料品、外國公館用品、海軍艦船及同材料、兵器彈藥及爆發物、本邦ヨリ出漁セシ船舶ノ捕獲採集セル水産物(以上輸入)等所謂特別輸出入ノ金額ヲ包含ス、仍テ之ヲ除キタル内地ノ輸出ハ 1,127,468,118圓、輸入ハ 756,427,910圓ナリ、尙此ノ輸出中ニハ外國産ノ再輸出 10,723,653圓ヲ、輸入中ニハ内國産ノ再輸入 1,494,187圓ヲ各包含ス。

右特別輸出入ヲ除キタル 貿易額ヲ國別ニ就キテ見ルニ、輸出總額中505百萬圓、即チ約 448%ハ亞細亞ノ各地ニ向フモノニシテ、内192百萬圓即チ 170%ハ支那ニ、117百萬圓即チ 104%ハ 露領亞細亞ニ、71百萬圓即チ 63%ハ英領印度ニ、而シテ其他ハ他ノ印度、香港、比律賓地方ヘノ輸出ニ屬ス、何レモ前年ニ比シ増加セサルモノナク殊ニ前記支那、露領亞細亞、英領印度ノ三地ハ各 3千萬圓乃至 5千萬圓ノ増加ニシテ就中英領印度ハ増加割合偉大ナリ、歐洲諸國ヘノ輸出ハ 216百萬圓即チ 192%ニ當リ、大正三年即チ戰亂開始ノ年ノ激減後、同四年、五年相次テ少シク回復ノ狀アルモ、未タ十分ナラサルニ似タリ、但シ之ヲ國別ニ見ルトキハ、少カラズ變態ヲ認メ得ヘキカ如シ、即チ英國ハ金額ノ上ヨリ見ルトキハ順調ノ増加趨勢ニ在リテ本年 102百萬圓91%ナルモ、佛國ハ漸ク戰前ノ額ニ達シ本年 64百萬圓 56%ナリ、但シ總輸出額ニ對スル比例ニ於テハ共ニ前年ニ比シ減少ス、獨リ露國ハ著シク増加シ、前年ノ三倍 33百萬圓ニ至ル、又從來殆ント皆無ニ等シキ諸國ニ對スル輸出ハ、大正五年突然 10百萬圓以上ノ額ヲ示スニ至リシハ注目ニ値ス。北亞米利加ヘノ輸出額ハ約 353百萬圓即チ 313%ニシテ、亞細亞ニ次ク大數ヲ占ム、内殆ント全部ニ近キ 340百萬圓即チ 301%ハ合衆國ヘノ輸出ニ屬ス、加奈陀、墨西哥、其他ノ各國ハ、其ノ額未タ多カラサルモ、實數、比例共ニ前年ニ比シ適順ノ増加ヲ示ス、南亞米利加及亞弗利加ハ前年ニ引續キ増加シ、殊ニ埃及、喜望峯植民地及ナタル地方著シキ増加ヲ示スモ 其總量未タ甚タ多カ

ラス、二大洲ヲ合シテ僅ニ 13百萬圓ノミ、其他ニテハ濠太刺利、新西蘭ヲ合シテ 30百餘萬圓ニ達シ、前年ニ對スル進歩亦佳良ナリ。

大正五年内地輸入總額 756百餘萬圓ハ、亞細亞 368百餘萬圓、歐洲 108百餘萬圓、北米 205百餘萬圓、南米 6百餘萬圓、亞弗利加 8百餘萬圓、其他 47百餘萬圓ニシテ、之ヲ分節比例トスルトキハ亞細亞 487%、歐洲 143%、北米 272%、南米 9%、亞弗利加 11%、其他 63%ナリ、尙之ヲ國別ニ細觀スルトキハ、北米ノ殆ント全部ハ合衆國ニ屬シ、我輸入國中ノ第一ニシテ 而モ前年ニ比シ恰モ二倍ノ増加ヲ示ス、從來北米合衆國ハ我國ニ對スル 貿易關係ニ於テ輸出國ノ第一位タリシモ輸入國トシテ 第一位ヲ占ムルニ至ラザリシカ、大正五年始メテ輸入國ノ第一位ト爲レリ、次ニ英領印度ノ 179百萬圓 237%、支那ノ 108百餘萬圓 144%、英國ノ 81百餘萬圓 108%、濠洲ノ 43百餘萬圓 57%等我國ニ採リテ輸入多額ノ國ニ屬ス、何レモ前年ニ比シ大ニ増加シタルモ、比例數ニ於テモ 増加シタルハ獨リ濠洲アルノミ、其ノ以下ノ諸國多クハ實額増加シタルモ、前年ノ同一分節比例ト比シ甚シク 増加ノ跡ヲ認メス、但シ歐洲ニ於テ瑞典、挪威、南米ニ於テ智利、其他ノ諸國ハ、實額未タ多カラサルモ増加ノ趨勢大ナルモノアリ。尙獨逸及奧地利ニ對スル貿易ハ、輸出ニ於テハ全然其ノ蹤跡ヲ止メサルニ、輸入ニ於テハ前年ニ引續キ本年ニ於テモ、尙獨逸 4,467,653圓、奧國 36,385圓ノ數アルヲ認ム。

大正五年内地輸出入金額ヲ物品六大種別トシ 其ノ分節比例ニヨリテ見ルニ、輸出ハ粗生食料品 4.2%、製造食料品 5.1%、原料品 5.1%、原料用製品 48.0%、全製品 33.8%、其他ノ雜品 3.7%ニシテ即チ輸出品金額中ノ殆ント半數ハ原料用製品タリ、之ニ次キテ全製品次キテ原料品、製造食料品、粗生食料品等ナルモ、前年ノ同一比例ト對照シ、増加シタルモノハ、前記原料用製品ノ外ハ其他雜品ノアルノミ、但シ其ノ實額ニ於テ前年ヨリ減少シタルモノ一モ之アルナシ。而シテ是等六種ノ種類ニ就キ 明治四十一年ヲ百トシタル指數ヲ見ルニ、雜品ノ増加最モ著シク、大正五年ニハ 992、即チ約十倍ノ増加ナリ、之ニ次キテ粗生食料品、原料用製品、全製品等 331乃至 313ノ指數ヲ示シ、即チ平均以上ノ増加タリ、原料品ノ増加最モ微弱ニシテ 142ノ指數ヲ示ス、此點ヨリ見ルトキハ、我國ノ輸出貿易ノ性質ハ極メテ良好ノ傾向ニ在リト云フニ足ランカ。

右ト同一比例ヲ輸入ニ就キテ見ルニ、粗生食料品 1.9%、製造食料品 2.2%、原料品 57.1%、原料用製品 26.7%、全製品 11.2%、其他ノ雜品 0.9%ニシテ、原料品ハ輸入總額ノ半數以上タリ、之ニ次テ原料用製品ニシテ、此ノ二者ヲ合スルトキハ實ニ 83.8%ノ大部ヲ占ム、次テ全製品、製造食料品、粗生食料品及其他ノ雜品ノ順位タリ、之ヲ前年ト比較スルニ、原料用製品及全製品ハ増加シ、食

料品ノ二種ハ減少ス、原料品モ亦減少ノ比例數ヲ表ハスモ、實數ニ於テハ寧ろ増加セリ。又輸出ニ於テ觀タルト同シク、明治四十一年ヲ百トシタル指數ヲ見ルトキハ、原料品最モ指數高ク 281ヲ示シ、前年ノ 221ヨリ遙ニ増加セリ、次テ原料用製品 239、之ニ次キテハ雜品ノ 191ナリ、以上三種ハ平均以上ノ増加ニシテ他ノ三種ハ平均以下タリ、全製品ハ前年ノ 40ニ對シ 66ニシテ稍々増加シタリト雖總數ニ對スル比例ヨリスルモ、將タ明治四十一年ニ對スル 指數ヨリ見ルモ、共ニ甚タ大ナラス、是等輸入品ノ種類ヨリ觀察スルモ亦我貿易ハ佳良ノ狀況ニ在リト云ヒ得ヘキカ如シ。

大正五年輸出品中、其金額ノ大ナルモノヲ 百萬圓單位ヲ以テ列記スレハ、生絲 266(236%)、綿織絲 77(68%)、銅 66(58%)、羽二重 41(36%)、綿メリヤス肌衣 28(25%)、機寸 21(19%)、石炭 20(18%)、生金巾及シーテング 18(16%)、汽船 17(15%)、精糖 16(14%)、豆類 16(14%)、綾木綿 13(12%)、麻真田 12(11%)、陶磁器 12(11%)、米 11(10%)等ニシテ以上悉ク前年ニ對シ多少ノ増加ヲ示ス、而シテ特ニ激増ノ甚シキハ汽船ナリ、其他綿メリヤス肌衣ヲ主トシ綿織物一般並ニ豆類等モ激増ノ部ニ屬ス。

大正五年輸入品中、其ノ金額ノ大ナルモノヲ、同シク百萬圓單位ヲ以テ列記スレハ、綿織 274(363%)、豆精 34(45%)、羊毛 33(44%)、電鍍セナル鐵板 22(30%)、條竿等ノ鐵 22(30%)、塊及錠鐵 16(22%)、眞鍮及青銅 14(18%)、砂糖 12(17%)、汽船10(14%)、葉鐵及葉銅 10(13%)、製紙用パルプ 9(12%)、大麻黃麻及マニラヘンブ 8(11%)、牛皮水牛皮 8(11%)等ニシテ、以上ノ諸品ハ、獨リ砂糖ヲ除クノ外ハ、皆前年ニ對シ増加シタルモノノミニシテ、殊ニ増加割合ノ大ナルモノハ、輸出ノ場合ニ於ケルト等シク、汽船最モ甚シ、以上ハ輸入ノ各品ニ付キテ一々金額ノ多少順ニ掲ケタルモ、更ニ同種ノモノヲ括約スルトキハ、綿織ノ第一位ナルニ次テハ、鐵其他ノ金屬類最モ多額ナリ、其ノ製品ヲ除キタル 各種金屬材料ノミニテ 150百萬圓ニ達ス。

大正五年貿易額ヲ、輸出ハ内國産、輸入ハ外國産ノミニ就キテ月別ニ見ルニ、其出入合計ハ一月最モ少ク、二月、三月相次テ増加シ、三月以降八月ニ至ルマテハ甚シキ増減ナク、九月以後激増シ、十二月ノ最大ニ達ス、而シテ此ノ趨勢ハ主トシテ 輸出ノ數ニ依ルコト多ク、輸入ノ額ハ各月ヲ通シテ多クノ變動ナシ、由來帝國ノ月別貿易ハ戰前マテハ、年首ヨリ七月ニ至ルマテハ 輸入過多ニシテ八月以後輸出超過ニ轉スルヲ以テ例トセシカ、戰後此ノ常軌ヲ破リ、殊ニ大正五年ニ入リテハ、一年ヲ通シ 絕對ニ輸出超過ヲ以テ終始セリ。

大正五年中輸出ヲ取扱ヒタル港數三十港、内輸出總價額ノ 441%ハ横濱ニシテ、以下神戸 297%、大阪 125%、敦賀 48%、門司 24

社ノ如ク一會社平均百萬圓以上モ投下セラル、カ如キ大資本ノモノナシ、次ニ運輸會社ハ、水運會社數モ多ク、次テ軌道、輕便鐵道ノ順ニシテ普通私設鐵道最モ少シ、其ノ資本額モ亦右ノ順位ニ在リ、就中水運 7,914萬圓、軌道 7,009萬圓、特ニ多シ、而シテ一會社平均資本ニ於テハ、私設鐵道 852萬圓最モ多ク、其ノ他ハ平均百萬圓ニ上ラスト雖、實際ニ於テハ宏大ナル大資本會社ヲ含ムハ、何人モ熟知スル所ナリ、尙會社ノ營業種類細別ハ之ヲ各種毎ニ前年ノ數ト對照スルトキハ、少カラズ變動ヲ認ムト雖、本表ノ分類ニ就キテハ原材料ニ於テ多少ノ疑ヲ挿ムノ餘地アルカ如キヲ以テ、深ク立入り記述スルヲ避ケタリ。

大正四年末現在會社ノ各府縣分布ノ狀況ヲ見ルニ其ノ事業ハ各府縣ハ全國ニ及フモノアリト雖主タル事務所ノ所在ニ依レハ、東京 2,025ノ最多ハ固ヨリ論ナク、之ニ次キテ、愛知 1,113、兵庫 1,110、大阪 1,106、北海道 819、長野 782、静岡 644、神奈川 531等會社數多ク、沖繩ノ 31ヲ最少トシ、徳島 77、宮崎 83、鹿兒島 84、奈良 87等ハ會社少キ府縣ナリ。資本金ノ多少分布ハ必スシモ右會社數ノ多少ト一致セズ、東京 875百萬圓ニ次キテハ、大阪 281百萬圓、兵庫 116百萬圓、神奈川 106百萬圓等ニシテ、愛知 77百萬圓ハ其ノ次ニ位スル如キナリ、最少ノ方面ニ於テモ、亦、徳島、鳥取、宮崎ノ諸縣ハ等シク 4百萬圓臺ニシテ、沖繩縣ヨリ少額ナリ、尙金額別ニ就キ各府縣ノ特徴ヲ細觀スルコトハ、茲ニ之ヲ略スルモ、五百萬圓以上ノ大資本會社ノミニ就キ一言スレハ、右ノ大會社ヲ有スルハ、東京 56、大阪 18、神奈川 7、兵庫 6ノ外ハ京都 3、福岡 3、

XII. 産業組合及同業組合

大正四年末現在、各種産業組合ノ數ハ 11,509ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ 349ヲ増加セリ、産業組合ハ明治三十三年ノ法律ニ依リ創メテ設立セラレ、同年末僅ニ 21ノ組合ヲ見ルノミナリシカ、爾來年々増加シ、終ニ最近前記ノ數ニ達セリ、今大正四年末ノ數ヲ組合ノ目的別ニ依リテ見ルニ、信用組合 3,015、販賣組合 234、購買組合 536、生産組合 132ニシテ、其他ハ二種乃至四種ノ目的ヲ併有ノモノニ屬ス、而シテ信用販賣購買組合 2,609、信用購買組合 2,583、著シク多數ナリ、今假ニ數種ノ目的ヲ併有ノモノ中ヨリ各目的ヲ一トシテ積算シ、之ニ單純ナルモノヲ加フレハ信用ニ關スルモノ最モ多ク 9,739、次ニ購買ニ關スルモノ 7,458、販賣ニ關スルモノ 4,109、生産ニ關スルモノ 1,671ニシテ、最モ少シ、是等ノ目的別ヲ前年ト對照スルニ、信用組合、販賣組合及信用ヲ兼有スル組合ハ、總テ増加シ、其ノ他ノ組合殊ニ生産組合若ハ生産ヲ兼有スルモノ減少ノ現象ヲ示スカ如シ、是果シテ産業組合法ノ目的ニ適スルモノト云フヲ得ヘキカ。

愛知 2、北海道 2、其他群馬、新潟、三重、熊本、沖繩各 1ナリトス。次ニ會社ノ營業種類別ヲ府縣ニ就キテ見ルニ、農業會社ハ北海道 71ヲ最多トシ、東京 31、長野 31、岐阜 28、愛知 28、兵庫 21、高知 18等ヲ多數ノ順位トシ、沖繩ノ皆無ヨリ香川 1、宮崎、徳島、山口、鳥取、栃木各 2、茨城、奈良各 3等ヲ少數ノ方面トス。工業會社ハ東京 723ヨリ大阪 467、愛知 432、兵庫 324、北海道 218等多數ノ順位ニシテ、次テ静岡、廣島、秋田、岡山、京都等頗ル多シ、最モ少キハ沖繩 7、宮崎 16、鹿兒島 28等ナリ、次ニ商業ハ其ノ性質上都會ヲ包有スル府縣ニ於テ其數多カルヘキハ當然ナリト雖、會社組織ニ於テ營マシ、商業ハ必スシモ之ト一致セサルモノ無キニアラサルカ如シ、即チ商業會社多數ノ第一ハ東京 1,187ナリト雖、之ニ次テハ兵庫 680、愛知 598、大阪 558、長野 506、北海道 428、静岡 402、神奈川 362等順次相次キ京都、新潟、福岡、岡山、廣島、富山、福島等 200乃至 300ノ間ニアリテ所謂第二ノ階級ニ屬スルカ如シ、反對ニ最少ノ方面ヨリスレハ沖繩ノ 18ヨリ、徳島 31、鹿兒島 38、奈良 42等ノ順序ナリ。運輸業ハ、是亦農業ト等シク北海道最モ多ク、會社數 102ナリ、次テハ兵庫 85、東京 84、大阪 63、愛知 55、静岡 54、長野 43、富山 41、福岡 40等ニシテ、他ノ種類ノ會社ノ府縣分布ノ狀況トハ稍々趣ヲ異ニスルモノアリ、最少ノ方面ニ於テモ、亦、宮崎ノ 5ヲ最少トシ、次テ沖繩 6、熊本 7、徳島 8、佐賀、福井各 9等順次其數ヲ増ス、其他ノ府縣ハ右ノ中間ニ在リ、而シテ運輸業會社ハ最多ト最少トノ間隔甚大ナラス、各府縣ニ比較的平等ニ分布存立スルカ如シ。

産業組合ノ大正四年末各府縣分布ノ狀況ヲ見ルニ、兵庫縣ノ 703ヲ最多トシ、長野縣 500、群馬縣 478、新潟縣 421、愛知縣 408等多ク、次テ廣島縣 385、岡山縣 380、福島縣 366、千葉縣 353、埼玉縣 340等ノ諸縣亦多キモノニ屬ス、反之最モ少キモノハ沖繩縣ノ 46ヲ除クノ外、徳島縣 106、次テ東京府 112、大阪府 114、滋賀縣 118等ナリ、産業組合ノ種類ハ信用ヲ目的トスルモノ最モ多ク購買ヲ目的トスルモノ次テ多キ事實ヨリ考フルトキハ、金融機關ノ最モ整備セル又購買ノ便宜多キ、東京、大阪ノ都會ヲ有スル府縣ニ組合ノ少キ點丈ハ首肯セラレ得ルカ如シ。各府縣ニ就キ組合ノ種類ニ付キテノ細觀ハ此所ニ之ヲ省略スルモ 瞥見スル所ニテハ府縣ニ依リ著シク異ナルカ如シ。

産業組合ヲ組織別ニ見ルニ、大正四年末ニ於テハ、有限責任 7,633、無限責任 3,646、保證責任 230ニシテ、有限責任最モ多ク、無限責任ハ有限責任ノ約半數ニ當ル、併シナカラ、之ヲ明治三十九年以來ノ數ニ就キテ見ルトキハ、四十一年末迄ハ却テ無限責任ノ組織多

カリシニ四十二年以降有限責任ノ増加著シクシテ、終ニ今日ノ現狀ニ至リタリ、此ノ組織別彼此多少ノ關係ハ各種目的ノ異ナルニ從ヒ今日尙一様ナラサルカ如シ、即チ大體ニ於テ單純ナル信用組合ヲ主トシ信用ニ關スル組合ハ、他ニ比シ比較的無限責任ノ組織組合多キノ傾向看取セラル、ニ似タリ。

重要物産同業組合法モ、亦産業組合法ト同シク 明治三十三年ノ

XIII. 電氣事業及瓦斯事業

【電氣事業】 大正四年末現在ノ 開業電氣事業ハ 510ニシテ外ニ自家用電氣工作物 1,609官廳施設電氣工作物 121アリ、此ノ合計 2,240ニシテ尙此ノ他ニ未開業事業及工作物合計 168アリ。此ノ事業及工作物合計ヲ十二年前ナル明治三十六年ニ比シ同年ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ開業ハ 491未開業ハ 336合計ハ 476ニ當リ其ノ進歩ノ著シキヲ見ル。殊ニ是等事業ノ發電力ヲ見ルニ使用認可ノモノ 771,584[キロワット]ニシテ使用未認可ノモノ 377,107[キロワット]アリ、此ノ電力ヲ明治三十六年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ使用認可ノモノハ 1,744、未認可ノモノハ 1,049、合計ハ 1,432ニ當ル、茲ニ至リテ電氣事業ノ進歩頗ル長足ナルヲ知ルヘシ。開業電氣事業ヲ其ノ目的ニ依リテ別テハ電氣供給事業 438電氣鐵道事業 25二者兼營事業 47ナリ、故ニ電氣供給事業ハ總數ノ 95.10%電氣鐵道事業ハ 14.12%ニ當リ、兩者ノ中各 9.22%ハ兼營事業ノ占ムル所ナリ。開業電氣事業ノ一事業平均ノ使用認可電力ハ 1,126[キロワット]ニシテ電氣供給事業ノミハ 930[キロワット]、電氣鐵道事業ハ 195[キロワット]、兼營事業ハ 3,171[キロワット]ニ當ル、又開業自家用電氣工作物ノ認可電力ノ平均ハ 109[キロワット]ニシテ官廳施設電氣工作物ハ同ク 178[キロワット]ニ當レリ、以テ是等事業ノ規模ヲ知ルヘシ。

大正四年末現在ノ使用認可電力ヲ發電原動力ニ依リテ別テハ水力 449,220[キロワット]、火力 322,364[キロワット]ナリ。之ヲ總量ノ分節比例ト爲セハ水力 58.22%火力 41.78%ニ當ル、若シ夫レ明治三十六年ノ同一比例ヲ見シカ水力 29.66%火力 70.34%ナリシナリ、又明治三十六年ノ各百ニ對スル指數ヲ求メンカ水力ハ 3,423ニシテ火力ハ 1,036ナリ、是等ノ事實ニ由リテ水力電氣ノ發達頗ル著シキヲ見ルヘシ。殊ニ之ヲ各種類ニ就テ見ルニ營利事業ハ最モ水力ヲ利用スルコト多ク使用認可總電力ノ 68.85%ハ水力電氣ニシテ 31.15%ノミ火力電氣ナリ、之ニ反シテ自家用電氣工作物ハ寧ロ火力電氣多ク水力電氣ノ 30.54%ニ對シ 69.46%ヲ占メ、官廳施設電氣工作物ハ殊ニ火力電氣多ク水力電氣僅ニ 1.86%ニシテ他ノ 98.14%ハ火力電氣ナリ。惟フニ斯クノ如キハ二種ノ工作物ハ其ノ規模狭小ニシテ之ヲ營利事業ト比スヘカラサルモノ

公布ニ係リ、同年四月一日ヨリ施行セラレタルモ、本書ニ於テハ大正元年以來、四ケ年ノ組合數ノ表アルノミ、其ノ組合數大正四年末ニ於テ 1,017アリ、四ケ年間ノ進歩甚タ遅々タルカ如シ、最モ多キハ蠶絲及蠶種業組合ニシテ、其ノ數 248、次テ織物業 133、米穀業 64ナリ、同年同業組合聯合會ノ數ハ 46ナリ。

アルニモ據ルヘク、又自家用工作物ノ如キハ之ヲ營利事業ニ比シ早ク發達シタルニモ由ルモノナラン。

次ニ電氣事業ヲ地方別ニ見ルニ、營利事業ノ事業數ニ於テハ兵庫最モ多ク岐阜之ニ次キ愛知、静岡、福島等ノ各地方ノ多キモノナレトモ、發電力ヲ以テ比スレハ東京最モ多ク、大阪之ニ次キ、神奈川、福岡、北海道、兵庫、愛知等ノ諸地方ニ多シ。自家用電氣工作物ノ電力ニ依リテ比スルニ福岡最モ多ク其ノ他大阪、兵庫、東京、北海道、栃木等ノ諸地方ニ多ク即チ鐵山多キ地方及都會ニ多シ。又官廳施設電氣工作物ハ東京、福岡最モ多ク群馬、大阪、兵庫ノ各地方モ稍多シ。

原動力別ノ發電力ヲ地方別ニ見ルニ水力電氣ハ東京最モ多ク大阪之ニ次キ其ノ他北海道、神奈川、愛知、熊本、静岡、福岡、栃木等ノ諸地方ニ多ク、火力電氣ノ中汽力ハ大阪、福岡最モ多ク東京、兵庫等ノ諸地方次テ多ク、火力電氣ノ中瓦斯力ハ東京最モ多ク福岡、兵庫、鹿兒島ノ諸地方稍多シ。

營利電氣事業ノ大正四年ニ於ケル各營業決算期末ノ事業數ヲ見ルニ 481ニシテ其ノ拂込資本金ノ總額ハ 594,705,172圓ナリ。此ノ拂込資本金ヲ明治三十六年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 2,467ニ當リ即チ十二年間ニ於テ二十五倍ニ近キ放資ヲ見ルニ至リタル寔ニ盛ナリト云フヘシ。此ノ放資ノ増加ハ營利事業數ノ増加ニ依ルノミナラス、各事業其ノモノカ尙大ナルニ至リタルニ由ルナリ、即チ明治三十六年ノ一事業平均拂込資本金ハ 270,808圓ナリシカ大正四年ハ此ノ平均額 1,236,393圓ト爲リ、明治三十六年ノ百ニ對スル指數ハ 456ニ當リタリ。上記營利事業ノ中電燈事業ヲ營ムモノハ 460ニシテ總數ノ 95.63%ニ居リ、殆ト總テハ電燈事業ヲ營ムモノナリ、大正四年ニ於ケル電燈取附總數ヲ十燭光ニ換算スレハ 7,886,034個ト爲リ、之ヲ電氣力ニ換算スレハ 190,496[キロワット]ニ當ル。又動力供給事業ヲ營ムモノハ 384アリ總數ノ 79.81%ニ居ル其ノ大部分ハ電燈事業ヲ兼營スルモノナルヘシ、大正四年ニ於ケル取附電動機ノ換算電氣力ハ 136,918[キロワット]ニ當リ、之ヲ馬力ニ換算スレハ 182,704馬力ニ當ル。此ノ他電氣事業總數中ニハ鐵道事業ヲ營ムモノアルモ交通ノ部ニ詳記セ

ルヲ以テ茲ニハ記載セス大正四年末現在ノ營利事業ニ就テ其ノ發電所數ヲ見ルニ、總數 604箇所アリテ原動力ノ水力ナルモノ最モ多ク 344箇所ヲ占メ殘ル 260箇所ハ汽力瓦斯力殆ト相半ハセリ。而シテ殊ニ原動力ヲ水力ニ求ムルコト多キモノハ 電氣供給事業ニシテ其ノ總數ノ 61%ハ水力ナリ。又此ノ發電所ヲ電壓ニ依リテ別テハ高壓最モ多ク特別高壓之ニ次キ、特別高壓發電所ヲ有スルコト最モ多キハ電氣鐵道及電氣供給營業事業ニシテ其ノ總數ノ 37%ニ當リ電氣供給事業ハ同ク 22%ナリ。此ノ發電所ニ於ケル發電機ノ箇數ハ恰モ 1,000ニシテ高壓發電機最モ多ク 770ニシテ特別高壓ハ 139ナリ。此ノ發電機ノ容量ハ總數 681,096[キロヴォルトアンペア]ニシテ各種ノ發電機ノ平均一箇ノ[キロヴォルトアンペア]量ハ低壓 124高壓 411特別高壓 2,400ナリ。發電所ノ事實ニ就テ電氣事業ノ發達ヲ見ルニ、明治四十年ヲ各百ト爲シタル大正四年ノ指數ハ發電所總數 422發電機總數 308發電機ノ容量總數 887ニ當リ其ノ進歩ノ頗ル長足ナルヲ知ルヘク、更ニ之ヲ電壓別ト爲セハ特別高壓最モ著明ノ發達ヲ爲シ高壓之ニ次ケリ、即チ明治四十年ノ各百ニ對スル指數ハ發電所低壓 263高壓 412特別高壓 768、發電機低壓 144高壓 312特別高壓 927、發電機容量低壓 244高壓 576特別高壓 2,576ナルニ依リテ知ルヘシ。惟フニ斯ノ如キハ近年水力電氣ノ發達ニ伴フ現象ナルヘク、特別高壓發電機ヲ裝置シ得ル適當ノ水力發電所ニ富メルハ本邦ノ地勢地形カ與フル恩惠ナリト謂ハシ。

大正四年ニ於ケル營利事業ノ各營業決算期末ノ電線路ヲ見ルニ、全互長ハ 26,495.5哩ニシテ全延長ハ 98,429.1哩ナリ。之ヲ既往ニ比スルニ明治三十六年ノ同事實ノ百ニ對スル指數ハ全互長 1,600ニシテ全延長 1,646ニ當リ、又上項ト比センカ爲メ明治四十年ヲ百ト爲シタル指數ヲ求ムレハ全互長ハ 897ニシテ全延長ハ 871ニ當レリ。而シテ此ノ全延長ノ四十年ニ對スル指數ヲ電壓別ニ見レハ低壓ハ 685高壓ハ 901特別高壓ハ 1,599ニ當リ、是ニ於テモ特別高壓ノ著シキ發達ヲ見ルヘク、而シテ物質ノ文明ノ進歩ニ伴ヒ是等危險物增多ノ止ムヲ得サルモノアルト共ニ其ノ危險ニ對ス

XIV. 交

【道路及橋梁】大正元年末調査ノ道路延長ハ 國道 2,178里縣道 9,179里 31町、里道 107,768里 8町ナリ、之ヲ明治四十年末ノ調査ニ比スルニ國道 31里2町、縣道 166里5町、里道 13,446里30町ヲ増セリ。里道ノ延長ノ著シク増加セルハ其ノ何ノ故タルヲ詳ニセス。五年間ニシテ斯ノ如ク多クノ開發アリタルカ將タ調査ニ遺漏アリタル爲カ歟フヘシ。

國道ニ架設セル橋梁ノ總數ハ 9,504箇所ニシテ道路延長 8町餘

ル防備モ亦等閑ニ附スヘカヲサルモノナルヲ思ハサルヘカラス。

電氣供給事業ニ就テ大正四年末ノ電燈供給數ノ總燭光ハ 7,087萬燭光ニシテ之ヲ年末人口ニ比スレハ百ニ付 130燭光ニ當リ、又面積ニ比スレハ一平方里ニ付 2,858燭光ニ當レリ。此ノ面積ニ對スル燭光數ヲ地方別ニ見ルニ東京府最モ多ク大阪府之ニ次キ 神奈川縣京都府、福岡縣等其ノ多キモノニシテ愛知、兵庫、香川、静岡ノ諸地方ハ稍多キモノナリ。又電力供給ノ電動機ノ換算馬力ハ 527千馬力ニ當リ、此ノ馬力ノ最モ高キハ福岡縣ニシテ其ノ他東京、大阪、廣島、北海道、兵庫等ノ諸地方ヲ多シト爲ス。

大正四年中ノ電氣事業ノ故障件數ハ送電中止 2,151件送電不完全 11件アリ。送電中止ノ 384件ハ全部中止ニシテ他ノ 1,767件ハ一部中止ナリ。之カ原因ヲ討ヌルニ自然的損傷ト不可抗力トニ因ルモノ最モ多ク、設備ノ不完全ニ因ルモノハ總數ノ 0.42%操業者ノ過失ニ因ルモノハ同 10.27%ニ當ル。又同年中ノ災害件數ハ負傷 126人死亡 88人火災 60件其ノ他 622件アリ。此ノ中傷者ハ電氣鐵道ニ於テ最モ多シ死者ハ架空配電線路ニ於テ最モ多ク火災ハ殆ト全部需用者ノ工作物ニ起レリ。

【瓦斯事業】大正五年三月末日現在ノ瓦斯事業ハ總數(91ニシテ其ノ中 87ハ石炭瓦斯 3ハ[アセチレン]瓦斯、1ハ天然瓦斯ナリ。是等瓦斯事業總テ營利事業ニシテ其ノ拂込資本金ノ總額ハ 86,874,609圓ニシテ僅ニ五年前ナル明治四十四年末ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ [209ニ當リ是亦發達ノ著シキヲ見ル。需用家ニ於ケル取附口數ヲ四十四年ニ比較シ其ノ指數ヲ求ムルニ燈用ハ 175熱用ハ 263ニシテ燈用モ大ニ増加シタルト殊ニ熱用ノ増加著明ナリ。又動力供給ニ於テハ基數ハ寧ろ明治四十四年末ヨリ減少シ力量ハ上ニ同シキ指數 109ニシテ僅ニ増加セリ、是ニ由テ見レハ瓦斯事業ノ目下ノ發展路ハ其ノ熱用最モ大ニシテ燈用之ニ次クカ如シ。瓦斯事業ノ重要ナル副生物[コークス]ハ大正五年三月末日ニ終ル一箇年間ニ於テ 341,458噸[コールタール]ハ同 143,697石アリ、之ヲ明治四十五年大正元年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ[コークス]ハ 112[コールタール]ハ 105ニ當レリ。

通

ニシテ一橋梁アリ、縣道ノ橋梁ハ 39,255箇所是亦 8町餘ニシテ一橋梁アリ、里道ノ橋梁ハ 272,710箇所ニシテハ道路延長 14町餘ニシテ一橋梁アル割合ナリ。

【鐵道】大正四年度末鐵道線路ノ延長ハ開業 7,435哩 69鎖未開業 1,662哩 25鎖ニシテ此ノ開業線路中 5,756哩 76鎖即チ開業線路總延長ノ 77.4%ハ國有、217哩37鎖即チ 2.9%ハ私設(經營者 6)、1,461哩36鎖即チ 19.7%ハ輕便鐵道(經營者 110)ナリ。此ノ開業線

路ノ延長ヲ面積ニ比スルニ大正四年度末ハ百平方里ニ付 29哩56鎖ニ當リ、之ヲ明治五年末ノ同比例 6鎖ナリシニ比スレハ約 400倍ニ相當シ、二十年前ノ明治二十八年ニ比スレハ約 3.2倍ニ相當セリ。以上ノ開業線路中國有ニ於テハ 86.9%ハ單線、12.7%ハ複線 0.3%ハ三線以上、私設ニ於テハ 86.6%ハ單線、13.0%ハ複線 0.4%ハ三線以上、輕便ハ 98.4%ハ單線 1.6%ハ複線ナリ。輕便鐵道ハ之ヲ別トシ普通鐵道ニ於ケル單線複線ノ關係ハ國有私設略ホ相同キハ鐵道經營上ノ必要ニ依ル暗合ナルヘシ。

大正四年度末ノ停車場數ハ國有 1,630箇所ニシテ開業線路延長 3哩 43鎖ニ付一停車場アリ、私設ハ 104箇所是ハ 2哩 7鎖ニ付一停車場アリ、輕便鐵道ハ 1,131箇所アリ 1哩 23鎖ニ付一停車場アル割合ナリ。

大正四年度末ノ各鐵道ノ機關車、客車、貨車數ヲ見ルニ、國有ハ開業線路延長百哩ニ付機關車 46.6輛、客車 118.7輛、貨車 757.2輛アリ、私設ハ同百哩ニ付機關車 34.1輛、客車 142.9輛、貨車 565.0輛アリ、輕便鐵道ハ同百哩ニ付機關車 24.2輛、客車 82.2輛、貨車 240.7輛アリ、此ノ客車ノ座席ハ國有ニ在リテハ一輛平均 43.2私設ニ在リテハ同 46.2輕便ニ在リテハ同 39.2ニ當リ、又貨車ノ積載噸數ハ國有ニ在リテハ一輛平均 9.4噸、私設ニ在リテハ同 7.3噸、輕便ニ在リテハ同 6.1噸ニ當レリ、以テ設備ノ大體ヲ知ルニ足ラン。

大正四年度中ノ機關車走行哩ハ國有ハ 7,142萬哩、私設ハ 176萬哩輕便 668萬哩ニシテ、之ヲ各有スル機關車ニ比シ一輛平均一日ノ走行哩ヲ算出スレハ國有ハ 73哩餘、私設ハ 65哩餘、輕便ハ 52哩弱ニ當ル。又客車ノ走行哩ハ國有ハ 37,463萬哩、私設ハ 1,389萬哩、輕便ハ 2,581萬哩ニシテ之モ亦各有スル客車ノ總數ニ比シ一輛平均一日ノ走行哩ヲ算出スレハ國有ハ 152哩餘私設ハ 123哩弱、輕便ハ 59哩弱ニ當ル。又貨車ノ走行哩ハ國有ハ 7,767萬哩、私設ハ 893萬哩、輕便ハ 1,723萬哩ニシテ、之ヲ各有スル貨車ノ總數ニ比シ是亦一輛平均一日ノ走行哩ヲ算出スルニ國有ハ 49哩弱私設ハ 20哩弱輕便ハ 13哩餘ニ當レリ。而シテ又列車走行哩ノ合計ハ國有ハ 5,933萬哩、私設 148萬哩、輕便 634萬哩ニシテ之ヲ各種列車ニ分テテ分節比例ヲ算出スレハ國有ハ旅客列車 42.31%貨物列車 36.99%混合列車 20.70%ニ當リ、私設ハ旅客列車 37.32%貨物列車 21.58%混合列車 41.10%ニ當リ、輕便ハ旅客列車 2.99%、貨物列車 3.84%、混合列車 93.17%ニ當レリ。又大正四年度中ノ國有鐵道ノ平均一日營業哩ハ 5,729哩ナリ、之ヲ以テ列車走行哩ノ總數ヲ除シ更ニ一日平均ノ走行回數ヲ算出スレハ 28.4ヲ得、私設鐵道ノ平均一日營業哩ハ 217哩ニシテ是亦國有同様ニ處置スレハ一日平均ノ走行回數ハ 18.7ニ當リ、輕便鐵道ハ平均一日營業

哩 1,304哩ニシテ其ノ一日平均走行回數ハ 13.3ニ當レリ、以上ノ諸係數ハ各種鐵道ノ作用ヲ示スモノニシテ國有ト私設トノ間並ニ普通鐵道ト輕便鐵道トノ間ニ自ラ別種ノ作用アルコトハ之ニ依リテ知ラルヘク、今ハ其ノ煩ヲ避ケテ細論ニ入ラサルヘシ。

大正四年度中ノ鐵道乘客數ハ國有 17,229萬人、私設 1,548萬人、輕便 3,591萬人ニシテ之ヲ等級別ト爲シ總數ニ對スル分節比例ヲ求ムレハ國有ハ一等 0.17%二等 4.04%三等 95.79%、私設ハ一等 0.01%二等 0.94%三等 99.05%、輕便ハ一等 0.00%二等 1.00%三等 99.00%ニ當リ、此ノ各等ヲ通シタル延入哩ニ就テ乘客一人ノ平均乘車哩ヲ算出スレハ國有ハ 22哩30鎖、私設ハ 9哩51鎖、輕便ハ 5哩74鎖ニ當レリ。又大正四年中ノ鐵道運輸貨物ハ手荷物大貨物ヲ合セテ國有ハ 3,594萬噸此ノ延噸哩 330,952萬噸哩、私設ハ 178萬噸 3,199萬噸哩、輕便ハ 403萬噸 4,427萬噸哩ナリ、此ノ延噸哩ヲ各一日平均營業哩ニ比例シ各哩一日平均輸送噸數ヲ算出スレハ國有 1,583噸私設 404噸輕便 93噸ニ當レリ。

鐵道職員ノ大正四年度末現在ハ國有 112,102人、私設 2,685人、輕便 9,810人ナリ。此ノ總職員ヲ平均一日營業哩ニ比スルニ國有ハ一哩ニ付 19.57人、私設ハ同 12.37人、輕便ハ同 7.52人アル割合ナリ。

大正四年度ニ於ケル鐵道ノ益金ヲ營業哩ニ比シ一日一哩ニ付平均益金ヲ算出スレハ國有ハ 30圓81錢、私設 23圓80錢、輕便ハ 5圓31錢ニ當レリ。此ノ平均益金ヲ十年前ナル明治三十八年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ國有ハ 127.9私設ハ 118.4輕便ハ明治四十四年度以後ノ新設ナルカ故ニ比較スヘキモノナシ。

大正四年度中ノ鐵道ノ事故ハ國有 1,124件私設 27件輕便 370件ナリ、之ヲ各一日平均營業哩ニ比スルニ各百哩ニ付國有ハ 19.6件私設ハ 12.4件輕便ハ 28.4件アリタリ。大正四年度中ノ鐵道死傷人員ハ合計 3,789人ニシテ此ノ中 2,020人ハ死者 1,769人ハ傷者ナリ。此ノ死者ヲ鐵道ニ依リテ別テハ國有 1,844人私設 67人輕便 109人ニシテ傷者ハ國有 1,600人私設 41人輕便 128人ナリ。又之ヲ死傷者ノ種類ニ依リテ別テハ死者ハ乘客 25人職員 76人公衆 1,919人、傷者ハ乘客 282人職員 829人公衆 658人ナリ。此ノ死傷者ヲ死傷ノ原因ニ依リテ別テ各分節比例ヲ算出スレハ乘客ハ過失 49.5%自殺 4.56%其ノ他 45.93%、職員ハ過失 88.07%自殺 0.44%其ノ他 11.49%、公衆ハ過失 36.71%自殺 60.23%其ノ他 3.06%ナリ。茲ニ謂フ其ノ他ニハ鐵道ノ事故ノ及ホセル危害ヲ包含ス、サレハ乘客ノ死傷ハ乘客自家ノ過失ト鐵道ノ事故ト相半ハシ、職員ノ死傷ハ自家ノ過失大部分ヲ占メ鐵道ノ事故ニ由ルコト少ク、公衆ニ至リテハ多少ノ過失ニ由ルモノアリト雖多クハ自ラ死ヲ求ムル者ノ結果ナルカ如シ、而シテ此ノ公衆ノ死傷ヲ列車走行哩ニ比

シ其ノ十萬哩ニ對スル比例ヲ求ムレハ國有ハ 3.98人私設ハ 6.07人輕便ハ 2.44人ニ當レリ。

【電氣鐵道】 大正四年末現在ノ電氣鐵道ハ 64ニシテ之ヲ五年前ノ明治四十三年ニ比シ 37ヲ増ス、其ノ線路延長ハ 667哩66鎖ニシテ經營者平均ノ線路延長ハ 10哩35鎖ニ當リ、之カ有スル車輛ノ數ハ 4,116輛ニシテ經營者平均 64輛餘ニ當ル。又大正四年中ノ乗客總數ハ 62,489萬人ナリ。

【馬車鐵道】 大正四年末現在ノ馬車鐵道ハ 37ニシテ之ヲ五年前ノ明治四十三年ニ比シ 4ヲ増ス、其ノ線路延長ハ 271哩50鎖ニシテ經營者平均ノ線路延長ハ 7哩2鎖ニ當リ、之カ有スル車輛1,014輛、馬匹 730頭ニシテ經營者平均車輛 27輛餘馬匹 20頭弱トス、又大正四年中ノ乗客總數ハ 407萬人ナリ。

【人車鐵道】 大正四年末現在ノ人車鐵道ハ 14ニシテ之ヲ五年前ノ明治四十三年ニ比シ 11ヲ増ス、其ノ線路延長ハ 70哩40鎖ニシテ經營者平均ノ線路延長ハ 5哩3鎖ナリ。

【汽動鐵道】 大正四年末現在ノ汽動鐵道ハ 26ニシテ其ノ線路延長 272哩41鎖、之カ經營者ノ平均ハ 10哩30鎖トス。

【諸車】 大正六年三月末日現在ノ有稅諸車數ヲ見ルニ、乗用馬車ハ明治四十四年度以降漸次其ノ數ヲ減シテ 7,976輛ト爲リ、荷積用馬車ハ之ニ反シテ年々増加シ 195,068輛ノ多キニ達シ、牛車ハ荷馬車ノ如ク増加セサレトモ而モ敢テ減セズ 33,576輛アリ、荷車ハ年々増加シテ 188萬輛ノ多キモノアリ、荷積用自動車ハ一時甚タ多キヲ加ヘシカ茲兩三年俄然トシテ減少シ今ハ 23輛アルノミ、乗用自動車ハ之ニ反シテ頗ル發展ノ狀アリ前年ノ 873輛ニ對スルニ本年ハ實ニ 1,284輛ナリ、人力車ハ年々衰微シ 112,687輛ト爲リ、自轉車ハ依然増加ノ歩ヲ止メズ 878,557輛ニ上リ、自働自轉車モ亦長足ニ進歩シ 809輛ヲ算スルニ至レリ。

【河川】 内務省ノ所謂重要河川ハ全國(北海道ヲ除ク)ニ於テ 135川アリ、此ノ重要河川中舟路筏路ヲ合セタル航路ノ延長十里以上ノ河川ヲ舉ケレハ 78川アリ、之ニ北海道ニ於ケル幹川流路延長三十里以上ノ 8川ヲ加フレハ本邦ノ大川ハ 86川トス。此ノ大川中幹川ノ流路最モ長キモノハ信濃川ノ 94里石狩川ノ 93里ニシテ利根川ノ 82里天鹽川ノ 78里北上川ノ 62里吉野川(阿波)ノ 60里木曾川ノ 59里、最上川天龍川ノ 55里等其ノ長キモノニ屬ス、又北海道ヲ除キタル各川ノ航路ヲ見ルニ、幹川ノ航路延長 72里ナル信濃川ヲ最長トシ利根川ノ 70里之ニ次キ北上川ノ 59里天龍川ノ 55里最上川ノ 50里等其ノ長キモノニ屬セリ。

【港灣】 大正五年十月一日現在ノ港灣總數ハ 1,462港ニシテ之ヲ港種別ト爲シ分節比例ヲ求ムレハ軍港及要港 0.41%、開港 2.46%、商港 51.92%、漁港 36.59%、避難港 8.62%ナリ。以上ノ中重ナル

七十二港ニ就テ大正四年中ノ入港船數ヲ見ルニ、汽船ノ入港船數最モ多キハ神戸ノ 19,799隻ニシテ七尾ノ 12,534隻之ニ次キ門司ノ 12,006隻大阪ノ 10,590隻今治ノ 10,025隻等最モ多キモノニ屬シ、其ノ噸數ヨリ見レハ門司ノ 2,055萬噸最モ大ニシテ神戸ノ 1,443萬噸之ニ次キ下關ノ 611萬噸長崎ノ 475萬噸、大阪ノ 464萬噸横濱ノ 462萬噸等其ノ多キモノニ屬セリ、又帆船ハ大阪ノ 104,608隻最モ多ク、横濱ノ 67,825隻門司ノ 59,277隻御手洗ノ 50,732隻等其ノ多キモノニ屬シ、其ノ噸數ヨリ見レハ若松ノ 308萬噸最モ大ニシテ御手洗ノ 305萬噸之ニ次キ大阪ノ 259萬噸門司ノ 197萬噸宇島ノ 182萬噸横濱ノ 132萬噸等多キモノニ屬セリ。

【航路標識】 大正四年末ニ於ケル航路標識ハ官設燈臺 140箇所、公設燈臺 26箇所、其ノ他各種ノ夜標官設 63箇所、公設 37箇所、各種ノ晝標官設 26箇所、公設 86箇所、私設 9箇所ナリ、是等標識以外ニ官識ノ各種警號 26箇所、信號所 7箇所アリ。燈臺ノ發達ハ最モ著シク其ノ數ノ増加ト共ニ構造亦完全ト爲リ、今ヤ光達距離 20哩以上ノモノ官設 32箇所、10-20哩ノモノ官設 75箇所、公設 9箇所ヲ見ルニ至レリ。

【船舶】 大正四年末ノ船舶總隻數ハ 38,563隻ニシテ此ノ中 2,132隻(5.53%)ハ登簿汽船、1,504隻(3.90%)ハ不登簿汽船、8,656隻(22.45%)ハ登簿帆船、8,842隻(22.93%)ハ不登簿帆船、1,257隻(3.26%)ハ登簿石數船、16,172隻(41.93%)ハ不登簿石數船ナリ、此ノ他噸數五噸未満、積石數五十石未満ノ小船大正五年度末ニ於テ 278,619隻アリ。登簿汽船トハ二十噸以上ノ汽船ノ謂ヒニシテ其ノ隻數近時著シク増加シ十年前ナル明治三十八年ニ比スルニ其ノ百ニ對スル指數 153.4ナリ、又其ノ噸數ヲ積算スレハ大正四年ハ 1,604,900噸ニシテ之ヲ明治三十八年ノ 932,740噸ニ比シ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 172.1ニ當リ、即チ隻數ノ増加ニ比シ噸數ハ一層増加シ漸次大船ノ多キヲ加フルヲ示セリ。不登簿汽船トハ五噸以上二十噸未満ノ汽船ノ謂ヒニシテ是亦隻數頗ル増加シ十年前ナル明治三十八年ニ比シ百ニ對スル 251.5ノ指數ヲ示シ、其ノ噸數合計ハ 18,191噸ニシテ是亦明治三十八年ニ比シ百ニ對スル 270.6ニ當ル。登簿帆船ハ二十噸以上ノ帆船ノ謂ヒニシテ其ノ隻數明治三十八年ノ百ニ對スル 234.0ニ當リ、噸數合計 542,579噸ニシテ之ヲ明治三十八年ニ比シ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 166.3ニ當リ、隻數ノ増加ト噸數ノ増加ト一致セズ汽船ニ反シ小船多キヲ加フルノ徵ヲ示セリ。又不登簿帆船ハ五噸以上二十噸未満ノ帆船ノ謂ヒニシテ其ノ隻數ハ明治三十八年ノ百ニ對スル 2,042.0ニ當リ増加最モ著シク其増加力ハ不登簿汽船ニ八倍ス、其ノ噸數合計ハ 128,694噸ニシテ是亦明治三十八年ニ對スル指數 1,962.4ニ當リ登簿帆船ト同様ニ増加最モ著シキ小形船ナルコトヲ示セリ然ルニ積石二百

石以上ナル石數登簿帆船ハ減少シ明治三十八年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數 83.6ニ當リ、積石數合計ハ 410,964石ニシテ此ノ明治三十八年ノ百ニ對スル指數ハ 92.9ニ當リ、是ハ噸數帆船ニ反シ大船多キヲ加ヘタルモノ、如ク、五十石以上二百石未満ナル不登簿石數船モ登簿石數船ト同ク其ノ隻數ヲ減シ明治三十八年ニ對スル指數 83.0ニシテ其ノ積石數合計ハ 1,844,444石ニシテ明治三十八年ノ百ニ對スル指數 89.3ニ當リ、是亦大體ニ於テ其ノ大サヲ減セサルモノ、如シ。

大正四年末現在登簿汽船ノ船質ヲ見ルニ鋼又ハ鐵製 941隻鋼及木製又ハ鐵及木製 16隻木製 1,175隻ナリ、之ヲ分節比例ト爲モハ鋼又ハ鐵製 44.14%木鋼又ハ木鐵製 0.75%木製 55.11%ニシテ今尙ホ木製ハ過半ヲ占メタリ。而シテ是等船舶ノ船齡ヲ見ルニ鋼又ハ鐵船ハ五年未満ナルモノ 29.22%五年以上十年未満ナルモノ 14.98%十年以上十五年ナルモノ 10.84%十五年以上ノモノ 44.96%ナリ、又木船ハ五年未満ノモノ 23.15%五年以上十年未満ノモノ 19.06%十年以上十五年未満ノモノ 22.30%十五年以上ノモノ 35.49%ナリ、之ニ由テ觀レハ若齡船ハ鋼又ハ鐵船ノ比例高ク、中齡ノ船ハ木船ノ比例高ク老齡ノ船ハ再ヒ鋼又ハ鐵船ノ比例高シ、是ハ本邦ニ於ケル造船ハ木製船多ケレトモ近來ニ至リテ鋼又ハ鐵製船大ニ増加シタル徵象ニシテ、其ノ老齡船ニ鋼又ハ鐵製多キハ木製ニ比シ鋼又ハ鐵製船ノ耐久力大ナルニ依ルナリ。又登簿帆船ノ船質ヲ見ルニ、是ハ殆ト全部木製ニシテ唯僅ニ4隻ノミ鋼製船ナリ、而シテ此ノ木製船ノ船齡ヲ見ルニ五年未満ノモノ 27.75%五年以上十年未満ノモノ 30.49%十年以上十五年未満ノモノ 14.19%十五年以上ノモノ 27.57%ナリ、即チ汽船ニ比シ寧ろ若齡ナルモノ多キモ最近ニ至リテ造船力少シク弱マリタルモノ、如シ。

大正五年度末現在ノ有稅小船ハ 278,619隻ニシテ中動力ヲ有スルモノ 451隻アリ、即チ總數ノ 99.84%ハ無動力船ナリ。近時小船ハ漸次其ノ數ヲ減シタリシカ、前年度ヨリ今年度ニハ涉リテハ殊ニ甚シク今年度末ノ現在ハ前年度末現在ノ 55.68%ナリ、斯ノ如キハ從來漁船ヲ包含セシメテ報告シ來レル地方アリシカ本年ヨリ之ヲ除外シタルニ依ルナリ(漁船ノ數ハ漁業ノ部ニ載セタリ)。

大正四年中ノ登簿船ノ異動ヲ見ルニ汽船ノ新規登録 102隻其ノ登録抹消 103隻ニシテ 1隻ヲ減シ、帆船ノ新規登録 1,021隻其ノ登録抹消 308隻ニシテ 713隻ヲ増シ、石數帆船ノ新規登録 31隻其ノ登録抹消 119隻ニシテ 88隻ヲ減シタリ。以上ノ登簿事實ヨリ見レハ本邦ノ船舶ハ獨リ噸數汽船ノミ大ニ増加シタルモノ、如シ。

【造船】 大正四年末現在ノ造船所ハ 209箇所ニシテ前年ヨリ減スルコト 29箇所ナリ、又船渠數ハ 60箇所ニシテ前年ヨリ減スルコト 3箇所、浮船渠ハ 2箇所ニシテ前年ト増減ナシ。大正四年中ニ

於ケル造船數汽船ハ 63隻 51,431噸ニシテ一隻ノ平均噸數ハ 816噸ニ當ル、帆船ハ 411隻 26,024噸ニシテ是亦一隻ノ平均噸數 63噸ニ當レリ。然ルニ造船數ハ汽船ニ於テハ明治四十五年大正元年ヲ最高トシテ漸次其ノ隻數ヲ減シタレトモ噸數ハ却テ増加シ明治四十五年大正元年ノ一隻平均噸數僅ニ 237噸ナリシモノカ大正三年ハ隻數コソ半ハニモ足ラサルマテニ減シタレトモ一隻平均噸數ハ 1,049噸ニ増加シタリシカ、本年ハ隻數モ減シ噸數モ亦大ニ減シタリ。又帆船ハ大正二年ヲ頂巔トシテ爾來隻數ヲ漸減シタリ、但シ一隻平均噸數ハ大正二年 66噸同三年 62噸ナルカ故ニ其ノ大サニハ大ナル差違ナキカ如シ。以上造船所ノ減少ハ小規模ノ造船所ノ廢止若クハ大規模造船所ニ併合セラレタルモノ、如ク、造船數ノ減少ハ果シテ何ニ因スルカ今其ノ原因ヲ詳ニセスト雖惟フニ歐洲大戰ノ影響ヲ被リ造船原料ノ輸入一部杜絶シタルモ亦其ノ原因ノ一ナルヘシ。

大正四年度中ニ新ニ造船獎勵認許證書ヲ下付シタルモノ 51隻アリ、支出シタル獎勵金總額ハ 155萬圓餘トス。

【海員】 大正四年末現在ノ海技免狀受有者ハ 32,116人ニシテ中内國人 31,766人(98.91%)外國人 350人(1.09%)、之ヲ十年前ノ明治三十八年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ内國人ハ 174.8ニ當リ外國人ハ 99.72%ニ當レリ即チ知ル外國人海員ニ増加ナクシテ内國人海員著シク増加シタルコトヲ、内國人及外國人ノ受有スル海技免狀ヲ種類ニ依リテ分チ各總數ニ對スル分節比例ヲ算出スレハ内國人ハ甲乙丙各種ノ船長 7.02%、同各種ノ運轉士 63.87%、機關長及機關士 29.11%ニシテ外國人ハ船長(甲種ノミ) 50.50%各種運轉士 13.43%機關長及機關士 36.00%ナリ。

【遭難】 大正四年中ノ遭難船舶ハ合計 1,035隻ニシテ中滅失 159隻(15.39%)損傷 876隻(84.65%)ナリ、此ノ遭難船ヲ船種ニ由リテ分テハ汽船 679隻(65.60%)帆船 356隻(34.40%)ニシテ汽船ハ滅失 28隻損傷 651隻、帆船ハ滅失 131隻損傷 225隻ナリ、遭難ノ最モ多カリシハ瀬戸内海ニシテ北海道沿海及九州沿海之ニ次ケリ、遭難ノ最モ多カリシ月ハ十月三月一月二月ニシテ七月六月ハ最モ無事ナリキ、遭難船ニ因ル死傷人員ハ 248人ニシテ中死者 56人負傷者 38人行衛不明者 154人ナリ、遭難船數ハ之ヲ累年ニ見ルニ明治四十一年ニ 154隻テフ少數ノコトアリタル外近キ既往ニ於テ本年ノ如ク少キハ無ク、死傷人員モ亦明治三十九年ノ 197人以降本年ノ如ク少キハ無シ、大正四年中ニ遭難船ニ對シ人命救助ヲ爲シタル者 983人之ニ依リテ救助セラレタル者 551人アリ。

【海員審判】 大正四年中地方海員審判所ニ於テ受理シタル件數ハ 448件ニシテ此ノ人員 576人ナリ、中裁決 321件 425人ニシテ免狀行使停止 224人(52.72%)譴責 98人(21.88%)不懲戒 108人(2

5.82%)ナリ、又此ノ免狀行使停止者ヲ事件ノ種類ニ依リテ分チ總數ニ對スル分節比例ヲ算出スレハ衝突 31.70%乗揚 35.71%放棄又ハ沈没 5.80%汽機又ハ汽機毀損 7.59%法規違背 12.50%職務怠慢 3.57%其ノ他 3.13%ナリ。

又同年中高等海員審判所ニ於テ受理シタル控告件數ハ 53件ニシテ此ノ人員 66人ナリ中裁決 34件 40人ニシテ原裁決破棄更ニ裁決シタルモノ 25件(73.53%) 31人(77.50%)棄却 9件 (26.47%) 9人 (22.50%)ナリ。

【命令航路】 大正四年度ニ於ケル命令航路ニ屬スル 汽船會社ハ日本郵船株式會社、大阪商船株式會社、東洋汽船株式會社、日清汽船株式會社、南洋郵船株式會社、北日本汽船株式會社ノ六トス、日本郵船株式會社ハ拂込資本金 2,200萬圓ニシテ汽船 131隻(此ノ噸數 429,252噸)ヲ有シ政府ノ補助金及獎勵金ヲ受クルコト 3,232,775圓、大阪商船株式會社ハ拂込資本金 1,856萬圓餘ニシテ汽船 130隻(此ノ噸數 211,075噸)ヲ有シ政府ノ補助金及獎勵金ヲ受クルコト 1,700,294圓、東洋汽船株式會社ハ拂込資本金 975萬圓ニシテ汽船 14隻(此ノ噸數 85,033噸)ヲ有シ政府ノ補助金及獎勵金ヲ受クルコト 2,658,292圓、日清汽船株式會社ハ拂込資本金 810萬圓ニシテ汽船 23隻(此ノ噸數 31,877噸)ヲ有シ政府ノ補助金及獎勵金ヲ受クルコト 537,752圓、南洋郵船株式會社ハ拂込資本金 75萬圓ニシテ汽船 4隻(此ノ噸數 14,938噸)ヲ有シ政府ノ補助金及獎勵金ヲ受クルコト 174,954圓、北日本汽船株式會社ハ拂込資本金 50萬圓ニシテ汽船 8隻(此ノ噸數 7,169噸)ヲ有シ政府ノ補助金及獎勵金

XV. 通信及郵便爲替貯金事業

【通信官署】 大正四年度末現在ノ遞信省所管通信官署ハ郵便局 7,335箇所、電信局 1,005箇所、無線電信局 76箇所(中 69箇所ハ船内局)電話局 18箇所ナリ。之ヲ十年前ナル明治三十八年度末ニ比シ其ノ百ニ對スル本年ノ指數ヲ求ムルニ郵便局ハ 117.7電信局ハ 164.8電話局ハ 400.0ニ當リ、無線電信局ハ當時絶無ニシテ比較スルニ由無シ。又大正四年度末現在ノ自働電話所ハ 718箇所、郵便切手賣捌所ハ 58,334箇所、郵便函ハ 61,534箇所ニシテ是亦明治三十八年ノ百ニ對スル本年ノ指數ヲ求ムルニ自働電話所ハ 502.1郵便切手賣捌所ハ 121.6郵便函ハ 119.0ニ當ル。又大正四年度末現在ノ郵便函ヲ宅地ノ面積ニ比スルニ 18,855坪ニ付一郵便函アル比例ニシテ明治三十八年ノ同比例ハ 22,771坪ニ當レリ。是等ノ事實ハ通信機關ノ發達ヲ示スモノニシテ殊ニ電話及無線電信ニ至リテハ頗ル長足ノ進歩ヲ爲シタルモノト謂フヘシ。

【郵便線路】 大正四年度末郵便線路ハ陸上ハ道路 8,404里鐵道 7,189哩水上ハ河、海、湖ヲ合セテ 20,440哩ナリ。之ヲ十年前ナル

ヲ受クルコト 123,065圓ナリ、以上各會社ノ本年ニ於ケル船客及貨物ノ運賃總額ヲ百ト爲シ之ニ對スル政府ノ補助金及獎勵金ノ比例ヲ求ムレハ下ノ如シ、日本郵船株式會社 9.66%大阪商船株式會社 8.32%東洋汽船株式會社 35.82%日清汽船株式會社 20.11%南洋郵船株式會社 31.76%、北日本汽船株式會社ハ 33.11%ナリ。

【土木費】 明治四十五年大正元年中支出土木費ノ決算ハ總額 6,388萬圓ニシテ、之ヲ十年前ナル明治三十五年度ニ比スレハ其ノ百ニ對シ 153.4ニ當リ著シク増シタリ、此ノ總額中國庫ノ支出ハ 630萬圓(9.9%)ニシテ地方費ノ支出ハ 5,758萬圓(90.1%)ナリ、之ヲ各工種ニ分チ分節比例ヲ算出スレハ道路費 32.7%橋梁費 9.7%河川費 20.1%港灣潮除其ノ他ノ諸費 37.5%ナリ、而シテ之ヲ十年前ナル明治三十五年度ノ同一比例ニ比スルニ道路費及橋梁費ハ共ニ 0.5%ヲ増シ河川費ハ 7.9%ヲ減シ港灣潮除其ノ他ノ諸費ハ 6.9%ヲ増シタリ。

上記大正四年度ノ地方土木費ヲ負擔者別ト爲シ之カ分節比例ヲ算出スレハ府縣費 45.42%都市町村費 45.05%寄附金 4.23%其ノ他 5.30%ニ當リ、是等ノ負擔者別費額ヲ十年前ノ明治三十五年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ府縣費ハ 147.7都市町村費ハ 199.7寄附金ハ 131.9其ノ他ハ 123.0ニ當リ、都市町村費最モ増額スルコト著シク十年間ニ於テ殆ト倍セントスル狀況ナリ。

大正四年ノ道路費ヲ通常費ト災害費トニ分テハ通常費 94.5%災害費 5.5%ニ當リ、橋梁費ハ通常費 80.8%災害費 19.2%、河川費ハ通常費 56.5%災害費 43.5%ニ當レリ。

明治三十八年ニ比スルニ陸上水上共ニ變化アレトモ就中注目セラルルハ陸上ノ道路ノ里程著シク減縮シ鐵道ノ里程大ニ延長シタルコトナリ、以テ交通機關ノ發達カ通信ノ敏速ヲ來タスノ狀況ヲ見ルニ足ルヘシ。

【郵便物】 大正四年度中ノ引受郵便物ノ總數ハ 188,800萬通ニシテ配達郵便物ノ總數ハ 186,269萬通ナリ、之ヲ十年前ノ明治三十八年ニ比スレハ其ノ百ニ對シ引受郵便物ハ 152.3配達郵便物ハ 152.5ニ當リ、人口ノ同一指數カ 114.3ナルニ比スレハ通信ノ發達殊ニ顯著ナルモノアルヲ見ルヘキナリ。以上ノ中外國郵便物ヲ摘出スレハ大正四年度中ノ其ノ發送總數ハ 1,096萬通到著總數ハ 1,535萬通ナリ、明治四十二年以前ハ韓國併合前ナルカ故ニ素ヨリ今日ト外國郵便物數ヲ比較スヘキモノニアラス、仍テ五年前ナル明治四十三年ト比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ發送數ハ 108.7ニシテ到著數ハ 172.7ニ當ル。發送數ノミヲ見レハ總引受郵便物ノ指數ヨリ迥ニ低キモ、亦到著數ノミヲ見レハ總配達郵便物ノ指數ヨ

リモ高キコト大ナリ。何故ニ外國郵便物ハ發送數ニ比シテ到著數多ク其ノ發達モ亦發送數ヨリモ到著數著シク高キカ、今其ノ理由ヲ明カニセスト雖、大正四年度ノ事實ニ就テ見レハ亞米利加洲殊ニ其ノ北米合衆國ニ於テ到著數頗ル多ク發送數ヲ超ユルヲ見ル。

【小包郵便】 次ニ小包郵便物ヲ見ルニ大正四年度ニ於ケル引受總數 2,613萬個配達總數 2,404萬個ナリ、此ノ中外國ニ發送シタルモノ 73萬個外國ヨリ到著シタルモノ 9萬個ナリ、以上ノ引受總數ヲ十年前ナル明治三十八年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ 190.04ニ當リ、是亦其ノ發達頗ル著シト謂フヘシ。

【電信線路】 電信線路モ亦今ヤ漸ク密度ヲ増シ大正四年度末ニ於テ陸上線ノ架空線ハ線路 8,074里線條 43,444里、架空ケーブル心線 329里地下ケーブル心線 1,009里ト爲リ之ヲ面積ニ比スルニ百方里ニ付線條 175.22里心線 5.40里ニ當リ、之ヲ明治三十八年度末ノ同比例ノ線條 142.03里、心線 2.05里ナルニ比スレハ架空線モ發達シタルトモ殊ニケーブル線ノ著シキ發達ヲ見ルナリ。又海及河底線ハ大正四年度末ニ於テ線條 5,195哩心線 5,881哩アリ、之ヲ明治三十八年度末ニ比シ其ノ心線ノ百ニ對スル本年ノ指數ヲ求ムルニ 195.7ニ當リ是亦長足ノ進歩ヲ見ルナリ。

【電信】 大正四年度中ニ於ケル電信總通數ハ發信 3,389萬通著信 3,465萬通ナリ、之ヲ十年前ナル明治三十八年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ發信數ハ 146.3著信數ハ 147.4ニ當リ、是亦曩ニ掲ケタル人口ノ指數ニ比シ甚タ高キヲ知ルヘシ。以上ノ大正四年度電信總通數ノ中發信 49,868通著信ノ中 29,360通ハ無線電信ノ取扱ヒ數ニシテ現ニハ甚タ多キモノニアラサレトモ而モ始メテ之ヲ取扱ヒタル明治四十一年度ニ比スレハ發信著信共ニ十倍以上ニ上レリ。又此ノ無線電信取扱ノ發信數ニ比シ著數ノ著シク少キハ其理由明カナラサレトモ船内局ノ著信數ノ少キニ依ルモノナルカ如シ。

【電話】 電話交換取扱局所ハ大正四年度末ニ於テ 2,488箇所ト爲レリ。之ヲ明治三十八年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ 1,382.22ニ當リ、電話加入人員ハ 221,048人ニシテ此ノ同一指數ハ 52.41ニ當レリ。局所ノ指數ニ比シ加入人員指數ノ低キハ取扱局所ノ設置カ漸ク加入者少キ小都會ニ及ホシタルニ由ルナルヘク即チ以テ電話普及ノ狀態ヲ推知スルニ足ルナリ。又大正四年度末ノ電話加入者數ヲ人口ニ比例スルニ其ノ千ニ付 4.06ニ當リ、此ノ比例數ハ前年ヨリ高キコト 0.12十年前ヨリ高キコト 3.29ナリ。而シテ大正四年度末ノ比例數ヲ地方別ニ見レハ東京府ノ 15.7最モ高く大阪府ノ 10.8京都府ノ 10.0奈良縣ノ 7.9神奈川縣ノ 5.9兵庫縣ノ 5.4等其ノ高キモノニ屬セリ。

【郵便爲替】 大正四年中ニ遞信省所管通信局所ニ於テ取扱ヒタ

ル郵便爲替ハ振出口數 1,631萬口、拂渡口數 1,712萬口ナリ。而シテ其ノ金額ハ振出 21,572萬圓拂渡 22,490萬圓合計 44,062萬圓ニ上レリ。之ヲ十年前ナル明治三十八年ノ總額 34,556萬圓ニ比スレハ 9,506萬圓ノ増加ニシテ實ニ 27.51%ヲ増シタル比例ナリ。又大正四年度中ニ取扱ヒタル外國郵便爲替ハ口數振出シ 17,195振込 153,140ニシテ其ノ金額ハ振出シ 88萬圓振込 899萬圓ニシテ振込ハ振出ノ十倍餘ニ當レリ。然ルニ此ノ振出シ額ハ遠キ既往ヨリ漸次増額シテ茲ニ至ルモノナレトモ、振込額ハ嘗テ明治四十三年度ニ 1,328萬圓ノ最高額アリ爾來漸次減少シテ今日ノ額ヲ見タルナリ、故ニ十年前ナル明治三十八年度ノ振出額ニ對スル振込額ハ十七倍弱五年前ナル同四十三年ハ十九倍弱ヲ示シタルナリキ。外國ヨリ振込額ノ最モ大ナルハ北米合衆國ニシテ大正四年度ハ 506萬圓、布哇ハ之ニ次キ 186萬圓加奈太ハ 122萬圓ナリ、故ニ總額ノ 56.24%ハ北米合衆國 20.65%ハ布哇、13.60%ハ加奈太ニシテ殘ル 9.51%ヲ他ノ諸國ヨリノ振込額トス。

【郵便貯金及保管證券】 遞信省並ニ朝鮮總督府、臺灣總督府、關東都督府及樺太廳ノ所管ニ係ル郵便貯金ニ關スル總數ハ大正四年末現在ノ預入人員ハ 1,376萬人ニシテ之カ預金高ハ 22,184萬圓ナリ。此ノ預入人員ヲ十年前ナル明治三十八年ニ比スルニ其ノ百ニ對スル指數 242.1ニシテ預金高ノ同一指數ハ 419.9ナリ。然レハ此ノ十年間ニ於テ預金者ノ數モ倍増シタルトモ預金高更ニ増加シテ四倍ニ達シ各人ノ預金額ノ著シキ增多ヲ示シタリ。内地ノミニ事實ヲ人口ニ比スルニ預入人員ハ大正四年ニ於テ 230.3%ニ當リ、其金高ハ人口百人ニ付 381圓68錢ニ當レリ。保管證券モ亦好況ヲ呈シ遞信省ニ於テ保管セル内地、朝鮮、臺灣、關東州ニ於テ受入レタル證券ノ大正四年度末預入人員ハ 49萬人ニシテ其ノ額面金額ハ 4.925萬圓ナリ、之ヲ十年前ノ明治三十八年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ人員ハ 7,514.5ニシテ金額ハ 1,654.5ニ當リ其ノ差額ハ大ナリ、是此ノ證券預入レハ日露戰後ノ行賞アリタル明治三十九年以後大ニ増加シタルニ依ルナリ。

【郵便振替貯金】 遞信省並ニ朝鮮總督府、臺灣總督府、關東都督府及樺太廳ノ所管ニ係ル郵便振替貯金ノ總數ハ大正四年度末ニ於テ加入口數 74,841アリ、明治三十九年三月ノ創始ナルヲ以テ三十九年度末ヲ百ト爲シタル指數ヲ求ムレハ 946.0ニ當リ實ニ長足ノ進歩ヲ爲シタルモノト謂フヘク、又大正四年度中ノ受入金額ハ基本預金ヲ除キテ 42,533萬圓ニ上リ之カ同一指數ヲ求ムレハ 1,541.2ニ當リ、此ノ機關ヲ用ユル者ノ甚タ多キヲ加ヘ而モ人員ノ増加ニ比シ金額ノ増加ノ著シキモノアルヲ示シタリ。

【郵便取立金】 遞信省並ニ朝鮮總督府、臺灣總督府、關東都督府及樺太廳ノ所管ニ係ル郵便取立金モ亦著シク増加セリ。即チ大

正四年中ノ受入口數拂渡口數共ニ 357萬口ニシテ受入金額ハ 3,882萬圓拂渡金額ハ 3,880萬圓ナリ。之ヲ十年前ナル明治三十八年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ受入口數ハ 318.6拂渡口數ハ 319.0受入金額ハ 430.1拂渡金額ハ 431.9ニ當リ、是亦發達ノ著キモノアルヲ見ルヘシ。

【年金恩給取扱】 大正四年度ニ於ケル年金及恩給取扱口數ハ 118萬口ニシテ其ノ金額ハ 3,408萬圓ナリ。是亦明治四十三年開始以來著シク増加シ其ノ當時ヲ百トシテ本年度ノ指數ヲ求ムレハ口數ハ 111.5金額ハ 121.1ニ當レリ。

XVI. 貨幣及度量衡

【貨幣】 大正五年度中、造幣局カ貨幣鑄造ノ爲受領シタル地金ノ額ハ、金 16,944,989匁、銀 28,839,137匁。白銅 5,018貫、青銅 26,277貫ナリ、青銅ノ外ハ何レモ前年ニ比シ著シク増加ナリ、銀以下ハ悉ク政府ヨリノ受領ニ係ルモ、獨リ金ハ帝國人民及外國人ヨリノ輸納ニ屬ス、而シテ、此ノ内外國人ヨリノ輸納ハ 63,480匁ニシテ、前年ニ比シ減少シタルモ、帝國內人民ヨリノ輸納ハ 16,881,509匁ニシテ、前年ノ 556萬餘匁ニ比シ、著シク多額ナリ。

大正五年度中、貨幣ノ鑄造高ハ、金貨 70,933,020圓、銀貨 6,704,005圓、白銅貨 200,019圓、青銅貨 250,023圓ニシテ、合計 78,087,067圓ナリ、更ニ之ヲ貨幣ノ種類ニ就テ見レハ、金貨ハ悉ク二十圓貨幣タリ、銀貨 670萬餘圓ノ中、4,853,025圓ハ五十錢貨幣ニシテ、1,850,980圓ハ十錢貨幣ナリ、白銅貨ハ總テ五錢貨幣タルハ論ナク、青銅貨ハ 21萬餘圓ノ一錢貨幣ノ外、4萬餘圓ノ五厘貨幣ヲ鑄造セリ。

同年度中、貨幣發行高ハ、總額 67,709,370圓ニシテ、銀貨以下ノ補助貨ハ、同年度中ノ鑄造高ノ内千圓以下ノ端數供試ノ爲發行ニ至ラサル外五十錢銀貨 485萬圓、十錢銀貨 185萬圓、五錢白銅貨 20萬圓、一錢青銅貨 21萬圓、五厘青銅貨 4萬圓發行セラレタルモ、獨リ二十圓金貨ハ、115,340圓ノ供試高ヲ除キ、60,559,370圓發行セラレ、而シテ 12,983,543圓ハ造幣局在高トシテ存セリ。

以上大正五年度ニ於ケル貨幣ノ鑄造高並發行高ヲ前年若ハ前々年ニ對照シ見ルニ、何レモ二倍以上ノ増加ヲ示ス、殊ニ補助貨ノ發行ノ多額ナル、近年稀有ノ數タリ、而シテ本年度中ノ鑄造高ハ銀貨 1,992,000圓、白銅貨 10,000圓、銅貨 136,000圓、合計 2,138,000圓ニシテ前年ヨリ少シ、今此ノ鑄造高ヲ前記發行高ヨリ差引タトキハ、同年度中、銅貨ノ減少セル外、各種貨幣共増加シ、結局同年度末ニ於テハ、前年ニ比シ合計 65,571,370圓ノ發行増額ヲ見ルニ至リタリ。

更ニ貨幣ノ發行高ヲ、累年ノ狀況ニ於テ見ルニ、明治三年造幣

【郵便電信電話收入】 通信事業ハ上記ノ如ク著シク發達ヲ爲シタルカ故ニ從テ其ノ收入モ亦概シテ年々増額セリ、今大正三年度ノ決算ヲ掲ケ之カ五年前ナル明治四十二年度ノ決算百ニ對スル指數ヲ擧クレハ次ノ如シ、即チ通常郵便ハ決算 2,311萬圓ニシテ指數 121.2、小包郵便ハ決算3,941萬圓ニシテ指數 123.2、郵便爲替ハ決算 165萬圓ニシテ指數 149.7、郵便貯金ハ決算 61萬圓ニシテ指數 310.5、電信ハ決算 1,115萬圓ニシテ指數 1,352.1、電話ハ決算 1,570萬圓ニシテ指數 225.4、以上ノ合計ハ決算 5,605萬圓ニシテ指數 146.8ニ當レリ、以テ其ノ大體ヲ推察スルニ足ルヘシ。

察創設ヨリ同六年ニ至ル間ニ於テハ、約 5,600萬圓ノ發行アリ、爾後各五年期間ニ、3千萬圓ヨリ 6千萬圓ニ、明治二十六年度マテ遞次増加セシカ、二十七年乃至三十一年度ノ五年間ニ、一躍 19,344萬圓ノ多數ニ上レリ、是レ言フマテモナク日清戰役ノ期ナ劃シ國費ノ大ヲ致セルト、國力ノ發展ノ結果ニ外ナラス、次ノ五年期間ニ於テモ亦 1億以上ノ發行アリ、更ニ明治三十七年度ヨリ四十一年度ニ至ル期間ニ於テ、亦 2億ヲ突破セリ、四十二年度乃至大正二年度ノ期間ニ於テモ、19,736萬圓ノ發行アリ、其後未タ五年ニ滿タサルモ三年間ニシテ既ニ 1億 2千萬圓ヲ超ユルヲ見レハ、今後二年間ノ發行ヲ加算セハ大約 2億圓ニ達スヘキハ想像ニ難カラス。

尙明治三年十一月造幣創始以來ノ貨幣發行額ハ、10億6,297萬餘圓ニシテ、其ノ鑄造高ノ總額ハ 7,734萬圓ナルカ故ニ、差引額9億8,563萬餘圓ナルモ、密ニ民間ニ於テ鑄造サレ、又ハ國外ニ輸出セラレ、額ヲ知ルヲ得サルヲ以テ、實際社會ニ流通スル硬貨ノ幾何ナルヤヲ推測シ難シ。

【度量衡】 大正四年度中、度量衡器ノ檢定數ハ、度器 4,547,421、量器 1,961,918、衡器 833,955ニシテ内甲種檢定ト稱シ農商務大臣ノ名ノ下ニ中央度衡檢定所並ニ其ノ支所ニ於テ檢定シタルモノ、度器 214,438、量器 143,251、衡器 15,938、又乙種檢定ト稱シ地方長官ニ於テ檢定ヲ與ヘタルモノ、度器 4,332,983、量器 818,667、衡器 818,014ナリ、而シテ右檢定箇數中檢定合格シタルモノ、度器 4,443,546、量器 928,482、衡器 805,170ナリ、以上ノ數ヲ前年ニ對照スルニ、量器ハ前年ニ比シ減少シタルモ、度、量ノ二種ハ前年ヨリ増加セリ。

同年度中ノ販賣數即チ需用高ヲ見ルニ、度器 3,745,850、量器 946,402、衡器 639,742ナリ、其ノ人口ニ對スル割合ハ度 68.80%、量 17.38%、衡 13.59%ナリ、是又量器獨リ前年ヨリ減少ス、右需用高人口比例ヲ地方別ニ就キテ見ルニ、度器ノ最高ハ大阪府 171.39%ニシテ、東京府 169.56%、京都府 145.23%、北海道 106.22%

等ニ次キ、福岡縣 96.06%、奈良縣 94.73%、和歌山縣 83.23%、神奈川縣 75.17%等又其次ナリ、而シテ、沖繩縣 23.00%、埼玉縣 32.50%、鳥根縣 34.98%等最少ノ部ニ屬ス。次ニ量器ニ於テハ、福岡縣 46.99%ヲ最高トシ佐賀縣 32.42%、大阪府 26.33%、茨城縣 25.33%、奈良縣 24.46%、京都府 22.89%、東京府 22.62%、北海道 22.36%等順次相次キ高位ニシテ、石川 8.86%、栃木 8.92%、山形 9.45%、福井 9.55%、滋賀 9.73%、巖手 9.84%、沖繩 9.95%、岡山 9.98%等ノ各縣ハ最少ノ部ニ屬ス。又衡器ハ東京府ノ 28.69%ヲ最高トシ、大阪府 24.29%、奈良縣 19.70%、京都府 18.89%、香川縣 16.61%、福岡縣 16.09%、山口縣 15.94%等多ク、巖手縣 3.74%ヲ最少トシ鹿兒島 4.36%、神奈川縣 4.93%、其他青森、福井、沖繩等ノ諸縣少シ、以上度、量、衡ノ三器ノ需用

割合ハ府縣ニ依リ各特徴アルヲ示ス。

次ニ、度量器ノ取締成績ヲ、其ノ市町村長ニ於テ行フ所謂第二種檢査ヲ除キ、府縣知事ニ於テ行フ第一種檢査ノミニ就キテ見ルニ、大正四年度中檢査ヲ行ヒシ戸數ハ、1,258,770ニシテ、其ノ器數ハ度器 472,710、量器 2,827,116、衡器 1,683,143ナリ、前年ニ比シ稍少シ、而シテ其ノ成績ハ檢査器百中不合格ノモノ、度器 6.0%、量器 4.8%、衡器 9.7%、何レモ前年ニ比シ不合格ノ割合少シ、而シテ明治三十八年以來時ニ多少不成績ノ年アルモ、大體漸次佳良ニ向ヒツ、アリ、此ノ不合格割合ナ府縣別ニ見ルニ、度器ハ神奈川、福井ニ縣並北海道等多ク、量器ハ奈良、鳥取、北海道等多ク、衡器ハ福島、熊本、奈良、群馬、長崎ノ諸縣不合格ノ數多シ。

XVII. 銀行及金融

【銀行總說】 大正四年末帝國内（朝鮮ニ本店ヲ有スル銀行ノ朝鮮ニ於ケル數ヲ除ク）ニ本店ヲ有スル銀行ノ總數ハ 2,151内所謂特殊銀行ハ 46ノ農工銀行ヲ合シテ 52行ニシテ普通銀行 1,442行、貯蓄銀行 657行ナリ、其ノ支店及出張所數 3,430、拂込資本金 651,237,077圓、積立金 255,145,597圓ナリ、又同年中是等ノ銀行ノ取扱ヒシ入金及出金ハ共ニ約 1,143億圓ニシテ其ノ純益金ハ 13,158萬圓、配當金 5,133萬圓ナリ。本店數ハ前年ニ比シ 2行ヲ減シタルモ支店及出張所數ハ 78ヲ増シ本店一ニ付 1.59ニ當ル、一行平均拂込資本金ハ 303,760圓、同積立金ハ 118,617圓ナリ、是等ノ數ハ獨リ行數ヲ除クノ外明治三十二年以來殆シト例外ナリ年々増殖シ來リツ、アルヨリ見ルトキハ我國ノ銀行ハ大體ニ於テ漸次大組織ト爲リ内容モ亦次第ニ充實ニ趣キツ、アルヲ推察シ得ヘキナリ、又拂込資本金及積立金ノ合計百圓ニ對スル入金又ハ出金ハ何レモ約 12,620圓ニ當リ、是又前年ニ比シ千圓以上ヲ増加シタルモ、大正三年戰亂開始ノ年ニ於ケル不景氣ノ際大ニ減シタルヲ漸クニシテ回復シタルニ止リ、本年ニ於テ未タ十分ノ活氣ヲ認メ難シ、從テ純益金 20.2%モ亦前年ノ不景氣ヲ漸ク回復シタルノミ、但シ配當金 7.88%ハ前年ヨリ増率ヲ示スハ銀行ノ組織ハ多ク會社タル以上已ム得サルニ出ツル人工の結果タルヘシ。

次ニ大正四年中全國總銀行ノ預金ヲ見ルニ總預高 365億圓ニシテ、前年ノ減少ニ對シ著シク増加シ、其ノ年末殘高 26億圓ニシテ、是又前年ニ對シ著シク増加シ其ノ額 4億5千萬圓以上ニ昇レリ、明治三十二年ニ比シ約五倍ノ増加ナリ、右預金激增ノ結果トシテ、橫濱正金銀行及一般小銀行ニ於ケル借入金並割引手形ハ前年ニ比シ大ニ減少シタルヲ見ル。

大正四年ニ於ケル貸出金ノ總高ハ 71億餘圓、其ノ年末殘高 14

億9,278萬圓、又割引手形ノ總額引高ハ 94億2,680萬圓、其ノ年末殘高 15億5,173萬圓ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ、貸出金、割引手形、共ニ一年中ノ總高ハ前年ヨリノ減少ヲ繼續シ本年更ニ減少セリ、但シ其ノ年末殘高ハ却テ増加セリ、又荷爲替手形ハ、總貸付高 7億9,253萬餘圓、其ノ年末殘高 3,491萬餘圓ニシテ、前年ノ減少ニ反シ著シク増加セリ、以上ノ數ヲ明治三十二年ニ對照スルニ、一般貸付金ハ二倍強ノ増加ナルニ、割引手形又ハ荷爲替手形ニ依ル貸出額ハ恰モ四倍ノ増加ナリ。

次ニ預ケ金ハ、大正四年中 124億9,642萬餘圓、其ノ年末殘高 3億4,667萬餘圓、有價證券ノ年末在高ハ實價ニテ 5億7,261萬餘圓、金銀年末在高 3億 236萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ悉ク膨脹ヲ示ス、殊ニ預ケ金並有價證券ノ激增ハ貸付高ノ減少ト共ニ同年ニ於ケル所謂遊金ノ多キヲ明示ス。

大正四年中銀行ニ於テ取扱ヒタル手形ノ内、割引手形及荷爲替手形ニ付キテハ前述ノ如クナルカ、同年中ノ送金手形ハ、振出額 53億3,107萬餘圓、受込額 49億7,937萬餘圓、又代金取立手形ハ、當所 17億3,745萬餘圓、他所 8億4,265萬餘圓ニシテ、何レモ前年ノ減少ト反對ニ増加セリ。

【日本銀行】 日本銀行ハ、明治十五年公稱資本金 1,000萬圓、内 200萬圓ノ拂込ヲ以テ創設セラレシカ、大正四年末現在ニ於テハ、本店ノ外 11ノ支店ヲ有シ、拂込資本金 3,750萬圓ト爲リ、3,022萬餘圓ノ積立金ヲ有シ、店數及資本金ハ前年ト異ナルナキモ積立金ハ 102萬圓ヲ増加セリ、同年中ノ入金及出金ハ、各 173億餘圓ニシテ、前年ニ比シ共ニ 17億餘圓ヲ増ス、拂込資本金ト積立金トノ合計百圓ニ對シ入金出金共ニ約 25,500圓ニ當ル、純益金ハ繰越金ヲ合シテ 757萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ少シク減少シタリ。

日本銀行特有ノ業務タル兌換銀行券ニ就キ大正四年ノ狀況ヲ見ルニ同年末發行高ハ 4億3,013萬餘圓ニシテ、明治三十二年以來ノ趨勢ニ對シテハ素ヨリ増加ノ勢ニ在リ、殊ニ前年末ニ比シテ大ニ増加セルモ、明治四十四年及大正元年等ニ比シ減少セリ、今之ヲ月別ニ見ルニ、一月以來五月ニ至ルマテハ前年不景氣ノ餘勢尙存シ、益減少ノ一方ナリ、六月稍上リシモ、七月更ニ減少シ、終ニ制限外發行ニ至ラサリシカ、八月漸ク 465萬圓ノ制限外發行ヲ見タルヲ始トシ、十二月末ニハ 6,172萬圓ノ制限外ヲ見ルニ至レリ、右ニ對スル準備正貨、亦一月以來稍モスレハ減少ノ傾向アリシカ、十二月一躍 2億4,841萬圓ニ上リ、前年末ニ對シ 3,000萬圓ヲ増セリ。大正四年中銀行券受入金貨拂出額 4,170萬圓ニシテ、金貨受入銀行券拂出額 48萬圓ナリ前年ニ比シ金貨拂出超過額著シク多シ。

日本銀行ニ於ケル預金ノ大正四年中總預高ハ 96億7,769萬餘圓ニシテ未曾有ノ最高額ナリ、而シテ其ノ年末殘高ハ 2億4,497萬圓ニシテ、是亦明治四十三年以後ノ最高額ナリ、日本銀行預金ノ多少ハ、主トシテ所謂特別預金タル政府預金其他ノ多少ニ之レ依リ、現ニ大正四年末、2億4,497萬圓中ノ大部分 2億3,339萬圓ハ特別預金タリ。普通預金ノ同年中總預高ハ 75億6,796萬圓ニシテ從來曾テ有ラサル最高額ヲ示シ、其年末高 1,158萬圓ハ前年ニ比シ 372萬圓ヲ減シタリト雖、其他ノ年ニ於テハ未タ曾テ有ラサルノ高額ナリ。

次ニ貸出金ノ、大正四年中總高ハ、3億218萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ、8千餘萬圓ヲ減シタルノミナラス、明治四十二年及同四十三年ノ外皆テ無キ少額ナリ、而シテ年末殘高ハ 4,577萬餘圓ニシテ此ノ少額タルモ亦從來曾テ見サル所ナリ、貸出金モ、亦日本銀行ニ於テハ政府貸上金ノ多少ニ依リ、年々ノ數ニ著シキ影響アリ、普通貸付金ハ定期、當座ヲ合シ大正四年中總高 1億4,035萬餘圓、其ノ年末高 278萬餘圓、又外國爲替貸付金ハ、同年中 1億1,828萬餘圓、其ノ年末高 2,078萬餘圓ナリ、何レモ近年ナキ少額ナリ。

以上預金ノ増加貸付金ノ減少トハ大正四年金融緩慢ノ狀況ヲ明瞭ニ證示スル所ナルカ、尙割引手形モ、同年中總高 2億2,925萬餘圓、其年末殘高 3,491萬餘圓ニシテ、是又前年ヨリ引續キ減少シ十數年來無キ少額ニ至リタリ。

次ニ預ケ金ハ大正四年中總預ケ高 6,016萬餘圓、其年末高 4,246萬圓ハ、共ニ前年ヨリ著シク増加シ、且ツ明治四十年以降始メテノ多額ヲ示セリ。又有價證券ノ大正四年末現在ハ實價ニテ 4,395萬餘圓ニシテ是又明治三十二年ヨリ數年間及明治四十二年ヲ除ケハ之ヲ下リタルコトナシ。同年末金銀有高 8,828萬餘圓ニシテ、亦前年ニ比シ減少ノミナラス、數年來ノ少額タリ。

更ニ大正四年中取扱ヒタル手形ヲ見ルニ、前掲割引手形ノ内 1億9,122萬餘圓ハ當所手形ニシテ、95萬餘圓ハ他所手形ナリ、又送

金手形ノ同年中振出高ハ 11億8,360萬餘圓ニシテ、受込高ハ 12億3,463萬餘圓ナリ、送金手形ハ殆ント一年ノ例外ナク年々膨脹ヲ示セリ、又代金取立手形ノ大正四年中取扱額ハ、當所 98萬餘圓、他所僅ニ 6萬餘圓ナリ、前年ニ比シ大ニ減少セリ、此ノ手形ノ取扱ハ日本銀行ノ業務トシテハ極メテ重要ナルモノニアラス。

【横濱正金銀行】横濱正金銀行ハ明治十三年ノ開業ニ係リ、創メ公稱資本金 300萬圓、内拂込 140萬圓ナリシカ、次第ニ發展シ、大正四年末ニ於テハ、其ノ拂込資本金 3,000萬圓、積立金 2,135萬餘圓ナリ有スルニ至リ、横濱ノ本店ノ外、帝國本土内ニ 4、支那、歐米、南洋等ノ重要都市ニ 25、合計 29ノ支店及出張所ヲ有シ、前年ニ比シ 2店ヲ増ス。大正四年中ノ入金及出金ハ各約 197億圓餘ニシテ、前年ニ比シ著シク増加シタルモ、未タ其ノ前年タル大正二年ノ額ヲ超ルコトヲ得ルニ至ラス、出入金額ヲ拂込資本金ト積立金トノ合計ニ比スレハ、百圓ニ付 38,500圓強ニ當ル、同年ノ純益金ハ繰越金ヲ合シテ 573萬餘圓ニシテ前年ニ比シ大ニ減少セリ、是亦預金徒ニ膨脹シ資金ニ對スル需要未タ十分起ラサリシニ由ル。

横濱正金銀行モ、亦明治三十九年勅令ニ依リ、關東州及支那ニ於テ銀行券ヲ發行スルコトヲ得、其ノ大正四年末ニ於ケル發行額ハ、之ヲ日本貨ニ換算シ、719萬餘圓ニシテ、前年末ニ比シ、約 90萬圓ノ増加ナリ。

預金ノ大正四年中總預高ハ、132億6,868萬餘圓ニシテ、前年ノ減少ヲ回復シタレトモ、其ノ前年タル大正二年及明治三十八年ノ額ノ下ニ在リ、又年末殘高ハ 1億7,457萬餘圓ニシテ、却テ前年末ヨリ 631萬餘圓少シ、而シテ右年末高ノ内容ハ 1,374萬餘圓ハ、所謂特別預金タル政府ノ國債元利任拂基預金ニシテ、1億6,088萬圓ハ普通預金タリ、共ニ前年ヨリ減少セリ、横濱正金銀行ハ世界ノ各地ニ其ノ店舗ヲ有スルヲ以テ、預金モ亦全世界各方面ノモノヲ集ムルノ地位ニ在リ、從テ必スヨモ同年内地一般ノ狀態タル預金増加ノ狀勢ニ一致セサルモノアルカ如シ。

大正四年ニ於ケル、借入金總高ハ、3億8,523萬餘圓、其ノ年末殘高、4,260萬餘圓、共ニ前年以來引續減少ヲ示ス、同年再割引手形ハ總高 1億8,990萬餘圓、年末殘高 13,976萬餘圓、是亦前年末繼續低下ノ數ナリ、皆是資金ノ需要少カリシニ依ルナルヘシ。

次ニ、貸出金ノ一年總高ハ、6,億5,934萬餘圓ニシテ、是亦前年ニ引續キタル減少ナリ、反之、其ノ年末殘高ハ 7,407萬圓ニシテ、却テ前年ヨリ 6百餘萬圓ヲ増加ス。

横濱正金銀行ニ於ケル割引手形ノ大正四年中總高ハ、8億9,757萬圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ 1億6,595萬圓ナリ、是又大正二年以降引續キノ減少ヲ示セリ。

次ニ、大正四年中ノ預ケ金高ハ、21億3,912萬圓ニシテ、前年ニ比シ著シク増加シ、其年末預ケ金ハ、5,417萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ二倍以上ノ増加ナリ、從テ未曾有ノ多額ナリ、有價證券ノ正金銀行ニ於テ所有スルモノハ各國各種ノ證券ニ亘リ、貨幣單位亦從テ六七種ニ跨ル、今之ヲ換算實價ニ依リ掲クレハ大正四年末現在 2,033萬餘圓ニシテ大正二年以來繼續減額ニ在リ、而シテ大正元年ノ額ヨリモ少シ。同年金銀有高ハ 2,344萬餘圓ニシテ是亦前年ニ比シ等シク減少セリ。

横濱正金銀行ニ於テ取扱フ爲替ニハ、海外爲替ト、内國爲替トアリ、海外爲替ノ方法トシテハ爲替手形、爲替預金手形、買入爲替手形、割引手形、代金取立手形アリ、今内國本支店ヨリ、各地ヘ向ケタルモノト、受ケタルモノトニ分チ見ルニ、割引手形又ハ買入爲替手形ハ、各地ヘ向ケタルモノ 32,805萬餘圓、内、内國各地 7,127萬圓、外國 25,678萬圓ニシテ、前年ヨリ増加シ、各地ヨリ受ケタルモノハ 22,020萬餘圓、内、内國 6,000萬餘圓、外國 16,020萬圓ニシテ、前年ヨリ著シク減少セリ、送金手形ハ、向ケタルモノ、78,356萬圓、内、内國 48,772萬餘圓、外國 29,583萬餘圓、受ケタルモノ 68,058萬餘圓、内、内國 50,380萬餘圓ニシテ、共ニ前年ニ比シ増加著大ナリ、代金取立手形ハ、向ケタルモノ 1,907萬圓、内、内國 1,467萬圓、外國 439萬圓、受ケタルモノ 3,882萬圓、内、内國 1,845萬圓、外國 2,037萬圓共ニ前年ヨリ減少セリ、又爲替預金手形ハ、向ケタルモノ 450萬圓ハ前年ヨリ増加セルニ、受ケタルモノ 511萬圓ハ前年ヨリ減少セリ、利付爲替手形ハ、向ケ 7,796萬圓、受ケ 4,485萬圓、共ニ前年ヨリ減少セリ。

【日本勸業銀行】日本勸業銀行ハ、明治三十六年資本金 1,000萬圓ヲ以テ創立セラレシカ、後二回ノ増資ニ依リ、4,000萬圓ニ上リ、而シテ拂込資本金ハ、大正四年末 2,500萬圓トナリ、前年ト同シ、又積立金ハ 553萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ 76萬餘圓ヲ増加セリ。大正四年中ノ入金並出金ハ、各約 3億3,420萬圓ニシテ前年ニ比シ 3,880萬圓餘ヲ増ス、拂込資本金及積立金百圓ニ對シ共ニ 1,094圓ニ當ル。

勸業銀行ノ特權ニ屬スル勸業債券ノ大正四年中新タニ發行シタル額 3,395萬圓、償還額 8,15萬餘圓、差引 2,580萬圓ヲ増發シ、年末殘高 2億291萬餘圓ヲ算スルニ至リタリ、同年金融緩慢ノ際ナリシヲ以テ之ヲ地方ニ放資シ都鄙疏通ノ用ニ供スルニ在リ。

勸業銀行ノ預金取扱業務ハ明治四十三年以來ノ事ニ係リ、同行トシテハ未タ重要ナル業務ニアラス、其ノ大正四年中ノ總預金ハ 2,140萬圓、年末殘高 533萬餘圓ナリ。

次ニ貸付金ハ大正四年中總貸付高 2億4,887萬圓、其ノ年末殘高

2億 2,468萬圓ヲ算ス、前年ニ比シ大ニ増加セリ、是レ一般商業銀行ト性質ヲ異ニスル所以ナリ、右ノ増加ハ主トシテ年賦償還貸付ニシテ、定期償還貸付ハ却テ前年ヨリ減少ス、而シテ定期償還貸付ハ明治四十四年以來寧ロ減退ノ狀況ナリ。

大正四年末勸業銀行年賦貸付金ヲ、其ノ年限別ニ就キテ見ルニ十五箇年最モ多額ニシテ 6,984萬圓ニ達ス、次テ二十箇年 5,602萬圓、十箇年 4,222萬圓ニシテ、之ニ次キテハ三十箇年 1,040萬圓、二十五箇年 952萬圓等ナルモ、其額著シク少シ。次ニ、之ヲ借主業體別ニ見ルトキハ、農業者 7,854萬圓、工業者 6,333萬圓著シク多額ナリ、次テ耕地整理ノ 2,324萬圓多ク、而モ年々増加ノ傾向著明ナリ、之ニ次キテハ市區町村ノ公共團體 1,067萬圓ナルモ、右ハ年々減退ノ狀ニ在リ。

次ニ、同年末定期貸付金ノ總額 388萬餘圓中、其ノ大部分即チ 269萬餘圓ハ五箇年償還ノモノニ屬シ、殘餘ノ少額ハ皆四箇年以下ノモノナリ、而シテ之ヲ借主業體別ニ見ルトキハ、年賦貸付金ノ農業者多額ナルニ反シ、定期貸付金ハ工業者最モ多額ヲ占メ、其額 137萬餘圓、次テ産業組合 126萬餘圓ナリ、右二種ヲ除クノ外其他ノ業種ニ屬スル借主ノ額甚タ少シ。

勸業銀行ノ手形割引業務ハ明治四十三年ヨリ開始セラレ、モ、是亦甚タ重要ナルモノニアラス、大正四年中ノ總割引高ハ 874萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ減少シタルモ、其ノ年末殘高ハ 282萬餘圓ニシテ、前年ヨリ 111萬圓ヲ増加セリ。

大正四年中預ケ金ノ總高ハ 1億734萬餘圓ニシテ前年ニ比シ恰モ 3千萬圓ノ増加ナリ、又其ノ年末殘高ハ 913萬餘圓ニシテ是亦前年ノ倍額以上ナリ、有價證券ノ同年末現在額ハ公債實價ニテ 234萬餘圓、株券及社債券實價 52萬餘圓、前年ニ比シ何レモ著シク増加セリ、金銀年末在高ハ 11萬餘圓ナリ。

【農工銀行】農工銀行ハ、明治三十一年一月静岡農工銀行ノ開業ヲ以テ初マリ、同三十三年八月阿波農工銀行ノ開設ニ及ンテ全國總數 46ト爲リ、府縣各一ヲ有スルニ至リタリ、支店出張所ノ數大正四年末 6ニシテ前年ニ比シ 1ヲ増セリ、拂込資本金 45,095,000圓、一行平均 980,326圓ニシテ、積立金總額 20,293,712圓、一行平均 441,171圓ナリ、前年ニ比シ一行平均資本金 36,141圓、積立金 64,641圓ノ増加タリ、尙農工銀行法第一條ニ依リ政府ヨリ交付シタル資金ハ總額 8,278,620圓ニシテ、府縣ニ依リ異同アリ、又大正四年中ノ入金並出金ハ各約 6億600萬圓ニシテ前年ニ比シ殆ント 1億圓ノ増加ナリ、資本金及積立金百圓ニ對シテハ 926圓餘ニ當リ前年ノ同比ヨリ 90圓高シ、同年中ノ純益金ハ繰越金ヲ合シ 830萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ 100萬圓ヲ増加セリ。

農工債券ノ大正四年中發行セラレタルモノ、1,352萬圓、同年中

償還セラレタルモノ 1,314萬餘圓、從テ年末殘高ハ昨年ノ 8,220萬
ヲ越スルコト 1,037萬圓ノ 9,257萬圓ト爲レリ。

大正四年中、農工銀行ノ預金總高ハ、1億2,079萬餘圓ニシテ、前
年ニ對シ 1,670萬圓ヲ増シ、其ノ年末預金高ハ 3,811萬餘圓ニシテ
前年ニ對シ 461萬餘圓ヲ増加セリ、右年末高ヲ種類別トスルトキ
ハ官公預金 428萬餘圓、定期預金 2,656萬餘圓、當座預金 457萬
餘圓、其他預金 268萬餘圓ナリ、即チ三分ノ二強ハ定期預金タリ、
而シテ本年ニ於テハ官公預金ノ獨リ減少セル外、他ハ何レモ前年
ヨリ増加セリ。

農工銀行ノ大正四年中借入額ハ、499,157圓ニシテ、其年末殘高
ハ 424,610圓、逐年減少ニ趨キツ、アリ。

次ニ農工銀行ノ貸付金ハ、大正四年中總貸付高、1億7,364萬餘
圓、其ノ年末殘高 1億5,419萬餘圓ナリ、共ニ前年ノ數ニ比シ、1千
萬圓以上ヲ増加セリ、右年末高ヲ種類別トシテ掲ケレハ、年賦貸
付金 1億3,278萬餘圓、定期貸付金 1,074萬餘圓、短期貸付金 65
萬餘圓、特別小口年賦並定期貸付金 1,000萬圓ナリトス、之ヲ前年
ニ比スルニ、年賦貸付金獨リ 1,200萬圓ヲ増加シタルノミ、他ハ不
動若クハ寧ロ少シク減少ヲ示セリ。

大正四年年末賦貸付金ヲ 償還年限別ニ見、之ヲ萬圓單位ニテ掲
クレハ、五年未滿 46.9、十年未滿 394.2、十五年未滿 3,620.7、二
十年未滿 6,052.3、二十五年未滿 2,434.6、三十年迄 719.2ナリ、
前年ニ對シテハ何レノ年級モ増加セサルモノナキモ、就中二十年
及十五年最モ増加甚シ、而シテ貸付金額ノ最モ多キモ亦二十年ニ
シテ、次テ十五年及二十五年等ナリ、然レトモ僅ニ五年前ノ明治
四十三年頃迄ハ十五年未滿ノ年限ノモノ却テ最モ多カリキ、即チ
次第ニ長期年賦ニ亘ルノ傾向ニ移リ來リシナリ。

年賦貸付金ヲ、借主業種別ニ付キテ見レハ、其ノ大正四年末ノ
數ニ於テハ農業者最モ多ク、8,171萬餘圓ヲ占ム、次テ工業者 2,6
47萬圓ヲ占ム、以上二業ニ於テ約十分ノ八ヲ有ス、之ニ次キテハ
商業者ノ 1,028萬圓、耕地整理ノ 503萬圓等ナリトス、而シテ前年
ニ對シテハ農業會社及公共團體ヘノ貸付ノ減シタル外、他ノ業種
何レモ多少増加セサル無キ中ニ、殊ニ農業者ニ對スル貸付一千萬
圓以上ノ増加ヲ見タリ。次ニ同年年賦貸付金ヲ 抵當ノ有無別トス
ルトキハ有抵當 1億2,667萬圓、無抵當 660萬圓ナリ、年々有抵當
ノ増加優大ナリ、惟フニ是借主中公共團體ノ如キ寧ロ年々減少ノ
傾向アルニ反シ、普通農工業者ノ著シク増加スル事實ト相關連ス
ルナルベシ。

次ニ、大正四年末ノ定期貸付金ヲ償還期間別ニ付キテ見ルニ、實
際ノ取扱ニ於テ五年ヲ以テ限度ト定ムルカ如ク、而シテ貸付金ノ
半數以上ハ四年以上五年ノ期間ニ在リ。更ニ之ヲ借主業種別ニ見

ルトキハ農業者連帶、農業者、工業者、産業組合、商業者等ノ順位
大體年賦貸付ノ場合ト一致スルカ如シ。又之ヲ抵當ノ有無別ニ見
ルトキハ年賦貸付トハ大ニ趣ヲ異ニシ、有抵當 520萬圓、信用55
3萬圓ナリトス。

大正四年ニ於ケル農工銀行ノ割引手形ハ、總高 342萬餘圓、其年
末殘高 49萬餘圓ニシテ、前年ニ對シ減少セリ、殊ニ總割引高ハ前
年ノ半數以下ニ下レリ。

大正四年ニ於ケル農工銀行ノ預ケ金一年總高ハ、2億2,532萬圓
ニシテ、其年末殘高 3,623萬圓ナリ、前年ニ比シ著シキ多額ナリ。
次ニ同年末所有有價證券實價ハ 687萬餘圓ニシテ、是亦前年ニ比
シ増加セリ、同年末金銀有高ハ 108萬圓ナリ。

【北海道拓殖銀行】北海道拓殖銀行ハ、明治三十三年ノ開業ニ
係リ、大正四年末ニ於テハ支店出張所數 8、拂込資本金 4,988,188
圓、積立金 1,561,700圓ナリ、即チ前年ニ比シ更ニ 48萬餘圓ノ資
本金ノ拂込ヲ爲シ、又 17萬餘圓ノ積立金ヲ増シタリ、大正四年中
ノ入金又ハ出金ハ、約 4億2,900萬圓ニシテ、資本金及積立金ノ合
計百圓ニ對シテハ、各、約 6,580圓ニ當ルモ、前年ニ比シ減少シタ
リ、同年中ノ純益金ハ繰越金ヲ合シ 60萬餘圓ナリ。

拓殖銀行ニ於ケル拓殖債券ハ明治三十八年ヨリ發行セリ大正四
年中ノ發行債券ハ 81萬圓ニシテ、前年ヨリノ越高ニ合シ總發行高
2,055萬餘圓ヲ算セシモ、同年中ノ償還高 61萬餘圓アリテ、年末殘
高 1,994萬餘圓ナリ。

大正四年中ノ預金總高 7,896萬圓、其年末殘高 1,166萬餘圓ナ
リ、前年ニ比シ共ニ増加セリ、年末殘高ヲ種類ニ分チ見ルニ定期
預金 690萬圓、當座預金 148萬餘圓、其他預金 327萬餘圓ナリ、前
年ニ對シ増加セルハ定期預金ナリトス。

次ニ、大正四年中ノ貸付金ハ總貸付高 3,563萬餘圓ニシテ、前年
ニ比シ増加ヲ示スモ、其ノ年末殘高ハ 2,483萬餘圓ニシテ、前年
ニ比シ少シク減少セリ、今此ノ年末額ヲ貸付種類別ニ掲ケレハ年
賦貸付金 2,277萬餘圓、定期貸付金 100萬餘圓、當座貸越 52萬餘
圓、其他 52萬餘圓ナリ、即チ本年ニ於テモ數年來ノ傾向ヲ追ヒ、定
期貸付減退ニ、年賦其他ハ少シク増加ノ數ヲ示セリ。右貸付金ノ
内、年賦貸付金ヲ、年限別ニ見ルニ、其ノ金額多キハ、十五年 46
9萬圓、十年 448萬圓、十二年 319萬圓、二十年 278萬圓、十三年
213萬圓、八年 178萬圓等ノ順序ニシテ、右ノ順位モ、其ノ金額モ、
前年ト殆ト同一ナリ。更ニ借主業種別ニ見ルニ農業者 1,522萬
圓、商業者 185萬圓、土功組合 176萬圓、雜業者 140萬圓等ニ對
スル貸付最モ多シ、是亦前年ト略同様ノ現象ナリトス。次ニ大正
四年末定期貸付金ヲ償還年限別ニ見ルニ、二年 32萬圓、一年 24
萬圓、三年 18萬圓、五年 18萬圓、四年 8萬圓ナリ、而シテ其ノ

借主別ハ雜業者最モ金額多ク 24萬餘圓ナリ、次テ農業者、水産業
者、商業者、土功組合等ノ順ニシテ、而モ各略同額ヲ占ム、右ノ
順位並ニ金額等前年ト著シク異ナル所タリ。

大正四年ニ於ケル割引手形ノ總割引額 1,718萬餘圓ニシテ、其ノ
年末殘高 232萬餘圓ナリ、共ニ前年ニ比シ著シキ増大ナリ、又同
年中ノ荷爲替手形ハ、總貸出高 1,035萬圓ニシテ、年末殘高 60萬
餘圓ナリ、是又前年ニ比シ増加セリ。又同年中ノ送金手形ハ、振
出 1,615萬餘圓、受込 1,846萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ各 200萬圓
ノ減少ナリ。次ニ代金取立手形ノ額ハ、當所 412萬餘圓、他所 145
萬餘圓ナリ、前年ニ比シ當所増加シ、他所減少セリ。

次ニ、大正四年ニ於ケル拓殖銀行ノ預ケ金ハ、總預ケ高 1億221
萬餘圓、其ノ年末殘高 698萬餘圓ナリ、共ニ前年ニ比シ著シキ膨
脹ナリ。同年末有價證券ノ有高ハ、公債證書實價 123萬餘圓、社
債券實價 33萬餘圓ナリ、前年ニ對スル増額殊ニ著大ナリ、而シテ
同年末金銀有高ハ 82萬餘圓ナリ、是亦前年ヨリ多シ。

【臺灣銀行】臺灣銀行ハ、明治三十二年ヨリ營業ヲ開始シ、同
年末ニ於テ拂込資本金 125萬圓ナリシカ、大正四年末ニ於テハ 1,2
50萬圓ト爲リ、積立金 415萬圓、支店出張所 26ヲ有スルニ至レ
リ、同年中臺灣銀行ニ於ケル出入金ノ増大ハ著シ、即チ入金 50億
5,397萬餘圓、出金 50億7,686萬餘圓、前年ニ對シ何レモ15億圓以
上ヲ増セリ、從テ利益金モ亦多ク、前年繰越金ヲ合シテ 213萬餘
圓ニ達シタリ。

臺灣銀行ニ於テモ兌換銀行券ヲ發行ス、而シテ其ノ大正四年末
現在ノ發行高ハ 17,611,315圓ナリ、前年末ニ比シ約 336萬餘圓多
シ、而シテ之カ準備正貨ハ、金 637萬餘圓、銀 180萬餘圓ニシテ、
保證準備ハ 943萬餘圓ナリ、同年中各月ニ依リ發行額ニ多少ノ高
低アリシモ結局保證制限額タル一千万圓ニ達セス。

大正四年ニ於ケル預金總高ハ、11億 8,206萬餘圓、其ノ年末殘高
7,458萬餘圓、前年ニ對スル増加顯著ナリ、年末高ヲ種類ニ依リ別
掲スレハ定期 3,321萬餘圓、當座 1,681萬餘圓、其他 2,455萬餘
圓ニシテ、本銀行ニ於テモ亦定期預金ノ増殖最モ激シ、又本年
中ノ借入金總高ハ 416萬餘圓ニシテ、其年末殘高 71萬餘圓ナリ、是
亦前年ニ見サル所ナリ。

次ニ、大正四年ニ於ケル貸付金ハ、總高 1億7,402萬餘圓、其ノ
年末殘高 2,288萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ大ニ増加セリ、其年末高
ヲ種類別トスレハ、614萬餘圓ノ政府貸上金ノ外、定期貸付 603萬
餘圓、當座貸越 516萬餘圓、利付爲替手形 553萬餘圓ナリ、前年
ニ對シテハ定期貸付獨リ減少セリ。

割引手形(買入爲替手形ヲ合ス)ノ大正四年中總割引高ハ、4億
6,858萬餘圓、其ノ年末殘高 8,813萬餘圓ナリ、又同年荷爲替手形

ノ總貸出高ハ、3,139萬餘圓、其ノ年末殘高 410萬餘圓ナリ、悉ク
前年ニ對シ激増タリ、次ニ同年中送金爲替手形ハ、振出 2億5,309
萬餘圓、受込 2億4,650萬餘圓、前年ニ對シ殆ト二倍タリ、又同
年代金取立手形ハ振出 602萬餘圓、受込 856萬餘圓ニシテ前年ヨ
リ減少ス。

大正四年中ノ預ケ金ハ、6億1,370萬圓ニシテ、前年ニ比シ二倍
以上ノ増加ナルニ、其ノ年末高ハ 391萬餘圓ニシテ、僅ニ 12萬圓
ノ増加ナリ。又同年末有價證券ハ實價 8,332,014圓ニシテ前年ヨ
リ少シク減少ス。同年末金銀有高ハ 8,640,134圓ニシテ前年ヨリ
146萬餘圓ノ増加ヲ示ス。

【日本興業銀行】日本興業銀行ハ、明治三十五年拂込資本金 2
50萬圓ヲ以テ營業開始セラレ、最近大正四年ニ於テハ 1,750萬圓
ノ拂込資本金ト 192萬2千圓ノ積立金ヲ擁シ、支店 2ヲ有ス、大正四
年中ノ入金及出金ハ各約 6億9,600餘萬圓ナリ、利益金ハ前年繰越
ヲ合シ 128萬餘圓ヲ生セリ、前年ヨリ減少セリ。

大正四年中興業債券ノ總發行高ハ 7,053萬餘圓、内同年中新發
行ニ係ルモノ 1,385萬圓、又同年中償還額ハ 633萬餘圓ニシテ、結
局同年末殘高ハ 6,420萬餘圓ナリ。

預金ノ大正四年總預高ハ 1億9,787萬圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ
1,837萬餘圓ナリ、増加頗ル著シ、今年末高ヲ種類別トシテ掲クレ
ハ、定期預金 1,442萬餘圓、當座預金 194萬餘圓、其他 199萬餘
圓ナリ、前年ニ比シテハ定期並當座共ニ大ニ増加シ、其他ノミ減
少セリ。

信託金ノ大正四年中總受入高ハ 4,220萬餘圓ニシテ、其ノ年末
殘高 1,124萬餘圓ナリ、前年ニ比シ増加セリ、右ノ信託金ニハ擔保
附社債信託契約ノ數ヲ含マス。

次ニ貸付金ノ大正四年總高ハ 3,438萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ僅
ニ増加シタルモ、其ノ年末殘高ハ 2,912萬餘圓ニシテ、前年ヨリ 1
00萬圓ヲ減少セリ、今之ヲ種類ニ別テハ定期貸付 2,782萬餘圓、不
動產擔保貸付 129萬餘圓、當座貸付僅ニ 5,692圓ナリ。

割引手形ノ大正四年中總割引高ハ 1億6,818萬餘圓、其年末殘高
2,931萬圓ニシテ、此數モ亦前年ヨリ減少セリ。

興業銀行ノ大正四年ニ於ケル預ケ金一年中總高ハ 2億856萬餘圓
ニシテ、前年ニ比シ減少セリ、反之其ノ年末殘高ハ 1,199萬餘圓
ニシテ、前年ニ比シ恰モ 450萬圓ヲ増加セリ。又同年末有價證券
ノ有高ハ實價ニ換算シ、2,950萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ大ニ増加
シ。又金銀有高ハ同年末 217,505圓ナリ。

【普通銀行】大正四年末ニ於ケル普通銀行ノ數ハ、1,442、其ノ
支店出張所數 1,945、拂込資本金 3億5,770萬餘圓、積立金 1億2.7
66萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ行數 151、支店出張所 230、資本金

4,350萬圓、積立金 462萬圓ヲ減少セリ、是レ從來普通銀行中ニ計算セル貯蓄兼營普通銀行 150行ヲ、本年ヨリ貯蓄銀行トシテ揚上スルニ至リタル結果ナリ、同年中純益金、配當金ノ減少モ、亦同一ノ理由ニ基クモノナルモ、其ノ入金並出金ハ從來ヨリ貯蓄兼營銀行ノ數ヲ含マサルモノニシテ正シク比較シ得ヘキ數ナルカ、其ノ額本年ニ於テ約 612億圓、即チ前年ニ比シ約 25億圓ヲ増加シタリ。

普通銀行ノ府縣分布ノ狀況ヲ大正四年ニ於テ見ルニ、静岡ノ132ヲ最多トシ、兵庫 130之ニ次キ、東京 110、長野 80、福岡 62、大阪 52、新潟 49等、又之ニ次キテ多シ、而シテ徳島縣ノ全クノ本店ヲモ有セサルノ外、沖繩、高知ノ各 3行ノミナル、最モ少キモノナリ、支店出張所ヲ多數ニ有スルハ、兵庫、大阪、東京、愛知等ノ府縣ナリ、銀行數ノ多少ト資本金額ノ多寡トハ、必スシモ一致セサルハ當然ニシテ、拂込資本金ノ多キ府縣ヲ舉ケレハ、東京、大阪、兵庫ニ次キ静岡ナリ、蓋シ静岡縣ハ金融界ニ於ケル一異彩ト謂フニ足ランカ。

次ニ、預金ヲ見ルニ、大正四年ニ於テハ銀行全般ニ就キテ見タルト一般總預金ハ前年ノ減少ヲ回復シ、年末殘高ハ引續キ増加シタリ、今其ノ年末殘高ノミニ付其ノ種類ヲ掲ケレハ、官公預金約 1,596萬圓、定期 7億7,102萬圓、當座 5億706萬圓、其他 4億550萬圓ナリ、更ニ右官公預金ヲ除キタル所謂普通預金ノ最モ多キ府縣ヲ二三列記スレハ、東京、大阪、兵庫ニ次キテハ京都、愛知、神奈川ニシテ静岡、福岡等又之ニ次ク。

貸出金ノ總額、大正四年ニ於テハ前年ニ引續キ減少シタルノ事實亦銀行全般ノ趨勢ト同一ニシテ、尙普通銀行ニ於テハ其ノ年末殘高モ亦減少セリ、而シテ之ヲ種類ニ分チ見ルニ、定期貸ハ前年ニ對シ其ノ總高増加シテ年末殘高減シ、當座貸越ハ總高、殘高共ニ減少セリ、是ニ依リテ見ルニ、同年ニ於ケル貸付營業ハ頗ル慎重ノ方針ニ出テタルモノ、如シ、而シテ其ノ貸付金年末高ハ、定期貸 4億1,077萬圓、當座貸 2億3,495萬圓、合計 6億4,572萬圓ナリ、今之ヲ抵當別トスルニキハ、動産抵當 2億3,927萬圓、不動産抵當 2億4,183萬圓、信用 1億6,462萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ三種等シク減少セリ、而シテ右三種ノ明治三十二年以降増加ノ勢ハ、不動産抵當最モ大ニ、信用及動産ハ比較的小ナリ、一見甚タ奇異ニシテ、商業銀行ノ發達トシテ不健全ノ觀アルカ如シト雖恐クハ之レ貸出ノ實體ハ主トシテ手形ノ割引若ハ荷爲替ノ方面ニ發達シ、其ノ單純ナル貸付ハ多ク不動産抵當ノ已ムヲ得サルニ至リシ結果ナラン。

大正四年末貸付金殘高ヲ其ノ數量多キ府縣ニ付キ見ルニ、是又東京、大阪、兵庫ノ外ハ静岡抽出テテ多ク、次テ神奈川、新潟、福

岡、愛知、長野、京都等ノ諸府縣ナリ。

割引手形ノ大正四年中總高ハ、66億7,489萬圓、其年末殘高 10億5,751萬圓、荷爲替手形ノ同年總貸付高 6億1,374萬圓、其年末殘高 2,548萬圓ニシテ、總割引高ノ少シク減シタル外、他ハ何レモ前年ニ比シ増加セリ、加之明治三十二年ニ對スル増加ノ狀況貸付金ノ増加趨勢ニ比シ遙ニ大ナリ。

右總割引高中ニハ前年ヨリノ越高ヲ包含スルヲ以テ、之ヲ除キタル大正四年中ノ額ハ當所 50億4,242萬圓、他所 6億5,525萬圓ニシテ、兩者ノ比約 7.6ト 1.トニ當ル、併シナカラ此ノ割合ハ府縣ニ依リテ同一ナラス。

割引手形ヲ爲替手形、約束手形ノ別ニ依リテ見ルニ大正四年ニ於テハ爲替手形 36億5,570萬圓、約束手形 20億4,198萬圓ニシテ、爲替手形ノ多キコト實ニ 16億1,372萬圓ナリ、而シテ前年ニ對シテハ、約束手形減少シ、爲替手形大ニ増加セリ、此ノ現象ハ數年來繼續シ來リタル所ナルモ、試ニ明治三十二年ノ數ニ遡リテ見ルトキハ、割引ニ付セラル、手形ハ、殆ント全部約束手形ノミニシテ、爲替手形ハ約束手形ノ十分ノ一ニ當ラザリシナリ、爾來爲替手形ノ發達、就中日露戰役後ノ發達著シキモノアリテ、終ニ今日ノ現狀ニ至レリ、是レ最モ能ク我國ノ信用經濟ノ發達ヲ示スノ數タルカ如シ。但シ之ヲ府縣別ニ見ルニ、今尙約束手形ノ著シク多額ナル地方アリ、其ノ順位ハ今明確ニ爲シ難キモ、東北ニ於テ岩手、宮城、福島、關東ニテ東京、神奈川ヲ除ク全部、北陸ニ於テ新潟、富山、東山ノ長野、東海ニ於テ静岡、近畿ニ於テ奈良、中國ニ於テ山口ヲ除ク諸縣、四國ノ全部、九州ニ於テ大分、佐賀、宮崎、鹿兒島及沖繩等ハ多少ニ掲ラス約束手形多シ、尙新附ノ地ニ於テハ臺灣ハ著シク爲替手形ノ地ナルニ朝鮮ハ約束手形ノ地ナリ。

荷爲替手形モ亦總貸付高ヨリ前年越高ヲ控除シタルモノ即チ大正四年中ノ振出額ハ 6億66萬圓ニシテ、同年中各店ニ於ケル受込額ハ 6億3,877萬圓ナリ、荷爲替手形ノ振出、受込ノ額、府縣ニ依リ均等ヲ得サルハ貨物ノ生産地ト消費地トノ關係ニ基クハ素ヨリ其ノ所ナリ。

送金手形ノ額ハ、前年ヨリ引續キ減少シ、大正四年中振出、受込共ニ約 25億圓ナリ、前年ニ比シ 2億圓ノ減少ナリ、明治三十二年以降ノ増加ノ約二倍ニ當リ、其ノ他手形等ノ増加ニ比シ進歩大ナラフ、恐クハ是レ郵便爲替、振替等ノ發展ノ影響大ナルモノアリテ然ルヘシ、是又振出受込ノ關係ハ府縣ノ經濟上ノ特徴ニ依リ一様ナラストス。

代金取立手形ノ大正四年中ノ取扱額ハ、當所 15億4,245萬圓、他所 7億2,606萬圓ニシテ、前年ニ比シ遙ニ増加ス、而シテ明治三十

二年以來ノ進歩ノ大ナル、各種手形中ノ第一ニシテ、十六年間ニ 5倍乃至 7倍ノ増加ヲナス、是又府縣ニ依リ當所他所ノ差等著シ。

大正四年中普通銀行ニ於ケル預ケ金總高ハ、78億7,353萬餘圓、其ノ年末殘高 8,336萬圓、又有價證券ノ年末額ハ、實價額 3億 2,837萬圓ニシテ、何レモ前年ニ比シ著シク多額ナリ、是レ貸付及割引額ノ減少ト共ニ、同年金融緩慢ノ現象ヲ微證スルモノナリ。同年末金銀在高 1億4,732萬圓ニシテ、前年ニ比シ 1,700萬圓ノ多額ヲ示ス。

【貯蓄銀行】大正四年末現在貯蓄銀行數ハ656、其ノ支店出張所 101、數拂込資本金 1億2,094萬圓、積立金 4,243萬餘圓、又同年中ノ各店ノ入金ハ約 85億圓、出金ハ 84億8,744萬圓、純益金 2,354萬圓、配當金 985萬圓ナリトス。悉ク前年ヨリ著シキ増加ナリ、是主トシテ從來普通兼營銀行ヲ普通銀行トシテ掲ケ來リシ 150行ヲ本年ヨリ貯蓄銀行ニ移セシニ依ル。貯蓄銀行本店ノ最モ多キ府縣ハ東京 86、愛知 39、神奈川 34、新潟 33、長野 29、兵庫 29等ニシテ、其ノ支店出張所ノ多キハ東京 253、愛知 88、廣島 76、長野 74、兵庫 66、神奈川 65等ナリ、而シテ拂込資本金ハ新潟縣ノ 1,386萬圓各府縣中ノ最高額ナリ。

貯蓄銀行ノ普通預金ハ、官公預金ヲ合シテ、大正四年中ノ總額 20億6,111萬餘圓、年末殘高 3億3,587萬圓ナリ、前年ニ對シ異常ノ増大ナルモ、前記 150行移算ノ關係上、正當ナル比較ヲ爲シ難シ。借入金ノ年末殘高並再割引手形額ノ大正四年ノ減少ハ、是又同年金融緩慢ノ事實ヲ語ルニ足ル。

貯蓄銀行ノ貯蓄預金ハ、大正四年中ノ總預高 4億8,229萬圓、其ノ年末殘高 1億9,306萬圓、前年ノ減少ニ反シ著シキ増加ヲ示ス、而シテ此ノ預人員 1,016萬餘人ナルヲ以テ、一人平均 19圓弱ニ當ル、明治三十二年ノ預金額ニ對シ約四倍半ノ増加ヲ示スモ、郵便貯金ノ増加ニ比シ劣ル所アリ、貯蓄預金ヲ、預人員體別ニ見ルニ、人員金額共ニ雜業最モ多ク、次テ商、農、工ノ順位ナリ、但シ一人平均預金額ニ於テハ商業最モ多ク、工業之ニ次キ、雜業及農業又其ノ次位ナリ。利子歩合ハ、最高18.0%ヨリ最低 2.6%ノ間ニ在リ、最高ハ前年ト同一ナルモ最低歩合ハ前年ヨリ遙ニ低下セリ、是又大正四年金融緩慢ヲ語ル一證左タリ。貯蓄預金ノ多キ府縣ハ、東京 14,598萬圓ヲ最高トシ、大阪 2,557萬圓、愛知 1,279萬圓、京都 1,209萬圓、神奈川 877萬圓、新潟 725萬圓、岡山 448萬圓等ニシテ、兵庫ハ實ニ其ノ次ナリ。

大正四年ニ於ケル貯蓄銀行ノ貸付金ハ、普通銀行ニ於テハ前年ニ比シ減少シタルモノアルニ拘ハラズ、悉ク増加ノ數ヲ示ス、其ノ年末高ヲ舉ケレハ、定期貸 1億8,463萬圓、當座貸 8,072萬圓ナリ、而シテ其ノ抵當別ハ、矢張不動産多ク、次テ動産、信用ノ順

序ナリ、其ノ明治三十二年以來ノ増加ノ趨向ハ、信用及不動産並ニ動産ニ比シ盛ナリ。

大正四年割引手形ノ總割引高 9億1,184萬圓、其ノ年末殘高 1億6,130萬圓、前年ヨリ著大ノ増加ナリ、尙同年中ノ割引手形ヲ當所他所ニ分テハ、當所 7億1,392萬圓、他所 9,811萬圓、更ニ手形ノ種類ニ依リ分テハ、爲替手形 2億6,870萬圓、約束手形 5億4,334萬圓ナリ、貯蓄銀行ノ割引手形ハ、爲替手形ノ額未タ約束手形ノ半數ニモ及ハサルハ、貯蓄銀行ニ依リテ手形ノ割引ヲ求ムルモノハ、未タ商業的信用ノ十分發達セザル地方若ハ範圍ニアレハナルヘシ。

荷爲替手形ノ大正四年中總貸付高 1億3,704萬圓、内前年越ヲ除キ同年中振出ハ 1億3,565萬圓、拂込ハ 1億243萬圓、年末殘高ハ 4,711萬圓ナリ、前年ニ比シ異常ナル激増ト云フヘシ。送金手形ノ振出 4億9,148萬圓、受込 3億2,217萬圓、代金取立手形、當所 1億2,209萬圓、他所 8,957萬圓、前年ニ對シ殆ント二倍ニ近キ激増ナリ。

大正四年ニ於ケル貯蓄銀行ノ預ケ金高ハ9億9,863萬圓、其ノ年末殘高 9,638萬圓、有價證券在高實價 1億3,078萬圓ナリ、是亦前年ニ比シ著シキ増加ナリ、金銀在高 3,232萬餘圓モ亦然リ。

尙貯蓄銀行ニ於ケル手形其他ノ普通商業銀行ノ行爲ノ數ハ、普通銀行ヨリモ却テ著シキ發達ノ數ノ認メラル、モノアルハ、初メ單純ナル貯蓄銀行カ、營利ノ關係上中道ニシテ普通銀行ノ業務ヲ營ムニ至ルモノ多キニ依ルモノ、如シ。

貯蓄銀行カ法令ノ命スル所ニ依リテナス供託金高ハ、擔保價格ニ於テ大正四年末 49,585,194圓、内、國債證券 2,036萬圓、地方債證券 983萬圓、株券其他 1,938萬圓ナリ。

【擔保附社債信託事業】大正四年末擔保附社債信託事業ヲ營ム會社ハ、前年ト等シク 10會社ニシテ、其拂込資本金 8,275萬圓ナリ、而シテ年末ノ契約額ハ 37口、5,611萬餘圓及英貨 100萬磅ナリ、前年ニ比シ新契約ト、償還解約等トヲ差引キ、尙 8口、1,332萬圓ヲ増加セリ、右大正四年末現在契約額中100萬磅並ニ 1,572萬圓ハ、第三者總額引受、2,215萬圓ハ受託會社總額引受、1,824萬圓ハ受託會社ノ募集ニ係ル、三種共ニ前年ヨリ増加セリ。

【手形交換】大正五年末全國十二個所交換所ニ於ケル手形交換高ハ、手形枚數 13,525,220枚、其ノ金額 202億3,474萬餘圓、前年ニ比シ、2,333,714枚、86億902萬餘圓ヲ増加セリ、手形ノ交換額ヲ明治三十三年以來ノ數ニ見ルニ、逐年増加シ來リテ、大正三年戰役開始ノ年、其ノ枚數ノ増加ニモ掲ラス、金額少シク減少シタルノ一例ヲ止ムルノミナリト雖、今回大正五年ノ金額ノ激増ノ如キハ、未タ曾テ有ラサル所ナリ、而シテ手形一枚ノ平均金額モ亦

著シク膨大セリ。之ヲ月別ニ見ルニ、大正五年ハ三月ヨリ四月ニ於テ稍減少シタル外、年首ヨリ年末ニ及ヒ毎月著シキ速度ヲ以テ増進セリ、之ヲ交換所別ニ見レハ、東京、大阪ヲ最多トシ、神戸、横濱之ニ次キ、京都、名古屋又其ノ次ナリ、但シ、京都ハ枚數ニ於テハ遙ニ横濱ノ上ニ在ルモ、金額ニ於テハ其ノ半ニモ達セス、其他ノ地ハ、枚數ニ於テモ金額ニ於テモ上記ノ地方ニ及ハサルコト遠シ。

【金利】 銀行定期預金年利ノ全國平均ハ大正四年中既ニ年首ヨリ年末ニ至ルニ從ヒ月毎ニ順次低下シ、其十二月ニ於テハ最高 6.0%、最低 5.0%ノ年利ヲ以テ大正五年ニ移レリ、而シテ大正五年ニ於テモ、亦、預金利率ハ、一年中終ニ一度モ上騰スルコトナク、寧ロ低下一方ニテ年末ニ及ヘリ、而シテ最高最低共ニ五月ヨリ八月若ハ九月ニ至ル間ニ於テ 0.3%ノ低下ヲ見タリ、即チ大正五年ハ年首最高 6.0%、最低 4.9%ヲ以テ初マリ、年末最高 5.6%最低 4.6%ヲ以テ終レリ。

次ニ、銀行貸付金年利ノ全國平均ハ、是亦大正四年中順次低下ノ一方ノミニシテ、一月最高 11.5%、最低 8.7%ヨリ、十二月最高 10.9%、最低 7.9%ヲ以テ終リタリシカ、大正五年ニ於テモ、亦僅ニ年末ニ際シ輕微ノ上騰ヲ見シ外、數回ノ低落ヲ爲セリ、即チ、先ツ一月ヨリ、二月、三月若ハ四月ニ至ル間ニ於テ、最高モ、最低モ、各0.2%ノ低落ヲ爲シ、之ヲ五月迄持續シタル後、更ニ六月、七月、八月ニ至リ、繼續低落セリ、而シテ最低ハ九月少シク上騰ノ形ヲ見セシモ、十月再ヒ前月以上ニ下落セリ、最後ニ年末ニ際シ、最高ハ十一月ヨリ、最低ハ十二月ニ入リテ、少シク上騰シ、年末ノ貸付金利ハ最高 10.4%、最低 7.2%ヲ示セリ。

次ニ銀行ニ於ケル割引手形ノ割引歩合ハ、是亦大正四年ニ於テハ、殆ント例外ナシニ、年首ヨリ年末ニ及ヒ、順次低落シ、以テ十二月ノ百圓ニ付日歩最高 2.98錢、最低 1.67錢ニ至レリ、而シテ

XVIII. 保 險

大正四年末ニ於ケル内國保險會社總數ハ 64會社ニシテ、之ヲ分類スレハ生命保險ニ關スルモノ 41、傷害保險ニ關スルモノ 1、損害保險ニ關スルモノ 22ナリ、而シテ保險會社ハ各種兼業ノモノモ少カラサルカ故ニ、或ル種ノ保險ノ如キ兼業會社ノミニ依リテ營マル、モノアリ。今兼業ヲ各一ト計算シ其ノ數ヲ掲ケ、損害保險ノ細別ヲ見ルニ、火災保險 20(内兼業 5)海上保險 12(内兼業 6)運送保險 8(悉ク兼業)信用保險 1(兼業)機關汽罐保險1、自動車保險 1(兼業)ナリ

生命保險會社ノ數ハ前年ニ比シ 同一ニシテ且三十四年ニ比スルモ同一ナリ。但シ明治三十七八年ノ頃一度其ノ數ヲ減シタルコト

大正五年ニ於テモ亦、更ニ低下ヲ繼續シテ、其ノ年末ノ最高 2.73錢、最低 1.85錢ニ及ヘリ、尙之ヲ各月ニ就キテ見レハ一月ヨリ二月、三月ニ至ル頃既ニ若干ノ下落ノ傾向ヲ示セシカ、六月ヲ過キ七月、八月ニ亘リ急激ノ下落ヲ爲シ、而シテ最高ハ九月稍上昇シ、以後殆ント持合ノ姿ニテ進ミ、十二月些少ノ騰貴ヲナシタルカ、最低ハ八月ノ下落ナク、反之九月、十月下落シ、十二月ニ上騰ヲ現出セリ。

【外國爲替相場】 大正五年ニ於ケル一年平均ノ外國爲替相場ハ、倫敦我金貨一圓ニ對シ 2志1片³/₄、桑港及紐育ハ我百圓ニ對シ 50.16弗、孟買ハ我百圓ニ對シ 157.52[ルビアンナ]、上海同百圓ニ對シ 71.03兩、香港ハ彼ノ香銀百弗ニ付 101.28圓ナリ、即チ本年ハ歐米及孟買ニ安ク、上海、香港ニ高シト概言シ得、蓋シ其ノ安キハ主トシテ貿易ノ輸出超過ニ基キ、所謂國際債務ノ仕拂ヲ彼ヨリ要スルモノアルノ關係ニ出テ、其ノ高キハ本年ニ於ケル銀ノ未曾有ノ高價ニ依リ銀貨國ニ對スル爲替ノ高價ヲ現出シタルナリ、而シテ歐米ニ對スル安キモ此ノ如キハ未ダ之レ有ラサルノ現象ナルカ、支那ニ對スル高値モ亦稀有ノ事實ナリ、嘗テ明治三十九年同四十年ニ於テ隨分高キコトアリシモ最高今回ノ如キハアラサルナリ。

右ノ事實ヲ月別ニ見ルニ、倫敦ハ各月殆ント大ナル變動ナシ、桑港及紐育ハ四月迄ハ變動ナカリシモ、五月以後各月殆ント低落ヲ見サルハナク、十月ニ及ヒタリ、以テ十一月、十二月ノ安定位ニ到着シタルノ觀アリ、孟買モ亦略紐育又ハ桑港ト同一ノ傾向ニ似タリ、而シテ上海及香港ハ是亦上下共同ノ徑路ヲ執レリ、即チ一月ヨリ二月ニ至ル際、稍下降ノ傾向アリシカ、次テ五月ニ至ルマテ非常ナル暴騰ヲナシ、六月、七月低落シ、八月以後再ヒ騰貴ニ次クニ騰貴ヲ以テシ、終ニ十二月ニ至リ一年中ノ最高ニ達セリ。

保 險

アリシカ、大正元年以後再ヒ増設ノ結果今日ノ數ニ至レリ、右ノ内普通生命保險 39ニシテ、徴兵保險 2ナリ、其ノ拂込資本金ハ普通生命 8,073,250圓、徴兵 425,000圓ニシテ、積立金ハ普通生命 1億5,194萬餘圓、徴兵 793萬餘圓ナリ、又收入ノ内保險料ハ普通生命 4,249萬餘圓、徴兵 161萬圓、支出ノ内保險金ハ普通生命 1,224萬餘圓徴兵 8萬餘圓ナリ、而シテ年度末契約ハ普通生命ニ於テハ件數 1,816,292件其金額 10億7,222萬餘圓ニシテ徴兵ニテハ 273,780件 4,376萬餘圓ナリトス、以上本年度ニ於ケル生命保險ハ前年度ニ比シ保險料ノ收入減少シ、保險金ノ支出増加セルヲ見ル、而シテ年度末現在契約ハ徴兵保險ニ於テハ少シク増加シタルモ、普通生命保險

ハ件數ニ於テモ金額ニ於テモ稍減少セリ。明治三十四年度以來年々急激ノ増加ヲ爲シ來リ 契約金額五倍以上ニ進展シタリシニ、本年些少ナリトモ減退ヲ見ルニ至リタル所以ハ、單ニ不景氣ノ一語ヲ以テ解釋シ得タリトスヘキカ。

傷害保險ハ一會社ニシテ資本金 25萬圓、積立金 36,702圓ヲ有スル外、兼業 2會社アリ、而シテ是等 3會社ノ大正四年度中ノ保險料 92,261圓、保險金 30,721圓ニシテ、年度末契約 12,602件 1,484萬餘圓ナリ。是亦前年度ヨリ減少セリ。

損害保險中火災保險會社ハ、大正四年度末 15社、拂込資本金 1,112萬餘圓ノ外、兼業 5會社アリ、積立金總額 1,537萬餘圓ニシテ、同年度中收入保險料 910萬餘圓支出保險金 437萬餘圓ナリ、而シテ本年度中ノ新規契約ハ普通件數 1,080,587、金額 40億8,214萬餘圓、日歩保險件數 1,793、金額 119億4,567萬餘圓ニシテ、其ノ年度末現在數ハ普通 989,227件、23億3,577萬餘圓及日歩保險 1,056件、3,876萬餘圓ナリ、之ヲ前年度ニ對照スルニ、新規契約數モ年度末數モ共ニ大ニ増加シ、生命保險トハ全ク狀況ヲ異ニス。

海上保險會社ノ大正四年度末數ハ 6會社、拂込資本金 894萬圓ニシテ、尙兼業 6會社アリ、其ノ積立金 2,199萬餘圓ナリトス。同年度中ノ保險料收入 1,656萬餘圓、保險金支出 708萬餘圓ニシテ、本年度中ノ新規契約ハ 1,443,583件、其金額 34億2,659萬餘圓ニシテ年度末殘數 47,055件、2億9,954萬餘圓ナリ、右ニ掲ケタル海上保險ニ關スル本年度ノ計數ハ、總テ前年度ニ比シ著シキ膨脹ニシテ、從テ會社有ラサル大數ナリ。戰時海上危險ノ大ナルニ伴フ結果タルハ素ヨリナルモ、生命保險ノ不振ノ年ニ於テ損害保險中特ニ海上保險ノ此ノ増大アリ、蓋シ異觀ナリト云フヘシ。

次ニ運送保險ノ大正四年度末 8會社ハ、悉ク他ヨリノ兼營ナリ。同年度中保險料收入 13萬餘圓、保險金支出 16,588圓、年度内新規契約 222,983件、3億7,848萬餘圓ニシテ、年度末高 4,173件、758萬餘圓ナリ、獨リ前年ニ對シ大ナル差等ナキノミナラス、又數年前ニ比シ多クノ進歩ヲ認メ難シ。惟フニ此ノ保險ハ恐ク海上保險ト相合シテ考觀スヘキモノナルヘシ。

XIX. 官廳使用現業員共濟組合

官廳使用現業員ノ共濟組合ハ 明治四十年ニ鐵道廳ニ之ヲ設ケタルヲ創メトシ、大正五年度末ニ 現ニ存スルモノ五アリ、即チ印刷局現業員共濟組合、鐵道院現業員救濟組合、專賣局現業員共濟組合、海軍共濟組合、爲替貯金局及地方逓信官署現業員共濟組合是ナリ。是等五組合ノ總組合員ハ 217,953人ニシテ前年ニ比シ 3,167人ヲ増シタリ。本年度中ノ總掛金額ハ 1,187,604圓ニシテ一人平均 5圓45錢ニ當ル、此ノ掛金以外ニ政府ノ補助金 857,035圓アリ、

信用保險ノ名稱スルモノ大正四年度末 1會社アリ、是亦他ヨリノ兼業ニ係ル。同年度中新契約 2,017件、172萬餘圓、其年度末高 1,882件、159萬餘圓ニシテ、保險料ノ收入 21,175圓、保險金ノ支出 6,227圓アリ、此ノ保險モ亦前年ニ比シ發展ノ跡ヲ認メ難シ。

次ニ大正四年度末ニ機關汽罐保險ト稱スル會社 1アリ、拂込資本金 125,000圓、積立金 13,197圓ヲ有ス。同年度中契約 160件、211萬餘圓、年度末亦同數ナリ。而シテ保險料ノ收入 25,180圓、保險支出金 150圓ナリ。

次ニ自動車保險會社大正四年度末 1アリ他ノ保險ノ兼業ナリ。前年ヨリノ開始事業ニ屬シ、前年ニ於テハ未タ事業ノ見ルヘキモノ無カリシカ、本年度ニ於テハ新規契約 31,701件、1,031萬餘圓ニシテ其ノ年度末現在契約 26,973件、865萬餘圓ナリ。而シテ同年度中ノ保險料收入ハ 147,129圓ニシテ、保險金ノ支出シタル額 26,517圓ナリトス。

以上ノ外外國保險會社ノ我國ニ來リテ 保險業ヲ營ムモノアリ、其數生命保險 4、火災保險 22(別ニ兼營 2アリ)海上保險 7(別ニ兼營 5)アリ、前年ト同數ナリ。何レモ供託金ヲ提供ス、其ノ大正四年度末金額生命 4會社 782萬餘圓、火災 24會社 284萬餘圓、海上 12會社 133萬餘圓ナリ。生命保險ノ大正四年度中新規契約ハ 2,842件、676萬餘圓ニシテ、年度末現在 24,231件、5,249萬圓ナリ。之ヲ前年度ニ比スルニ新規契約ハ減シタルモ年度末數増加セリ、而シテ同年度中ノ保險料ハ 308萬餘圓ニシテ、保險金ハ 70萬圓ナリ。次ニ火災保險ノ同年度中契約ハ 140,500件、9億7,274萬餘圓、其年度末高 120,210件、8億676萬餘圓ニシテ保險料ハ 243萬餘圓保險金ハ 149萬餘圓ナリ。又海上保險ノ大正四年度中契約ハ 100,263件、4億1,245萬餘圓、其ノ年度末高 8,136件、2,597萬餘圓、ニシテ、同年度中保險料收入 157萬餘圓、保險金支出 67萬餘圓ナリ。外國保險會社ニ於テモ海上保險ノ膨脹ヲ例外トシ、其他ノ保險ハ前年ニ比シ成績佳良ナリト云フヲ得ス。大正元年二年ノ交ヲ最高トシテ漸次減退ノ狀ニ在ルニ似タリ。惟フニ是レ戰役發生ノ影響ニ依リテ然ルカ、抑亦内國保險ノ發達ノ結果ニ基クカ。

掛金額ノ約 72%ニ當レリ。本年度中ニ救済金ノ給與ヲ受ケタル者 56,487人アリ、組合員ノ 25.92%ニ當ル、給與シタル救済金及其ノ他ノ支出總額ハ 1,108,240圓ニシテ本年度中收入金總額 2,505,584圓ニ對スル 44.23%ニ當レリ。更ニ各組合ニ就テ之ヲ細觀スレハ下ノ如シ。

【印刷局現業員共濟組合】 大正五年度末ノ組合員總數 2,713人中男 55.95%、女 44.05%ナリ、本年度中ノ組合員ノ掛金總額ハ圓

ニシテ一人平均 6圓12錢弱ニ當ル、此ノ外ニ政府ノ補助金 10,965圓アリ、掛金總額ノ約 66%ニ當レリ、本年度中救済金給與ヲ受ケタル者 1,199人アリ組合員ノ 44.17%ニ當リ未タ嘗テ見サル多數ナリ、此ノ被給與者ノ 88%餘、組合員ノ 36%餘ハ勤績給與金受領者ニシテ即チ一箇年以上勤績者ノ 脱退シタル者トス、其ノ他疾病勤務ニ耐エシテ退職シ疾病給與金ヲ受ケタル者組合員ノ 3%被給與者ノ 7.3%アリ、是亦既往ニ比シ著シク多シ、傷痍給與金ヲ受ケタル者 6人公務上ノ傷痍療養費ヲ受ケタル者 77人此ノ二者ヲ合セテ組合員ノ約 3%餘被給與者ノ約 7%餘ニ當レリ、又給與金額ハ合計 27,156圓ニシテ總支出金ノ約 60%ニ當リ約 40%ハ有價證券ヲ買入タリ、給與金ヲ分テ各種ノ分節比例ヲ算出スルニ 傷痍給與金 2.26%療養費 1.64%罹災給與金 0.30%死亡給與金 2.71%疾病給與金 7.87%勤績給與金 85.22%ニ當リ、要スルニ印刷局共済組合ハ脱退者ノ救済ニ向テ最モ大ナル働キアルモノ、如シ。

【鐵道院現業員救済組合】 大正五年度末ノ現組合員總數ハ 104,488人中 86.87%ハ規定上當然組合ニ加入スヘキ現業員即チ甲種組合員ナリ、本年度中ノ組合員掛金總額ハ 597,048圓ニシテ一人平均 5圓71錢餘ニ當ル、此ノ外ニ政府給與金 415,787圓アリ掛金總額ノ約 70%弱ニ當レリ、本年度中救済金ヲ受ケタル者 20,004人ニシテ組合員ノ 19.14%ニ當リ前年ノ同一比例ニ比シ約 7%高シ、此ノ被給與者中最モ多キハ拂戻金受領者（印刷局ノ勤績給與金受領者ト略ホ同一性質ヲ帶フル者）ニシテ總被給與者ノ 63.84%ニ當リ、之ニ次クモノ 醫療金給與者 28.83%アリ、傷痍救済金給與者ハ 3.30%死亡救済金給與者ハ 2.69%ニ過キス、支出金總額 554,007圓ノ殆ト全部ハ救済金ニシテ唯 0.45%ナル 2,494圓ノミ他ノ費用ニ充テラレタリ、而シテ救済金ヲ種別シ 其ノ分節比例ヲ算出スレハ傷痍救済金 21.12%死亡救済金 31.73%老衰救済金及其ノ利子 1.93%醫療金 1.68%拂戻金 43.54%ニ當ル、總支出ノ約半額ニ近キ額ハ脱退者ノ爲ニ費サルレトモ、而モ尙傷痍者ニ死亡者ニ救済金ヲ給與スルコト尠ナラス、殊ニ本年度ヨリ新ニ設ケタル 醫療金ハ公務ニ因ラサル傷痍又ハ疾病者ニ對スル 醫療費ノ補助ニシテ便宜ニ適セル新事業タルヲ見ルヘシ。

【專賣局現業員共済組合】 大正五年度末ノ組合員總數 24,264人ニシテ中男 26.34%、女 73.66%ナリ、本年度中組合員ノ掛金總額 57,687圓ニシテ一人平均 2圓38錢弱ニ當ル、此ノ外ニ政府ノ補助金 33,174圓アリ掛金總額ノ約 66%餘ニ當レリ、本年度中救済金ヲ受ケタル者 14,961人アリ、組合員ノ 61.66%ニ當リ、是亦未タ嘗テ見サル高率ナリ、此ノ被給與者中最モ多キハ 脱退給與金受領者（鐵

道院ノ拂戻金受領者ニ略ホ同シ）ニシテ總被給與者ノ 72.50%ニ當ル、斯ノ如キハ 本年度ニ規則ヲ改正シ一般ノ脱退者ニ救済金ヲ給與スルコト、爲シタルガ 爲ナリト云フ、之ニ次テ多キハ疾病給與金受領者ニシテ 11.70%、次キハ年功給與金受領者 9.64%、産婦給與金受領者 4.83%ナリ、支出金總額 96,428圓ノ中唯僅ニ 9圓ノミ他ノ目的ニ支出セラレ他ハ總テ救済金トシテ 支出セラレタリ、之ヲ種別シテ分節比例ヲ算出スレハ傷痍給與金 1.44%療養金 0.47%産婦給與金 2.72%疾病給與金 4.40%死亡給與金 2.88% 脱退給與金 59.14%年功給與金 28.95%ニ當ル、年功給與金モ亦一種ノ脱退給與金ナルノミ、然レハ此ノ組合モ亦今ハ其ノ力ノ 大部ヲ脱退者救済ノ爲ニ盡シツ、アルモノ、如シ。

【海軍共済組合】 大正五年度末ノ現組合員總數ハ 50,158人アリ其ノ殆ト全部ハ男ニシテ 98.43%ヲ占メ女ハ僅ニ 1.57%アルノミ、本年度中組合員ノ掛金總額ハ 337,036圓ニシテ一人平均 6圓72錢弱ニ當ル、此ノ外ニ政府ノ給與金 272,937圓アリ掛金總額ノ約 81%弱ニ當ル、本年度中救済金ヲ受ケタル者 4,749人アリ組合員ノ 9.47%ニ當リ、此ノ被給與者中最モ多キハ 療養救済金受領者ニシテ總被給與者ノ 52.52%ヲ占メ脱退救済金受領者ニ次キ 28.41%ニ當ル、支出金總額 152,320圓ノ中雜費 810圓ノ他ハ救済金ニシテ之ヲ種別シテ分節比例ヲ算出スレハ傷痍救済金 29.01%死亡救済金 21.51%特症救済金 14.06%脱退救済金 19.28%療養救済金 16.12%葬祭料 0.02%ニ當レリ、此ノ中特症救済金ハ他ノ組合ニ見サル所ニシテ肺結核ニ罹リ雇傭ヲ解カレタル者ニ給スル救済金ナリ 本年度ニ於テ一人平均 173圓70錢ヲ給與セリ、此ノ組合ハ傷痍救済ニ注意ヲ拂フコト大ナルモノアルカ如シ。

【爲替貯金局及地方逓信官署現業員共済組合】 大正五年度末ノ組合員總數ハ 36,330人ニシテ男 69.07% 女 30.93%ナリ、本年度中組合員ノ掛金總額ハ 179,233圓ニシテ一人平均 4圓93錢餘ニ當ル、此ノ外ニ政府ノ補助金 119,172圓アリ掛金總額ノ 66%餘ニ當レリ本年度中救済金ヲ受ケタル者 15,574人アリ組合員ノ 42.87%ニ當リ、此ノ被給與者中最モ多キハ 脱退給與金受領者ニシテ總被給與者ノ 67.20%ヲ占ム、脱退者ニ附帶給與スヘキ勤績給與金受領者ニ次キ 26.50%アリ、此ノ兩者ヲ合スレハ 93.70%ニ當リ殘 6.30%ノミ他ノ諸救済金受領者タリ、支出金總額 259,942圓ノ中 1,499圓ノ雜費ヲ除ケハ他ハ總テ救済金ニシテ 之ヲ種別シ分節比例ヲ算出スレハ傷痍給與金 0.80%疾病給與金 0.31%療養給與金 2.94% 死亡給與金 7.22%災害給與金 0.18%脱退給與金 59.84%勤績給與金 28.70%ニ當リ、是亦殆ト脱退者ノ爲ニ存立スルカ如キノ觀アリ。

XX. 教育及慈惠

【罹災救助基金】 大正四年度ニ於ケル罹災救助基金ノ支出總額ハ 113,927圓ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ約三分一弱ニ當リ、前五ケ年ノ平均ナル 707,558圓ニ比スレハ約六分一ナルノミ、即チ知ル本年度ハ救助ヲ要スル 罹災甚タ少ナカリシコトヲ、本年度支出額ヲ費途ニ依リテ別チ總數ニ對スル 分節比例ヲ算出シ、近キ五年度平均（明治四十三年度一大正三年度）ノ同一比例ト比スルニ避難所費ハ 0.34%ニシテ五年平均ヨリ低キコト 0.94%、食料費ハ 21.60%ニシテ五年平均ヨリ低キコト 23.47%、被服費ハ 3.66%ニシテ五年平均ヨリ高キコト 2.74%、治療費ハ 0.04%ニシテ五年平均ヨリ低キコト 0.40%、小屋掛費ハ 23.79%ニシテ五年平均ヨリ高キコト 12.56%、就業費ハ 50.29%ニシテ五年平均ヨリ高キコト 9.68%、雜費ハ 0.28%ニシテ五年平均ヨリ低キコト 0.17%ナリ。罹災ノ性質及罹災地ノ事情ニモ由ルカ 故ニ之ヲ一様ニ論シ難シト雖、就業費ノ多キヲ加ヘタルハ救助カ漸ク根本的ニ爲リタルノ 觀アリテ喜フヘキ兆ナルカ如シ。

大正四年度中支出罹災救助金ノ最モ多額ナリシハ岡山縣ノ 33,894圓ニシテ宮城縣ノ 16,463圓ニ次キ其ノ他鳥取縣ノ 11,561圓島根縣ノ 7,438圓徳島縣ノ 6,324圓等其ノ多額ナルモノニ屬セリ。

【救済人員】 大正四年中恤救規則ニ基キ國庫費ヲ以テ救済セル人員ハ 1,664人地方費ヲ以テ救済セル人員 9,687人國庫費救済者ニ地方費ヲ以テ補助セシ者 498人ナリ、明治四十二年以前ハ單ニ國庫費救済者ノミニシテ 公知ノ地方費救済ナカリシカ、同年以降地方費救済者アリ年々其ノ數ヲ増加スルモノ、如ク（地方費救済ノ統計ハ大正二年以後存ス）、從テ年々國庫費救済者ノ數ヲ減シタリ 本年中被救済者ノ死亡數及廢停數ヲ總員ニ比例スルニ 國庫費救済者ハ死亡 10.60%廢停 4.87%地方費救済者ハ死亡 12.44%廢停 31.42%國庫費及地方費救済者ハ死亡 11.85%廢停 5.82%ナリ、死亡モ廢停モ地方費救済者最モ高シ。

大正四年中ノ救済者ヲ地方別ニ見ルニ最モ多キハ滋賀縣ノ 1,073人ニシテ新潟縣ノ 939人岡山縣ノ 849人之ニ次キ其ノ他大阪府ノ 666人石川縣ノ 607人東京府ノ 569人廣島縣ノ 544人徳島縣ノ 532人等其ノ多キモノニ屬セリ。

大正四年中ノ救済人員ヲ種別シ 其ノ總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ 國庫費救済者ニ於テハ癡疾 30.77%老衰 22.30%疾病 37.26%幼弱 9.67%、國庫費及地方費救済者ニ於テハ癡疾 23.50%老衰 24.10%、疾病 18.67%幼弱 33.73%、地方費救済者ニ於テハ癡疾 9.37%老衰 34.02%疾病 31.17%幼弱 21.27%其ノ他 4.17%ナリ。

大正四年中ニ支出シタル救助金ハ國庫費 24,041圓地方費 110,542圓計 134,583圓ニシテ地方費ノ中 14,046圓ハ國庫費救済ノ者ニ補助シタルモノトス、此ノ金額ト前記ノ人員トヲ以テ一人平均ノ金額ヲ算出スルニ總數ニ於テハ 11圓36錢ニ當リ地方費ノミハ 9圓96錢ニ當レリ、國庫費ハ地方費補助ノ 分ニ對スル費額不明ナルカ 故ニ明瞭ナラス、假ニ國庫費ノミヲ以テ救済セル人員ヲ以テ國庫費ノ總額ヲ除スレハ 14圓45錢ト爲リ、國庫費救済人員ト國庫費及地方費救済人員トヲ合セ國庫費額ト地方費ノ 國庫費救済者ニ對スル補助額トヲ合セタルモノヲ 除スルニ 17圓62錢ト爲レリ、惟フニ國庫費救済者ハ之ヲ地方費救済者ニ比シテ 其ノ期間長キモノ多キナルヘシ、本年中救済費支出額ヲ地方別ニ見ルニ 國庫費ニ於テハ北海道ノ 5,209圓最モ多ク東京府ノ 2,117圓ニ次キ其ノ他青森縣ノ 1,956圓神奈川縣ノ 1,835圓廣島縣ノ 1,531圓、岡山縣ノ 1,329圓等多キモノニ屬ス、又地方費ニ於テハ東京府ノ 23,454圓大阪府ノ 23,235圓ヲ最モ多シト爲シ其ノ他岡山縣ノ 6,531圓新潟縣ノ 4,265圓廣島縣ノ 4,075圓兵庫縣ノ 3,580圓石川縣ノ 3,340圓等多キモノニ屬セリ。

【棄兒】 大正四年末現在ノ養育棄兒ハ 1,812人ニシテ之ヲ養育費ノ出所ニ依リテ分テハ 國庫費 330人國庫費養育者ニ地方費ヲ以テ補助スル者 1,013人地方費養育者 228人私費 241人ナリ、之ヲ總數ニ對スル 分節比例ト爲セハ 國庫費ノミ 18.21%國庫費及地方費 55.91%地方費ノミ 12.58%私費 13.30%ニ當ル、而シテ其ノ養育費ハ國庫費 9,627圓地方費 57,241圓ニシテ地方費ノ中 46,297圓ハ國庫費養育ノ者ニ補助シタル額ナリ、私費ノ養育費ハ 明瞭ナラサルカ 故ニ之ヲ除キ國庫費及地方費養育ノ 總數ニ就テ一人一箇年ノ平均養育費ヲ算出スレハ 42圓56錢ニ當リ、地方費ノミノ養育者ハ平均 48圓ニ當レリ。

大正四年末現在ノ養育棄兒ヲ 地方別ニ見レハ東京府ノ 912人最モ多ク大阪府ノ 127人長崎縣ノ 124人之ニ次キ 其ノ他佐賀縣 108人福岡縣 101人神奈川縣 61人岡山縣 41人等其ノ多キモノニ屬ス、又養育費ノ中國庫費ノ支出額最モ多キハ東京府ノ 4,689圓最モ多ク大阪府ノ 1,024圓ニ次キ佐賀縣 730圓神奈川縣 630圓福岡縣 468圓等其ノ多キモノニ屬シ、又地方費ノ 支出額ハ東京府ノ 46,289圓最モ多ク大阪府ノ 5,275圓ニ次キ其ノ他千圓以上ヲ支出シタルハ神奈川縣ノ 1,676圓アルノミ。

【行旅病人及行旅死亡人】 大正四年末現在ノ行旅病人ハ男 1,514人女 710人計 2,224人ニシテ前年末ヨリ少キコト 728人ナリ、大正四年中ニ新ニ救護ヲ受ケタル 行旅病人ハ 6,760人ニシテ之ニ前

年末現員ヲ合スレハ救護總員ハ 9,712人ト爲リ此ノ中 2,661人ハ死亡シ 4,827人ハ扶養義務者ニ引渡シタリ、此ノ死亡者ヲ救護總員ニ比スレハ其ノ 20.74%ニ當レリ、右ノ行旅病人ニ關シ道府縣費ヨリ辨償シタル金額ハ 243,396圓ニシテ前年ニ比シ 50,967圓ヲ増シタリ、此ノ辨償金ヲ最モ多ク支出シタルハ東京府ノ 130,185圓ニシテ之ニ次クハ大阪府ノ 26,629圓北海道ノ 22,347圓ナリ、其ノ他神奈川県ノ 8,266圓廣島縣ノ 6,697圓愛知縣ノ 5,300圓、福岡縣ノ 5,262圓等多キモノニ屬セリ。

大正四年中ノ行旅死亡人(行旅病人ノ死亡者ヲ含マス)ハ 3,763人ニシテ前年ヨリ少キコト 580人ナリ、之ヲ男女ニ分テハ男 3,114人女 649人ニシテ男 82.75%女 17.25%ニ當リ、之ヲ變死病死ニ分

XXI. 災

【水災】 大正三年中水災ニ罹リタル市町村數 3,820箇所ニ及ヒ之ヲ前年ニ比スレハ 604箇所ヲ増シタリ、就中多町村ニ涉リタルハ富山縣ノ 478箇所ニシテ新潟縣ノ 246箇所、福島縣ノ 239箇所、長野縣ノ 237箇所、静岡縣ノ 219箇所、茨城縣ノ 212箇所、埼玉縣ノ 201箇所等其ノ多キモノナリ、此ノ水災カ招ケル 諸損耗ハ見積リ 2,874萬圓ニシテ之ヲ前年ノ 4,771萬圓ニ比スレハ 1,897萬圓輕シ、又之カ復舊費ノ見積リハ 2,076萬圓ニシテ是ハ又前年ヨリ強キコト約 510萬圓ナリ、斯ノ如キハ前年ノ調査ニ於テ宮城、福島二縣ノ諸損耗カ頗ル大ナルモノアリシニ依ルモノニシテ 本年ノ復舊費カ過少ニ見積ラレタルニハアラサルカ如シ、本年ノ諸損耗見積リカ地方別ニ見ルニ富山縣ノ 708萬圓最モ大ニシテ 新潟縣ノ 487萬圓之ニ次キ其ノ他埼玉縣ノ 376萬圓静岡縣ノ 225萬圓栃木縣ノ 163萬圓群馬縣ノ 138萬圓等大ナルモノニ屬ス、又復舊費ノ見積リハ栃木縣ノ 451萬圓富山縣ノ 444萬圓最モ大ニシテ 新潟縣ノ 159萬圓静岡縣ノ 141萬圓神奈川県ノ 127萬圓 群馬縣ノ 117萬圓等其ノ大ナルモノニ屬ス。

【潮災】 大正三年中潮災ニ罹リタル市町村數ハ 277箇所ニシテ前年ヨリ多キコト 164箇所ナリ、殊ニ潮災多カリシハ長崎縣ノ 125箇所佐賀縣ノ 45箇所高根縣ノ 39箇所ニシテ熊本縣ニモ稍強キ潮災アリタレトモ 其ノ市町村數ノ調査ヲ闕ケリ、潮災ニ因ル諸損耗ノ見積リハ 864萬圓ニシテ前年ノ 160萬圓ニ比スレハ 五倍以上ニ當リ熊本縣ノ 422萬圓佐賀縣ノ 222萬圓福岡縣ノ 93萬圓長崎縣ノ 85萬圓等其ノ大ナルモノナリ、又之カ復舊費ノ見積リハ 226萬圓ニシテ前年 36萬圓ニ比スレハ約七倍半ナリ、是亦熊本縣ノ 85萬圓佐賀縣ノ 69萬圓長崎縣ノ 32萬圓等ヲ其ノ多キモノト爲ス。

【暴風雨被害】 大正三年中ノ暴風雨被害ニシテ水災ニ算ヘラレサルモノ 997市町村ヲ侵セルアリ、之ヲ前年ニ比スレハ 70箇所ヲ

テハ病死 1,250人變死 2,513人ニシテ病死 33.22%變死 66.78%ニ當リ、病死ヲ男女ニ分テハ男 85.44%女 14.56%ニ當リ、變死ハ男 81.42%女 18.58%ニ當リ、又男女ヲ變死病死ニ分テハ男ハ病死 34.32%變死 65.68%女ハ病死 28.04%變死 71.96%ニ當レリ、行旅死亡人中相續人ヨリ取扱費用ノ辨償ヲ得サリシ場合ニ遺留品ヲ賣却シ仍不足ナルカ爲道府縣費ヨリ辨償シタル金額ハ 16,086圓ニシテ前年ヨリ少キコト 4,654圓ナリ、此ノ辨償金ヲ最モ多ク支出シタルハ東京府ノ 2,618圓ニシテ大阪府ノ 1,926圓之ニ次キ其ノ他栃木縣ノ 934圓神奈川県ノ 842圓 静岡縣ノ 545圓埼玉縣ノ 508圓等多キモノニ屬セリ。

害

減ス、各地方中此ノ被害最モ大ナリシ山口縣ノ 142箇所ニシテ愛媛縣ノ 122箇所茨城縣ノ 120箇所之ニ次テ大ニ、其ノ他福岡縣ノ 93箇所和歌山縣ノ 59箇所三重、沖繩縣ノ共ニ 50箇所等大ナルモノニ屬ス、此ノ被害ニ因ル、諸損耗ノ見積リハ 410萬圓ニシテ前年ヨリ輕キコト 132萬圓ナリ、之ヲ地方別ニ見ルニ侵シタル市町村ノ箇所トシテ多カラサレトモ 損耗ノ最モ大ナルハ高知縣ノ 93萬圓ニシテ 愛媛縣ノ 86萬圓之ニ次ケリ、其ノ他山口縣ノ 57萬圓熊本縣ノ 47萬圓沖繩縣ノ 28萬圓 茨城縣ノ 22萬圓鹿兒島縣ノ 21萬圓等大ナルモノニ屬ス、又損耗見積リハ 前年ヨリ輕ケレトモ復舊費ノ見積リハ 前年ヨリ 21萬圓高キ 61萬圓ナリ、但シ地方別ニハ十萬圓以上ナルハ 唯富山縣ノ 16萬圓ト山口縣ノ 11萬圓トニアルノミ。

【火災】 大正四年中ノ火災度數ハ 16,475回ニシテ此ノ中 7.54%ハ放火度數ナリ、火災度數ヲ前年ニ比スレハ 1,408回ヲ減シタレトモ之ヲ十年前ナル 明治三十八年ニ比スレハ 其ノ百ニ對スル 110.5ニ増加セリ、放火度數モ亦前年ニ比スレハ 168回ヲ減シ 明治三十八年ノ百ニ對シテハ 105.9ニ増加シタリ、大正四年中ノ火災ノ爲シタル損害ノ見積金額ハ 1,627萬圓ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 12萬圓ヲ増シタリ、火災ノ度數ヲ地方別ニ見レハ東京府ノ 749回最モ多ク新潟縣ノ 630回兵庫縣ノ 622回之ニ次キ、其ノ他茨城縣ノ 574回千葉縣ノ 541回愛知縣ノ 529回廣島縣ノ 528回岡山縣ノ 527回長野縣ノ 509回等多キモノニ屬セリ、又損害高ノ百萬圓以上ナルハ東京府ノ 179萬圓宮城縣ノ 142萬圓島根縣ノ 126萬圓 神奈川縣ノ 103萬圓等ナリ、火災ノ度數ヲ月別ト爲セハ 地方ヲ異ニスルニ依リテ必スシモ同一ナラサルヘキ 大體ニ何レノ月ニ於テ最モ火災多キカヲ警告スルノ 料ト爲ヌ得、即チ明治三十九年以降大正四年ニ至ル十年間ノ事實ニ基キ 一年平均一日ノ火災度數千ニ付各

月平均一日ノ火災度數ノ 比例ヲ算出スルニ、其ノ最モ高キハ二月ノ 1,319ニシテ一月ノ 1,309之ニ次キ四月ノ 1,244三月ノ 1,239十二月ノ 1,236五月ノ 1,170ト次第シ 以上ヲ平均ヲ超越スル 火災多キ月トス、平均以下ノ火災最モ少キハ九月ノ 641ニシテ十月ノ 688之ニ次キ 七月ノ 707八月ノ 771六月ノ 855 十一月ノ 880ト上リテ五月ニ接續ス、要スルニ四月ノ三月ヨリ 高キト八月ノ七月ヨリ 高キトヲ破格トスレハ、二月ヲ頂嶺トシ、九月ヲ谷底トセル 一山

XXII. 衛

【醫師、齒科醫師、藥劑師、産婆、病院、藥種商及製業者】 大正四年末現在ノ醫師ハ 43,847人ニシテ前年ニ比シ 1,409人ヲ増シ、之ヲ年末ノ人口ニ比スルニ一萬ニ付 8.05ニ當レリ、管テ醫師ノ員數ニハ尠ナカラサル重覆アリ 明治三十四年ニ内務省ハ特ニ醫師及藥劑師ノ現在調査ヲ行ヒ一時ニ 23%餘ノ醫師ノ虚數ヲ除キタルコトアリシカ、當時人口一萬比例ハ 7.26ナリキ、然ルニ今ヤ其ノ比例ノ増加上記ノ如ク、又明治三十四年ヲ百ト爲シタル 大正四年ノ指數ハ 133.0ニ進メリ、是醫育機關ノ増設ニ依リ 新免許者多キカ爲カ、將タ再ヒ舊時ノ轍ヲ踏テ重覆ヲ來シツ、アルニアラサルカ 注意スヘキ現象ナリ、但シ茲ニ掲グル 醫師ノ員數ハ内務省カ醫師免許證ヲ下附シタル者ノ數ニシテ必スシモ 内地ニ在留シテ醫業ニ従事スル者ノ數ニアラス、外國在留者モ 植民地在留者モ包含シ、又陸海軍ノ醫務若クハ公務等ニ従事シ 一般社會ノ醫療トハ没交渉ナル者ヲ包含スルナリ、次ニ掲グル齒科醫師及藥劑師モ亦然リ。

齒科醫師ハ大正四年末現員 2,953人ニシテ 前年ニ比シ 582人ヲ増シ、明治三十四年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 556.1ニ當リ實ニ五倍半ノ増加ナリ、併シナカラ 之ヲ人口ニ比スルニ其ノ一萬ニ付 0.54ノミ即チ二萬ノ人口ニ對シ一人ノ齒科醫師アルニ過キサルカ故ニ尙未タ充實セリト言フ能ハサルナラン。

大正四年末ノ藥劑師ノ現員ハ 6,040人ニシテ前年ニ比シ 1,561人ヲ増シ、年末ノ人口一萬ニ對シテハ 1.11ニ當レリ、藥劑師モ亦明治三十四年現在調査ニ依リ 21%餘ノ虚數ヲ除キタリシカ爾來再ヒ増加シ、其當時ト比シ百ニ對スル 240.2ニ當ル約二倍半ノ増加ナリ、然レト藥劑師ハ素ト其ノ員數ノ少カリシモノナルカ 故ニ斯カル増加モ有リ得ヘシト認メラル。

産婆ハ大正四年末ニ於テ 31,856人ノ現員アリ、前年ニ比シ 808人ヲ増シ、年末ノ人口一萬ニ付 5.85ニ當ル、此ノ員數ヲ以テ見レハ助産機關ハ整ヘルカ如キモ、3萬有餘ノ産婆中ニハ所謂從來産婆限地産婆等モ少ナカラサルヘク、從テ實際ニハ尙幾多ノ新知識アル産婆ノ輩出ヲ要スルナラン。

病院ハ大正四年末ニ 1,057院アリ、前年ヨリ増スコト 42院ナリ、

一谷ヲ現スルナリ、而シテ大正四年ノ 月別ヲ之ニ對比スレハ六月ヨリ十一月マテ低ク其ノ他ノ高キコト同一ナレトモ 各月ノ間ニハ少ナカラス 不同ナルモノアリ、又大正四年ノ放火ノ度數ヲ其ノ多キモノヨリ排列スルニ必スシモ 火災度數ト一致セス、七月、六月ハ火災甚タ多カラサルニモ拘ハラズ放火多ク、二月、三月ノ火災多キニモ拘ハラズ放火トシテハ 敢テ多カラズ、是等ハ社會事情ト自ラ 因縁スル所アルモノ、如シ。

生

但シ茲ニ謂フ病院トハ 陸海軍ノ病院、傳染病院隔離病舎、娼妓病院等特殊ノ目的ヲ指セル 病院ヲ包含セス、一般社會ノ治療機關トシテノ働キアルモノ、ミノ 謂ヒナリ、之ヲ官公私立ニ別テハ官立 77院ニシテ前年ト増減ナク、公立 77院ニシテ前年ヨリ二院ヲ減シ、私立 973院ニシテ前年ヨリ 144院ヲ増セリ、此ノ總數ヲ人口ニ比スルニ百萬人ニ付 19院餘ニ當ル。

藥種商ハ大正四年末現員 28,036人製業者ハ同 1,831人アリ、前年ニ比シ藥種商ハ 493人ヲ減シ製業者ハ 257人ヲ増セリ。

【賣藥】 大正四年末ノ免許方數 88,156方アリ、前年ニ比シテハ 1,607方ヲ減シタレトモ十年前ナル 明治三十八年ニ比スレハ其ノ増加著シク、其ノ百ニ對シ 144.5ニ當ル、又大正四年中ノ賣藥印紙稅總額ハ 2,367,059圓ニシテ前年ニ比シ 13,477圓ヲ増シ、十年前ナル 明治三十八年ニ比スレハ 其ノ百ニ付 172.6ニ當リ 増加ノ度合著シキモノアリ、印紙稅額ヨリ 賣藥ノ定價ヲ推定シ、之ヲ人口ニ比スレハ一人ニ付 44錢ニ當ル。

【傳染病】 大正五年中ノ法定傳染病ヲ見ルニ、虎列刺ハ明治四十五年大正元年ニ小流行アリタル 後殆ト其ノ發生ナカリシカ、不幸ニシテ本年ハ病毒侵入シ 10,371人ノ患者 6,260人ノ死者ヲ出セリ、其ノ死亡比例ハ之ヲ既往ノ大流行時ニ比スレハ 多少低ケレトモ尙 60.36%ニ當リテ甚タ高シ、赤痢ハ本年モ亦 22,452人ノ患者 4,554人ノ死者ヲ出シ前年ヨリ患者 1,315人ヲ増セリ、其ノ死亡比例ハ 20.28%ニシテ既往ニ比シテ輕カリシカ如シ、腸壁扶斯ハ 41,918人ノ患者 8,396人ノ死者ヲ出シ、前年ニ比シ患者ノ多キコト 5,458人ニシテ明治二十九年以降始メテ見ル多數ナリ、其ノ死亡比例ハ 20.03%ニシテ是亦明治四十三年以降ノ高率ナリ、[バラチフス]ハ患者 6,781人死者 737人ニシテ前年ヨリ患者ノ少キコト 268人、死亡比例ハ 10.87%ナリ、痘瘡ハ患者 264人死者 48人此ノ死亡比例 18.18%、發疹瘰扶斯ハ患者 606人死者 117人此ノ死亡比例 19.31%、猩紅熱ハ患者 1,056人死者 50人此ノ死亡比例 4.73%、實布極利亞ハ患者 16,249人死者 3,960人ニシテ前年ニ比シ患者ノ少キコト 3,452人ナリ、其ノ死亡比例ハ 24.37%ニシテ之ヲ既往ニ比シ漸

次多少ノ下降ヲ見ルカ如クナレトモ而モ 其ノ歩武遅トシテ進マ
ス、治療血清ノ供給豊富ナル文明國トシテハ 尙甚タ高シト謂フヘ
シ、[ベスト]ハ此ノ年モ亦侵入シ 78人ノ患者 65人ノ死者ヲ出セ
リ、其ノ死亡比例實ニ 83.33%ナリ。

一年ヲ四分シ一、二、三月ヲ第一季トシ 四、五、六月ヲ第二季トシ
七、八、九月ヲ第三季トシ 十月、十一月、十二月ヲ第四季トシ 大正五年ノ各季
ニ於ケル各種傳染病ノ發生狀況ヲ見ルニ、虎列刺ハ第三季ト第四季
トニミ發生シ第三季ニ 68.90%第四季ニ 31.10%ヲ發生セリ、赤
痢ハ全年ヲ通シテ發生シタレトモ第一季ハ甚タ少ク 1.18%ノミ第
二季モ尙少ク 9.12%ナリシカ第三季ハ最も高ク 73.29%ヲ發生シ
第四季ハ大ニ減シタレトモ餘燼未タ滅セス 16.41%ヲ出セリ、腸
空扶斯ハ赤痢ニ比スレハ遙ニ平等的ニシテ第一季ニ於テ既ニ 12.05
%發生シ第二季ニハ 15.32%ノ發生ヲ見第三季最多クシテ 46.36
%ヲ發生シ第四季モ尙甚タ尠カラサシテ 26.30%ヲ出セリ、[パ
ラチフス]ハ大體腸空扶斯ト同型ナレトモ第一季第二季ノ低キコト
腸空扶斯ヨリ低ク第三季第四季ノ高キコト、腸空扶斯ヨリ高シ即チ
第一季ハ 6.52%第二季ハ 12.94%第三季ハ 53.36%第四季ハ 27.1
8%發生セリ、痘瘡ハ其ノ病毒侵入ノ時期ニ應シテ發生ヲ見併シ
ナカラ其ノ病性トシテ概シテ寒冷ノ候ニ多ク炎暑ノ候ニ少シ即チ
第一季 9.09%第二季 64.39%第三季 0.38%第四季 26.13%ヲ發生
セリ、發疹室扶斯ハ春季ニ多ク發生スルコト例年ノ例ノ如ク第一
季 26.40%第二季 58.42%第三季 14.36%第四季 0.82%ナリ、猩紅熱
ハ本邦ニ於テ其ノ數甚タ少ク 而モ其ノ發生ハ頗ル平等的ナリ即チ
第一季 26.23%第二季 30.68%第三季 14.39%第四季 28.69%ナリ
實布埜利亞ハ近キ既往ニ於テ 比較的全年平等ニ發生シタレトモ本
年ハ稍強ク第一季第四季ニ發生シテ第三季ニ少ナカリキ即チ第一
季 32.24%第二季 21.11%第三季 14.64%第四季 32.01%ナリ、[バ
スト]ハ其ノ病毒侵入ノ時ニ應シテ發生ス 本年ハ第四季ニ於テノ
ミ發生セリ。

大正五年中ノ各種傳染病ノ發生數ヲ地方別ニ見ルニ、虎列刺ハ
大阪府、兵庫縣ニ最も多ク、其ノ他長崎、福岡、山口、廣島等ノ諸縣ニ
多發シ、關東及東北ニハ全ク其ノ發生ヲ見サル地方モアリタリ、
赤痢ハ東北ニ於テハ宮城縣、中部ニテハ 長野縣及東京府、近畿ニ
テハ兵庫縣、中國ニテハ廣島縣、四國ニテハ 香川縣、九州ニテハ
福岡縣、熊本縣ニ多發セリ、腸空扶斯ハ全國殆ト平等ニ發生シタレ
トモ就中多キノ福岡縣ニシテ 其ノ東京府、大阪府、愛知縣、兵庫縣、
宮城縣等寧ロ衛生設備ノ佳良ナルヘキ大都市ヲ包有スル地ニ於テ
却テ多發セルヲ注意スヘキ現象ナリ、[パラチフス]ノ發生ハ大體
ニ於テ腸空扶斯ニ隨伴セリ、痘瘡ハ兵庫縣ニノミ多發シ大阪府及神

奈川縣ニ少シク發セリ、發疹室扶斯ハ東京府最多ク長野縣ニモ
稍多ク發生シタレトモ 其ノ他ハ殆ト總テ東北地方ニ發生セリ、猩
紅熱ハ東京京都二府ニ多發シ 其ノ他ハ甚タ少シ、實布埜利亞ハ東
京府最多ク福島縣ニ次キ 全國其ノ發生無キハ無ケレトモ概シ
テハ東北地方ニ多發セリ、[ベスト]ハ三重縣最多ク愛知縣ニ
次キ大阪府ニ一人ノ發生アリタリ。

【種痘】大正四年中ニ施行セル第一期第一回種痘ノ總員ハ 1,48
9,334人ニシテ中 2.54%ハ私種痘 997.46%ハ公種痘ナリ、此ノ種
痘人員中 38,570人ノ檢疹未了者ヲ除キ善感比例ヲ算出スレハ 94.9
0%ニ當リ、而シテ公種痘ノミハ 94.89%ニシテ私種痘ノミハ 95.5
7%ニ當ル、此ノ第一回種痘ノ不善感者及前年ノ不善感者等ニシテ
本年第二回種痘ヲ行ヒタル者 92,721人アリ、此ノ中 987.19%ハ公
種痘ニシテ 12.81%ハ私種痘ナリ、又此ノ第二回種痘者中檢疹未了
者 4,606人ヲ除キ善感比例ヲ算出スルニ 96.92%ニ當リ、是亦公種
痘ノミハ 69.37%ニシテ私種痘ノミハ 55.81%ナリ。

又大正四年中ニ施行セル第二期第一回種痘ノ總員ハ 1,058,662
人ニシテ中 6.80%ハ私種痘 993.20%ハ公種痘ナリ、此種痘人員中
19,564人ノ檢疹未了者ヲ除キ善感比例ヲ算出スルニ 58.00%ニ當
リ、而シテ公種痘ノミハ 58.11%ニシテ私種痘ノミハ 42.12%ニ當
レリ、又此ノ第一回種痘ノ不善感者及前年ノ不善感者等ニシテ第
二回種痘ヲ行ヒタル者 337,258人アリ 此ノ中 987.26%ハ公種痘ニ
シテ 12.74%ハ私種痘ナリ、又此ノ中檢疹未了者 5,499人ヲ除キ善
感比例ヲ算出スレハ 18.91%ニ當リ、公種痘ノミハ 19.01%私種痘
ノミハ 11.45%ニ當レリ。

【水道】本邦ニ於ケル上水道ハ明治二十年ニ横濱水道ノ成レル
ヲ最先トシ、爾來年ヲ追フテ増設シ、軌近殊ニ著シキ 歩武ヲ以テ増
加シ大正四年末ノ現在ハ 49箇所ニ其ノ竣成ヲ見タリ、就中最大ナル
東京水道ハ一日給水量 4,170萬瓦倫ヲ超へ、大阪水道ハ 2,075
萬瓦倫、京都水道ハ 917萬瓦倫、横濱水道ハ 808萬瓦倫、神戸水道
ハ 737萬瓦倫ヲ一日ノ平均給水量トス、斯ノ如キモ尙以テ満足スヘ
キニアラス、試ニ大正四年末ノ給水總戶數(自宅引用及共用給用合
計)ヲ大正二年末測ノ其ノ市ノ總戶數ニ比スルニ、上記ノ大水道ト
雖モ大ニ擴張スヘキ 要アルヲ見ル、即チ東京水道ハ東京市總戶
數ノ 59.11%ニ給水スルノミ、大阪水道ハ大阪市ノ 62.71%、京都水
道ハ京都市ノ 33.76%、横濱水道ハ横濱市ノ 57.61%、神戸水道ハ神
戸市ノ 47.51%ニ給水スルノミ他ハ推シテ知ルヘシ、然レハ前ニ怪
ミタル大都市ヲ包有スル 地方ニ於テ寧ロ腸空扶斯ノ發生多キ所以
モ亦決シテ偶然ニアラサルヲ思フナリ。

XXIII. 教 育

モノニ屬シ爾餘ノ各地方ハ 5—8學級ノ範圍内ニ在リ。
【小學校教員】大正四年末ニ於ケル全國小學校教員ハ 162,99
2ニシテ內尋常小學校ノ教育ニ従事スル者 142,122高等小學校ノ教
育ニ従事スル者 20,870ナリ、教員ヲ資格別ニ見ルニ本科正教員 1
17,580(72%)専科正教員 7,507(5%)准教員 15,629(10%)代用教員
22,276(13%)ニシテ內本科及専科正教員ハ逐年増加シ之ニ反シテ
准教員ハ逐年減少シ代用教員ハ稍増加ノ形勢ヲ示スト雖著明ナラ
ス、要スルニ小學教員ノ資格ハ漸次向上ノ趨勢ナルコト明カナリ、
小學校教員ヲ男女別ニ見ルニ男 117,182(72%)女 45,810(28%)ニ
シテ男女何レモ逐年増加スト雖殊ニ女教員増加ノ程度著シ。

【小學校兒童】小學校兒童數ハ大體ニ於テ 各地方人口ノ多少ト
伴ヘリ實數ニ就テ其ノ多少ヲ見ルニ東京 322,180兵庫 291,198北海
道 288,858新潟 271,667愛知 271,574福岡 268,071大阪 258,799廣
島 231,464静岡 222,878長野 211,282ハ何レモ二十萬以上ニシテ兒
童數多キモノニ屬シ鳥取 58,586沖繩 70,795宮崎 86,588山梨 87,5
32奈良 88,014高知 89,958福井 91,943島根 95,878滋賀 99,241ハ何
レモ十萬以下ニシテ兒童數少キモノニ屬シ 爾餘ノ各地方ハ皆十萬
臺ニ居レリ。

學校一ニ付兒童數ハ逐年増加シ 最近ニ於テハ一校平均 291人ノ
兒童ヲ收容セリ、各地方ニ就テ見レハ大阪 530東京 529兵庫 428
福岡 427 佐賀 426神奈川 424愛知 404等特ニ多ク之ニ反シテ岩手
169高知 178鳥取 195青森 196等ハ特ニ少シ。

【盲啞學校】盲啞者ニ對スル教育施設ハ逐年増加シ而モ其ノ程
度甚タ急速ナリ即チ明治三十五年度ト大正四年トノ 比較ニ於テ學
校數ハ 19ヨリ 71ニ教員ハ 101ヨリ 455ニ生徒ハ盲生 509ヨリ 1,
906ニ啞生 554ヨリ 1,167ニ卒業者ハ盲啞合計 96ヨリ 438ニ何レモ
増加セリ就中技藝科生ノ 増加著シクシテ 159ヨリ 1,036ニ同卒業
者ハ 22ヨリ 200ニ増加セリ各地方ニ就テ見レハ往々其ノ施設ナキ
モノアリト雖多クハ一校ヲ有シ多キハ 五校ヲ有スルモノアリ隨テ
其ノ生徒數モ多少アリ東京府ノ如キハ 568ニシテ之ヲ最多トシ次
テ京都 233大阪 208等多キモノニ屬シ 其ノ他ハ 100人内外及數十
人ノモノ多キヲ占ム。

【師範學校】師範教育施設ハ逐年増加シ大正四年度ニ於テハ學
校 92教員 1,696生徒總數 27,083內本科生男 16,613女 7,622ニシテ
同年度中本科卒業生男 5,076女 2,416ナリ 各地方ニ 就テ見ルニ何
レモ皆一校若ハ二校ヲ有シ生徒ハ東京 1,327福岡 1,120兵庫 966鹿
兒島 895大阪 888愛知 889熊本 820等多キモノニ屬シ 其ノ少キモ
ノト雖 200ヲ下ルコトナク概ネ 300—500ノ範圍内ニ在リ。

【學齡兒童】大正四年末ニ於ケル全國學齡兒童中既ニ就學ノ
始期ニ達シタル者ハ男 4,004,943女 3,726,995 合計 7,731,998ニシ
テ之ヲ人口ニ對比セハ男 14.6%女 13.8% 其ノ平均 14.2%ニ當
レリ、學齡兒童ノ就學歩合ハ從前甚タ不振ナリシカ 十數年以前ヨリ
俄カニ面目ヲ革メ近時著シク 優良ニ趣キ男 98%女 97%以上ノ就
學歩合ニ達シ尙逐次増歩ノ 形勢ヲ示セリ、男女平均ニ於テ各地方
學齡兒童就學歩合ノ多少ヲ比較スルニ 何レモ皆優良ニシテ特ニ劣
レルモノアルコトナシト雖 強テ其ノ多少ヲ摘記セハ宮城、岡山、奈
其、三重、廣島、佐賀、山形、山口、香川、石川、福島、茨城、大分、新潟、
静岡、岐阜、宮崎ノ各地方ハ 99.01—99.75%ノ範圍内ニシテ就學歩
合ノ高キモノニ屬シ之ニ反シテ 德島、沖繩、愛知、大阪、秋田、東京、
栃木、高知、青森ノ各地方ハ 94.88—98.00%ノ範圍内ニシテ上記各
地方ニ比スレハ稍遜色アルヲ免レス而シテ爾餘ノ各地方ハ 98—99
%ニシテ中位ニ屬スルモノトス。

【小學校數】大正四年度末ニ於ケル全國小學校數ハ 25,578校ニ
シテ市町村平均約二校ニ當レリ、之ヲ既往ト比較スレハ 多少減
少ヲ見ル是レ小學校ノ 合併ニ依ルモノトス、小學校ヲ尋常及高等
ノ種類ニ依テ見レハ大正四年度末ニ於テ尋常小學校 12,178校、尋
常高等併置ノ小學校 13,052校、高等小學校 348校ニシテ之ヲ既往
ニ週テ比較スルニ尋常科及高等科ノミヲ 置ク小學校ハ漸次減少シ
之ニ反シテ尋常高等併置ノ小學校ハ漸次増加セリ 但シ其ノ増加ハ
前二者ノ減少ニ及ハサルカ 故ニ結局前記ノ如ク小學校總數ニ於テ
減少ヲ見ルモノトス。

【學級數】大正四年度ニ於ケル全國學級ノ數ハ 146,599ニシテ
之ヲ既往ニ比スレハ 逐年漸々トシテ 増加シ十年前ノ 108,797ニ
對シテ 37,802ヲ増加シ又現行小學校令施行ノ 明治三十四年度ニ於
ケル 93,560ニ對シテ 53,039ヲ増加シ指數ヲ以テセハ最近ノ數ハ十
年前ノ數 100ニ比シ 134.8明治三十四年度ノ數 100ニ比シ 156.7ニ
相當ス。

前記ノ如ク小學校數ハ逐次減少スルニ反シ 學級數ハ逐次増加ス
ルカ故ニ結局一學校ニ付學級數ハ増加スヘク 換言セハ學校ノ内容
ハ漸次膨脹セリ、即チ一學校ニ付學級數ハ 明治三十四年度ニ於テ
3.43ナリシカ今ヤ 5.73トナリ過去十數年間ニ於テ増加セシモノ 2.
30學級ナリ、一學校ニ付學級數ハ地方ニ依テ多少逕庭アリ、就中
大阪 (10.19)東京 (9.79)佐賀 (8.88)兵庫 (8.31)香川(8.20)愛知
(8.11)福岡(8.05)等多キモノニ屬シ岩手(3.31)北海道 (3.61)青森
(3.63)高知 (3.87)島根 (4.00)鳥取(4.10)奈良(4.24)福島(4.40)和
歌山 (4.58)福井(4.58)宮城 (4.68)岐阜(4.76)新潟(4.86)等少キ

【高等師範】 高等師範學校ハ東京、廣島ニ各一校女子高等師範學校ハ東京、奈良ニ各一校アリ教員、生徒、卒業者何レモ逐年増加シ大正四年度ニ於テハ 高等師範ノ 教員 128生徒 1,062卒業者 245女子高等師範ハ教員 94生徒 693卒業者 191ナリ。

外ニ中等教員養成機關トシテ 臨時教員養成所アリ、従前數ヶ所アリシカ漸次減少シテ大正四年度ニハトナレリ其ノ教員 18ニシテ生徒ハ女子 181卒業者同シク女子 45ナリ。

【教員檢定】 教員檢定合格者ハ大正四年度ニ於テ小學校教員 12,112中等教員 833ニシテ之ヲ既往ニ比較スレハ 小學校教員ハ多少減少シ中等教員ハ一紙一弛常ナキカ 如シト雖是亦漸減ノ趨勢ナルカ如シ。

【中學校】 中學校ノ施設ハ諸種ノ教育施設中最モ著シク發達シツ、アルモノニシテ 全國ニ於テ明治三十二年ト大正四年度トノ比較ハ學校 191ヨリ 321ニ教員 3,102ヨリ 6,575ニ 生徒 69,179ヨリ 141,954ニ本科卒業生 4,206ヨリ 20,462ニ増加セリ就中生徒ノ増加特ニ著シクシテ學校ノ増加之ニ伴ハサルカ 爲一學校平均ノ生徒數ハ漸次増加シ明治三十二年ニ於テ本科生 362ノモノ 大正四年度ニ於テハ 442トナレリ、教員モ亦逐次増加シテ 生徒ノ増加ト雁行ノ姿ニアリ其ノ割合ハ教員一ニ付生徒 20-22ノ間ニ在リ。

各地方ニ就テ見ルニ何レモ皆中學校ノ施設ナキハナク 殊ニ東京ハ 36校ノ多數ヲ有シ次テ新潟、大阪ノ各 12校兵庫、岡山、廣島ノ各 11校福岡ノ 10校等多キモノニ屬シ沖繩、滋賀ノ各 2校青森、山梨、鳥根、宮崎ノ各 3校等少キモノニ屬シ 爾餘ノ地方ハ何レモ 4-9校ヲ有ス、生徒ハ東京ノ 17,989特ニ多ク 大阪 6,243福岡 5,840ハ稍多キモノニ屬シ其ノ少キモノハ 沖繩ノ 804滋賀ノ 931等ニシテ他ハ概ネ 1,000-3,000ノ範圍内トス、一學校ニ付生徒ハ 500以上ノモノ數校アルノ外他ハ何レモ 300-400ニシテ 300ヲ下ルモノハ一モ之アルコトナシ、教員一ニ付生徒ノ 割合ハ各地方間ニ大差アルコトナク約 20内外トス。

【高等女學校】 高等女學校モ亦其ノ發達著シキモノニシテ全國ニ於テ明治三十二年ト大正四年度トノ比較ハ學校 37ヨリ 223ニ教員 405ヨリ 3,526ニ生徒 8,587ヨリ 75,832ニ本科卒業生 904ヨリ 15,042ニ増加セリ、尙明治四十五年大正元年度ヨリ實科高等女學校ヲ施設スル所トナリ 大正四年度ニ於テハ學校 143教員 1,055生徒 20,117本科卒業生 4,607アリ。

各地方ニ就テ之ヲ見ルニ何レモ 皆高等女學校ノ施設ナキハナク 殊ニ東京ハ 28校ノ多數ヲ有シ次テ京都ノ 18校大阪ノ 12校愛知ノ 10校等多キモノニ屬シ 秋田、福井、山梨、徳島、沖繩ノ各 1校青森、茨城、富山、石川、滋賀、奈良、鳥取、高知、大分、鹿児島ノ各 2校ハ少キモノニ屬シ爾餘ノ各地方ハ何レモ 3-9校ノ範圍内ニ在リ、生徒

ハ東京ノ 9,365特ニ多ク次テ大阪 4,827京都 3,768岡山 3,168福岡 3,131等稍多キモノニ屬シ之ニ反シテ沖繩ノ 288秋田ノ 429山梨ノ 498ハ特ニ少ク尙數百人ノ少キ生徒ナルモノ 往々之アリト雖概シテ 1,000-3,000ノモノ多ク占ム、一學校ニ付生徒ハ 400-500内外ノモノ數校アルノ外ハ概ネ 200-300トス、教員一ニ付生徒ハ各地方間ニ大差アルコトナク 20内外ノ割ニシテ 就中鹿児島ノ 30.8徳島ノ 36.4ハ特ニ多數ノモノナリ。

實科高等女學校ハ大正四年度ニ於テ 北海道、岐阜、山梨、鳥根、沖繩ノ數地方ニ施設ナキモノアルノ 外他ノ各地方ハ何レモ皆之ヲ有シ殊ニ大分ノ 9校廣島、鹿児島ノ各 7校ノ如キ多キモノアリ、生徒ニ就テ見レハ兵庫ノ 931大分 906ハ特ニ多ク 他ノ各地方ハ約數百ノ生徒ヲ有スルモノトス。

一學校ニ付生徒ハ 200内外ノモノ多ク教員一ニ付生徒ハ 15-20ニシテ是等ヲ高等女學校ニ比スレハ尙遜色アルヲ免レス。

【専門學校】 (實科専門學校ヲ除ク) 大正四年度ニ於ケル専門學校ハ全國ニ於テ 60校アリ 内醫學藥學ニ關スルモノ 16校法學ニ關スルモノ 10校文學ニ關スルモノ 14校宗教ニ關スルモノ 20校美術2校及家政、音樂、體育、植民各 1校アリ又一學校ニシテ 二種以上ノ學科ヲ置クモノアリテ其ノ多キモノハ 法、文、商、理、工ノ五科ヲ併置スルモノアリ。

生徒總數ハ 30,988ニシテ 内本科生 17,350ナリ 又生徒總數中男 29,643ニシテ女ハ 1,345ナリ、而シテ各科中女生徒アルハ醫學、文學、教育學、家政學、宗教、音樂ニシテ他ノ諸科ハ皆男子ノミナリ、各科ニ就キ生徒ノ多少ヲ見レハ法學(8,899)最モ多ク醫學(5,636)經濟學(4,235)之ニ亞キ商科(3,225)文學(2,151)宗教 2,075更ニ之ニ亞ク 其ノ他ノ 諸科ハ 500-1,000ノモノ多ク 植民(221)體育(87)ハ特ニ少キモノニ屬セリ、本科卒業生ハ醫學最モ多クシテ 1,154ナリ次テ法學(441)商科(393)文學(345)經濟學(833)宗教(326)等ニシテ音樂體育ハ各 17ニ過キス。

【高等學校】 大正四年度末ニ於ケル全國高等學校ハ 8校ニシテ従前 6校又ハ 7校ナリシニ比スレハ僅ニ一ニ増加ニ過キスト雖其ノ教員、生徒、卒業生ニ至リテハ逐次増進シ 最近ニ於テ教員 365生徒 6,201卒業生 1,754アリ之ヲ明治二十八年ニ比スレハ生徒 44.6%卒業生 二倍半ヲ超ヘルニ至レリ。

【帝國大學】 大正四年度末ニ於ケル全國帝國大學ハ 4ニシテ其ノ分科 16トス内東京帝國大學ハ法、醫、工、文、理、農ノ六分科、京都帝國大學ハ法、醫、工、文、理ノ五分科、東北帝國大學ハ理、農、醫ノ三分科(理醫科ハ仙臺、農科ハ札幌)九州帝國大學ハ醫、工ノ二分科及各大學ニ大学院ヲ置ケリ。

東京帝國大學ハ講座 195教員 417、京都帝國大學ハ講座 119教員

191東北帝國大學ハ講座 48教員 197、九州帝國大學ハ講座 54教員 30ニシテ何レモ従前ニ比シ著シク増加セリ 即チ四大學合計ニ於テ講座ハ十年前ニ比シテ約二倍シ 教員ハ十年前ニ比シテ是亦二倍ヲ超ヘ十年前ニ比スレハ實ニ五倍セリ。

四帝國大學ヲ通シテ各分科ニ屬スル 學生生徒數ヲ順次ニ擧ケレハ法科 3,236(88%)農科 1,625(19%)醫科 1,478(17%)工科 1,330(16%)文科 572(6%)理科 350(4%)ナリ 従前帝國大學學生ハ皆男子ニ限リシカ最近ニ於テ 東北帝國大學理科大學ニ女子學生 3ヲ見ルニ至レリ、學生生徒トモ逐年増加シ最近ニ於テ學生ハ 7,736生徒ハ 1,960ニシテ之ヲ 既往ニ比スレハ 學生ハ十年前 100ニ對シ 132ニ十年前 100ニ對シ 492ニ 増加シ生徒ハ十年前 100ニ對シ 370ニ十年前 100ニ對シ 751ニ 當レリ、學生ノ 卒業生ハ最近ニ於テ法科 643、醫科 270、工科 330、文科 132、理科 65、農科 200ナリ尙外ニ生徒卒業生各分科ヲ通シテ 715アリ。

【實業補習學校】 實業補習學校ハ工業、農業、水産、商業、商船及上記ノ學科以外ノ學校ニシテ 内商船補習學校ノミ其ノ發達ヲ見サルモ他ノ各科ハ長歩ノ發達ヲナセリ 即チ現行實業補習學校規程施行ノ明治三十四年度ト最近トヲ比較スルニ 農業補習學校ハ其ノ進步特ニ著シクシテ 明治三十四年度末ニ於テ 123ナリシカ大正四年度末ニハ 6,528トナリ其ノ増率五倍以上トス 工業、水産、商業補習學校ハ其ノ發達上記農業ニ及ハサルコト 遙ニ遠シト雖猶五倍以上ノ増率ヲ以テ進ミ 最近大正四年度末ニハ工業 168水産 142商業 221校ヲ有ス生徒及修了者亦大體ニ於テ 校數ノ進步ニ伴ヒ増加ヲスルヲ見ルナリ。

【實業學校】 茲ニ實業學校トハ所謂中學校程度ノ實業學校ニシテ即チ 工業、甲種農業、乙種農業、甲種商業、乙種商業、水産、甲種商船ノ各學校ナリ 内水産學校ノ進步ナキト 甲種商船學校ノ進步遅々タルモノヲ除ケハ他ノ 諸科ハ何レモ 皆逐次發達セリ、現行實業學校今施行ノ年ハ多クハ 明治三十二年ニ屬スト雖統計様式變更ノ關係上當時ノ計數ト現時計數ト適切ニ比較スルコト能ハサルヲ以テ今最近十年間ノ事實ニ依テ見ルニ 其ノ校數工業ハ 30ヨリ 36ニ甲種農業ハ 66ヨリ 82ニ 乙種農業ハ 74ヨリ 181ニ甲種商業ハ 50ヨリ 68ニ乙種商業ハ 14ヨリ 38ニ何レモ増加セリ、生徒モ亦大體上記校數ト同様ノ趨向ヲ以テ 發達シ就中乙種農業(約四倍)乙種商業(約三倍)甲種商業(約二倍)ノ増加著シク 次テ甲種農業及工業學校生徒ナリト雖其ノ増率上記各生徒ニ及ハスシテ 僅ニ數割ノ増加トス 水産ノ進步ヲ見サルト 甲種商船ノ進步遅々タルハ前ニ校數ニ就テ見タル所ト同様ナリ、實業學校本科卒業生ハ 大正四年度ニ於テ工業男 5,792甲種農業男 13,654乙種農業男 17,671女 1,685甲種商業男 14,948女 93、乙種商業男 5,962女 292水産男 816女 14甲種

商船男 1,803ナリ。
【徒弟學校】 職工ノ教育機關タル徒弟學校ハ逐年其ノ進步著シキモノアリ同學校規定施行ノ年ナル 明治三十七年度ニ比スレハ學校ハ 40ヨリ 124ニ教員 231ヨリ 771ニ生徒 2,886ヨリ 14,557ニ本科卒業生大正四年度ニ於テ 3,191ナリ。

【實業專門學校】 實業專門學校ハ大正四年度末ニ於テ 22校アリ 内工業ニ關スルモノ 8校農業及商業ニ關スルモノ 各 7校トス、生徒ハ工業 2,888(内本科生2737)農業 1,597(内本科生1,245)商業 3,193(内本科生 2,587)ニシテ本科卒業生ハ工業 893、農業 447、商業 925ナリ。

既往トノ比較ニ於テハ何レモ皆其ノ發達著シキモノアリ即チ現行專門學校今施行ノ年ナル 明治三十六年度ト最近トヲ比スルニ學校ハ工業 3ヨリ 8ニ農業 2ヨリ 7ニ商業是亦 2ヨリ 7ニ増加シ生徒指數ハ明治三十六年度 100ニ對シ工業 280農業 341、商業 259ニシテ農業ノ増率最モ著シ。

【各學校入學志願者及入學者】 中學校、高等女學校、專門學校、高等學校、帝國大學ニ於ケル入學志願者ハ 逐年増加シ其ノ入學者モ亦漸次増加スト雖入學志願者増加ノ歩調急速ナルカ 爲入學割合ハ近時減少セリ 即チ入學志願者ニ對シ入學者ノ歩合最モ少キハ工業專門學校 19.25%ニシテ高等學校 21.73%醫學專門學校 21.76%之ニ亞キテ兩者伯仲ノ間ニ在リ農業 31.61%及商業 33.51%專門學校亦低キモノニ屬セリ中學校 48.33%高等女學校 59.13%ハ約半数ノ入學者モアルニシテ文學ノ 專門學校モ亦 53.09%ナルノ 外他ノ各校ハ概シテ入學者ノ率低シト云フヘカラス。

【海外官費留學生】 大正四年度末ニ於テ文部省ヨリ 91大正五年末ニ於テ外務省ヨリ 15合計 106ヲ出セル之ヲ前年ニ比スレハ 3ヲ増セシモ前々年ノ事實ニ比スレハ 數十人ヲ減少セリ是レ時局ノ影響ヲ被レルノ結果トス。

留學國中文部省ヨリ出ル者ニシテ最モ多キハ米國 52ニシテ英米獨ノ 16之ニ亞キ英米獨佛ノ 5更ニ之ニ亞ク外務省ヨリハ支那 6西班牙、葡萄牙各 3ニシテ其ノ他ノ諸國ニ 1又ハ 2ヲ出スモノアリ。

【公學費】 府縣、郡、市、町、村カ教育費ノ爲ニ支出スル費用ハ大正四年度ニ於テ 80,643千圓ニシテ内町村公學費 48,737千圓(60%)府縣 17,322千圓(21%)市公學費 12,295千圓(16%)郡公學費 2,289千圓(3%)ナリ之ヲ平均額トセバ府縣公學費ハ一府縣 368,558圓郡公學費ハ一郡 4,070圓市公學費ハ一市 173,169圓町村公學費ハ一町村 3,989圓ニ當レリ、公學費ハ 逐年増加シ之ヲ十年前ニ比スレハ 始年 100ニ對シ最近年ノ 指數府縣公學費 178郡公學費 210市公學費 185町村公學費 174ニシテ 郡公學費ハ二倍ヲ超ヘ其ノ他ノ各公學費何レモ二倍ニ近キ増加ヲ爲セリ。

市町村公學費中俸給ニ要スル額ハ大正四年度ニ於テ 36,312千圓ニシテ市町村公學費金額ノ 59.5%ニ當ル 上記俸給中小學校教員ノ俸給ハ 34,505千圓ニシテ俸給金額ノ 95%ニ當レリ。

小學校教員俸給ヲ既往ノ事實ト比較セシメテ十年前ノ明治三十九年度ニ於テハ 18,820千圓ニシテ之ヲ最近ノ金額ニ比スレハ其ノ増加 1倍83即チ約二倍セリ 若シ將來此ノ歩調ヲ以テ進マシムカ今後十年後ニ於ケル市町村小學校教員ノ俸給額ハ 63,144千圓ヲ要スルコトナルヘシ。

【公學收入】 府縣、郡、市、町村ノ公學收入ハ大正四年度ニ於テ 1 3,699千圓ニシテ内府縣公學收入 5,384千圓郡公學收入 699千圓市公學收入 2,597千圓町村公學收入 5,018千圓ニシテ何レモ前記公學費ヲ償フニ足ルモノナシ 即チ公學費ニ對スル收入ノ不足ハ總額ニ於テ 66,945千圓ニシテ 83%ニ當レリ、是皆地方費ヲ以テ支辨セラルルモノトス。

【出版圖書】 大正四年ニ於ケル出版圖書數ハ 49,181部ニシテ內著作 49,065翻譯 116ナリ之ヲ前年ニ比スレハ 2,618部ヲ増加シ十年前ニ比スレハ 20,320部ヲ増加シ指數ヲ以テセハ十年前 100ニ對

XXIV. 社 寺 及 教 會

【神社及神職】 大正五年末現在ノ神宮及官國幣社合計 175社前年ヨリ増スコト 4社、府縣社郷社村社合計 49,404社前年ヨリ減スルコト 171社、境外無格社 69,338社前年ヨリ減スルコト 1,725社、總計 118,917社前年ヨリ減スルコト 1,892社ナリ、斯ノ如キ神社ノ減少ハ郷社村社以下殊ニ境外無格社ニ合祀セラレタルモノ多キニ因ル。

大正四年末ノ神職總員ハ 14,619人ニシテ之ヲ大正四年末ノ所屬神社ニ分配シテ比例ヲ算出スルニ國幣社以上ハ一社平均 4.11人ノ神職アリ、府縣社ハ同 1.50人、郷社ハ同 0.99人、村社ハ 0.19人ニ當リ、即チ郷社ハ一社一人ト見ルヘク 村社ハ五社一人ニモ當ラス、境外無格社ニ至リテハ無所屬神職ノ 908人ト比スヘキモノニアラサルカ如シ、而シテ神職總員ヲ前年ニ比スレハ 277人ヲ増加シタレトモ之ヲ十年前ナル明治三十八年ニ比スレハ其ノ百ニ對スル 97.4ニ減シタリ、此ノ減少ハ主トシテ無所屬神職ニ於テ見タル所トス、神職總員ハ人口一萬ニ付 2.69人ニ當ル。

【寺院及住職】 大正四年末ノ寺院總數ハ 71,653箇所ニシテ前年ニ比シ 33箇所ヲ減ス、外ニ境外佛堂 36,247箇所アリ是亦前年ニ比シ 52箇所ヲ減ス、此ノ寺院數ヲ宗派別ト爲シ分節比例ヲ算出シ其ノ高キモノヨリ舉ケレハ眞宗ノ 27.40%最モ高ク曹洞宗ノ 19.85%ニ次ギ眞言宗ノ 17.20%淨土宗ノ 11.65%臨濟宗ノ 8.48%日蓮宗ノ 7.00%天台宗 6.37%相次第シ最モ少キハ華嚴宗 0.05%法相

シ最近ハ 170ニ當ル。

出版圖書ノ種類ハ産業 6,697(14%)及政事 6,132(12%)特ニ多數ナリ是ヨリ遙ニ下ニ宗教 2,895(6%)教育 2,696(5%)文學 2,210(4%)稍多キモノ屬シ 書畫 1,697(3%)交通 1,432(3%)醫事 1,307(3%)法律 1,258(3%)音楽 1,043(2%)小説 1,041(2%)地理 1,026(2%)天文 1,019(2%)之ニ亞キ他ニ尙諸種ノモノアリト 雖何レモ一千部以下ナリ。

【圖書館】 大正四年度末ニ於ケル全國圖書館數ハ官公立 394私立 506合計 900ニシテ所藏圖書冊數ハ官公立 2,115,913私立 1,9 44,059合計 4,059,972ナリ即チ一館平均官公立ハ 5,370冊私立ハ 3,842冊ナリ、又所藏圖書ヲ和漢洋ノ別ニ見レハ官公立ニ屬スルモノ和漢 93%洋 7%私立ニ屬スルモノ和漢 96%洋 4%ノ割合ナリ。

閱覽人員ハ官公立 4,682,349私立 2,256,976ニシテ之ヲ一圖書館一日ニ付平均人員ヲ算出セハ官公立ハ 33私立ハ 12トス。

圖書館ニ關スル諸種ノ事項ヲ既往ト比スレハ 何レモ其ノ發達著シキモノアリ即チ九年前ニ對シ 館數ハ約六倍シ圖書冊數ハ二倍半シ閱覽人員ハ約七倍セリ。

宗ノ 0.06%ニシテ融通念佛宗ハ 0.51%時宗ハ 0.69%黃檗宗ハ 0.7 3%ニシテ天台宗ノ次位ニ在リ、而シテ大正四年末ノ各宗寺院數ヲ前年ニ比スルニ 其ノ増加シタルハ一宗タニ無ク、黃檗宗、時宗、融 通念佛宗、法相宗、華嚴宗ハ 増減無ク、天台宗ハ 7箇所、眞言宗ハ 9 箇所、淨土宗ハ 2箇所、臨濟宗ハ 4箇所、曹洞宗ハ 1箇所、眞宗ハ 6 箇所、日蓮宗ハ 4箇所ヲ減シタリ。

大正四年末現在ノ住職總員ハ 51,584人ニシテ人口一萬ニ付 9.48 人ニ當ル、此ノ員數ヲ前年ニ比スルニ 601人ヲ増シタリ、之ヲ各 宗ニ就テ見ルニ増加シタルハ曹洞宗ノ 191人眞言宗ノ 189人日蓮 宗ノ 166人臨濟宗ノ 83人眞宗ノ 35人時宗ノ 10人黃檗宗ノ 4人融 通念佛宗ノ 3人法相宗ノ 2人計633人ニシテ、華嚴宗ニハ増減ナク、 減少シタルハ天台宗ノ 58人淨土宗ノ 24人計 82人ナリ、又此ノ住 職ノ員數ト寺院數トヲ對照スルニ 各宗共ニ住職ノ充實セルハ無ク 皆寺院ノ數ハ住職ノ數ヨリ多シ、試ニ一住職ニ對スル寺院ノ比 例數ヲ算出シ其ノ高キモノヨリ舉ケレハ法相宗 2.69華嚴宗 1.88眞 言宗 1.77天台宗 1.69融通念佛宗 1.64黃檗宗 1.55時宗 1.43臨濟宗 1.37眞宗 1.32淨土宗 1.31曹洞宗 1.27日蓮宗 1.24ニ當リ、總數ハ 1.39ニ當レリ。

【教會堂】 大正四年末現在ノ神佛以外ノ宗教用會堂及講義所ハ 1,411箇所アリ、之ヲ宗派別ト爲シ分節比例ヲ算出シ其ノ多キモノヨリ列舉スレハ、日本基督教會 17.36%、日本聖公會 15.31%、天主

公教及日本メソヂスト教會ハ共ニ 13.61%組合基督教會 9.57%、ハ リスト正教 9.43%、浸禮教會 4.68%、救世軍 2.91%、福音教會 1. 63%、美普教會 1.49%、福音路帖 0.71%、其ノ他 9.71%ナリ、又此 ノ年末現在數ヲ前年ニ比スルニ 22箇所増加セリ、之ヲ宗派別ニ見 ルニ其ノ減シタルモノハ浸禮教會ノミニシテ 福音教會ハ増減ナク 其ノ他ハ總テ多少ノ増加アリ最モ多キ増加ハ日本メソヂスト教會 ノ 5箇所トス。

【宗教宣布者】 大正四年末現在ノ神道十三派ノ中大成教ヲ除ク各 派ニ各 1人ノ管長アリ大成教ニハ管長事務取扱者 2人ヲ置ケリ、 神道各派ヲ合セテ教師 74,757人アリ、人口一萬ニ付 13.73ニ當ル、 此ノ教師ヲ男女ニ別テハ男 91.71%女 8.29%ニ當レリ、又生徒 2 49人アリ之ヲ教師ニ比スレハ其ノ 0.33%ナルノミ。

佛教ニ於テハ大正四年末現在管長 56人アリ、之ヲ宗派別ト爲セ ハ臨濟宗ニ 14人眞言宗ニ 12人眞宗ニ 10人日蓮宗ニ 9人天台宗ニ

XXV. 警 察

【警察官署及警察官】 大正四年末現在ノ警察署ハ 704署ニシテ 前年ニ比シ 2署ヲ減シ、警察分署ハ 499署ニシテ是亦前年ヨリ 9署 ヲ減シ、巡查及巡查部長派出所(警部補派出所ヲ含ム) 2,639所ニシ テ前年ヨリ増シタルコト 162所、巡查駐在所及巡查立番所ハ 14,1 52所ニシテ前年ヨリ 32所ヲ減シタリ、惟フニ警察署ハ大正元年末 最モ多クシテ漸次減少シ、警察分署ハ 明治四十三年末最モ多數ニ シテ是亦漸次減少シ、巡查及巡查部長派出所ハ 屢消長アリテ最近 ニ増加シ、巡查駐在所ハ昨年マテハ著シク 増加シ來リシカ本年ハ 減少セルナリ、此ノ官署ノ數ヲ 大正四年ノ行政区劃ノ數ニ對比ス ルニ警察署及警察分署ヲ合セテ一郡市ニ付平均 1.70署餘ニ當リ、 巡查及巡查部長派出所ハ一市平均 37.31署ニ當リ、巡查駐在所ハ一 町村平均 1.16所ニ當レリ。

大正四年末現在ノ警察官中警部、警部補、巡查ノ員數ヲ舉ケレハ 警部 1,465人警部補 1,226人巡查 39,855人ニシテ 之ヲ前年ニ比ス レハ警部 6人警部補 42人巡查 2,345人ヲ増シタリ、此ノ巡查ノ員數 ヲ年末ノ人口ニ比スルニ巡查一人ニ對スル人口ハ 1,366人ニシテ、 前年ノ同一比例 1,430ニ比シ 64人ヲ減シタリ、此ノ巡查ニ對スル 人口ノ比例ヲ地方別ニ見ルニ最モ巡查多キハ東京府ニシテ人口 53 4人ニ付一巡查アリ、大阪府及神奈川縣之ニ次キ 大阪府ハ人口 815 人ニ付神奈川縣ハ人口 840人ニ付一巡查アリ、京都府ハ人口 993 人ニ付兵庫縣ハ人口 1,101人ニ付愛知縣ハ人口 1,335人ニ付滋賀縣 ハ人口 1,353人ニ付長崎縣ハ人口 1,368人ニ付各一人ノ巡查アル比 例ナリ、是等ノ即チ巡查配置密ナル地方ニシテ 此ノ中滋賀縣マテ ハ全國平均以上ニ巡查アル 地ニシテ、長崎縣ハ平均ヲ超越スルコ

トス、各宗ヲ通シテ教師 66,607人アリ、此ノ中各宗寺院ノ住職ヲ兼ル者必ス多カルヘキモ今其ノ數ヲ詳ニセズ、教師ノ總員ヲ人口ニ比スルニ 其ノ一萬ニ 付 12.05トス、神道ノ教師ヨリ人口比例ノ少キコト 1.68ナリ、此 ノ教師ヲ男女ニ別テハ男 98.04%女 1.96%ニ當ル、佛教ニハ教師 ノ外ニ非教師 44,755人アリ、是ハ布教ニ從事セサル僧侶ノ謂ヒナリ、 惟フニ此ノ非教師中ニモ 各宗寺院ノ住職タルモノ 尠ナカラサルヘキモ今ハ其ノ數ヲ詳ニセズ、非教師ノ總員ヲ人口ニ比スルニ 其ノ一萬ニ付 8.22人ニ當リ教師ノ人口比例ヨリ低キコト 3.88ナリ、此ノ非教師ヲ男女ニ別テハ 男 93.85%女 6.15%ニ當ル、佛教 ノ生徒ハ各宗ヲ通シテ 8,088人アリ、之ヲ教師ノ數ニ比スルニ其ノ 百ニ付 12.14ニ當レリ。

神佛以外ノ宗教宣布者ハ大正四年末ニ於テ 2,381人アリ、之ヲ内 外人ニ別テハ本邦人 66.86%外國人 33.14%ニ當ル。

察

ト 2人ナリ、之ニ反シ巡查ノ配置稀疎ナル 地方ヲ舉ケレハ沖繩縣 ノ 2,210人ニ付一巡查アルモノ最モ少ク、之ニ次ク者熊本縣ノ人口 1,918ニ付一巡查、茨城縣及宮崎縣ノ共ニ人口 1,900ニ付一巡查アルカ如キ其ノ稀疎ナルモノタリ。

【檢舉及犯則者取扱】 大正四年中ニ檢舉シタル犯罪人並ニ取扱 ヒタル諸犯則人員ノ總數ハ 755,083人ニシテ 之ヲ前年ニ比スレハ 9,043人ヲ増シタリ、此ノ中刑法犯者ハ 291,870人ニシテ總數ノ 38.6 5%ニ當リ前年ニ比シ 6,849人ヲ減シ、陸海軍刑法犯者ハ 388人ニシ テ總數ノ 0.05%ニ當リ前年ニ比シ 53人ヲ増シ、警察犯處罰令違犯 者ハ 167,492人ニシテ總數ノ 22.18%ニ當リ前年ニ比シ 3,852人ヲ 増シ、諸條例諸規則違犯者ハ 72,027人ニシテ總數ノ 9.54%ニ當リ前 年ニ比シ 20,854人ヲ増シ、廳府縣ヨリ發シタル命令違犯者ハ 223,3 06人ニシテ總數ノ 29.57%ニ當リ前年ニ比シ 8,767人ヲ減シタリ、 而シテ刑法犯中最モ多キヲ占ムルモノハ竊盜ニシテ總刑法犯ノ 25 .06%ニ當リ前年ニ比シ 1,905人ヲ減シ、次ハ賭博及富籤ニ關スル 罪ニシテ總數ノ 23.51%ニ當リ是亦前年ニ比シ 8,972人ヲ減シタリ、 是等ノ犯罪者ノ減少ハ上記ノ如キ 刑法犯者ノ總數ヲ減少セシ メタルモノ、如ク、之ニ次テ多キ詐欺及恐喝罪ノ總數ノ 16.74%ニ 當リ前年ヨリ 759人多ク、傷害罪ノ總數ノ 6.46%ニ當リ前年ヨリ 342人ヲ増シタリ。

【盜難】 大正四年中ニ取扱ヒタル 盜難ノ總件數ハ 287,706件ニ シテ之ヲ類別スレハ強盜 0.53%竊盜 76.30% 擄奪 1.02%、拐帶詭 騙 22.15%ニ當ル、此ノ盜難件數ヲ人口ニ比スルニ其ノ千ニ付 5.2 8ニ當リ、此ノ係數ハ前年ニ比シテ 0.09ヲ減シタレトモ前年ヲ除

外スレハ明治四十一年以來ノ高率ナリ、強盗件數ハ前年ヨリモ増加シ明治三十七年以來始メテ見ル高率ニシテ之ヲ類別スレハ家ノ遭遇セルモノ最モ増加セリ、竊盜件數ハ前年ヨリモ減少シ之ヲ類別スレハ家ノ屋內 68.54%屋外 22.78%船 1.19%人 7.50%ナリ而シテ一般ニハ前年ヨリ低キニモ拘ハラズ家ノ屋外ト人ノ遭遇セル竊盜ハ前年ヨリモ増加セリ。

盜難ヲ其ノ遭遇シタル月ニ依リテ分チ一年平均一日ノ盜難千ニ付各月平均一日ノ盜難比例ヲ算出シ見ルニ 明治三十二年以降大正四年ニ至ル十七年間ノ平均ニ於テハ三、四月ニ稍多ク六月最モ少ク夫レヨリ漸次多キヲ加ヘ十二月最多ト爲ル、即チ八月ヨリ十二月マテノ五箇月ハ平均以上ニシテ他ノ七箇月ハ平均以下ナリ、然ルニ大正四年ノ盜難月別ハ大ニ其ノ型ヲ異ニシ平均以上ナルハ二月、四月、五月、八月、十二月ニシテ最高ノ十二月ナルハ同斷ナレトモ之ニ次クハ五月、四月ニシテ最低ハ三月ニ在リ六月之ニ次キ十月又之ニ次ク、斯ノ如キハ何等カ基ツク所ノ社會的因由アリヤ將タ偶然ノ結果ナリヤ今其ノ原因ヲ詳ニモセズ、次ニ大正四年ノ盜難ヲ種類ニ依リ月別ニ觀察スルニ、竊盜ハ盜難全體ト同型ニシテ強盜ハ少シク之ト異ナリ平均以上ナルハ一月、四月、八月、十月乃至十二月ノ六箇月ニシテ最高ノ十二月ナルト最低ノ六月ナルトハ一般盜難ト同一ナレトモ一月カ高キ第二位ニ居リ八月カ第三位ニ居ルハ異型ナリ、又拘摸ハ平均以上ノ月一月三、四、五月、九月十一、十二月ノ六箇月ニシテ十二月最モ高キコト他ノ盜難ト同様ニシテ十一月之ニ次キ五月第三位ニ在リ八月ヲ最低ト爲ス、是等ノ現象モ之ヲ仔細ニ觀察セハ恐ラク偶然ナラサル特殊ノ社會的關係ニ基ツクモノナルヘキモ今ハ唯事實ヲ呈露スルニ止メント欲ス。

【被殺害者】 大正四年中警察上取扱ヒタル被殺害人員ハ 2,556人ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 245人ヲ減シタリ、併シナカラ是ハ前ノ被殺害者カ著シク多カリシカ爲メニシテ之ヲ前年マテノ五年平均 2,352人ニ比スレハ本年ハ 204人ノ増加ナリ、此ノ被殺害者ヲ人口ニ比スルニ大正四年ハ其ノ百萬比例 47人ニ當レリ、又被殺害者ヲ其ノ殺害スルニ至レル原因ニ依リテ分テハ最モ多キモノハ爭論又ハ一時ノ怒ニ因ルモノニシテ總數ノ 13.16%ヲ占メ痾情又ハ嫉妬ニ因ルモノ之ニ次キ 8.80%怨恨ニ因ルモノ 4.54%等其ノ多キモノニ屬ス。

【災害死者】 大正四年中警察上取扱ヒタル災害其ノ他ノ事故ニテ死セシ人員ハ 16,594人ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 2,160人ヲ減シ、之ヲ前年マテノ五年平均ニ比スレハ 64人ヲ増セリ、又之ヲ人口ニ比スルニ大正四年ハ其ノ百萬ニ付 304ニ當ル、此ノ死者中最モ多キハ過失ニ因リ汽車電車等ニ觸レル者ニシテ總數ノ 52.23%

ヲ占メ、途中ニテ發病之ニ次キ 8.84%、難船 5.11%鐵業 4.28%等其ノ多キモノニ屬ス。

【自殺】 大正四年中警察上取扱ヒタル自殺者ハ 12,564人ニシテ之ヲ男女ニ分テハ男 7,939人女 4,625人ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ男ハ 139人女ハ 2人ヲ増セリ、又前年マテノ五年平均ナル男 7,199人女 4,263人ニ比スレハ男 740人女 362人ヲ増セリ、又之ヲ各性人口百萬ニ比スルニ男ハ 289人女ハ 171人ニ當ル、試ニ此ノ比例數ヲ十年前ナル明治三十八年ノ同一比例男 237人女 156人ニ比スレハ男女共ニ増加シ殊ニ男ノ増加著シク三十八年ノ百ニ對スル 121.9ニ當リ女ハ同ク 109.6ニ當レリ、自殺者ヲ其ノ手段ニ依リテ分チ各性ノ總數ニ對スル手段別ノ分節比例ヲ算スルニ 男女共ニ最モ多キハ縊死及入水ニシテ之ニ次キテ縊死第三ニ居ル、併シナカラ各手段ノ比例數ハ男女ノ間頗ル不同アリ、即チ縊死ハ男 55.56%ニシテ過半ヲ占ムレトモ女ハ 40.58%ニシテ尙未タ半數ニ達セス、入水ハ男 18.39%ニシテ縊死ノ半ハニ達セサレトモ女ハ 41.04%ニシテ寧ろ縊死ヨリ多ク、縊死ハ男 15.68%女 10.59%、刃物ヲ用ヒタルハ男 4.25%ナレトモ女 2.75%ナルノミ、毒ヲ仰ケルハ男ハ 4.20%ナレトモ女ハ刃物ヲ用ヒタルヨリモ多ク 4.74%ナリ、銃死ハ最モ少ク男 1.98%女 0.30%ナリ、自殺ノ手段ニ於テモ自ラ男女ノ別ノ截然タルモノアルヲ見ルヘシ。

明治三十二年以降大正四年ニ至ル十七年間ノ自殺者ヲ月別ト爲シ一年平均一日ノ自殺千ニ付各月平均一日自殺比例ヲ算出スレハ、自殺ハ夏季ニ多ク冬季ニ少ク七月ヲ頂嶺トセル急峻ナル山ヲ形成スルナリ、即チ四月乃至九月ノ六箇月ハ平均以上ニシテ最高ノ七月ハ 1,262ニ當リ最低ノ十二月ハ 748ニ當ル、唯茲ニ一ノ奇異ナル現象ハ均シク高位ニ在レトモ六月ハ五月七月ノ間ニ挿マレテ一段低ク截痕狀ヲ呈スルコトニシテ、彼ノ雙蹄山テフ筑波山ノ形貌ニ似タリ、何故ニ斯カル截痕アルカ、所謂梅雨期ナル此ノ六月多雨ノ際ハ自殺者ヲ少クスル何等カノ原因ノ働アルカ、兎モ角モ注意スヘキ現象ナリ、而シテ大正四年ノ自殺者ヲ月別ニ觀察スレハ、最高點カ七月ニアラスシテ五月少シク夫ヨリモ高キヲ異ナリト爲スノミ、六月ノ截痕アルモ十二月ノ最低ナルモ全ク十七年間ノ觀察ト異ナル所ナシ。

大正四年ノ各性自殺者ヲ年齢ニ依リテ別チ各分節比例ヲ算出スレハ十六歳未滿者ハ男 1.24%女 1.79%ニシテ最モ少ク、十六歳以上二十歳未滿ハ男 5.29%女 10.52%ニシテ女ハ此ノ年齢ニ於テ既ニ稍多ク、二十歳以上三十歳未滿ハ男 22.99%女 26.39%ニシテ此ノ年齢ニ於テモ女ノ比例高ク、三十歳以上四十歳未滿ハ男 15.26%女 14.84%ニシテ此ノ年齢ヨリ女ノ自殺者減シテ男ノ比例高ク、四十歳以上五十歳未滿ハ男 13.59%ニシテ女ハ 10.70%五十歳

以上ハ男 41.63%女 36.26%ニシテ男愈々高ク、此ノ外ニ年齢不詳者アリ男ハ總數ノ 3.34%ニ當リ女ハ同ク 0.95%ニ當ル。

大正四年ノ各性自殺者ヲ其ノ自殺ノ因由ニ依リテ分チ各分節比例ヲ算出スレハ男女共ニ最モ多キモノハ精神錯亂ニシテ男ハ 26.02%女 27.81%ヲ占メタリ、次ハ痾情ニ因ルモノ男 20.49%女 22.64%女ハ斯カル苦惱ニモ耐ヘ能ハサルコト男ヨリモ多シ、活計ノ困窮又ハ薄命ヲ嘆キテ自殺セルモノ男ハ 8.84%女ハ 5.27%男ハ生活ノ維持者タルコト女ヨリモ多キタケニ此ノ原因ニ襲ハル、コト強シ、痾情又ハ嫉妬ニ因ルモノ男ハ 1.11%女ハ 2.40%女ニ此ノ原因ノ働キ強キハ寧ろ當然ナラン、前非ヲ悔ヒ又ハ慚愧ニ耐エス自殺セル者男 1.50%女 0.91%女ノ廉恥ヲ知ル者少シト言フニアラサレトモ所謂男子ヲシキ自殺ノ男子ニ多キモ亦當然ナルヘシ、親族ノ不和ニ因ルモノ男 2.04%女 4.98%意志弱キ女ノ特質ハ茲ニモ現ハレタリ、罪ノ發覺ヲ懼レヌハ刑ノ免レ難キ爲ニ自殺セル者男 2.13%女 0.65%斯カル機會ニ遭遇スルコト男ハ女ヨリ遙ニ多カルヘシト想像セラル、將來ノ事ヲ苦慮セルニ因ル自殺男女共ニ 1.90%ナルハ必スシモ偶然ナラサルヘシ、商業等ノ爲損失シ又ハ負債償却ニ困ミテ自殺セル者男ハ 3.57%女ハ 0.48%ナリ、是亦家計ノ維持者トシテノ男ニ此ノ苦惱多カルヘキハ多言ヲ要セサル所ナラン、淫逸放蕩ノ末自殺ノ巴ムナキニ陷レル者男 2.12%女 0.41%斯カル原因カ女ニモ存スルハ寧ろ嘆スヘク而モ男ノ五分一以上ナルハ驚クヘキ世態ナリト謂ハンカ、雇主又ハ父兄等ノ懲戒又ハ譴責ニ因ル者男 0.71%女 1.15%斯カル機會ニ遭遇スルコト男ニ多カルヘキモ尙且ツ女ノ比例高キハ上來謂フ所ノ女ノ特質ノ然ラシムル所ナルヘシ、離縁ヲ愁ミテ自殺セル者男 0.23%女 1.34%男ニモ亦斯カル原因ニ依リテ自殺ノ擧ニ出ツル者女ノ五分一アルハ注意スヘシ、夫ハ子等ノ不行狀ヲ歎キテ自殺セル者男 0.25%女 0.52%女ハ男ヨリモ其ノ場合多キノミナラス是モ亦所謂女ヲシキ自殺トヤ言ハンカ、私通姪姪ヲ憂ヒテ自殺セルモノ男ニ無クシテ女ニノミ 1.25%アリ老衰ノ身ノ不自由ヲ苦慮シテ自殺セル者男 1.42%女 2.31%女ハ男ヨリモ高齢者多キハ從テ此ノ原因ノ働キ多キニ至ルナルヘシ、婚

XXVI. 裁判及登記

【裁判所及司法職員】 大正四年末現在ノ裁判所總數ハ 242箇所ニシテ之ヲ區別スレハ大審院 1、控訴院 7、地方裁判所 50、區裁判所 184トス、此ノ裁判所數ハ大正二年ニ 128箇所ヲ減シテ以來増減ナキモナリ。

大正四年末現在判事ハ 818人ニシテ前年ヨリ 4人ヲ減シ、檢事ハ 379人ニシテ前年ヨリ 1人ヲ増シ、司法官試補ハ 215人ニシテ前年ヨリ 55人ヲ増シ、書記長 8人増減ナリ、書記 3,582人前年ヨリ 1

如ヲ忌ミテノ自殺者男ハ 0.08%女ハ 0.61%男ニ取リテハ是敢テ重大ノ原因ナラサレトモ女ニハ決シテ易キタル原因ニアラスト知ラレタリ、身體ノ不具ナルヲ歎キテ自殺セル者男 0.35%女 0.63%形貌ヲ尊フ女ニハ左モアルヘキコトナランカ、鬱憂ニ因ル自殺者男 0.86%女 2.14%此ノ曖昧ナル原因モ女ノ多クカ陰鬱ナルタケ女ニ働クコト強キヲ當然視セラル、ナリ、親又ハ夫妻ノ痾氣ヲ苦ニシテ自殺セル者男 0.20%女 0.37%親又ハ夫妻若クハ子等ノ死去ヲ歎キテ自殺セル者男 0.38%女 0.71%アリ、此ノ兩原因ノ死去ニ強クシテ痾氣ニ弱キハ自ラ然ルヘク而シテ共ニ女ニ強ク男ニ弱キモ其ノ女ヲシキ男ヲシキ所ナルヘク見ラル、ナリ、以上列記以外ノ原因ニ依リテ自殺セル者男ニ 16.40%女ニ 17.64%アリ、原因不詳ノ自殺者男ニ 9.67%女ニ 3.94%アリ。

【警察上賞與及賞詞】 大正四年中ニ警察上ノ功ニ依リ金圓ヲ賞與セル人員 33,083人ア之ヲ前年ニ比シ 419人ヲ減シ、賞詞ヲ交付セル人員 4,256人アリ是亦前年ニ比シ 238人ヲ減セリ、是等受賞者ヲ警察事務ニ從事スル者ト職務ノ爲ニアラサル者トニ分テハ警察事務ニ從事スル者ハ賞與者ニ 88.38%賞詞者ニ 67.65%アリ、職務ノ爲ニアラサル者ハ賞與者ニ 11.62%賞詞者ニ 32.35%アリ、而シテ一人平均賞與金額ハ警察事務ニ從事スル者 1圓13錢餘、職務ノ爲ニアラサル者 1圓22錢弱ニ當ル、賞與者及賞詞者ヲ合セテ其ノ受賞ノ事由別ニ分節比例ヲ算スレハ警察事務ニ從事スル者ノ約 98%マテ犯罪人ノ搜查檢舉又逮捕ニ由ルモノニシテ、職務ノ爲ニアラサル者ノ約 82%マテハ人命救助ニ由ルモノナリ。

【退隱料、遺族扶助料等】 大正四年末現在ノ退隱料受領者巡査 14,074人警部補 651人此ノ金額一人平均巡査 58圓20錢餘警部補 79圓50錢弱、同遺族扶助料受領者巡査 3,019人警部補 45人此ノ金額一人平均巡査 22圓73錢弱警部補 35圓47錢弱ナリ、又大正四年中ニ退職一時金療治料、給助料及弔祭料ヲ受ケタル者巡査 3,332人警部補 65人アリ、其ノ金額平均一人巡査 28圓76錢弱警部補 62圓88錢弱ニ當ル。

入ヲ増シ、執達吏 577人前年ヨリ 11人ヲ増シ、辯護士 2,665人前年ヨリ 179人ヲ増シ、公證人 285人前年ヨリ 11人ヲ減シ、破産管財人 493人前年ヨリ 20人ヲ減セリ、此ノ職員ヲ裁判所別ニ見レハ大審院ハ判事 26人檢事 7人、控訴院ハ平均一院判事 10人檢事 3.9人、地方裁判所ハ平均一箇所判事 7.1人檢事 2.5人司法官試補 3.6人、區裁判所ハ平均一箇所判事 3.4人檢事 0.9人司法官試補 0.14人ニ當ル、又辯護士ハ一地方裁判所ニ付平均 53.3人アリ、公證人

ハ同 5.7人、破産管財人ハ同 9.9人アリ、執達吏ハ一區裁判所平均 3.1人アリ。

甲、民事裁判

大正四年ノ事實ニ就テ先ツ裁判所ノ民事事務ヨリ之ヲ觀ン。

【區裁判所】 區裁判所ニ於テ取扱ヒタル民事事件數ハ總テ 955,322件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 94,655件多ク即チ前年ノ件數ノ 11.00%ヲ増加シタリ、又本年中ノ新受件數ハ 916,045件ニシテ之ヲ前年ニ比シ 87,393件多ク即チ前年ノ件數ノ 10.55%増シタリ、又本年中ノ終局件數ハ 909,813件ニシテ是亦前年ニ比シ 88,837件多ク即チ前年ノ件數ノ 10.82%増シタリ、此ノ終局件數ヲ區裁判所ニ屬スル判事總員ニ比スルニ一人平均 2,492.6件ニ當リ之ヲ前年ノ同一比例 2,201.0件ニ比スレハ 291.6件ヲ増シタリ。新受件數ノ事件ノ種類ニ就テ前年ト比スルニ和解事件ハ 26件ヲ増シ、督促件數ハ 60,162件ヲ増シ、第一審訴訟件數ハ 16,801件ヲ増シ、抗告件數ノ中前年マテ存シタル身分登記ニ關スル 抗告件數ハ戶籍法改正ニ依リ絶無ト爲リタルカ故ニ本年ハ戶籍ニ關スル 抗告件數ノミ即チ總抗告件數トシテハ 1,700件ヲ減シタリ、強制執行件數ハ 2,262件ヲ増シ、家賃分散件數ハ 72件ヲ増シ、非訟事件ノ數ハ 9,766件ヲ増シ、再審件數ハ 6件ヲ減シタリ、即チ抗告ト再審トヲ除キタル他ノ總テカ増加シタル中ニモ督促事件最モ著シキ増加ナリキ、又此ノ新受件數ノ種類別ノ分節比例ト爲セハ和解事件 0.08%督促事件 48.33%第一審訴訟事件 24.31%戶籍ニ關スル 抗告事件 0.01%強制執行 3.25%家賃分散 0.03%非訟事件 23.98%再審 0.00%ナリ。

【地方裁判所】 地方裁判所ニ於テ取扱ヒタル民事事件數ハ總テ 36,582件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 855件多ク、即チ前年ノ件數ノ 2.39%ヲ増シタリ、又本年中ノ新受件數ハ 25,481件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 875件多ク、即チ前年ノ件數ノ 3.56%ヲ増シタリ、又本年中ノ終局件數ハ 24,820件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 195件多ク、即チ前年ノ件數ノ 0.79%ヲ増シタリ、此ノ終局件數ヲ地方裁判所ニ屬スル判事ノ總員ニ比スルニ一人平均 70.2件ニ當リ之ヲ前年ノ同一比例 71.2件ニ比スレハ 1.0件ヲ減シタリ、又新受件數ヲ事件ノ種類ニ依リテ別チ前年ト比スルニ第一審訴訟件數ハ 140件ヲ増シ、控訴件數ハ 735件ヲ増シ、抗告件數ハ 194件ヲ減シ、破産件數ハ 23件ヲ増シ、非訟事件ハ 161件ヲ増シ、再審件數ハ 7件ヲ増シタリ、又此ノ新受件數ノ種類ニ依リテ分チ分節比例ト爲セハ第一審訴訟事件 61.76%控訴 26.55%抗告 5.87%破産宣告 0.84%非訟事件 4.93%再審 0.05%ナリ。

【控訴院】 控訴院ニ於テ取扱ヒタル民事事件數ハ總テ 4,149件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 319件少ナク、即チ前年ノ件數ノ 7.14%ヲ減シタリ、又本年中ノ新受件數ハ 2,169件ニシテ之ヲ前年ニ比ス

レハ 164件少ナク、即チ前年ノ件數ノ 7.03%ヲ減シタリ、又本年中ノ終局件數ハ 2,301件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 187件少ク、即チ前年ノ件數ノ 7.52%ヲ減シタリ、此ノ終局件數ヲ控訴院ニ屬スル判事ノ員數ニ比スルニ一人平均 31.1件ニ當リ之ヲ前年ノ同一比例 33.4件ニ比スレハ 2.3件ヲ減シタリ、又新受件數ヲ事件ノ種類ニ依リテ分チ之ヲ前年ニ比スルニ控訴件數ハ 198件ヲ減シ、抗告件數ハ 24件ヲ増シ、特別訴訟 3件ヲ増シ再審 1件ヲ増シタリ、又此ノ新受件數ヲ事件ノ種類ニ依リテ分チ分節比例ト爲セハ控訴 86.81%抗告 12.31%特別訴訟 0.51%再審 0.37%ナリ。

【大審院】 大審院ニ於テ取扱ヒタル民事事件數ハ總テ 2,400件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 385件多ク、即チ前年ノ件數ノ 19.11%ヲ増シタリ、又本年中ノ新受件數ハ 1,795件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 121件多ク即チ前年ノ件數ノ 7.23%ヲ増シタリ、又本年中ノ終局件數ハ 1,269件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 558件多ク即チ前年ノ件數ノ 78.48%ヲ増シタル著シキ進捗ヲ爲シタリ、此ノ終局件數ヲ大審院ニ屬スル判事ノ總員ニ比スルニ一人平均 48.8件ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例 28.4件ニ比スレハ 20.4件ノ増加ナリ、又總件數ヲ事件ノ種類ニ依リテ分チ之ヲ前年ニ比スルニ上告書ハ 394件ヲ増シ、抗告書ハ 9件ヲ減シタリ、又此ノ總件數ヲ種類別ト爲シ分節比例ヲ算出スレハ上告書 70.83%抗告書 29.17%ニ當レリ。

次ニ大正四年ノ民事裁判ヲ其ノ區分ニ依リテ觀察セン。

【和解事件】 和解事件ノ總件數ハ舊受 23件新受 715件計 738件ニシテ上記ノ如ク前年ニ比シテコソ 僅ニ増シタルトモ之ヲ既往ニ比スレハ寔ニ著シキモノアリ、即チ明治二十三年ニハ 89萬件ノ多キモノアリシカ爾來年々大減少ヲ爲シ二十八年ニハ 12,000件ト爲リ、三十三年ニハ 4,000件ニ下リ、三十八年ニハ 1,000件ニマテ下リヌ、斯ノ如キ大減少ハ、要スルニ裁判所ヲ煩ハスマテモナク辯護士ニ依リテ和解ノ取結ハルモノ多キヲ増スニ由ルモノナラン、本年中ノ和解事件ノ佳良ノ結果ヲ得タル 329件ニシテ總件數ノ 44.58%ニ當リ、取又ハ却下 84件アリ、遂ニ不調ニ陥リタルモノ 296件アリ總件數ノ 40.24%ニ當ル、明治四十四年ヨリ大正四年ニ至ル五年間ノ和解事件ノ終局件數ヲ種類別ト爲シ分節比例ヲ算出スルニ人事ニ係ルモノ 6.42%土地建物船舶ニ係ルモノ 31.42%金錢證券ニ係ルモノ 45.37%米穀物品及其ノ他ノ雜事ニ係ルモノ 16.79%ニ當ル、然ルニ大正四年ノモノ事實ヲ見レハ人事ハ 3.95%ニシテ大ニ減シ、土地建物船舶ハ 23.55%ニシテ是モ減シ、金錢證券ハ 56.42%ニテ前二種ノ減シタルタケ是ニ於テ増シ、雜事ハ 16.08%ニシテ略ホ増減ナシ、此ノ變化ヲ既往ノ各年ニ就テ見ルニ人事ハ明治二十三年 1.34%ノ少量ナリシカ、二十八年ニハ 8.93%ニ増シ、三十三年ハ 10.72%三十八年ハ 11.08%ト漸次増加ノ傾向ヲ有セシ

カ茲十年間ニ上記ノ如ク減少シ、土地建物船舶ハ 明治二十三年ニハ僅ニ 4.99%ナリシモノカ二十八年ニハ 17.21%ト爲リ三十三年ニ 21.24%ト爲リ三十八年ニ 22.25%ト爲リ斯ノ漸次増加シテ上記ノ如ク最近五年ノ 大量ヲ見ルニ至レリ、金錢證券ハ明治二十三年ハ 81.65%ノ大量ナリシカ二十八年ハ 53.02%三十三年ハ 44.80%三十八年ハ 43.36%ニ是ハ又漸次減少セシカ 最近ニハ又増加シテ上記ノ如キ量ヲ見タリ、雜事ハ明治二十三年ニ 12.02%二十八年ニ 20.84%三十三年ニ 23.24%三十八年ニ 23.31%ノ動搖アリタリ、要スルニ此ノ分量上ノ動搖ト前記ノ増減トヨリ察スレハ、和解事件ハ管テハ輕易ナル事ニモ裁判所ヲ煩ハセシモノカ 漸次難解ノ事件ノミ裁判所ヲ煩ハスニ至リタルモノナルカ如シ、之ヲ總件數ニ對スル和解不調ノ比例ニ就テ見ルニ、明治二十三年ハ 27.84%二十八年ハ 34.95%三十二年ハ 53.47%三十八年ハ 54.85%ナルハ即チ能ク之ヲ證シ得ルモノト謂フヘシ、然ルニ最近ニ至リテ又不調件數ノ比例低下シ大正四年ハ上記ノ如ク、又最近五年平均ハ 45.36%ト爲レリ、此ノ原因ハ今的確ニ知ル能ハスト雖、惟フニ世態ノ然ラシムル所ニシテ事實トシテハ 終局件數中金錢證券ニ係ル分節比例ノ増加ノ如キ又人事ニ係ル分節比例ノ減少ノ如キ以テ其ノ原因ヲ髣髴スルニ足ルモノナキニアラサルナキカ。

【督促事件】 大正四年中ニ取扱ヒタル 督促事件ハ 442,672件ニシテ中却下又ハ取下 85件ヲ除ク他ノ總テハ支拂命令ヲ發シタリ、此ノ支拂命令ニ對シ異議ノ申立ヲ爲シタル者 17.46%アリ、又支拂命令ニ次テ執行命令ヲ發スルニ至リタルモノ 22.95%アリ、此ノ他ノ 59.59%ノ大部分ハ督促手續ニ依リテ債務ノ辨濟ヲ了シタルモノト見ルヘキカ、督促事件ハ之ヲ既往ニ比スルニ其ノ増加著シキモノアリ、即チ大正四年ノ總件數ヲ前年ニ比スルニ 60,163件ノ増加ニシテ之ヲ十年前ナル 明治三十八年ニ比スレハ 202,203件ノ増加ニシテ殆ト倍セントシ、又二十年前ナル同二十八年ニ比スレハ 283,494件ノ増加ニシテ約三倍ニ近カラントス、而シテ之カ効果ヲ見ルニ 明治二十八年ハ支拂命令ニ對シ異議ノ申立ヲ爲シタル者 16.59%執行命令ヲ發シタル者 23.29%、又三十八年ハ異議申立者 17.44%執行命令ヲ發シタル者 23.64%、又前年ハ異議申立者 17.67%執行命令ヲ發シタル者 22.05%ナリ、即チ知ル大體ニ於テ各年略ホ同一ノ成績ヲ現ハスモノナルコトヲ、次ニ督促事件ノ目的物ナル種類ヲ舉クレハ大正四年ニ於テハ代替物 0.84%有價證券 0.00%ヲ除キタル他ノ 99.16%ハ一定ノ金額ナリ、然ルニ之ヲ既往ニ見ルニ前年ハ一定ノ金額 98.91%ニ當リ、明治三十八年ハ同 97.46%ニ當リ、同二十八年ハ同 90.83%ニ當レリ、斯ノ如キハ代替物及有價證券カ督促手續ノ目的物ト爲ルコト漸ク少キニ至リタルニモ由レトモ、又上記ノ如ク督促事件ノ件數ノ著シキ増加ハ一定ノ金額ノ辨濟ヲ

督促手續ニ依リテ督促スル者ノ増加セルニ由ルナリ。

【訴訟事件】 大正四年中ノ第一審訴訟事件ノ總件數ハ區裁判所ニ於テ 255,065件地方裁判所ニ於テ 23,402件合計 278,467件ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ區裁判所ニ於テハ 22,635件ヲ増シ地方裁判所ニ於テハ 244件ヲ減セリ、又本年中新受ノ件數ハ區裁判所 222,658件ニシテ前年ニ比シ 16,801件ヲ増シ、地方裁判所ハ 15,736件ニシテ前年ニ比シ 140件ヲ増シタリ、故ニ第一審新受件數ハ合計 16,941件ヲ増シタリ、此ノ新受件數ノ多少ヲ既往ニ比スルニ、一派一弛高低不同ニシテ區裁判所ニ於テハ明治二十三年ハ著シク少カリシモ、翌二十四年ヨリ増加シ二十七年マテ 稍多カリシカ、二十八年ニ俄然減少シ、三十年ヨリ再ヒ増加シ三十六年ニ高點ニ達シ、三十七年ヨリ下リテ四十年ニハ 二十八年ト略ホ同位ト爲リ、四十一年ヨリ又上リテ大正三年ハ 三十六年ノ高位ヨリモ高ク、本年ハ管テ見サル多數ニ上リタリ、地方裁判所ニ於テモ 明治四十年マテハ大體ニ於テ區裁判所ト高低ノ趨勢ヲ共ニシタルトモ 唯其ノ張弛區裁判所ノ如ク著明ナラス、又區裁判所ト其ノ高點又ハ低點ノ一二年前後スルモノアルノミナリシカ、四十一年以後ハ 大正元年マテ 稍増加シ夫ヨリ減少シテ 今日ニ至レリ、試ニ明治二十四年以降各年ノ新受件數ヲ人口一萬比例ト爲シテ比較スレハ 明治二十四年ハ區裁判所 39.35地方裁判所 4.43二十八年ハ區裁判所 28.45地方裁判所 3.77三十三年ハ區裁判所 30.90地方裁判所 6.37三十八年ハ區裁判所 30.11地方裁判所 4.26、四十三年ハ區裁判所 28.94地方裁判所 3.96大正三年ハ區裁判所 38.82地方裁判所 2.91、大正四年ハ區裁判所 40.86地方裁判所 2.89ニ當レリ、是等訴訟ノ多少ハ一面ニ於テ時ノ社會事情ノ反映ナリトモ見ルヘク、管テ健訟ノ盛ンナリシ時代ヨリ日清戦時ニ於テ一頓挫シ、爾來再ヒ上昇シテ盛時アリ、日露戦後再ヒ頓挫シ、今や更ニ上昇シテ其ノ盛ヲ極メタリ、是果シテ喜フヘキヤ否ヤ。

第一審訴訟事件數ヲ種類シ、之ヲ總數ニ對スル分節比例ト爲セハ 區裁判所ニ於テハ通常訴訟 69.17%證書訴訟及爲替訴訟 1.83%公示催告事件 0.63%假差押及假處分 27.57%裁判所ニ繫屬シタル訴訟外ノ申立 0.80%ニ當リ、地方裁判所ニ於テハ通常訴訟 63.73%證書訴訟及爲替訴訟 6.57%假差押及假處分 10.84%人事訴訟 18.87%ニ當ル、通常訴訟ハ區裁判所ニ於テモ 地方裁判所ニ於テモ明治三十八九年ニ於テ大ニ減少セシカ 區裁判所ハ近時著シク其ノ數ヲ増シ、地方裁判所ハ一張一弛シ近ク 其ノ數ヲ減セリ、證書訴訟及爲替訴訟ハ是亦明治三十九年ニ大減少ヲ爲シ、爾來區裁判所モ 地方裁判所モ増加セリ、人事訴訟モ亦一時減少ヲ見シカ 近年又増加セリ。

大正四年中ノ第一審訴訟ノ終局件數ハ 區裁判所 218,238件地方裁判所 15,524件ナリ、之ヲ總件數ニ比スルニ區裁判所ハ 85.56%

地方裁判所ハ 66.34%ニ當ル、此ノ終局件數ヲ結果ノ種類ニ依リテ分テ分節比例ヲ算出スルニ、區裁判所ハ關席判決 21.40%拋棄認諾ニ基テ判決 0.44%其ノ他ノ終局判決 12.99%取下 20.71%和解 8.71%訴狀差戻 0.02%其ノ他ノ結果 35.73%ニ當リ、地方裁判所ハ關席判決 15.56%拋棄認諾ニ基テ判決 0.23%其ノ他ノ終局判決 37.06%取下 26.80%和解 2.78%訴狀差戻 0.30%其ノ他ノ結果 17.29%ニ當ル。

大正四年中ノ第一審訴訟ノ新受件數ヲ金額ニ依リテ分テ分節比例ヲ算出スルニ、區裁判所ニ於テハ十圓マテ 14.42%十圓以上五十圓マテ 43.80%五十圓以上百圓マテ 19.98%百圓以上五百圓マテ 21.43%五百圓以上千圓マテ 0.23%千圓以上一萬圓マテ 0.14%一萬圓以上 0.01%ニ當リ、地方裁判所ハ百圓マテ 0.57%百圓以上五百圓マテ 0.87%五百圓以上千圓マテ 46.27%千圓以上一萬圓マテ 47.89%一萬圓以上 4.40%ニ當ル、區裁判所ト地方裁判所トニ於テ金額ニ大差アルハ素ヨリ其ノ所ナリ、而シテ其ノ金額及見積價額ノ積算ヲ見ルニ區裁判所ハ 13,107,058圓ニシテ地方裁判所ハ 30,931,504圓ナリ、兩者共ニ此ノ金額ハ既往ニ於テ年々ニ増額シ來レルモノニシテ、區裁判所ハ十年前ナル 明治三十八年ヲ百ト爲シテ指數ヲ求ムルニ 312.9ニ當リ、地方裁判所ハ同上ノ指數 157.3ニ當ル、即チ僅ニ十年間ニ於テ區裁判所ハ一ニ對スル三以上地方裁判所ハ二ニ對スル三以上ニ増額セリ、斯ク區裁判所ノ増額カ地方裁判所ニ超過スル所以ノモノハ 明治三十八年以來追次改正セル裁判權ノ擴張ニ歸スヘシ、而シテ此ノ増額ハ何レノ階級ニ於テ來レルカ、之ヲ金額別件數ノ明治三十八年ニ對スル 大正四年ノ指數ヲ算出シ見ルニ、區裁判所ノ十圓迄ハ 124.6十圓以上五十圓迄ハ 154.5五十圓以上百圓迄ハ 173.5ニ該當シ、百圓以上ハ裁判權ノ擴張ニ據ルカ故ニ以下ト同一ニ見ル能ハサレトモ 假ニ擧ケルハ百圓以上五百圓迄ハ 438.4五百圓以上千圓迄ハ 248.6千圓以上一萬圓迄ハ 232.6ニ當リ一萬圓以上ハ三十八年ニ皆無ナリ、又地方裁判所ノ五百圓迄モ亦裁判權ノ變更ニ依リテ當然減少スルモノナルカ故ニ之ヲ見サルコトトシ、五百圓以上千圓迄ハ 175.8千圓以上一萬圓迄ハ 194.5一萬圓以上ハ 209.0ニ當レリ、即チ知ル區裁判所ニ於テハ百圓以上ハ措テ論セス、百圓以下ニ於テモ金額高キモノハ高キモノト其ノ指數高ク、地方裁判所モ五百圓以下ハ措テ問ハス五百圓以上ハ金額ノ高キハ高キト指數ノ增高著シ、是即チ總金額ノ増額シタル原因ノ一ニシテ他ハ以テ揣摩スルニ難カラス、而シテ此ノ事實ハ總テ本邦一般社會ノ經濟事情ノ推移ヲ察スルニ餘リアリト謂フヘシ。

次ニ大正四年ノ終局件數ニ依リテ 第一審訴訟ノ種類ヲ見ルニ區裁判所ニ於テハ土地 1.44%建物及船舶 1.75%金錢 55.10%米穀 0.82%物品 1.26%證券 0.24%雜事 39.40%ニ當リ、地方裁判所ハ

事 23.02%土地 8.13%建物及船舶 1.69%金錢 41.07%米穀 0.14%物品 0.93%證券 0.85%雜事 24.16%ニ當レリ、即チ區裁判所ニ於テモ地方裁判所ニ於テモ金錢ハ係争物トシテ大部分ヲ占メ、之ニ次クモノハ 雜事ニシテ地方裁判所ニ於テハ人事訴訟亦輕カラス、是等係争物ノ推移ヲ知ランカ 爲メ區裁判所ト地方裁判所トヲ通シ、各種類ノ明治三十八年ノ百ニ對スル大正四年ノ指數ヲ求ムレハ人事ハ 124.3土地ハ 111.7建物及船舶ハ 134.4金錢ハ 165.8米穀ハ 53.7物品ハ 96.6證券ハ 107.7雜事ハ 119.1ニ當リ總數ハ 138.7ニ當レリ、故ニ増加ノ平均以上ナルモノハ一ノ金錢アルノミ、建物及船舶ト人事トハ稍平均ニ近ケレトモ其ノ他ハ平均ヲ距ツルコト遠ク、米穀ト物品ハ寧ろ減少セリ、即チ金錢上ノ係争益々多キヲ加ヘントスルモノノ之ヲ是商取引ノ頻繁ナルニ歸スヘキ現下ノ世態ト爲スナリ。

【上訴】 次ニ上訴ニ就テ順次觀察スヘシ、先ツ大正四年中ニ區裁判所カ取扱ヒタル戸籍ニ關スル抗告件數ヲ擧ケルハ總件數 89件アリ、此ノ中却下シタルモノノ 31件(34.83%)市町村長ニ相當處分ヲ命シタルモノ 36件(40.45%)アリ、前年マテハ身分登記ニ關スル抗告ト合算シアリタルヲ以テ今ニ於テ之ヲ比スルニ由ナシ。

大正四年中ニ地方裁判所ニ於テ取扱ヒタル控訴總件數ハ 9,653件アリ、其ノ新受件數ハ 6,766件ニシテ之ヲ本年中ニ區裁判所カ第一審訴訟ニ下シタル判決總數 75,997件ニ比スレハ其ノ 8.90%ニ當ル、若シ夫十年前ナル明治三十八年ノ同一比例ヲ求ムレハ 11.95%ニシテ本年ハ低キコト 3.05%ナリ、而シテ地方裁判所カ此ノ控訴ニ下シタル判決ハ棄却 3,237件廢棄 1,252件ニシテ之ヲ總件數ニ比スレハ棄却 33.53%廢棄 12.97%ナリ、又控訴院ニ於テ取扱ヒタル控訴總件數ハ 3,799件アリ、其ノ新受件數ハ 1,883件ニシテ之ヲ本年中ニ地方裁判所カ第一審訴訟ニ下シタル判決總數 8,201件ニ比スレハ其ノ 22.96%ニ當ル、十年前ナル明治三十八年ノ同一比例ヲ求ムレハ 24.19%ニシテ本年ハ之ヨリ低キコト 1.23%ナリ、而シテ控訴院カ之ニ下シタル判決ハ棄却 987件廢棄 435件ニシテ之ヲ總件數ニ比スレハ棄却 25.98%廢棄 11.45%ナリ。

大正四年中ニ大審院ニ於テ取扱ヒタル上告總件數ハ 2,400件アリ、其ノ中新受件數ハ 1,795件ニシテ之ヲ本年中ニ地方裁判所及控訴院カ下シタル控訴審ニ下シタル判決總數 5,911件ニ比スレハ 30.37%ニ當ル、大正二年以前ハ控訴院モ亦上告審ヲ爲スノ裁判權ヲ有シタルヲ以テ十年前ナル 明治三十八年ノ地方裁判所及控訴院ノ控訴審ノ判決總數ニ對スル 控訴院及大審院ノ上告新受件數ノ比例ヲ求ムレハ 21.89%ニ當リ、本年ノ上記比例ハ之ヨリ高キコト 8.48%ナリ。

大正四年中ニ地方裁判所ニ於テ取扱ヒタル抗告總件數ハ 1,648件ニシテ中新受件數ハ 1,497件ナリ、此ノ新受件數ヲ十年前ナル明

治三十八年ニ比スルニ 430件ヲ減ス、又控訴院ニ於テ取扱ヒタル抗告總件數ハ 318件ニシテ 此ノ中新受件數 267件アリ、之ヲ明治三十八年ニ比スルニ 675件ヲ減ス、又大審院ニ於テ取扱ヒタル抗告總件數ハ 700件ニシテ之ヲ 明治三十八年ニ比スレハ 361件ヲ増セリ。

【強制執行】 大正四年中ニ區裁判所カ取扱ヒタル強制執行ノ總件數ハ 32,660件ニシテ中 29,812件ハ新受件數ナリ、此ノ新受件數ヲ十年前ナル明治三十八年ニ比スルニ 8,934件ヲ増シタリ、又本年中ニ執行シタル終局件數ハ 29,446件ニシテ此ノ債權總額ハ 27,308,863圓ニシテ一件平均 927圓餘ニ當ル、而シテ之ト同一平均額ヲ 明治三十八年ニ求ムレハ 948圓餘ニ當リ、本年ヨリ高キコト約 16圓ナリ、又本年中執達吏カ執行シタル 有體動産ニ對スル強制執行ノ終局件數ハ 197,572件ニシテ之ヲ明治三十八年ニ比スレハ 76,076件ヲ増シタリ、又此ノ債權總額ハ 35,017,950圓ニシテ一件平均 177圓餘ニ當リ、之ヲ明治三十八年ノ同平均額 169圓弱ニ比スレハ約 8圓ノ増ナリ。

【家資分散】 大正四年中ニ家資分散ノ宣告ヲ與ヘタルモノ 436件アリ、之ヲ十年前ナル 明治三十八年ニ比スルニ 174件ヲ減シタリ、此ノ債權總額ハ 247,170圓ニシテ一件ニ付平均 567圓弱ニ當リ、之ヲ明治三十八年ノ同一平均額 1,078圓餘ニ比スレハ約 511圓低シ、又本年中ニ復權申立、許可ヲ與ヘラレタル者 86件アリ、之ヲ宣告件數ニ比スレハ 19.72%ニ當ル。

【破産宣告】 大正四年中ニ破産宣告總件數 555件アリ、中宣告ヲ爲シタルモノ 215件ニシテ之ヲ十年前ナル 明治三十八年ニ比スルニ 130件ヲ増セリ、此ノ破産者ヲ種別スレハ個人 86.32%會社 13.68%ニ當リ、其ノ終局件數ヲ種別スレハ終局計算ニ因ルモノ 29.47%協諾契約ニ因ルモノ 3.16%其ノ他ノ方法ニ因ルモノ 67.37%ニ當ル。

【非訟事件】 大正四年中非訟事件ノ總數ハ 224,077件ニシテ 此ノ中新受件數ハ 219,687件アリ、新受件數ヲ十年前ナル明治三十八年ニ比スルニ 53,952件ヲ増セリ、又本年中ノ終局件數ハ 218,643件ニシテ之ヲ種別スレハ隱居、廢家、子ノ懲戒、家督相續人及親族會ニ關スル事件 23.85%相續ノ承認及拋棄ニ關スル事件 1.54%戸籍及身分登記ニ關スル事件 19.63%其ノ他ノ事件 54.99%ニ當レリ。

乙、刑事裁判

【區裁判所】 大正四年中ニ區裁判所ニ於テ取扱ヒタル第一審刑事事件ハ 107,473件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 789件ヲ減シ、五年前ナル明治四十三年ニ比スレハ 23,162件ヲ減セリ、又此ノ件數ヲ區裁判所ニ屬スル判事及檢事ノ人員ニ比スルニ 判事一人ニ付平均 293.4件檢事一人ニ付平均 493.0件ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例、判

事 286.0件檢事 340.8件ニ比スレハ判事ハ僅ニ 7.4ノ増ニシテ檢事ハ 152.2ノ増加ニ當ル。

【地方裁判所】 大正四年中ニ地方裁判所ニ於テ取扱ヒタル刑事事件ハ總數 17,670件ニシテ之ヲ區分スレハ、第一審 47.03%控訴審 52.32%抗告審 0.85%ナリ、此ノ總件數ヲ前年ニ比スルニ 1,224件ヲ減シ、五年前ナル明治四十三年ニ比スルニ 29,519件ヲ減シタリ、此ノ總件數ヲ地方裁判所ニ屬スル 判事檢事ノ總員ニ比スルニ 判事一人ニ付平均 50.1件檢事一人ニ付平均 138.3件ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例判事 54.0件檢事 141.0件ニ比スレハ判事 3.4件檢事 2.7件ヲ減シタルニ當ル。

【控訴院】 大正四年中ニ控訴院ニ於テ取扱ヒタル刑事事件ノ總數ハ 3,521件ニシテ之ヲ區分スレハ控訴審 98.84%ヲ占メ 1.16%ノミ抗告審ナリ、此總件數ヲ前年ニ比スルニ 532件ヲ減シ、五年前ナル明治四十三年ニ比スルニ 7,771件ヲ減シタリ、斯ノ如キ大減少ハ地方裁判所及區裁判所ノ 裁判權擴張ニ由ルモノニシテ、區裁判所ノ第一審件數増加ト共ニ 地方裁判所ノ第一審件數ハ減少シ、地方裁判所控訴審件數ノ増加ト共ニ 控訴院ノ控訴審件數ハ減少セリ、又控訴院ニ於テハ 大正三年以降上告審ノ裁判權ナキニ至リタルニ由リテ其ノ總件數ヲ減スルコト大ナリ、而シ大正四年ノ總件數ヲ控訴院ニ屬スル判事檢事ノ員數ニ比スルニ 判事一人ニ付平均 47.6件檢事一人ニ付平均 130.4ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例判事 54.8件檢事 155.9件ニ比スレハ、判事 7.2件檢事 25.5件ノ減ニ當レリ。

【大審院】 大正四年中ニ大審院ニ於テ取扱ヒタル刑事事件ノ總數ハ 3,990件ニシテ、之ヲ區分スレハ上告審 98.09%抗告審 0.32%再審 1.60%ナリ、此ノ總件數ヲ前年ニ比スルニ 154件ヲ減シ、五年前ナル 明治四十三年ニ比スルニ 627件ヲ増シタリ、是控訴院ノ上告審ナキニ至リタル以降大審院ニ之カ増加ヲ見タルニ由ルナリ、大正四年ノ總件數ヲ大審院ニ屬スル判事及檢事ノ員數ニ比スルニ 判事一人ニ付平均 153.5件檢事一人ニ付平均 570.0件ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例判事 165.8件檢事 828.8件ニ比シ判事 12.3件檢事 25.8件ヲ減シタルニ當ル。

次ニ刑事事件ノ各區分ニ就テ概説セン。

【捜査】 大正四年中ノ 犯罪捜査件數ハ 252,161件ニシテ其ノ中起訴 40.98%不起訴 59.02%ニシテ、又不起訴ノ分節比例ハ證據不十分 24.79%起訴猶豫 44.48%其ノ他 30.73%ナリ、此ノ捜査總件數ヲ前年ニ比スルニ 1,518件ヲ減シ、之ヲ五年前ナル明治四十三年ニ比スルニ 46,671件ヲ増シタリ、又捜査總件數中ノ起訴比例ヲ前年ニ比スルニ 0.23%ヲ減シ五年前ニ比シテハ 13.89%ヲ減シタリ。

【豫審】 大正四年中ノ 豫審終結被告人ハ總數 6,776人ニシテ其

ノ中免訴 13.31% 公判 = 付シタル者 86.66% ナリ 此ノ免訴ノ中 8 7.39%ハ證據不十分シテ 12.61%ハ其ノ他トス、豫審終結總數ナ 前年 = 比スル = 3,867人ヲ減シ、又之ヲ五年前ナル明治四十三年 = 比スル = 11,971人ヲ減シタリ、是近年輕罪ト認ムルモノニ對シ豫 審ヲ求メス直ニ起訴スルモノ漸ク多キヲ加ヘ殊ニ刑事略式手續ノ 施行以來豫審ヲ求メサルモノ一層多キニ至リタルニ由ルナリ、又 豫審終結總數中公判 = 付スル者ノ比例ヲ前年 = 比スル = 5.35%ヲ 減シ五年前 = 比シテハ 0.85%ヲ減シタリ、前年ノ比例ノ高キハ少 シク異例ナルカ如シ。

【公判】 大正四年中ノ刑事第一審總件數ハ 115,883件ニシテ前 年 = 比シ 342件ヲ減シ、五年前ナル明治四十三年 = 比シ 8,220件ヲ 減シタリ、又新受件數ハ 106,553件ニシテ是ハ前年 = 比シ 875件ヲ 増シタレトモ五年前 = 比シテハ 6,411件ヲ減シタリ、此ノ新受件數 ナ區別スレハ刑法犯 55.92%特別法犯 44.08%ニ當ル、又本年ノ 終局件數ハ 107,015件ニシテ總件數ノ 92.35%ニ當ル、又本年ノ 被告人總數ハ男 169,046人女 14,288人計 183,329人ニシテ之カ男 女ノ比例ハ男 92.21%女 7.79%ニ當ル、此ノ男ノ中 60.31%ハ刑法 犯ニシテ 39.69%ハ特別法犯ニ屬シ、又女ノ中 63.80%ハ刑法犯 36. 20%ハ特別法犯ナリ、又此ノ總被告人ノ中本年終局シタル者 171, 462人アリ總被告人ノ 93.58%ニ當リ、其ノ終局人員中 94.60%ハ 有罪ニシテ他ノ 6.00%ハ無罪、免訴若クハ管轄違其ノ他ナリ、此 ノ有罪比例ヲ前年 = 比スル = 本年ハ 1.30%低ク、本年ノ有罪比例 ナ犯罪ノ種類ニ依リテ算出スレハ 刑法犯ハ 95.71%ニシテ特別法 犯ハ 91.52%ニ當レリ。

【刑事略式事件】 大正四年中ニ受理シタル刑事略式事件被告人 員 78,827人アリ、之ヲ分テハ 刑法犯 35.91%特別法犯 64.09%ナ リ、此ノ略式手續法ハ大正二年七月以降施行セラレタルモノニシテ、之ニ由リ複雑ナル手續ヲ省略シ事ヲ敏捷ナラシメタルハ頗ル 時宜ニ適セリ、而シテ此ノ手續法ノ施行以後第一審刑事事件ノ減 少ヲ見タルコトモ亦注意スヘキ所ナリトス、上記被告人ニ對シ罰 金ヲ命シタル者 56,217件(總被告人ノ 72.59%)科料ヲ命シタル者 14,366件(同上 18.23%)アリ、此ノ命令ニ對シ正式裁判ノ申立ヲ爲 シタル者 1,807人之ヲ分テハ 刑法犯 33.37%特別法犯 66.63%トス 而シテ此ノ正式裁判ノ終局件數ハ 1,765件ニシテ、中再ヒ罰金又ハ 科料ニ處セラレタル者ハ 95.13%ナリ、又被告事件中手續法第三條 = 依ル略式命令ヲ爲スヲ得ス又ハ之ヲ爲スヲ相當トセスト爲シタル モノ 921件アリ、又第六條ニ依ル異議ノ申立ヲ爲シタルモノ 4,2 56件アリタリ、而シテ之ニ依リ爲シタル刑事第一審事件ハ 2,978件 其ノ被告人員ハ 5,403人ナリ、此ノ被告人員ヲ男女ニ分テハ男 93 .23%女 6.77%ニ當リ、又之ヲ種別スレハ 刑法犯 35.13%特別法犯

64.87%ニ當ル、此ノ第一審ニ於テ有罪ノ決定ヲ與ヘラレタルハ終 局人員ノ 91.54%ニ當ル。

【違警罪即決事件】 大正四年中違警罪即決被告人員ハ 417,413 人ニシテ之ヲ前年 = 比スレハ 9,393人ヲ増セリ、之ヲ種別スレハ刑 法犯 0.02%特別法犯 63.74%警察犯 36.24%ニ當ル、此ノ即決ニ 依リ拘留ヲ命ジタル者 13.98%科料ヲ命シタル者 85.35%免除 0.67 %ナリ、此ノ即決ニ服セス正式裁判ヲ申立タル者 1,030人アリ、其 ノ裁判終局人員ニ對スル處罰人員ハ 69.17%ナリ。

【上訴】 大正四年中ノ刑事控訴總件數ハ 12,725件ニシテ前年 = 比シ 596件ヲ減シ五年前ナル明治四十三年 = 比シ 3,625件ヲ減シ タリ、又新受件數ハ 11,393件ニシテ是亦前年 = 比シ 531件ヲ減シ 五年前 = 比シ 3,139件ヲ減シタリ、此ノ新受件數ヲ控訴申立人ニ依 リテ分テハ檢事 4.93%被告人 94.28%件ノ他ノ關係人 0.79%ニ當 ル、又本年中控訴終局件數ハ 11,646件ニシテ總件數ノ 91.52%ニ 當リ、此ノ終局件數中判決ヲ與ヘタルモノ 75.75%アリ、更ニ之ヲ 分テハ原判決取消 39.64%控訴棄却 60.36%ト爲ル。

大正四年中ノ刑事上告件數ハ 3,914件ニシテ之ヲ前年 = 比シ 16 9件ヲ減シ五年前ナル明治四十三年 = 比シ 601件ヲ減シタリ、又新 受件數ハ 2,412件ニシテ之ヲ前年 = 比シ 97件ヲ減シ五年前 = 比シ 593件ヲ減シタリ、此ノ新受件數ヲ上告申立人ニ依リテ分テハ檢事 0. 67%被告人 97.36%其ノ他ノ關係人 1.97%ニ當ル、又本年中控 終局件數ハ 3,586件ニシテ總件數ノ 91.62%ニ當リ、此ノ終局件數 中判決ヲ與ヘタルモノ 80.67%アリ、更ニ之ヲ分テハ原判決破毀 9.37%上告棄却 90.63%ニ當ル。

次ニ犯罪ノ各種ニ就テ概説セン。

【刑法犯】 大正四年中ノ刑法犯第一審有罪被告件數ハ 46,578件 ニシテ之ヲ罪名別ニ別チ分節比例ヲ算出スレハ竊盜罪最多ク 4 2.84%ヲ占メ、詐欺及恐喝罪ニ次キ 15.76%賭博及富籤ニ關スル 罪 13.89%横領罪 7.70%傷害罪 5.86%等其ノ多キモノニ屬ス、又 此ノ第一審有罪被告件數ヲ各控訴院管内別ト爲シ分節比例ヲ算出 スレハ東京 32.15%大阪 21.93%名古屋 8.27%廣島 12.90%長崎 12.69%宮城 6.12%函館 5.94%ニ當ル。

大正四年中ノ刑法犯被告人ノ總數 97,173人ニシテ之ヲ男女ニ分 テハ男 88,992人女 8,181人ナリ、此ノ被告人ヲ罪名別ト爲シ其ノ 最多キモノヨリ列擧スレハ、男ニ於テハ賭博及富籤ニ關スル罪 最多ク竊盜罪ニ次キ其ノ他多キモノハ詐欺及恐喝罪、傷害罪 横領罪、放火ノ罪、文書偽造罪、贓物ノ罪、過失傷害罪、殺人罪、住居 ヲ侵ス罪、強盜罪等ノ順位ニ在リ、又女ニ於テハ最多キハ賭博 及富籤ニ關スル罪ニシテ失火ノ罪ニ次キ其ノ他多キモノハ竊盜 罪、墮胎罪、詐欺及恐喝罪、過失傷害罪、横領罪、嬰兒殺罪、猥褻姦淫

罪、毀棄及隱匿罪、放火罪、傷害罪等ノ順位ニ在リ、而シテ是等ノ被 告人ノ中男ノ總數ハ第一審ニ於テ其ノ 89.07%ハ有罪 1.52%ハ無 罪及免訴確定シ、控訴審ニ於テ 5.81%ハ有罪 0.76%ハ無罪及免訴 確定シ、上告審ニ於テ 2.84%ハ有罪 0.00%ハ無罪及免訴確定セリ、 又女ノ第一審ニ於テ 93.06%ハ有罪 1.86%ハ無罪及免訴確定シ、控 訴審ニ於テ 3.47%ハ有罪 0.57%ハ無罪及免訴確定シ、上告審ニ於 テ 1.04%ハ有罪確定セリ、故ニ結局男ハ第一審ニ於テ 90.59%控 訴審ニ於テ 6.57%上告審ニ於テ 2.84%確定シ、女ハ第一審ニ於テ 94.92%控訴審ニ於テ 4.04%上告審ニ於テ 1.04%確定セリ、而シ テ男ハ總被告人ノ 97.72%ハ有罪 2.28%ハ無罪又ハ免訴ニ確定シ、 女ハ 97.57%ハ有罪 2.43%ハ無罪又ハ免訴ニ確定セリ。

刑法犯有罪確定被告人ヲ各性人口一萬ニ比スルニ男ハ 31.66女 ハ 2.95、總數ハ 17.42ニ當ル、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ男ハ 3.31女ハ 0.32總數ハ 1.82低シ、此ノ人口一萬比例ニ依リテ主ナル 罪名ヲ見ルニ賭博及富籤ニ關スル罪ハ男ハ 14.42女ハ 1.33竊盜罪 ハ男ハ 7.19女ハ 0.41詐欺及恐喝罪ハ男ハ 2.89女ハ 0.10傷害罪ハ 男ハ 1.81女ハ 0.04横領罪ハ男 1.57女ハ 0.07失火罪ハ男 0.62女 0.42ニ當リ、尙女ニ比較的高キニシテ墮胎罪ノ 0.16過失 傷害罪ノ 0.08嬰兒殺罪ノ 0.06放火罪ノ 0.04等ナリ。

次ニ刑法犯ノ有罪確定被告人ヲ刑名別ニ見ルニ 有期懲役最多ク 總數ノ 50.76%ヲ占メ罰金之ニ次キ 38.97%科料又次キ 9.95% ナリ、死刑ハ 89人アリ前年ヨリ 58人ヲ増シ、無期懲役ハ 74人ア リ前年ヨリ 10人ヲ減ス、此ノ受刑被告人ヲ人口一萬ニ比スルニ有 期懲役ハ 8.86ニシテ前年ノ同一比例ヨリ 0.71低ク、罰金ハ 6.79ニ シテ前年ヨリ 0.94低シ。

次ニ刑法犯ノ有罪確定被告人ニ就テ主ナル 罪名ト刑名トヲ結合 シ見ルニ賭博及富籤ニ關スル罪ハ有期懲役 15.30%罰金 66.66%科 料 18.04%、竊盜罪ハ全部有期懲役、詐欺及恐喝罪ハ 0.17%ノミ罰 金ニシテ他ハ有期懲役、傷害罪ハ有期懲役 40.44%罰金 43.48%拘 留 0.04%科料 16.04%、墮胎罪ハ全部有期懲役、横領罪ハ有期懲役 78.92%罰金 6.89%科料 14.18、強盜罪ハ死刑 6.45%無期懲役 4.01 %有期懲役 89.54%、等ナリ。

刑法犯第一審有罪被告人ニ就テ 累犯加重、減輕及免除ヲ見ルニ 初犯者及再犯加重ヲ爲サル者ハ有罪被告人ノ 54.58%ニ當リ、之 ヲ前年 = 比スレハ 6.44%ヲ減シ、再犯加重者ハ同 16.98%之ヲ前年 = 比スレハ 0.88%ヲ増シ、減輕者ハ同 1.65%ニシテ前年 = 比シ 0. 16%ヲ減シ、免除者ハ 0.02%ニシテ前年 = 比シ 0.01%ヲ増シタ リ、而シテ累犯加重ニ係ル者ノ 犯數ヲ見ルニ其ノ總數ニ對シ再犯 ハ 63.06%三犯ハ 28.46%四犯及四犯以上 8.48%ニ當リ、又減輕者 ヲ分テハ法律上 42.65%酌量 57.35%ナリ。

又刑法犯有罪被告人ニ對シ刑ノ執行猶豫ヲ言渡シタル者 6,236 人アリ、之ヲ有罪被告人ノ總數ニ比スルニ 6.57%ニ當ル、此ノ比 例ヲ前年 = 比スレハ 0.22%ヲ増セリ、此ノ執行猶豫ノ期間ニ依リ テ分テハ一年以上二年マテ 1.65%二年以上三年マテ 17.24%三年 以上四年マテ 65.55%四年以上五年マテ 15.55%ニ當ル、而シテ本 年中執行猶豫ヲ取消シタル者 397人アリ之ヲ前年 = 比スレハ 35人 ヲ減セリ。

【特別法犯】 大正四年中ノ特別法犯有罪確定被告人ノ總數 61,2 41人ニシテ之ヲ前年 = 比スレハ 12,541人ヲ増シタリ、斯ノ如キ大 増多ハ果シテ何ニ因ルカ試ニ罪名別ニ之ヲ比較スレハ 租稅及專賣 ニ關スルモノ 6,481人之ヲ前年 = 比シ 1,280人ヲ増シ、通信、運輸、 電氣ニ關スルモノ 1,520人前年 = 比シ 87人ヲ増シ、商事、產業ニ 關スルモノ 10,197人之ヲ前年 = 比シ 4,600人ヲ増シ、衛生ニ關ス ルモノ 8,075人警察、出版、著作、新聞紙ニ關スルモノ 6,223人此ノ 二者ヲ合セ前年 = 比シ 415人ヲ減シ、軍事ニ關スルモノ 8,848人之 ヲ前年 = 比シ 3,850人ヲ減シ、議員選舉及其ノ他ニ關スルモノ 19 897人之ヲ前年 = 比シ 10,839人ヲ増シタリ、然レハ衛生、警察、軍 事等ニ於テハ前年ヨリ減少シタルトモ他ハ總テ増加シタルカ中ニモ 議員選舉ニ關スルモノ著シク多カリシハ即チ本年ノ前年 = 比シ 總數ヲ高カラシメタル所以ナルカ如シ、而シテ此ノ特別法犯有罪 確定被告人ヲ男女ニ分テハ男 92.48%女 7.52%ニ當リ、此ノ男女ノ 各總數ニ對スル罪名別ノ分節比例ヲ算出スルニ男ニ於テハ 議員選 舉其ノ他ニ關スルモノ最多ク 31.64%ヲ占メ商事、產業ニ關スル モノ之ニ次キ 17.43%軍事ニ關スルモノ更ニ次キ 15.55%ヲ多シト 爲シ、女ニ於テハ租稅、專賣ニ關スルモノ最多ク 37.98%衛生ニ 關スルモノ之ニ次キ 31.04%警察、出版、著作、新聞ニ關スルモノ 1 3.83%等ヲ多シト爲ス、又此ノ特別法犯有罪確定被告人ヲ人口一萬 ニ比スルニ男ハ 20.62女ハ 1.70總數ハ 11.24ニ當リ、此ノ總數ニ於 ケル比例ヲ罪名別ト爲セハ租稅、專賣ニ關スルモノ 1.19通信、運輸 電氣ニ關スルモノ 0.28商事、產業ニ關スルモノ 1.87衛生ニ關スル モノ 1.48警察、出版、著作、新聞紙ニ關スルモノ 1.14軍事ニ關スル モノ 1.62議員選舉其ノ他ニ關スルモノ 3.65ニ當レリ。

特別法犯有罪確定被告人ヲ刑名別ニ分テハ 罰金最多ク 79.26 %ヲ占メ前年ヨリ高キコト 9.50%、科料ニ次キ 17.04%前年ヨリ 9.51%低ク、有期懲役 2.27%前年ヨリ 0.20%低ク、有期禁錮 0.4 6%前年ヨリ 0.30%高ク拘留 0.67%前年ヨリ 0.10%低シ。

特別法犯有罪確定被告人ニ刑ノ執行猶豫ヲ言渡シタル者 538人 アリ、之ヲ有罪被告人ノ總數ニ比スルニ 0.88%ニ當ル、之ヲ期間 ニ依リテ分テハ一年以上二年マテ 4.46%二年以上三年マテ 29.18 %三年以上四年マテ 60.22%四年以上五年マテ 6.14%ナリ、本年中

刑ノ執行猶豫ヲ取消サレタル者 15人アリ。

次ニ刑法犯ノ有罪確定被告人ニ就テ犯罪ノ諸關係ヲ見ント欲ス。

【犯罪地】 大正四年ノ刑法犯有罪確定被告人ヲ其ノ犯罪地ニ依リテ分チ、其ノ地方ノ人口萬ニ對スル比例ヲ算出スレハ、其ノ最高キヲ北海道ノ 39.57ト爲シ之ニ次クハ近畿ノ 27.67ニシテ關東ノ 20.90四國ノ 17.02等ヲ其ノ多キモノト爲シ、東海ノ 15.99中國ノ 15.28九州ノ 12.07東山ノ 11.86東北ノ 11.19北陸ノ 10.83沖繩ノ 5.97ト次第シテ少シ、又之ヲ各性人口ニ比例シ見ルニ男ハ全然總數ト順位ヲ同フシ最高ノ北海道ハ 66.11ニシテ最低ノ沖繩ハ 11.35ニ當レリ、女ハ大ニ趣キヲ異ニシ北海道 10.54近畿 5.48四國 3.64中國 2.75關東 2.38東北 2.30東海 2.23北陸 1.91九州 1.88東山 1.55沖繩 0.86ノ順位ヲ取レリ、之ヲ男ノ上記最高最低及其ノ中間ナル近畿 46.67關東 39.17四國 30.24東海 29.56中國 27.55九州 22.39東山 22.26東北 19.99北陸 19.64ニ對比スレハ地方ト男女ノ犯罪トノ關係歴々トシテ見ルヘキモノアリ、次ニ主ナル罪名ニ就テ地方別ノ關係ヲ知ランカ爲メ總數ニ對スル罪名別ノ分節比例ヲ算出シ其ノ分節比例ヲ比較スレハ、賭博及富籤ニ關スル罪ハ近畿最モ多ク北海道ニ次キ東海ト四國トハ、伯仲ノ間ニ在リテ次キ關東ト北陸トモ亦略同數ニシテ第四位ニ居ル、竊盜罪ハ沖繩頗ル多ク九州ニ次キ關東ハ第三位ニ在リ中國、東山、東海ト次第シ最モ少キハ北海道ト四國ナリ、詐欺及恐喝罪ハ中國最モ多ク九州ニ次キ東山、東海又次キ關東ハ東北ト同位ニ在リテ四國ヨリモ低ク近畿ハ最モ低クシテ北海道ハ其ノ上ニ在リ、傷害罪ハ四國最モ高ク北海道ニ次キ中國ト東北トハ略ホ同數ニシテ第三位ニ居リ東山ハ夫ヨリモ少シク低ク關東ハ寧ろ北陸近畿ヨリモ低ク東海上ニ在リ墮胎罪ハ東山頗ル多ク四國ニ次キ東海又次キ北陸東北關東次第シテ低ク、北海道最モ少ク近畿ハ夫ヨリモ少シク多シ、強盜罪ノ最モ多キハ關東ナリ、之ニ次クハ東山ト沖繩ニシテ九州東海ハ適ニ低ク東北北陸近畿ハ又更ニ低シ、殺人罪(嬰兒殺ヲ含ム)ハ九州最モ多ク中國ニ次キ四國又次キ東海東北東山ト次第シ關東ハ東山ニ次ク、猥褻、姦淫、重婚ノ罪ハ沖繩ニ最モ多ク之ニ次クハ九州關東中國ニシテ他ハ殆ト同位ナリ、文書偽造罪ハ沖繩頗ル多シ四國モ亦多ク中國ニ次キ北陸又次キ東山東北東海ハ略ホ同位ニ在リ、是等多少ノ順位ハ其ノ地方ノ事情ノ然ラシムルモノアルニ由ルヘキコト勿論ナレトモ、中ニハ都會ニ多カルヘク考ヘラル、犯罪ニシテ却テ都會人口ヲ含ムコト少キ地方ニ多キカ如キモノアリ、尙仔細ニ觀察スルニアラサレハ、邊ニ判斷ヲ下シ能ハス、今ハ唯事實ヲ呈露スルニ止ム。

【犯罪原因】 刑統統計ニ掲記セル犯罪ノ原因ハ之ヲ三十五項ニ分類セリ、此ノ分類因果シテ正鵠ヲ得タルモノナリヤ否ヤ今之ヲ

攷究スルニ邊ナキヲ以テ總數ニ對スル各項ノ分節比例ヲ算出シ其ノ高キモノ數項ヲ抄記センカ男ニ於テハ利慾最モ多ク 32.31%ヲ占メ、竊盜罪、賭博犯、詐欺恐喝等ニ此ノ原因ノ働キ最モ強シ、射倅之ニ次キ 10.78%ナリ、此ノ原因ハ殆ト總テ賭博犯ニ働ケリ、習癖ハ第三ニ居リ 9.57%ナリ、此ノ原因ハ竊盜罪、詐欺及恐喝ニ多ク働ク、第四ハ出來心ニシテ 6.22%アリ此ノ原因モ亦賭博、竊盜、詐欺、横領等ニ働ケリ、第五ハ貧困ナリ 3.88%ヲ有ス、是亦竊盜、賭博、詐欺、横領ニ働クコト強ク、第六ハ憤怒 3.66%アリ此ノ原因ハ傷害罪ニ最モ強ク働キ殺人罪ヲ胚胎スルニ至ル、第七ハ遊蕩 2.37%ナリ、是亦竊盜、詐欺、横領ノ原因トシテ有力ナル働キヲ爲スモノ、如シ、次ニ女ニ於テモ利慾最モ大ニシテ 20.95%ヲ占メ其ノ働キ男ト同様ニ竊盜、賭博、詐欺ニ強ク更ニ贓物及墮胎ノ原因トシテモ有力ナリ、次ハ射倅ノ 11.64%ナルコト男ト等シク其ノ賭博ノ原因タルコト亦同様ナリ、第三ハ出來心 7.54%ニシテ墮胎罪ヲ促スコト最モ強ク賭博、竊盜ノ原因トシテモ有力ナリ、第四ハ習癖 5.01%ニシテ最モ強ク竊盜ノ原因トシテ次ニ賭博ノ原因トシテ働ク、此ノ第三ト第四トカ男ト顛倒シテ現ハル、モ亦何等カ意味アルモノ、如シ、第五貧困ハ 3.49%竊盜ノ原因トシテ強ク詐欺及恐喝、嬰兒殺、墮胎ヲ促スモノ、如ク、第六ハ疎虞ニシテ 1.44%アリ失火罪及過失傷害ノ原因ト爲リ、第七ハ憤怒 1.09%傷害罪ノ原因ヲ爲スコト男ニ同シ、第八ハ痴情 1.04%ニシテ猥褻姦淫罪及墮胎罪ノ原因ト爲リ、第九ハ虛榮 0.84%ニシテ主トシテ竊盜ノ原因ト爲リ働クカ如シ。

【年齡】 男ノ總數ニ對スル年齡別百分比(年齡不詳ヲ除ク)ヲ算出スレハ二十歳未満者ハ 7.07%二十歳以上三十歳者ハ 32.31%三十歳以上四十歳者ハ 31.83%四十歳以上五十歳者ハ 17.95%五十歳以上六十歳者ハ 7.91%六十歳以上者 2.93%ニ當リ、又女ハ二十歳未満者 7.12%二十歳以上三十歳者 21.90%三十歳以上四十歳者 27.94%四十歳以上五十歳者 22.18%五十歳以上六十歳者 13.72%六十歳以上者 7.14%ニ當レリ、犯罪者ニ於ケル男女ト年齢トハ斯ノ如クニ大差アリ、二十歳未満ニ於テハ男女略ホ同様ナレトモ二十歳以上三十歳者ニ於テ男ハ著シク高ク此ノ年齡階級ヲ以テ最高ト爲スニ、女ハ尙ホ未タ最高ニ至ラス男ニ比シテ適ニ低ク、三十歳以上四十歳者ハ女ノ最高點ナリ、併シナカラ之ヲ男ニ比スレハ低ク男ハ此階級ニ於テ既ニ下向セルニモ拘ハラス尙女ヲ超過スルコト大ナリ、四十歳以上五十歳者ハ男ニ於テハ大ニ低下シ其ノ盛時ノ半ハナラントスルニ女ハ尙依然トシテ高ク、五十歳以上六十歳者ハ男女共ニ下リ男ハ二十歳未満者ヨリ僅ニ高キノミナレトモ女ハ男ノ殆ト倍ニ近ク其ノ低下急ナラス、六十歳以上者ハ男ハ最低位ニ達シ盛時ノ十分一ニタニ足ラサレトモ女ハ二十歳未満者ト

同位ニシテ男ノ前階級ヨリ僅ニ低キノミ、是ニ由テ觀レハ男ノ犯罪年齡ハ比較的短ク二十歳以上四十歳マテヲ盛時トシ五十歳迄ヲ亞盛時トスルニ女ハ比較的長キ犯罪年齡ヲ有シ男ノ亞盛時迄即チ二十歳以上五十歳マテ盛時ト爲シ進テ六十歳マテ亞盛時ト認ムヘキカ如シ、更ニ此觀察ヲ進メテ年齢ト罪名トノ結合ニ及ホスコトハ重要ノ探究ナレトモ今ハ之ヲ他日ニ讓ルコトセリ。

【配偶關係】 男配偶關係明カナル者ノ總數ニ對スル配偶關係別ノ百分比算出スレハ未婚者 41.51%有配偶者 53.18%離婚獨身者 2.84%寡夫 2.47%ニ當リ、女ハ同様未婚者 25.14%有配偶 58.47%離婚ノ獨身者 4.97%寡婦 11.42%ニ當レリ、明治四十一年ニ東京市カ行ヒタル市勢調査ノ結果表ニ由リ男女共ニ十五歳未満者ヲ除キ上記ト同一ノ比例ヲ算出スレハ、未婚者ハ男 42.57%女 24.95%有配偶者ハ男 50.87%女 56.89%離婚獨身者ハ男 1.89%女 3.36%寡夫 4.66%寡婦 14.79%ナリ、今是ト彼トヲ比較スルニ細密ニハ幾多ノ異點ニ其ノ型ヲ一ニス、然レハ配偶ノ有無ハ甚ク犯罪ト關係ナキモノ、如シ。

【教育】 男ノ教育ノ關係明瞭ナル者ノ總數ニ對スル其ノ教育程度ノ百分比算出スルニ高等教育ヲ受ケタル者 0.14%中等教育ヲ受ケタル者 1.35%普通教育ヲ受ケタル者 35.85%文字ノ讀ミ書キヲ爲シ得ル者 49.87%、全ク教育ヲ受ケサル者 12.79%ニ當リ、女ノ同上ハ高等教育ヲ受ケタル者無ク、中等教育ヲ受ケタル者 0.24%普通教育ヲ受ケタル者 15.15%文字ノ讀ミ書キヲ爲シ得ル者 32.09%全ク教育ヲ受ケサル者 52.52%ニ當ル、此ノ事實因果シテ教育ト犯罪トノ關係ヲ解析シ得ヘシトモ思ハレサレトモ記シテ以テ他日ノ攷究ニ備フ。

【信教】 是亦其ノ特徴ヲ捕捉シ能ハサル事項ニシテ、男ニ於テモ女ニ於テモ無信教者ノミ甚ク多ク、其ノ屬スル宗教ヲ示シタル者モ殆ト全數ニ近キ大部分ハ佛教ニシテ神道モ耶蘇教モ唯僅ニ存スルノミ、然レハ單ニ之ノミヲ以テシテハ何等ノ結論ニモ到達シ得サルカ如シ。

【資産】 約 80%ハ資産ナキ者、8%半ハ赤貧者、7%餘ハ稍資産アル者、3%弱ハ資産アル者ナリ、然レハ一般ニ資産ナキ者大部分ヲ占メタレトモ、之ヲ罪名別ニ見ルニ文書偽造罪、瀆職罪、殺人罪、傷害罪、過失傷害罪、墮胎罪等ニ於テハ必スシモ然ラサルモノアリ、故ニ是ニ謂フ資産ノ有無ノ區分ニテモ仔細ニ觀察スレハ多少ノ發見スル所ナキヲ保セス。

【生計】 是モ亦資産ノ有無ニ似テ劃然タル決定ヲ與フルニ難キモノトス、然レハ男女ヲ合セタル總數ニ於テ華美ノ生活ヲ爲ス者 0.3%普通ノ生活ヲ爲ス者 20.6%質素ノ生活ヲ爲ス者 22.9%貧困ノ生活ヲ爲ス者 56.2%ナリト言フニ止メン。

【月別】 月別ヲ輯約シ三月乃至五月ヲ春トシ、六月乃至八月ヲ夏トシ九月乃至十一月ヲ秋トシ十二月乃至二月ヲ冬トシテ全年ノ一日平均ノ干ニ對スル各季一日平均ノ比例ヲ算スレハ春季ハ 991.9ニシテ平均ニ近ク夏季ハ 858.5秋季ハ 838.1ニシテ共ニ平均ヨリ適ニ低ク、冬季ハ 1316.5ニシテ獨リ巔然トシテ高シ、是ハ主トシテ十二月テフ竊盜最モ多キ月ト一月二月テフ賭博最モ多キ月ヲ包含スルニ由ルモノニシテ、秋季ハ賭博殊ニ少ク竊盜モ亦多カラス、夏季及秋季ニハ失火ノ罪少ク文書偽造罪モ少ナケレトモ、獨リ傷害罪ノミハ夏季ニ多シ。

【職業】 職業ト犯罪トノ關係ハ最モ重要ナル觀察點ノ一ナルヘシ、然レトモ今日ニ於テハ正シキ職業別人口ヲ有セサルカ故ニ的確ニ之ヲ比較シ能ハサルヲ遺憾トス、而シテ茲ニ掲ケル犯罪者ノ犯時ノ職業モ亦果シテ有業者ナルヤ否ヤ、或ハ其ノ職業者ニ扶養セラル、無業家族ナルヤ否ヤ、若クハ職業上ノ地位ハ何ナリヤ夫スラ明瞭ナラサルカ故ニ是亦完全ナル材料ニアラス、然レハ茲ニハ二三職業者ノ總數ニ對スル主ナル罪名ノ分節比例ヲ算出シテ比較對照スルニ止メントス、即チ農業者ノ總數ニ對スル賭博及富籤ニ關スル罪ハ 47.79%ニシテ漁業者ハ是ヨリモ強ク 59.67%礦業者モ強ク 55.41%ヲ現ハシ、土木建築業者ハ農業者ト略ホ等シク 47.43%ニシテ商業者ハ漁業者ニ近キ 57.04%ヲ出シ、自由業ハ頗ル少ク 16.80%ナリ、又竊盜罪ハ土木建築業者甚ク高ク 23.04%ヲ現シ、礦業者ハ 13.85%農業者ハ 13.58%ニシテ略ホ同位ニ在リ、漁業者ハ 12.70%自由業ハ 12.09%ニシテ是亦相似タル數ヲ出シ、商業者ハ少ク 9.47%ナリ、竊盜罪ノ如キ所謂普遍的犯罪ハ斯カル不完全ナル觀察ニモ甚シキ較差ナシ、詐欺恐喝ハ自由業者甚ク高ク 15.84%ヲ現シ、商業者ニ次キ 9.84%土木建築業者 7.84%農業者 6.97%漁業者 4.68%ト次第セルハ意義アルモノ、如ク礦業者甚ク少ク 3.52%ナルハ其ノ生活上ノ地位並ニ智識程度ニ鑑ミテ左モアルヘシト首肯セラル、ナリ、横領罪モ詐欺ニ略ホ同シテ少ク異ナレリ、即チ自由業者 17.10%商業者 6.12%漁業者 5.29%農業者 3.93%、土木建築業者 2.53%礦業者 2.32%ナリ、傷害罪ハ礦業者最モ高ク 16.78%ニシテ漁業者 10.86%土木建築業者 10.45%ニシテ略ホ等位ニ在リ、農業者ハ 5.75%自由業者ハ 4.84%而シテ商業者ノ 3.97%ナルカ如キ是亦其ノ犯罪ノ性質ト職業トニ鑑ミ、決シテ無意味ナラサルカ如シ。

【受刑度數】 刑法犯有罪確定被告人ニ就テ、各性ノ總數ニ對スル受刑度數ノ分節比例ヲ算出スルニ、一度ハ男 65.58%女 84.29%、二度ハ男 14.68%女 8.90%、三度以上五度ハ男 14.88%女 5.52%、六度以上十度ハ男 3.94%女 1.07%十一度以上ハ男 0.92%女 0.23%ニ當レリ、男ハ二度以上ノ者多ク女ハ一度ノ者多シ、而シテ之

前年ニ比スルニ 男モ女モ一度ノ者ノ比例少シク高シ、尙二三ノ罪名ニ就テ一度ノ者ノ比例ヲ見ルニ 賭博及富籤ニ關スル罪ハ男70.7%女82.31%ニシテ男ハ總數ヨリモ高ク女ハ總數ヨリモ低シ、竊盜罪ハ男47.42%女64.93%ニシテ共ニ總數ヨリ迥ニ低ク竊盜カ習癖ヲ爲スモノナルコトヲ明示セリ、詐偽及恐喝罪ハ男57.03%女72.57%是亦共ニ總數ヨリ低キモ竊盜ノ如ク甚シカラズ、其ノ他男ノ傷害罪カ73.88%ニシテ總數ヨリ高ク、女ノ姦淫罪カ100.00%ナルカ如キ、其ノ犯罪ノ偶發的ナルコト多キヲ示シタリ、唯女ノ墮胎罪カ86.87%ニシテ僅ニ總數ヨリ高キノミナルハ奇異ノ感ナキニアラサレトモ、是ハ墮胎者タル妊娠ノミノ上ニ係ル犯罪ニアラスシテ妊娠ノ囑託ヲ受ケ又ハ受ケスシテ墮胎セシメタル者ヲ包含スルカ爲ナルヘシ。

丙、 登 記

大正四年中ノ登記ノ總件數ハ 5,139,049件ニシテ 之ヲ前年ニ比スルニ 83.461件ヲ増セリ、此ノ總數中ノ 98.49%ハ不動産及船舶ノ登記ニシテ他ノ 1.51%ノミ永代借地權、華族世襲財産ノ創設、法

XXVII. 監

【監獄及其職員】 大正四年末現在ノ監獄ハ52箇所ニシテ外ニ分監 55箇所出張所 30箇所アリ、監獄ハ大正二年ニ 4箇所ヲ減シテ以來増減ナク、分監ハ大正二年ニ 8箇所ヲ減シ本年亦 1箇所ヲ減シ、出張所ハ大正二年ニ 8箇所ヲ減シ三年ニ 1箇所ヲ増シ本年亦2箇所ヲ増シタリ、大正四年末現在警察留置場ハ 1,213箇所アリ之ヲ前年ニ比シ 2箇所ヲ減ス。

大正四年末現在ノ監獄職員ハ典獄 52人典獄補 24人看守長 379人技手及通譯 4人以上前年ト増減ナク、監獄醫 130人前年ニ比シ 1人ヲ減シ、教誨師 127人前年ニ比シ 3人ヲ増シ、教師 33人前年ニ比シ 2人ヲ増シ、看守 6,806人前年ニ比シ 102人ヲ減シ、女監取締 248人前年ニ比シ 2人ヲ減シ、授業手 208人前年ニ比シ 8人ヲ増シ、履備 1,712人前年ニ比シ 6人ヲ増セリ。

【在監人員】 大正四年末在監人員ハ合計 54,506人ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 830人ヲ減シ、大正二年ニ終ル五年平均ノ 67,116人ニ比スレハ 12,610人ヲ減シタリ、斯ノ如キ大減ハ明治四十二年以降一時在監者ノ増加シタル時期ト比較ナルカ故ニシテ、之ヲ其ノ以前(三十七年一四十一年)ノ五年平均 58,502人ニ比スレハ本年ハ 1,004人ノ増加ニ當レリ、此ノ在監人ヲ男女ニ分テハ男 95.82%女 4.18%ニ當リ、之ヲ大正二年ニ終ル五年平均ノ男 94.69%女 5.31%ニ比スレハ女少シク減シ男少シク増セリ、又之ヲ種類別ト爲セハ受刑者 91.20%勞役場留置者 1.77%刑事被告人 6.96%乳兒 0.07%ナリ、而シテ此ノ各種類ノ男女別ヲ見ルニ受刑者ハ男 95.98%

人及其ノ他ノ登記ナリ、不動産ノ登記中 3.44%ハ登録稅ヲ課セサルモノニシテ 96.56%ハ一般ノ不動産登記ナリ、此ノ一般不動産登記ナ分類スレハ土地 91.36%建物 8.52%船舶 0.12%ニ當ル、又本年中ノ登録稅總額ハ 16,188,515圓ニシテ前年ヨリ多キコト 240,341圓ナリ。

土地ノ登記ヲ其ノ事由ニ依リ別テハ家督相續ニ因ル所有權ノ取得 3.50%賣買ニ因ル所有權ノ取得 29.41%ニシテ他ノ 67.09%ハ他ノ事由ニ屬シ、就中從來保有セル所有權ノ保存及登記ノ更正變更ニ係ルモノ最モ多シ、又建物ノ登記ヲ其ノ事由ニ依リ別テハ家督相續ニ因ル所有權ノ取得 1.98%賣買ニ因ル所有權ノ取得 12.81%ニシテ他ノ 85.21%ハ他ノ事由ニ屬シ是亦從來保有ノ所有權ノ保存及登記ノ更正變更等其ノ大部分ヲ占ム。

本年中商事會社ノ設立登記 4,146件アリ中 4,011件ハ本店設立ニシテ前年ニ比シ 325件ヲ減シタリ、又產業組合ノ設立登記 806件アリ是モ前年ヨリ 284件ヲ減シ、漁業組合ノ設立 35件アリ前年ヨリ 12件ヲ減シタリ。

獄

女 4.02%勞役場留置者ハ男 91.38%女 8.62%、刑事被告人ハ男 95.28%女 4.72%乳兒ハ男 51.16%女 48.84%ニ當レリ。

在監人員ヲ一年ノ各月末ニ就テ見ルニ大正四年ニ於テハ十月最モ高ク九月之ニ次キ八月七月六月五月相次キ十一月四月三月二月一月ト相次キ最モ低キハ十二月ナリ、然ルニ刑事被告人ノミヲ見レハ少シク之ト異ナルモノアリ、九月最モ高ク五月之ニ次キ、十月第三位ニ在リ、二月ヲ第四位ト爲シ、八月四月之ニ次キ、六月三月又次キ、七月一月十二月略等位ニ在リ、十一月最モ低シ、斯ノ如キハ裁判ノ進行ト相違スヘキモノニシテ是ノミヲ以テ何等特徴ヲ見出し得ルモノニアラサルカ如シ。

【入監出監】 大正四年中ノ入監出監數ヲ見ルニ、總數ハ前年ヨリ越 55,336人之ニ本年中入監 115,578人ヲ加ヘ出監 16,591人ヲ差引キ年末現在員 54,506ト爲ル、之ヲ男女別ニ見レハ前年ヨリ越男 95.58%女 4.42%本年中入監男 91.77%女 8.23%本年中出監男 91.67%女 8.33%ニ當ル、又各種類ニ就テ本年中ノ出入ヲ見ルニ受刑者ハ 51,166人入監シテ 52,158人出監シ、勞役場留置者ハ 13,760人入監シテ 14,030人出監シ、刑事被告人ハ 50,430人入監シテ 50,171人出監シ、乳兒ハ 222人携帶入監シ 24人ハ監内ニテ出生シ、282人ハ出監セリ、以上ノ出入人員ヲ合計シ之カ種類別ノ分節比例ヲ算出スレハ出監者ノ受刑者 44.74%勞役場留置者 12.03%刑事被告人 43.12%乳兒 0.11%ニ當リ、入監者中受刑者ハ 45.72%勞役場留置者ハ 11.91%刑事被告人 43.68%乳兒ハ監内出生ヲ加ヘテ

0.21%ナリ、以上ノ中、尙受刑者ヲ細觀スレハ其ノ入監者ノ 88.78%ハ男ニシテ 11.20%ハ女ナリ、此ノ女ノ比例ハ他ノ男女別ニ比シテ決シテ低キモノニアラス、此ノ男女ヲ入監ノ事由ニ依リテ分テハ男ハ 99.90%マテ新受刑者ニシテ女ハ 99.22%新受刑者ナリ、又出監者ハ男ハ 91.53%滿期者 1.94%死亡者 6.52%他ノ事由ニ依ル出監者、又女ハ滿期者 94.62%死亡者 0.35%他ノ事由ニ依ル者 5.03%ナリ。

【在監受刑者】 大正四年末現在在監受刑者ヲ其ノ罪名別ニ分チ分節比例ヲ算出スレハ男ハ 98.82%マテ刑法犯ニシテ 0.12%陸海軍刑法犯、其ノ他ノ 1.06%ノミ特別法犯ニ屬シ、女ハ 95.54%刑法犯ニシテ 4.46%ハ特別法犯ニ屬セリ、又此ノ刑法犯在監者ヲ各罪名別ト爲シ總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ 男ノ最モ多キハ竊盜 58.92%ニシテ詐欺及恐喝 12.35%之ニ次キ強盜 5.92%賭博及富籤 5.19%殺人4.99%橫領 4.67%通貨及有價證券、文書等偽造 3.19%傷害 3.10%等其ノ多キモノニ屬シ、女ハ竊盜 41.99%最モ多ク放火 14.40%之ニ次キ、嬰兒殺 7.99%詐欺及恐喝 6.99%賭博及富籤 3.84%墮胎 3.68%等其ノ多キモノニ屬セリ、又在監受刑者ヲ刑名別ト爲シ總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ 男ハ無期懲役 0.85%有期懲役 98.55%有期禁錮 0.28%拘留 0.32%ニ當リ、女ハ無期懲役 0.80%有期懲役 94.64%拘留 4.56%ニ當ル、更ニ在監受刑者ヲ刑期別ニ見レハ、男ハ無期 0.86%有期 99.14%ニシテ其ノ有期中最モ多キハ一年以上三年未滿ニシテ 31.81%ヲ占メ、之ニ次クハ五年以上十年未滿ニシテ 21.12%、六ヶ月以上一年未滿 15.95%三年以上五年未滿 14.70%、六ヶ月未滿 12.15%、十年以上十五年未滿 2.02%、十五年以上 1.39%ノ順位ナレトモ、女ハ之ト異リ一年以上三年未滿ノ 38.43%ノ最多ニ次クモノハ 六ヶ月未滿ノ 18.37%ニシテ第三位ノ六ヶ月以上一年未滿 14.49%ハ男ト同斷ナレトモ、第四位ハ男ノ第二位ナリシ五年以上十年未滿ノ 12.28%ニシテ次ハ三年以上五年未滿ノ 11.92%十年以上十五年未滿ノ 1.99%十五年以上ノ 1.78%ノ順位ヲ取レリ、是男女ノ犯罪ニ性質ヲ異ニスルモノアルコト上記ノ如キニ原因スルナリ。

【新受刑者】 在監受刑者ノ刑期長キ在監者ノ蓄積ニ依リテ犯罪狀態ヲ見ルカ上ニ錯誤ヲ來タスノ虞アリ、於是乎新受刑者ニ就テ之ヲ見ルノ要アリ、即チ大正四年中ノ新受刑者ヲ罪名別ト爲シ其總數ニ對スル分節比例ヲ算出シテ觀察スルニ、男ニ於テハ刑法犯 88.59%陸海軍刑法犯 0.26%森林法違犯 1.19%徵兵令違犯 0.15%警察犯處罰令違犯 7.69%其ノ他ノ特別法犯 2.19%ナルニ、女ハ陸海軍刑法犯、徵兵令違犯絕無ニシテ刑法犯モ亦少ク 37.07%森林法違犯 0.05%警察犯處罰令違犯頗ル多ク 52.89%其ノ他ノ特別法犯モ亦多ク 9.99%ナリ、此ノ刑法犯ノミニ就テ分節比例ヲ算出スレ

ハ男ニ於テハ竊盜最モ多ク 44.57%ヲ占メ賭博及富籤 15.91%詐欺及恐喝 14.64%之ニ次キ橫領 7.39%傷害 4.21%通貨、有價證券文書偽造 3.60%等多キモノニ屬シ彼ノ在監受刑者ニ於テ多キヲ占メタル強盜ハ 1.43%殺人ハ 嬰兒殺ヲ合セテ 1.75%ナルノミ、又女ニ於テハ竊盜ノ 43.32%最モ多ク、賭博及富籤 13.97%之ニ次キ詐欺及恐喝 8.57%墮胎 8.33%放火 4.64%殺人嬰兒殺ヲ合セ 7.29%橫領 3.27%贓物ニ關スル罪 3.03%狼狽姦淫及重婚等 2.89%其ノ多キモノニ屬シ、茲ニ於テモ其ノ順位ノ在監受刑者ト大ニ異ナルモノアルヲ見ルヘシ、又新受刑者ヲ刑名別ト爲シ各總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ 男ハ無期懲役 0.18%有期懲役 90.07%有期禁錮 1.01%拘留 8.56%死刑0.19%ニシテ大體ニハ在監受刑者ニ似タレトモ其ノ拘留多ク無期懲役甚タ少キニ於テ大差アリ、又女ハ無期懲役 0.11%有期懲役 86.84%有期禁錮 0.02%拘留 62.86%死刑 0.18%ニシテ是ハ又拘留ノ頗ル多キニ由リテ有期懲役ノ量ヲ少クセリ、是女ニ警察犯處罰令違犯多キニ依ル 徵證ナリ、次ニ新受刑者ヲ刑期別ト爲シ各總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ 男ニ於テハ無期 0.20%有期 99.80%、女ニ於テハ無期 0.29%有期 99.71%ニシテ之ヲ在監受刑者ニ比スレハ無期ノ比例低ク、又之ヲ有期ニ就テ見ルニ六箇月未滿ハ男 42.09%女 53.87%六箇月以上一年未滿ハ男 27.03%女 21.00%一年以上三年未滿ハ男 20.09%女 18.00%三年以上五年未滿ハ男 5.13%女 3.50%五年以上十年未滿 4.52%女 2.80%十年以上十五年未滿ハ男 0.51%女 0.10%十五年以上男 0.43%女 0.38%ナリ、女ノ十五年以上ト十年以上十五年未滿カ顛倒セル以外ハ其ノ刑期短キ者ト多キハ 整然タリ、而シテ女ノ刑期短キ者ト多キ割合強シ、此ノ關係ハ 在監受刑者ニ於テハ全ク見ル能ハサル所ナリ。

次ニ新受刑者(拘留及換刑輕禁錮ニ當ルモノヲ包含セス)ニ就テ犯罪上ノ諸關係ヲ見ルニ、第一大正四年中ノ新受刑者ヲ各性年齡別ト爲シ分節比例ヲ算出スレハ二十歳未滿ハ 男ニ在リテハ 10.97%女ニ在リテハ 14.63%二十歳以上三十歳未滿ハ 男 34.36%女 22.03%三十歳以上四十歳未滿ハ 男 28.49%女 23.69%四十歳以上五十歳未滿ハ 男 16.66%女 22.27%五十歳以上六十歳未滿ハ 男 6.39%女 11.82%六十歳以上ハ 男 2.53%女 5.56%ナリ、男ノ最高ハ二十歳以上三十歳未滿ニ在リテ稍急峻ノ山ヲ構成シ、女ハ三十歳以上四十歳未滿ヲ最高ト爲シ其穹隆甚タ緩ナリ、要スルニ女ノ受刑者ハ各年齡級ノ分配ヨリモ甚タ平等的ナリ、又此ノ比例數ヲ十年前ナル明治三十八年ノ同一比例數ニ比スルニ、二十歳未滿ハ男女共ニ減少シ、二十歳以上三十歳未滿ハ男モ減少シタレトモ 女ノ減少著シク、三十歳以上四十歳未滿ハ男女共ニ増加シ、四十歳以上五十歳未滿モ亦然リ殊ニ女ノ増加著シ、五十歳以上六十歳未滿ハ 男ハ少

シク減シタレトモ女反對=増加シ、六十歳以上ハ男モ女モ増加セリ、斯ノ如ク女ノ動搖著シキハ女ノ絕對數ノ過=男ヨリ少キ=原因スルモノナルヘク、而シテ男女共=三十歳以上五十歳ノ壯年=多キヲ加ヘタルハ果シテ何=原因スルカ、今ハ之ヲ追究セサルヘシ、又大正四年ノ事實=依リ各年齢者ヲ罪名=分チ觀ルニ殆ト各性各年齢ヲ通シテ最モ多キモノハ竊盜ニシテ、之=次ク罪名ハ各性各年齢=依リテ同一ナラス、即チ二十歳未満ノ男ハ竊盜 72.9%ニシテ詐欺及恐喝 8.1%横領 6.0%=當リ、同女ハ竊盜 73.1%ニシテ詐欺及恐喝 6.5%殺人(嬰兒殺ヲ含ム以下同シ) 6.2%=當リ、二十歳以上三十歳未満ノ男ハ竊盜 52.5%詐欺及恐喝 14.3%横領 7.8%賭博及富籤 6.2%傷害 4.9%=當リ、同女ハ竊盜 54.1%殺人 11.6%詐欺及恐喝 9.1%放火 5.8%墮胎 5.0%=當リ、三十歳以上四十歳未満ノ男ハ竊盜 35.4%賭博及富籤 20.6%詐欺及恐喝 15.5%横領 7.0%傷害 4.7%偽造 4.1%=當リ、同女ハ竊盜 40.1%賭博及富籤 17.0%詐欺及恐喝 9.0%猥褻姦淫 6.0%胎墮 5.4%殺人 4.8%=當リ、四十歳以上五十歳未満ノ男ハ竊盜 27.2%ニシテ賭博及富籤殆ト之=讓ラス 27.1%ヲ占メ詐欺及恐喝 16.1%横領 7.3%偽造 4.9%傷害 3.2%=當リ、同女ハ竊盜 29.0%賭博及富籤 23.2%詐欺及恐喝 10.2%放火 5.5%横領 5.3%殺人 4.7%、贓物=關ス 4.3%=當リ、五十歳以上六十歳未満ノ男ハ賭博及富籤寧ろ竊盜ヨリモ多ク 31.5%ヲ占メ竊盜ハ 27.1%ナリ詐欺及恐喝 14.9%横領 6.7%贓物 3.0%=當リ、同女ハ竊盜 33.3%賭博及富籤 25.3%墮胎 11.2%偽造 5.0%詐欺及恐喝 7.6%殺人 6.8%贓物 5.2%=當リ、六十歳以上ノ男ハ竊盜 30.9%賭博及富籤 26.9%詐欺及恐喝 12.4%横領 6.4%森林法違反 3.1%贓物 3.0%偽造 2.8%=當リ、同女ハ墮胎最モ多ク 36.8%賭博及富籤 18.8%竊盜ハ第三位ニシテ 17.1%ト爲リ放火 6.8%殺人モ亦 6.8%詐欺及恐喝 16.0%=當リ、以上ハ主ナル罪名ヲ擧ケタルニ過キサレトモ以テ年齢ト犯罪トノ關係ヲ窺フノ料ト爲ス=足ルモノアラソ。

次=飲酒ノ嗜好ト犯罪トノ關係ヲ見ルニ、大正四年ノ新受刑者中男ハ 56.52%酒ヲ嗜ミ 43.48%酒ヲ嗜マス、女ハ 10.26%飲酒ヲ嗜ミ 89.74%嗜マス、之ヲ既往ニ比スルニ男女共=飲酒ノ嗜好アル者少シク其ノ數ヲ減セリ、飲酒ノ嗜好アル男ノ最モ多キ犯罪ハ竊盜ノ 39.3%ニシテ詐欺恐喝之ニ次キ 15.9%賭博及富籤 15.1%横領 7.4%傷害 5.6%偽造 3.4%=當リ、飲酒ノ嗜好ナキ男ハ竊盜 38.4%賭博及富籤 15.9%詐欺及恐喝 92.0%横領 6.8%偽造 3.6%傷害 3.0%=當リ、飲酒嗜好ノ有無=依リ大差ナキモ唯飲酒嗜好家=傷害罪多キヲ異ナリトス、又女=於テハ飲酒ノ嗜好アル者ハ竊盜 37.0%賭博及富籤 18.1%詐欺及恐喝 13.9%墮胎 6.0%=當リ、其ノ嗜好ナキ者ハ竊盜 44.2%賭博及富籤 13.6%墮胎 8.2%詐欺及恐

喝 8.0%殺人 7.2%放火 4.5%横領 3.5%=當リ自ラ兩者ノ間=差アルカ如シ。

次=資産ノ有無ト犯罪トノ關係ヲ見ルニ、大正四年ノ事實ハ男=於テハ資産アル者 1.14%稍資産アル者 6.81%資産ナキ者 60.45%赤貧ナル者 31.60%=當リ、女=於テハ資産アル者 0.33%稍資産アル者 3.68%資産ナキ者 51.74%赤貧ナル者 44.25%=當レリ、之ヲ十年前ナル明治三十八年ノ同一比例ニ比スルニ 資産アル者ハ男女トモ=殆ト増減ナク、稍資産アル者ハ男女トモ=少シク減シ、増セリ、資産ナキ者ハ男ハ増シ女ハ減シ、赤貧ナル者ハ男ハ減シ女ハ資産アル者ト稍資産アル者トヲ合セテ其ノ 罪名別ヲ見ルニ、男ハ竊盜 22.7%詐欺及恐喝 18.5%賭博及富籤 15.2%偽造 8.5%横領 7.5%傷害 4.3%=當リ女ハ竊盜 21.4%殺人 17.9%墮胎 16.7%放火 9.6%賭博及富籤 8.3%詐欺及恐喝 7.1%=當リ、又資産ナキ者ト赤貧ナル者トヲ合セ見ルニ男ハ竊盜 45.0%賭博及富籤 15.5%詐欺及恐喝 13.8%横領 7.1%傷害 4.1%偽造 2.9%=當リ、同女ハ竊盜 44.3%賭博 14.3%詐欺及恐喝 8.7%墮胎 8.0%殺人 6.4%放火 4.5%=當ル、資産ノ有無ノ選定=如何ノ標準ヲ取リシヤ、其ノ申告=果シテ幾何ノ價值アリヤ 明瞭ナラサレトモ、斯クシテ主ナル罪名=就テ觀察シタルノミニテモ其ノ指示ハ必スシモ棄ツヘキモノニアラサルカ如シ。

大正四年中ノ新受刑者ヲ其ノ出生時ノ 身分=依リテ分テハ男ハ嫡出子 97.05%庶子 0.39%私生子 2.19%身分不詳 0.37%=當リ、女ハ嫡出子 97.48%庶子 0.38%私生子 1.81% 身分不詳 0.33%=當レリ、然ルニ大正二年ノ出生ノ事實=依レハ男ハ嫡出子 91.29%庶子 1.39%私生子 7.32%=當リ、女ハ嫡出子 90.98%庶子 1.26%私生子 7.76%=當レリ、若シ今日ヲ以テ既往ヲ推シ得ルモノトスレハ新受刑者ハ男女トモ 嫡出子頗ル多キモノト謂ハサルヘカラス、惟フ=是ハ新受刑者カ自己ノ身分ノ 私生子庶子ナルコトヲ隠蔽シテ自ラ嫡出子ナリト申告スルモノアルニ 由ル錯誤ナラサルナキカ。

大正四年中ノ新受刑者=就テ其ノ養育ヲ受ケタル 家庭ノ關係ヲ見ルニ實父母ノ下ニ養育セラレタル者男ハ總數ノ 91.91%女ハ 92.45%=當リ、此ノ係數ヲ累年ニ見ルニ男=於テハ減少シ女=於テハ増加スルノ概アリ、養父母=養育セラレタル者ハ男ハ 1.28%女ハ 0.95%ニシテ是ハ又反對ニ女ハ減少シ男ハ増加ス、其ノ他實繼父母=養育セラレタル者ハ男女共=増加ノ傾向アリ、祖父母=養育セラレタル者ハ實ニ減少スルノ傾向アルカ如シ、併シナカラ此ノ斷片的ノ事實ヲ以テ直ニ犯罪者ノ家庭ヲ斷スヘキニアラソ。

大正四年中ノ新受刑者=就テ教育ノ關係ヲ見ルニ 男ハ高等教育アル者 0.23%中等教育アル者 3.80%普通教育アル者 53.15%普通

教育ヲ受ケテセサル者 31.66%無筆者 11.16%=當リ、女ハ中等教育アル者 0.28%普通教育アル者 22.95%普通教育ヲ受ケテセサル者 33.53%無筆者 38.24%=當ル、總人口ノ教育程度ヲ知ラサルカ故=何レノ教育程度者カ新受刑者ト爲ルコト多キヤフ明ニセスト雖、上記ノ分節比例ヲ累年ニ見ルニ男=於テハ 高等教育アル者中等教育アル者及普通教育アル者共=著シク増加シ、普通教育ヲ受ケテセサル者及無筆者ハ減少セリ、又女=於テモ 中等教育アル者普通教育アル者普通教育ヲ受ケテセサル者ハ皆増加シ、無筆者ノミ減少セリ、僅ニ十年=足ラサル年間=於テ スクハカリ國民ノ教育程度=變化アリトシモ覺エス、然レハトテ教育アル者ノ犯罪カ斯ク急速ニ増多スヘシト思ハレス、要スルニ是ハ 調査上何等カノ變更アリタルニ由ルナラン。

【累犯】 大正四年中ノ新受刑者中男ハ 16,672人女ハ 502人ノ累犯者アリ、之ヲ新受刑者ノ各性總數ニ比例スルニ男ハ 40.26%女ハ 23.84%ノ累犯者アリタルコト、爲ル、此ノ累犯者ヲ年齢十八歳未満ト以上トニ分テハ男ハ十八歳未満 2.35%十八歳以上 97.65%=當リ、女ハ十八歳未満 4.38%十八歳以上 95.62%=當リ女ノ少年累犯者少シク高シ、又此ノ少年累犯者ヲ犯數ニ 分チ見レハ男ハ再犯 82.35%三犯以上 17.65%=シテ女ハ再犯 86.86%三犯以上 13.64%ナリ、又十八歳以上ノ累犯者ヲ犯數ニ依リ分チ見ルニ、男ハ再犯 59.51%三犯以上五犯マテ 36.38%六犯以上 4.11%=シテ女ハ再犯 67.29%三犯以上五犯マテ 28.33%六犯以上 4.38%ナリ、是等ノ事實ニ徴スレハ概シテ女ハ男ヨリモ 犯數多キ者少キカ如シ、累犯者ヲ罪名別ニ分チ主ナル罪名ノ分節比例ヲ 算出スルニ、十八歳未満ノ男=於テハ竊盜 86.4%横領 5.4%詐欺及恐喝 4.9%=當リ、同女=於テハ殆ト全部=近キ 90.9%ハ竊盜ナリ、又十八歳以上ノ男=於テハ竊盜 52.72%賭博及富籤 18.1%詐欺及恐喝 13.9%横領 5.0%傷害 1.4%=當リ、同女ハ竊盜 55.6%賭博及富籤 22.5%詐欺及恐喝 9.8%墮胎 6.5%=當ル。

【作業】 大正四年中入監人ノ一日平均作業人員ハ男 35,907人女 1,071人計 36,978人ニシテ之ヲ種類ニ依リ分テハ、男ハ官司業従事者 9.3%受負業従事者 76.9%委託業従事者 13.8%=當リ、女ハ官司業 3.1%受負業 62.1%委託業 34.8%=當ル、而シテ官司業ノ男カ從事スル主ナル作業ハ耕作 29.6%藥工 16.5%抄紙工 13.7%木工 10.5%伐木工 4.5%麻工 3.4%等、同女ハ裁縫工 63.6%抄紙工 18.2%等、受負業ノ男カ從事スル主ナル作業ハ機械工 33.8%麻工 20.7%藥工 9.4%草履工 5.9%網工 3.7%蘭葺工 3.5%等、同女ハ機械工 36.5%麻工 18.8%草履工 11.7%莫大小工 7.7%織寸工 6.6%紐工 5.0%等、委託業ノ男カ從事スル主ナル作業ハ裁縫工 21.6%機械工 16.2%莫大小工 12.3%麻工 8.6%經師工 3.8%藥工 3.1%網工

2.5%等、同女ハ裁縫工 42.6%機械工 18.8%麻工 14.2%莫大小工 10.2%等ナリ。

【疾患】 大正四年中ノ在監人ノ罹病者ハ男 73,379人女 2,428人計 75,807人ナリ、此ノ中男 4,169人女 208人計 4,377人ハ入監時ノ罹病者ナルカ故=入監後ノ罹病者ハ男 69,210人女 2,220人計 71,430トス此ノ入監時罹病者ヲ本年中ノ入監人員ニ比スルニ男ハ 9.01%女ハ 21.86%ノ罹病者アリタルコトヲ知ラル、而シテ此ノ入監時罹病者ヲ除キタル入監後ノ罹病者數ヲ年末ノ 在監人員ニ比スルニ男ハ 1,325.18%女ハ 974.10%ト爲ル、其ノ罹病數ノ多キ者ニ驚クヘキモノアリト謂フヘシ、是等罹病者ノ外前年ヨリ 繰越シタル患者アリ、之ヲ總計スレハ男 76,633人女 2,537人ト爲リ、此ノ總患者ノ本年中ニ治療シタル者ハ男 89.08%女 86.20%=當リ、死亡シタル者ハ男 1.11%女 0.59%ナリ、女ハ罹病比例=於テモ低ク其ノ罹病者ノ死亡比例=於テモ亦低シ、新受刑者ノミ=就テ見レハ女ハ寧ろ男ヨリモ年齢高キ者ノ 比例大ナリ、然レハ女ノ罹病比例低ク死亡比例亦低キハ男ニ比シテ刑期ノ 短キ者多キカ爲カ將タ女ハ斯カル場合=於テ男ヨリモ之ニ耐フルノ 特性アルカ尙攷フヘシ。

大正四年中入監者ノ各性千ニ對スル入監時罹病ノ 主ナルモノヲ擧ケレハ、男=於テハ結核性疾患 1.94%癩 0.37%癩毒 3.08%淋毒 2.88%軟性下疳 1.28%是等ノ傳染性疾患カ彼等ノ 社會ニ如何ニ蔓延シアルカヲ見ルヘク、殊ニ癩カ結核性疾患ノ約五分一ニ達スル多數アリシコトハ驚クヘキ事實ナラスヤ、普通病=於テ最モ多キハ皮膚病ナリ其ノ比例實ニ 13.62%トス、消化器疾患モ少ナカラサルニアラサレトモ其ノ總テヲ合セテ 4.60%ナルノヨ、呼吸器疾患ハ遙ニ少ナク 1.71%ナルノミ、眼病ハ總テ 2.35%其ノ中 1.00%ハ [トラホーム]ナリ、但シ此ノ入監時ノ罹病ハ 健康診斷ノ結果發見シタルモノニシテ、彼等自身ハ身ノ罹病者タルコトヲ 感セサルモアルヘク、縱シヤ罹病ヲ自覺シタルモ罪ヲ犯ス程ノ 活動力ヲ有シタル者ナルコトヲ知ラサルヘカラス、女=於テハ結核性疾患 1.05%癩毒 2.31%淋毒 0.21%軟性下疳 0.32%、流石ニ癩患者ナリ、結核性疾患モ癩毒モ男ヨリ少シ、其ノ淋毒ト軟性下疳トノ 甚タ少キハ眞ニ少キカ將タ診斷上之ヲ發見セサルモノナルカ 疑ハレ、皮膚病ハ女ニモ多ケレトモ而モ男ノ如ク多カラス 6.41%ナリ、消化器疾患モ男ヨリ少ク 3.05%、呼吸器疾患モ亦然リ 1.05%=過キス、眼病ノミハ男ヨリモ多ク 2.73%=シテ中 [トラホーム]ノ 1.89%ナルモ亦男ヲ超越スルコト大ナリ。

大正四年中=發生セル罹病者(入監時罹病者ヲ除ク)ノ 主ナル疾病ヲ年末ニ在監人員ニ比スルニ、男=於テハ結核性疾患 11.55%癩 0.08%癩毒 14.17%淋毒 12.45%軟性下疳 3.04%是等ノ疾患ハ多

カ入監時ニ發見セザリシモノ若クハ潜伏シアリテ入監後發シタルモノナラン、ロイマチス性疾患 34.56%脚氣 7.10%ノ如キ監内生活ノ影響ト見ルヘキカ、神經衰弱 25.54%モ亦然リ、夜盲症ノ 7.64%モ「トラホーム」ノ 6.61%モ注意スヘク、其ノ他ノ眼病 66.02%ハ監房ノ構造ニモ作業ニモ影響アルヘク、氣管支炎ノ 49.00%肋膜炎ノ 7.31%モ亦然リ、胃疾患ノ 213.84%腸加答兒ノ 163.90%痔疾ノ 83.72%等皆彼等ノ生活ヲ想見スルニ足ルヘク、皮膚病及運動器病ノ 223.54%外傷ノ 128.71%ハ彼等ノ勞働ヲ察スルニ餘リアルナリ、又ハ女ニ於テハ結核性疾患 2.19%梅毒 12.37%淋毒 1.32%癩モ軟性下疳モ無シ、潜伏梅毒ノ發生シタルモノ、ミ男ニ近キ多數ヲ出シタレトモ他ハ男ニ比スレハ頗ル少シ、ロイマチス性疾患41.68%脚氣 7.90%モ共ニ男ヨリ多シ、殊ニ脚氣ハ一般社會ニテハ男ノ約三分一ニ過キサル女カ監内生活ノ爲ニ男以上ニ發病シタルハ注意スヘキ現象ナリ、神經衰弱ハ 10.09%ニシテ男ノ半ハニモ足ラス、夜盲症ノ 2.19%ナルモ男ニ比シテ遙ニ少シ「トラホーム」ハ入監時ノ罹病トシテハ遙ニ男ヨリモ多カリシカ 監内發病ハ 10.97%ニシテ男ヨリモ少シ、併シナカラ其ノ他ノ眼病ハ 82.49%ニシテ男ヲ超ユ、氣管支炎 25.01%肋膜炎 2.65%ハ男ヨリモ少ク、胃疾患 181.66%腸加答兒 108.82%痔疾 11.41%皆男ヨリモ少キハ女ノ刑期カ概シテ短キ者多キニモ依ルカ、又皮膚病及運動器病 119.35

XXVIII. 陸

【壯丁】大正五年ニ於ケル徵兵検査人員中測尺不能ノ者ヲ除キタル全國壯丁ノ數ハ473,327人ナリ、人口千ニ付 8.57人ニ當ル、前年ニ比シ實數 549人ノ増加ニシテ、十五年前タル明治三十四年ヨリ 44,543人ヲ増セリ、今年以降ノ傾向ヲ見ルニ、逐年必ス増加ヲ示スニアラス即チ明治三十六年ニ於テハ前年ヨリ 8萬以上ノ激減ヲナセリ、但シ此ノ激減ハ徵兵法令ノ改正ニ依リ、三十六年ハ恰モ過渡ノ年ニ相當シ、同年ニ限リ前年又ハ後年ニ比シ約二個月間ノ出生者ノ検査ヲ缺如スルノ結果ト爲リシカ爲ナリ、次ニ三十八年、三十九年、相次テ減少シ、四十三年、四十四年、再ヒ遞次減少シ、大正二年亦少シク減少シタルノ事實アリ、其他ハ常ニ前年ヨリ後年ノ數多少ノ増加ヲ爲シテ最近ノ數ニ及ヘリ。

今大正五年ノ人員ヲ府縣ニ就キテ見ルニ、其多少ハ現住人口又ハ本籍人口ノ多少トモ一致セサルモノアリ、即チ壯丁検査人員ノ多キモノヲ順次ニ列擧スレハ、兵庫 18,413、東京 17,411、新潟 17,208、愛知 16,739、福岡 15,840、廣島 15,530、大阪 14,798、静岡 13,651、北海道 13,381等ノ順位ニシテ、人口多キ東京府カ兵庫縣ノ次ニ位シ、大阪府カ廣島縣ノ下ニ來ルカ如キ是ナリ、右ハ素ヨリ人口ノ男女ノ權衡、年齡ノ關係等ヲ研究スルニ於テハ自カラ

%外傷 49.14%ニシテ是亦男ヨリモ遙ニ少キハ男女ノ作業ノ異ナルモノアルニ依ルナラン、女ノ固有ノ疾患ナル婦人生殖器病ハ 50.47%アリ、又監内分娩ノ甚タ多カラサルニモ拘ハラ産ニ因スル疾患 13.16%アリタリ。

大正四年中ノ死亡者ハ男 852人女 15人計 867人ナリ、此ノ死者中最モ多キハ結核性疾患ニシテ男 255人女 2人アリ、之ヲ其ノ總患者ニ比スルニ男ハ 23.14%女ハ 12.50%ニ當ル、之ニ次クモフヲ腦及脊髓疾患ト爲ス男 112人女 1人アリ之ヲ其ノ總患者ニ比スレハ男ハ 8.03%女ハ 3.13%ニ當ル、胃疾患ノ死者男 72人女 1人之ヲ其ノ總患者ニ比スレハ男 0.61%女 0.23%ニ當ル、肺炎ノ死者男 51人女ナシ之ヲ男ノ總患者ニ比スルニ 34.93%ニ當ル、心臟ノ器質的疾患死者男 43人女 1人、之ヲ其ノ總患者ニ比スルニ男 10.49%女 5.88%ニ當ル、腎臟炎死者男 36人女 2人之ヲ其ノ總患者ニ比スルニ男ハ 10.81%女ハ 16.67%ニ當ル、肋膜炎死者男 34人女 1人之ヲ其ノ總患者ニ比スルニ男ハ 0.34%女ハ 0.40%ニ當ル、女ノ死者ハ餘リニ少數ナルカ故ニ之ヲ以テ何等ノ決定ヲモ與フル能ハサレトモ男ノ死亡比例ハ監獄ニ於ケル是等疾患ノ大勢ヲ知ルノ料トシ見ルニ足ルモノアリ。

軍

解釋シ得タルナルヘシト雖、單ニ問題ノ一端ヲ此處ニ掲ケ。

大正五年ノ壯丁人員ヲ身長別ニ依リテ見ルニ、五尺六寸以上 1,437、五尺五寸以上 23,057、五尺四寸以上 49,152、五尺三寸以上 80,831、五尺二寸以上 100,363、五尺一寸以上 91,185、五尺以上 63,685、四尺九寸以上 32,804、四尺八寸以上 13,521、四尺八寸未滿 7,319ナリ、即チ五尺二寸以上三寸未滿ノ者最モ多ク全人員ノ 21.20%ヲ占ム、之ヲ前年ニ比スルニ、五尺二寸以上身長高キ方面ノ各級ハ何レモ前年ヨリ其數ヲ増加シ、五尺二寸未滿身長低キ方面ノ各級ハ悉ク前年ヨリ其數ヲ減少セリ、即チ知ル大正五年ノ壯丁ハ前年ニ比シ身長延加シタルコトヲ、此ノ傾向ハ獨リ前年ト本年トノ關係ニ於テ然ルノミナラス、明治三十四年以來ノ數ニ於テ殆ント例外ナシニ續繼現出セリ、今暫ク中間ノ年ヲ看過シ十五年前ノ明治三十四年ト對照スルニ、明治三十四年ノ最多ハ五尺一寸以上二寸未滿ノ 20.50%ニシテ、次テ五尺二寸以上三寸未滿 20.29%、五尺以上五尺一寸未滿 15.83%ノ順位ナリシニ、十五年後ノ大正五年ニ於テハ、最多ハ五尺二寸以上三寸未滿ノ 21.20%ニシテ、次テ五尺一寸以上二寸未滿 19.26%ハ第二位ト爲リ、順位ヲ轉倒シ、而モ第三位ハ前年ニハ低尺級ナリシニ、本年ノ第三位ハ寧

ロ高尺級ノ五尺三寸以上四寸ノ 17.08%ナルニ見ルモ、我國ノ壯丁ノ身長ハ如何ニ延高セシカラ略知スルヲ得ヘキナリ、若シ徵兵検査ノ壯丁ヲ以テ我國人ヲ代表スルモノトセハ、帝國人ハ十五年間ニ平均約一寸以上身長増加セリト謂フモ強チ誤謬ニ非ラサルヘシ。

今大正五年壯丁検査ノ各身長級百分比例ノ數ニ依リ、地方ノ狀況ヲ略觀スルニ、全國平均ニ比シ身長高キ者ノ多キ地方ハ、近畿區、北海道、中國區、東山區等ニシテ、反之身長低キ者ノ多數ナル地方ハ沖繩縣、北陸區、關東區、東海區、四國區ナリ、而シテ九州區及東北區ハ稍全國平均ノ前後ニ在リ、尙之ヲ府縣ニ就キテ見ルトキハ、同區地方ニ於テモ著シク差アルモノアリ、近畿各縣ハ一般ニ高尺ナルモ、全國第一ノ高尺縣トシテハ、大正五年ノ數ニ於テハ東山區ノ滋賀縣ヲ以テ第一トス、次テ鳥取縣、佐賀縣、亦甚タ高尺ナリ、低尺地方トシテハ沖繩縣ヲ第一トシ、埼玉、群馬、栃木、新潟、山梨等ノ諸縣ナルモ一々正確ナル順位ヲ定メ難シ。

次ニ壯丁普通教育程度ヲ見ルニ、右ニ關シテハ未タ大正五年ノ材料ナシ、依テ大正四年ノ數ヲ掲ケ、而シテ其ノ總數ハ身長別ノ數ト同一ナラス、是レ身長別ニ於テハ年々約三千ノ測尺不能者ヲ除クト同時ニ、教育別ニモ極メテ少數ノ教育検査不能者ヲ除クハナリ、大正四年壯丁ノ教育検査執行人員 475,781人ニシテ之ヲ教育程度ニ依リ分テハ、大學卒業及同等者 2,005、高等學校並專門學校卒業及同等者 3,576、中學卒業及同等者 23,728、高等小學卒業及同等者 163,787、尋常小學卒業及同等者 227,309、稍讀方算術ヲ爲シ得ル者 45,070、讀方算術ヲ知ラサル者 10,306ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ、總人員ノ増加ハ 2.1%ナルニ、大學卒業及同等者ノ増加ハ 18.7%、高等學校並專門學校卒業及同等者ハ 3.0%、中學卒業及同等者 2.5%、高等小學卒業及同等者 4.2%、稍讀方算術ヲ爲シ得ル者 4.7%ニシテ、何レモ平均以上ノ増加ナリ、反之尋常小學卒業及同等者ハ僅ニ 0.1%ノ増加ニシテ、平均ニ及ハサルコト遠ク、殊ニ讀方算術ヲ爲シ得ル者ノ數ハ前年ヨリ少キコト 1.1%ニシテ絶對ニ減少セリ、尙明治三十四年ノ數ヲ見ルニ教育ノ普及ト共ニ、壯丁検査ノ際ニ於テモ益高キ程度ノ教育ヲ受ケタル者ノ數増加ノ傾向ヲ現出シ、同時ニ讀方算術ヲ知ラサル無學者ノ數、年々減少ス、今此無學者ヲ明治三十四年ト對照スルニ同年ニ於テハ 10,306人、即チ壯丁總員ニ對シ 2.2%ナリ、以テ文盲者ノ減少ヲ知ルニ足ル。

【學生生徒】陸軍ニ於ケル學生生徒ヲ教育スル機關ノ種類ハ、各師團及陸地測量部修技所ヲ合シテ十七種トス、是等ノ諸機關ニ

於ケル教員ノ大正四年末現在數ハ、972人ニシテ、明治四十三年ヲ割シ俄ニ 300餘人ヲ増加シタル以後、甚タ大ナル變動ナシ、大正四年末ニ於ケル内譯ハ、勅奏任 536、判任及履 348、囑託 76、外國人 12ナリ、前年ニ比シ勅奏任 13、囑託 5ヲ増シ、判任及履 6、外國人 12ヲ減シタリ、大正四年末學生生徒ノ總數ハ 4,985人ニシテ、前年ニ比シ 14人ヲ減少セリ、現在人員ノ内官費 3,624、半官費 117、自費 1,244ニシテ、右半官費又ハ自費ハ、中央、地方ノ幼年學校ニ之レアルノミ、他ハ悉ク官費ナリ、本年中、學生生徒ノ異動ヲ見ルニ、入學 4,922人、卒業 4,202人、各師團在勤ノ士官候補生ノ士官學校又ハ經理學校ヘ派遣 612人、退學 110人、死亡 12ナリ、右ノ内死亡ハ前年ニ比シ 2人ヲ減少セリ、之ヲ累年ノ數ニ見ルニ、嘗テ明治三十五年ニ於テ 49人ノ死亡アリタルヲ見ルモ、是學生ノ總數甚タ多キ際ノコトナルヲ以テ之ヲ比較ノ外ニ置クモ、爾後ノ學生ノ數多カラサル時ニ比較スルモ蓋シ死亡最モ少キ年ニ屬ス、又退學數ハ累年中本年最モ少シ、右退學ノ中、士官學校 30、中央地方幼年學校 20、各師團士官候補生 21、砲兵工科學校 16等最モ多ク、是等ハ退學ニ依リ全ク陸軍現役ヨリ除カル、モノナリ、又經理學校軍醫學校ニ各 3人ノ退學アルモ是等ハ其ノ性質明ナラス、砲工學校 9人ヲ首トシ、其他ノ各校ニモ夫々退學ノ數アルモ、是等ハ單ニ原隊ニ復歸スル陸軍内ノ異動ニ過キス。

【憲兵隊】大正五年末、憲兵隊ノ部屬ハ、司令部ノ外、朝鮮駐劄、臺灣、關東ヲ含ミタル 21憲兵隊及支那駐屯憲兵並青島守備軍憲兵隊トス、而シテ其ノ人員ハ、將官 2、上長官 41、士官 225、准士官 71、下士 1,218、兵卒 3,756、傭人 1,265、合計 6,578ニシテ前年ニ比シ、573人ヲ増加セリ、右現在員ノ 3以上即チ 4,315ハ朝鮮駐劄憲兵隊ニ屬ス、而シテ同隊ニハ此外、尙士官 14人、兵卒 4,667人ノ朝鮮人ヲ有ス、右ノ外、青島守備軍憲兵隊ニ通譯 2人、司令部ニ判任文官 5人アリ。

大正五年中憲兵ノ取扱ニ係ル犯罪人員ハ、陸軍々人 950、海軍々人 193、陸軍々屬 27、海軍々屬 5、朝鮮人陸軍々屬 15ノ外、軍人軍屬以外ノ犯罪人ノ取扱數 68,265人アリ、其内譯内地人男 4,942、女 270、朝鮮人男 60,312、女 2,135、外國人男 605、女 3ナリトス、右ノ内、軍人ハ海軍稍増シタルモ、陸軍ハ前年ニ比シ 156人ヲ減ス、軍屬ハ稍増シタリ、但シ明治四十三年以後大ナル數ノ變動ナシ、獨リ普通人就中朝鮮人ノ數ノ増加ノ著大ナル注目ニ値ス、是必シモ朝鮮人ノ犯罪數年々増加スト稱スヘキニアラサルヘシト雖、憲兵取扱ノ朝鮮人犯罪數ノ年々増加ハ之ヲ否ムコトヲ得ス、是果シテ何ノ兆リ、抑モ其ノ原因ハ何カ、此所ニ之ヲ知ルニ由ナシ。

【衛戍監獄】大正五年末、内地各地ヨリ朝鮮、臺灣、關東、滿

洲=互リ帝國陸軍 22衛戍監獄=於ケル、未決、既決ノ殘留在監人ハ 358人ニシテ、同年中一日平均在監人員ハ 416.62人ナリ、之ヲ前年=比スルニ、殘留人ハ 14人ヲ増シタルモ、平均人ハ 16.37人ヲ減シタリ、而シテ累年ノ傾向ヨリスレハ、一二多少ノ例外アルモ、大體=於テ逐年減少ノ趨勢=在リ、右ノ狀況ハ殊ニ未決ノ數=於テ然リ、即チ未決ハ年末殘留 17、一日平均 42.35ニシテ、前年=比スルニ累年ヨリスルモ殆ント常ニ減少ニ在リ、同年既決因ハ年末殘留 341ニシテ、前年=比シ 17ヲ増シ、平均在監 374.27ニシテ、前年=比シ 14.8ヲ減シタリ、未決ノ大正五年中入監ハ 1,375人出監ハ 1,378人ニシテ共ニ前年=比シ減退シ、既決ノ同年中入監ハ 1,503人出監ハ 1,786人ニシテ是亦共ニ前年ヨリ減少セリ、死亡者ノ皆無ト爲リシハ監獄衛生ノ改善ノ一端ヲ證スト解スヘキモノナランカ。

【衛戍病院】 大正五年末陸軍衛戍病院ノ數ハ、本院 83、分院 37ナリ、前年=比シ本院ニ 1ヲ減シテ分院ニ 1ヲ加ヘタリ。家屋ノ坪數、平家 99,577坪、二階 7,534坪、前年=比シ平家 28坪ヲ減ス。之カ職員ハ治療看護ノ方面ニ於テ軍醫正 44、軍醫 206、合計 250ト看護長 819アリ、調劑方面ニ於テ藥劑正 9、藥劑官 99アリ、經理方面ニ於テ主計 30、計手 120アリ、其他磨工長 47、雇傭 579合計 1,953ヨリ成ル、右ノ内ニハ素ヨリ卒ヲ含マサルモノトス、前年=比シ總職員 19人ヲ増加シタル所ナルカ、其ノ内課ニ於テハ經理部ノ計手 2ヲ減シタル外他ハ何レモ多少ノ増員ニ當ル、而シテ總職員ノ累年ヲ比較シ見ルニ、明治四十二年千餘人ノ激減後、大ナル増減ナシ、但シ四十二年ノ激減ノ原因ハ四十一年以前千餘人アリタル看護人ヲ同年以後廢止シタルニ由ル。

【疾患】 大正四年中ノ新患者ハ 198,181人ニシテ之ニ前年ヨリノ繰越舊患者ヲ合セ總數 200,428人ナリ、此ノ患者ノ治療日數ハ平均一患者十日ニシテ前年=比シ一日ヲ減シ其ノ短キコト 既往ニ當テ見サル所ナリ、此ノ治療日數ニ基キ平均一日ノ患者數ヲ算出スレハ 5,708人ニ當リ、之ヲ前年=比スルニ 265人ヲ増シタリ、又此ノ患者數ニ依リ兵員毎百ニ對スル一日ノ患者比例ヲ算スルニ 2.64人ニ當リ、前年ヨリ高キコト 0.05人ナリ、此ノ患者比例ハ嘗テ 6人以上ノ高率ヲ現ハシタルコトアリシカ、爾來年毎ニ低下シ大正三年ニ至リシカ本年ハ上記ノ如ク上昇シタリ、是偶然ノ結果ナリヤ將タ何等カ原因スル所アリテノ現象ナリヤ、上記ノ患者中不幸ニシテ死亡ノ轉歸ヲ取リタル者 354人アリ、之ヲ患者數ニ比スルニ 0.18%ニ當ル、此ノ死亡比例ハ既往ニ當テ見サル低位ナリ、又癩病ノ故ヲ以テ除役ノ已ム無キニ至リタル者 2,966人アリ、之ヲ患者數ニ比スルニ 1.48%ニ當ル、此ノ除役比例モ亦年々低下セリ。

以上ノ事實ヲ部隊別ニ見ルニ、内地諸部隊及諸學校ニ於テハ兵

員毎百一日ノ患者比例ハ 2.67人ニシテ其ノ死亡比例ハ 0.16%除役比例ハ 1.51%ニ當リ、臺灣守備隊ハ兵員毎百一日ノ患者比例 2.87人ニシテ内地ニ比シ 0.20人高ク其ノ死亡比例ハ 0.23%ニシテ是亦 0.04%高ク除役比例ハ 0.78%ニシテ内地ヨリ低キコト 0.73%ニシテ約半數ナリ、朝鮮駐屯部隊ハ兵員毎百一日ノ患者比例ハ 2.57人ニシテ内地ヨリ低キコト 0.10人、其ノ死亡比例ハ 0.22%ニシテ内地ヨリ高キコト 0.06%、除役比例ハ 1.07%ニシテ内地ヨリ低キコト 0.44%ナリ、關東州駐屯部隊ハ兵員毎百一日ノ患者比例ハ 2.13人ニシテ内地ヨリ低キコト 0.54人、其ノ死亡比例ハ 0.34%ニシテ是ハ又内地ヨリ高キコト 0.18%ニシテ倍以上ニ當リ、除役比例ハ 2.14%ニシテ内地ニ比シ 0.63%高シ、支那駐屯部隊ハ兵員毎百一日ノ患者比例 2.30人ニシテ内地ヨリ低キコト 0.37%、其ノ死亡比例ハ 0.23%ニシテ臺灣駐屯部隊ト同ク内地ヨリ 0.04%高ク除役比例ハ 1.05%ニシテ内地ヨリ低キコト 0.46%ナリ、又本年ヨリ設ケラレタル青島守備隊ハ兵員毎百一日ノ患者比例 1.53人ニシテ内地ヨリ低キコト 1.14人、其死亡比例 0.50%ニシテ他ニ見サル高率ヲ示シ内地ヨリ高キコト 0.34%即チ三倍以上ニ居リ、除役比例ハ 1.07%ニシテ朝鮮ト同ク内地ヨリ低キコト 0.44%ニ當レリ、更ニ内地ノ諸部隊ニ就テ細觀スルニ兵員毎百一日ノ患者比例ハ第十一師團(四國)ノ 3.24最モ高ク第十四師團(埼玉、群馬、茨城、栃木)ノ 3.20之ニ次キ其ノ他第三師團(三重、愛知、岐阜)ノ 3.08、第二師團(宮城、福島、山形)ノ 2.99第七師團(北海道) 2.97近衛師團(東京)ノ 2.96第一師團(東京、神奈川、千葉、山梨)ノ 2.90等其高キモノニ屬ス、然ルニ死亡比例ハ之ト基タ一致ヲ缺キ第十三師團(新潟、長野) 0.37最高ク第八師團(青森、岩手、秋田)之ニ次キ、第四師團(大阪、兵庫、和歌山) 0.21之ニ次キ其ノ他第七師團 0.20第十二師團(長崎、福岡、大分、佐賀、宮崎)及第十五師團(愛知、静岡、岐阜、長野)ノ共ニ 0.18第一師團及第五師團(廣島、山口、愛媛)ノ共ニ 0.17ナルカ如キ其ノ高キモノニ屬ス、又除役比例ハ第五師團ノ 3.25最モ高ク第十七師團(鳥取、島根、岡山、廣島)ノ 2.51之ニ次キ其ノ他第十五師團ノ 2.48第九師團(福井、石川、富山)ノ 1.12第十三師團ノ 2.01近衛師團ノ 1.90第七師團ノ 1.88第十八師團(長崎、福岡、佐賀、熊本)ノ 1.85等高キモノニ屬セリ、内地ノ諸部隊中諸學校ト懲治隊トハ特別ノ關係アルモノトシテ除キ殘ル近衛師團及第十八師團ト上記守備隊及駐屯部隊トノ間ニ於ケル患者比例ト死亡比例トノ相關比較ヲ試ミルニ唯臺灣守備、第六、第九、第十六第十七師團ニ於テノミ兩現象ノ一致ヲ見ルニ他ハ全然相反シテ患者多キ所ニ死亡少ク、患者少キ所ニ死亡多キカ然ラサルモ不一致ナルコトヲ示セリ、又患者比例ト除役比例トノ相關比較ヲ爲セハ其ノ正シキ一致ハ近衛師團及第十八師團ニ於テ見ルノミ他ハ反

對ナルカ否ラサルモ不一致ナリ、若シ夫レ患者比例ト死亡及除役ヲ合セサル比例トヲ對照スルニ不一致ナル程度ハ愈益強キニ至ル、然レハ諸部隊中ニハ患者トシテ算スル者ノ程度必スシモ一致セズ、或ル部隊ハ輕症者ヲモ算ヘ、或ル部隊ハ稍重症者ノミヲ算フルコトアルカ如シ、而シテ死亡比例ト除役比例トノ相關比較ヲ爲セハ、其ノ一致不一致殆ト相半シ殆ト捕捉スル所無シ、之ニ依リテ見レハ難治ノ重症者カ其ノ死ニ先テテ除役セラル、コトノ多キ部隊ニハ自ラ死者少キコトモ實際ニ於テ多少存スルモノ、如シ。

又兵種別ニ就テ兵員毎百一日ノ患者比例ヲ見ルニ下士候補生ノ 5.26人ナル懲治隊兵ノ 4.76人ナルハ特別トシテ鐵道隊兵ノ 3.90人重砲兵ノ 3.41人騎兵ノ 3.11人野砲兵ノ 3.06人等其ノ高キモノニ屬シ、歩兵ハ 2.54人工兵ハ 2.72人ナリ。

各病別ニ主ナル疾病ヲ見ルニ、結核性疾患ハ總テ 996人アリ中 974人ハ本年中新患者トス、之カ治療日數ニ依リテ兵員毎一日ノ患者比例ヲ算スレハ 0.04人ニ當ル此ノ總患者中、58人ハ死亡(5.82%) 79人ハ全治、778人ハ除役(78.11%)、微毒患者 1,622人淋毒患者 2,419人軟性下疳及橫痃患者 1,225人是等花柳病者ハ兵員毎百一日ノ比例 0.20人ナリ、ロイマチス性疾患 1,657人之カ兵員毎百一日ノ比例 0.04人トス、69人ノ除役(4.16%)ヲ出セリ、神經衰弱患者 625人其ノ除役 67人(12.32%)、精神病患者 70人其ノ除役 64人(91.43%)、肺炎患者 753人其ノ死亡 34人(4.52%)アリ胸膜炎患者 2,959人、此ノ胸膜炎ニ依ル除役 754人(25.49%)アリ、蟲様垂炎及腹膜炎患者 532人此ノ死亡 30人(5.64%)除役 18人(3.39%)、腎臟炎患者 197人此ノ死亡 13人(6.60%)除役 46人(23.35%)、自殺及自傷 88人其ノ死亡 23人(26.13%)、外傷及不慮 59,827人アリタリ

XXIX 海 軍

【軍艦】 大正五年末現在帝國海軍ニ於ケル軍艦ハ、艦數 132隻、排水量 688,697噸、馬力 1,675,511馬力ナリ、前年=比シ 3隻、1,712噸、133,169馬力ヲ増加セリ、艦數若ハ馬力ニ比シ噸數ノ増加著シカラサルハ、同年中ノ廢艦除籍艦ハ丹後、相摸、宗谷、笠置及龍田等比較的大艦ナリシニ反シ、新ニ艦籍ニ加ハリタルハ、獨リ伊勢ノ 30,500噸ノ外ハ悉ク驅逐艦ナレハナリ、帝國軍艦ハ明治三十八年、三十九年ニ於テ俄ニ膨脹シ、四十年一度最高ニ達シ、四十一年隻數噸數共ニ減少シ、爾來隻數ノ増加甚タ多カラズ、漸ク大正元年之ヲ回復シタルモ二年三年再ヒ減少シ、大正四年驅逐艦ノ新造ニ依リテ俄ニ隻數ヲ増シ終ニ現今ノ數ニ至レリ。噸數ハ四十一年、四十二年相次テ少シク減少シタル外、爾後常ニ若干ノ増加

新患者ヲ其ノ發生ノ月ニ依リテ分チ之ヲ一年平均一日ノ患者千ニ付各月平均一日ノ患者比例ト爲シテ觀察スルニ、内地ノ各部隊ノ平均ハ二月(1052)ヲ頂嶺トセル小山アリテ四月(917)ニ谷ヲ現シ踵テ八月(1269)ヲ頂嶺トセル大山アリテ降リテ十一月(500)ヲ谷底ト爲シ十二月又上リテ翌年ノ一月ニ接續ス、是ハ本年ニ限リタルコトニアラス殆ト年々同型ヲ繰リ返ヘスナリ、然レハ之ヲ以テ本邦少壯男子ノ月別發病型ト見ルモ可ナランカ、唯十一月ノ谷底ノ餘リニ深キハ一般ト違フ所ニアラサルカ、何トナレハ陸軍ニ於テハ此ノ月ヲ以テ演習月ト爲スカ故ニ從テ病者ノ發生ナキコト當然ナレハナリ、然ルニ各植民地ニ於ケル守備隊又ハ駐屯部隊ノ同一比例ヲ算出スレハ大ニ違ルモノアリ、即チ臺灣ニ於テハ所謂熱帶型ニシテ八月(1927)ヲ頂嶺ト爲セル大山アリテ其ノ谷ノ絶底ヲ二月(487)ト爲ス其ノ最高最低ノ較差實ニ 1440ニシテ、内地ノ 769ニ比スレハ殆ト倍ス、朝鮮ハ内地ト同様ノ二山二谷型ナレトモ後山ノ頂嶺ナル七月(1365)ニシテ前山ノ頂嶺三月(1173)ハ大差ナク、後谷十一月(4508)ノ甚タ深キニモ拘ハラズ前谷四月(1035)ハ頗ル淺シ、要スルニ朝鮮ノ患者發生ハ甚ク平等ナルニ突然七月八月ニ多發シ俄然十一月十二月ニ發生少キ奇型ヲ呈セリ、關東州ハ更ニ一層奇型ヲ現ス後山八月(1389)ノ最高ナルハ他ニ同シキモ夫ト殆ト同高ナル五月(1370)ヲ頂嶺トセル前山ハ遅レテ立チ、其ノ淺キ谷ナル六月(1098)ヲ隔テ、亞頂ナル七月(1325)ニ接ス、而シテ最低ノ深谷ハ他ト同ク十一月(448)ニシテ最高最低ノ較差ハ 938ナリ、以上ノ事實ニ依レハ内地ニ於テハ患者多發ノ月冬ト夏トニ在リ夏殊ニ多發シ、臺灣ハ夏ノミ多發シ、朝鮮ハ一年ヲ通シテ平等ナルトモ夏殊ニ多發ノ時アリ、關東州ハ暮春ヨリ初秋マテ多發シ必スシモ夏ノミ多發セサルカ如シ。

ヲ執リツ、今日ノ數ニ達セリ、以上隻數噸數並ニ馬力ノ累年變遷ノ狀ニ依リ艦ノ性質ヲ略察知スルヲ得ヘシ。

大正五年末水雷艇現在數ハ 24隻、3,119噸、66,200馬力ナリ、前年=比シ 2隻 198噸 3,800馬力ヲ減ス、水雷艇ハ明治三十七年乃至三十九年ノ交 85隻、7,535噸ヲ最大ノ極限トシ、爾來隻數噸數共ニ減少ノ一方ニシテ殊ニ大正二年激減甚シク以テ今日ニ至レリ。

【海軍軍人】 大正五年末帝國海軍軍人ノ總數ハ 96,899人ニシテ、内現役 63,225、豫備 20,386、後備 13,288ナリ、之ヲ明治三十四年以來ノ數ニ就キテ見ルニ、獨リ豫後備ノ逐年遞加スルノミナラス、現役モ亦僅ニ大正二年一度減少ノ事實アル外常ニ増加シ、十五年間ニ恰モ二倍強ト爲レリ。今大正五年ノ現役軍人ヲ階級別

＝見レハ、將官 109 (内甲板 80、機關 10)、上長官 1,344 (内甲板 731、機關 258)、士官 3,110 (内甲板 1,563、機關 573)、候補生 157 (内甲板 97、機關 35)、准士官 1,324 (内甲板 626、機關 483)、下士 12,064 (内甲板 6,562、機關 3,861)、卒 44,562 (内甲板 25,286、機關 15,917)、生徒 555 (内甲板 353、機關 137) ナリ。

右ノ内大正五年末海軍本省以下官衙勤務ノ海軍軍人ハ 6,361人ニシテ將官 76、上長官 754、士官 840、候補生 25、准士官 242、下士 1,360、卒 3,064ナリ、此他海軍官衙ノ事務ニ従事スル者勅奏判以下ノ軍屬 2,675アリ。

【海軍徴兵及募兵】 大正五年ニ於テ帝國海軍ニ徴集シタル兵卒中、其ノ徴兵ニ係ルモノハ 5,351人、其ノ募兵ニ係ルモノハ 5,590人、合計 10,971人ヲ徴集セリ、之ヲ兵種ニ分テハ徴兵ハ水兵 2,957、機關兵 1,923、其他 501ニシテ、募兵ノ水兵 3,063、機關兵 1,999、其他 528ナリ、即チ徴兵ト募兵トハ殆ント同數ニシテ募兵ハ稍多シ此ノ權衡ハ毎年相似タレトモ 只大正元年及三年ニ於テ徴兵却テ少シク多カリキ、而シテ徴集兵員ノ總數ハ大體年々多キヲ加フルノ傾向ニアリテ、明治三十四年ニ對シ恰モ倍數ヲ示セトモ、中間一二ノ例外トモ認めヘキハ明治三十八年及四十年ノ特ニ多數ナルト、大正二年ノ著シク少數ナルトナリ、大正五年徴集ノ兵員ヲ所管鎮守府別ニ示セハ、橫須賀 4,722、吳 3,368、佐世保 1,618、舞鶴 1,263ナリ。

海軍ニ於テハ其ノ所要兵員ハ海軍志願兵條例ニ依リ募集シタル者ト、徴兵ニ依リ徴集セルモノト二種アリ、而モ募兵却テ徴兵ヨリ多キハ前掲ノ如クナルカ、右大正五年ニ於ケル募兵ヲ其ノ府縣別ニ就キテ見ルニ、山口縣ノ 348ヲ最多トシ、次テ廣島 299、愛知 246、北海道 238、茨城 236、福島 228、千葉 226、岩手 222、兵庫 198等多數ノ順位ニ在リ、少數ノ方面ニ於テハ沖繩縣 5ノ特ニ最少ナル外、徳島ノ 50ヲ少數トシ、其他ノ府縣ハ何レモ其以上ナリ。

【海軍各學校】 大正四年末海軍各學校數ハ 8校ニシテ、其教員ハ勅委任 294、判任及雇 57、嘱託 59、合計 410ニシテ、外ニ外國人 6人アリ、前年ニ比シ 67人ノ増加ナリ、恐クハ前年激減ノ反動ナルベシ、大正四年末學生生徒ノ總數ハ機關學校、砲術學校、水雷學校ニ於ケル下士卒ノ練習生ヲ包含シ 2,486人ナリ、前年ニ比シ 168人ノ増加ナリ、右學生生徒ノ總數中將來各科ノ候補生タル生徒ハ兵學校ノ 328、機關學校ノ 125、經理學校ノ 68ニシテ、他ハ悉ク既ニ士官下士卒中ヨリノ學生及練習生ナリ、同年中ノ異動ハ入學ハ 3,058、卒業 2,818、退學 71ニシテ一人ノ死亡モナシ。

【海軍監獄】 大正五年末橫須賀、吳、佐世保、舞鶴、旅順ノ五海軍監獄ニ於ケル未決殘留人員ハ 15人ニシテ前年ヨリ 1人ヲ増セ

リ、同年中ノ入監ハ 388ニシテ出監ハ 389ナリ、此ノ出入數ハ前年ヨリ却テ多數ナリ、又同年末既決在監人ハ 172人ニシテ前年ニ比シ 71人ヲ増加セリ、而シテ明治四十三年以來ノ高數ナリ、右ノ數ハ前年ヨリ越人員 101＝同年中 324ノ入監ト 253ノ出監トノ差ニ依ル、右年末人員 172中 171ハ有期懲役ニシテ 1ハ有期禁錮ナリ。

【疾患】 大正四年中ノ新患者ハ 41,157人ニシテ之ニ前年ヨリノ繰越舊患者ヲ合セ總數 43,367人ナリ、此ノ患者ノ治療日數ハ一患者平均十九日ニシテ前年ニ比シ 四日ヲ減シタリ、此ノ治療日數ニ基キ平均一日ノ患者數ヲ算出スレハ 2,728人＝當リ、之ヲ前年ニ比スレハ 269人ヲ減セリ、又此ノ患者數ニ依リ兵員每百ニ對スル一日ノ患者比例ヲ算スルニ 5.30人＝當リ、前年ヨリ高キコト 0.06人ナリ、此ノ患者比例ハ明治三十六年ニ 6人以上ニ上リタルコトアリ爾來低下シ四十四年ノ 5.01人ヲ最低トシ再ヒ漸上シテ本年ニ至レリ、上記ノ患者中死亡ノ轉歸ヲ取りタル者 208人アリ之ヲ總患者ニ比スルニ 0.48%ノ死亡比例ヲ見ル、之ヲ前年ニ比スルニ 0.62%ヲ減ス、是前年ハ不慮ノ災厄アリテ多數ノ死者ヲ出シタル年ナルニ依ル、又罹病ノ故ヲ以テ除役セラレタル者 842人アリ之ヲ患者數ニ比例スルニ 1.94%ノ除役比例ニ當ル、是亦前年ニ比スルニ 0.31%ノ増ナリ、上記ノ比例數ヲ陸軍ニ比スルニ患者比例ハ 2.66人高クシテ正ニ倍シ、死亡比例ハ 0.30%高クシテ正ニ對スル五ヨリモ強ク、除役比例モ亦 0.48%高ク四割ノ増ニ當ル、海軍ハ陸軍ニ比シテ健康上不利ナルコト斯ノ如ク大ナルカ抑亦他ニ理由アルカ

海軍兵員中特ニ艦船乗組員ヲ別チテ之ヲ見ルニ、其ノ兵員每百一日ノ患者比例ハ 3.95人ニシテ之ヲ全數ニ比シ 1.35人ヲ減シ、死亡比例ハ 0.38%ニシテ全數ヨリ 0.10%低ク、除役比例ハ絶無ナリ艦船乗組員ハ海軍兵員ノ約 70%ヲ占ム、斯カル大多數ノ乗組員ハ左マテニ不健康ナラスシテ他部ノ少數者ニ大ナル 不健康アリ、爲ニ影響ヲ全數ニ及ホスモノトスレハ其ハ果シテ何レナリヤ、之ヲ各部ニ就テ見ルニ各鎮守府ノ患者比例頗ル低カラサルモノアリ、即チ吳ハ兵員每百一日ノ患者 13.56人、舞鶴ハ 11.66人橫須賀ハ 8.74人佐世保ハ 8.32人ナリ、死亡比例モ亦高ク橫須賀 1.05%吳 0.60%舞鶴 0.58%佐世保 0.51%ニ當リ、除役比例モ亦低カラシテ橫須賀 8.06%舞鶴 7.11%吳 6.58%佐世保 6.23%ニ當レリ、何故ニ鎮守府兵員ニ斯クハ高率アルカ、今其ノ原因ヲ詳ニセス 他日ノ攷究ヲ要スル所ナリ

各病別ニ主ナル疾病ヲ見ルニ、結核性疾患ハ總テ 537人アリ、中 470人ハ本年中新患者ナリ、兵員每百ニ付一日平均ノ結核患者ハ 0.15人ニシテ之ヲ陸軍ニ比スレハ 0.11人多シ、又結核死亡 44人

々ニ斷スヘキコトニアラスシテ必ス復雜ノ原因アリト思ハル、ナリ

次ニ新患者ヲ其ノ發生ノ月ニ依リテ別チ一年平均一日ノ患者千ニ付各月平均一日ノ患者比例ヲ算出シ見ルニ、一月(990)＝小隆起アリテ三月(829)＝淺キ谷アリ、六月(1304)＝突如トシテ頂巔ヲ現ハシ、八月(1108)＝稍下リシモ再ヒ九月(1174)＝上昇シ、又下リテ十一月(764)＝最低點ニ達ス、要スルニ二山二谷ノ變型ニシテ前山(一月)ハ低ク後山(六月)ハ高ク、其ノ下行脚ニ九月ノ 破格アリト見レハ可ナリ、唯奇異ナルハ最高點ノ六月ニ在ルコトニシテ、是ハ本年ニ限レル事實ニアラサルヲ以テ見レハ何等特殊ノ理由アルモノ、如シ

政

額ヲ略觀スルニ、大略三段ノ進展ヲ經來レルコト明カニ觀取セラレ、即チ明治十九年度ヨリ二十八年程度ニ至ル十年間ハ歳出總額常ニ七八千萬圓臺人口一人ニ付二圓前後當ニ過キサリシニ、二十九年度ニ於テ過渡ノ狀ヲ經テ三十年度ヨリ三十七年度ニ至ル八年間ハ一躍 2億圓ヲ超過シ、人口一人ニ對スル比例ハ 5圓乃至 6圓ノ間ニ進ミタリ、尋テ明治三十八年度中ヨリ倏ニシテ從來ノ二倍額ニ躍進シ、4億ヨリ 5億ニ進ミ、時トシテハ 6億ヲ突破セル數ヲ示セルコトサヘアリ、從テ其ノ人口ニ對スル比例ハ約 9圓ヨリ 12圓ノ邊ニシテ、往々 12圓ヲ超過セルコトアルニ至リタリ。

國家一般會計ノ歳入ハ特ニ臨時特別ノ狀況ニ依リ臨時部歳入ノ多額ヲ要スル場合ノ外ハ經常歳入其ノ主要部ヲ占ム、而シテ其ノ年々ノ増減ノ如キ經濟上法制上ノ重大ナル革更ナキ 限り多クノ變動ヲ見サルヲ恒トス、大正六年度實行豫算ハ歳入總額 7億萬圓中 5億 5,703萬餘圓ハ經常部ニ屬ス、之ヲ明治十九年度以降累年ニ見ルニ、明治三十八年ニ一躍一億圓ノ増額アリタル 外多クハ遞次漸増ヲ示ス、而シテ最近大正三年度ノ激減ノ外嘗テ 明治四十二年度ニ於テ一度前年度ヨリ減少ノ 數ヲ示ス、此ノ減少ハ官業及官有財産收入ノ減少ニ基ク、以上歳入經常部ノ額ハ毎年多クノ變動ナシト雖、更ニ之ヲ細別シ其ノ各ニ就キテ見ルトキハ亦特殊ノ變動ヲ認ムルコトアリ、大正六年度豫算ニ於ケル經常歳入ハ、租稅 32,043.4萬圓(57.5%)、印紙收入 3,079.1萬圓(5.5%)、官業及官有財産收入 17,634.7萬圓(31.7%)、雜收入 324.2萬圓(0.6%)、預金特別會計ヨリ繰入 1,654.3萬圓(3.0%)、臺灣總督府特別會計ヨリ繰入 455.2萬圓(0.8%)、朝鮮總督府特別會計ヨリ繰入 512.4萬圓(0.9%)ニシテ、即チ半額以上ハ租稅收入タリ、官業及官有財産收入之ニ次ク、印紙收入以下ハ甚々多カラス、而シテ茲ニ累年ノ傾向ノ觀過スヘカラサルハ、租稅收入ノ實額尙年々増加ヲ示シ 經常歳入中ノ主要部

(8.18%)除役 334人(62.20%)アリ、死亡ハ陸軍ノ比例低ク、除役ハ海軍ノ比例低シ、花柳病患者 9,222人、此ノ患者比例ハ 1.67人ニシテ陸軍ヨリ高キコト 1.47人ナリ、神經衰弱患者 253人其ノ除役 15人(5.93%)精神病患者 11人其ノ 除役 9人(81.81%)、肺炎患者 115人其ノ死亡 8人(6.91%)、胸膜炎患者 1,125人其ノ死亡 5人(0.44%)除役 150人(13.33%)、腎臟炎患者 76人其ノ死亡 4人(5.26%)除役 14人(18.42%)、自殺自傷 25人其ノ死亡 18人(72.00%)外傷及不慮 42人アリ、上記ノ事實ニ由リテ列スレハ海軍兵員カ陸軍兵員ヨリ患者比例モ死亡比例モ將タ除役比例モ 高キ一ノ原因トシテ結核性疾患ト花柳病トカ陸軍ニ比シテ海軍ニ多キコトヲ認メサルヘカラサルカ如シ、何故ニ此ノ二病カ海軍ニ多キカ 其ハ素ヨリ輕

財

甲 國家 財政

【一般會計歳入歳出】 大正六年度豫算ハ不成立ナリシカハ前年度豫算執行セラルヘキ管ナルモ、大藏省ニ於テ特ニ 調整シタル所謂實行豫算ヲ其後ノ追加豫算等ニ依リ 訂正シ掲ケタリ、其ノ額ニ依レハ、歳入ハ經常部 55,703.3萬圓、臨時部 15,605.2萬圓、合計 71,308.5萬圓、歳出ハ經常部 43,646.1萬圓、臨時部 27,662.4萬圓、合計 71,308.5萬圓ニシテ、前年度豫算ニ比シ歳入經常部 2,524萬圓、臨時部 8,690.7萬圓、合計 11,214.7萬圓、歳出經常部 3,870.5萬圓、臨時部 7,211.7萬圓、合計 11,082.2萬圓ヲ各増加セリ、而シテ本年ノ數ハ豫算ナルヲ以テ 歳入歳出共ニ過不足ナキモ、經常部ノミヲ以テスレハ 12,057.2萬圓ノ歳入超過ヲ示ス、人口一人ニ對スル比例ハ歳入歳出共ニ 12圓 73錢ニ當ル。

尙帝國國民ノ負擔スル費用ハ右ノ外府縣郡市町村ニ 亙リ各階級ノ公共團體ノ費用アリ、其大正六年度ノ額ハ未タ 調査ナキヲ以テ最近ノ決算タル大正三年度ノ數ヲ見ルニ、同年府縣郡ノ歳出ハ合計 11,259.9萬圓、市町村ノ分 20,783.4萬圓ナリ、同年人口一人ニ付府縣郡費 2圓10錢市町村費 3圓 87錢ナリ、右ノ内ニハ素ヨリ上級團體タル府縣ニ於テ一度支出ト爲リ更ニ 郡又ハ町村ニ於テ再ヒ支出トシテ重復計上セラル、額ヲ含ムヲ以テ、之ヲ合計スルハ極メテ疎策ノ譏ヲ免レスト雖、假リニ大正三年度國費負擔額ト合計スルトキハ、同年帝國人民ハ直接間接ニ一人ニ付約 18圓 22錢ヲ負擔スト言ヒ得ヘシ、而シテ水利土功組合等ノ費用ヲ其ノ組合區域内ノ住民ニ於テ負擔スルハ右ノ外ナリ。

今國家歳入歳出ノ大數ヲ内閣制施行後即チ 明治十九年度以降累年ニ見ルニ、年々多少ノ異動アリ、之ヲ政治上經濟上並ニ法制上ノ變遷ト結合シ仔細ニ觀察シ行クトキハ頗ル 興味アルヘク又極メテ明確ニ解釋シ得ラルヘシト雖、茲ニ其ノ繁ヲ省キ 單ニ歳出ノ總

ヲ占ムルモ其ノ程度ハ漸次低下シ、反之官業及官有財産ノ収入實額ニ於テモ比例ニ於テモ共ニ年々増進シツ、アルコト是ナリ。

尙租稅並官業及官有財産收入ニ就キ最近大正六年度ノ數ヲ細別シ百萬圓單位ヲ以テ擧ケレハ、地租 72.8、所得稅 36.8、營業稅 22.2、酒稅 89.8、醬油稅 4.9、砂糖消費稅 25.1、織物消費稅 17.4、賣藥營業稅 0.2、鑛業稅 3.1、取引所稅 4.8、兌換銀行券發行稅 0.9、噸稅 0.5、關稅 31.6、通行稅 4.8、相續稅 3.4、石油消費稅 1.3等ナリ、右ノ内戦前即チ大正二年度ニ比シ關稅ノ半額以下ニ減少シタル外甚シキ影響ヲ認ムヘキモノナシ、酒稅ノ大正四年度現計ニ於テ前年ニ比シ一千萬圓ノ減少ノ如キ著シキモノナリ、營業稅所得稅ノ減少ノ如キハ主トシテ稅法ノ改正ニ起因ス、官業及官有財産收入ノ主要ナルモノハ郵便電信及電話收入ト專賣局益金トニシテ、六年度豫算ニ於テ前者ハ 7,022萬圓、後者ハ 6,781萬圓ヲ示ス、之ヲ大正二年度決算以降ノ數ト對照スルニ、專賣局益金多少戰爭ノ影響ヲ受ケタルカ如ク認メラル、モ、郵便電信及電話收入ハ大ナル影響ナキニ似タリ、最後ニ官業中戰爭ノ爲メニ最モ有利ノ影響ヲ受ケタルハ製鐵所ナリ、即チ同益金ヲ見ルニ、大正二年度決算ニ於テハ 440萬圓ナルニ、同四年度現計ニ於テハ 1,350萬圓ヲ示シ、而シテ大正六年度ノ豫算ニ於テサヘモ 1,550萬圓ヲ計上セラル、ニ至リタリ。

次ニ一般會計ノ歳入臨時部ノ額ハ、大正六年度豫算ニ於テ總額 15,605萬圓、内官有物拂下代 377萬圓、雜收入 7,179萬圓、地方分擔納付金 405萬圓、公債募集金 1,943萬圓、森林資金繰入 299萬圓、前年度繰入金 5,204萬圓、其他 195萬圓等ニシテ、即チ雜收入前年度繰入金公債募集金等其ノ主要部分ヲ成スヨリ見ルモ年ニ依リ變化極リナキノ狀ヲ略察知シ得ヘキナリ、而シテ本年度特ニ雜收入ノ多キハ臨時軍事費所屬收入 5,055萬餘圓ノ計上セラレタルニ主トシテ是レ因ル。

大正六年度豫算歳出ノ經常臨時ノ總額ヲ所管別ニ見之ヲ百萬圓單位ヲ以テ掲ケレハ、皇室費 4.5(0.6%)、外務省 6.7(0.9%)、内務省 54.2(7.6%)、大藏省 298.4(41.9%)、陸軍省 99.0(13.9%)、海軍省 109.5(15.3%)、司法省 12.6(1.8%)、文部省 11.8(1.7%)、農商務省 22.2(3.1%)、逓信省 93.7(13.2%)ナリ即チ最モ多額ノ費ヲ要スルモノハ大藏省ニシテ全體ノ四割強ヲ占ム、今少シク其ノ内容ヲ檢スレハ、大藏省所管經常歳出 18,355萬圓中 13,934萬圓ハ國債整理基金繰入ニシテ、即チ帝國國債ノ元利支拂額ニ當リ、又同省臨時部 11,482萬餘圓中 2,663萬餘圓ハ臨時軍事費特別會計繰入ニ、8,200萬圓ハ臨時事件豫備費ニ、合計 10,863萬圓ハ結局戰爭費ニ屬スルモノナリ、大藏省ニ次ク多額ノ費用ハ陸海軍費タルハ論ナク合シテ 29.2%ヲ占ム、而シテ最近ノ趨勢ハ陸軍ヨリモ寧ロ

海軍ノ費用多額ヲ要スルニ至リタリ、以上軍事費ト國債費ヲ主トシタル大藏省ノ費用トヲ除キタル額即チ歳出總額ノ約三割弱ハ皇室費ヲ初メトシ帝國國民ノ福利増進公安維持ニ關スル一切ノ費用ニ屬スルモノトス、其ノ内ニ就キテハ逓信省費著シク多シ、同省費中ニテハ經常部中恩給及年金 3,707萬圓、逓信事業費 2,406萬圓等ヲ含ムト、臨時部中造船獎勵費 653萬圓、航路擴張費 652萬圓等ノ補助費等其ノ主要ナルモノナリ、逓信省ニ次キ多額ナルハ内務省ナルカ、同省ノ費用ハ經常部ヨリモ寧ロ臨時部ナ最トス、其ノ主ナルモノハ特別會計事業公債金繰入 1,614萬圓ヲ初メ治水事業費、特別會計經費補充金、北海道拓殖費、港灣改良費等ナリ、次ニ農商務省ノ費用ハ内務省ニ次ク多額ニシテ殊ニ累年ノ増加ノ趨勢ノ大ナルハ各省中ノ首位ニ位ス、是亦臨時部却テ經常部ノ倍額ナリ、其ノ主ナルモノハ製鐵所擴張費 892萬圓、國有林野經營費 299萬圓等收入増加ノ目的ヲ有スルモノ、外、産業獎勵費 157萬餘圓等ナリ、司法省及文部省ハ費用總額稍伯仲ノ間ニ在リト雖、累年ノ趨向ハ文部省寧ロ膨脹的ナリ、殊ニ臨時部ニ屬スル費用ニ於テ然リトス、各省中最モ歳出額少キハ外務省ナリ、但シ年々ノ臨時部費用ハ司法省文部省等ヨリ多シ。

【特別會計歳入歳出】 大正六年度ニ於テ國家財政ノ特別會計ノ數ハ、外務省所管 2、内務省所管 6、大藏省所管 12、陸軍省所管 4、海軍省所管 2、文部省所管 5、農商務省所管 2、逓信省所管 1、合計 34アリ、特別會計ノ數ハ前年度ニ於テ大ニ其ノ種類ヲ減シ、即チ朝鮮森林資本勘定、同收益勘定、貨幣整理資金、治水資金、軍艦水雷艇補充基金、帝國學士院學術研究獎勵金、電信燈臺用品製造所ノ 7ヲ廢シ、簡易生命保險ノ 1ヲ設ケタルニ止マリシカ、大正六年度更ニ臨時國庫證券收入金、事業公債金、朝鮮事業公債金ノ 3ヲ加フルニ至リタリ、

特別會計ノ歳入歳出ハ某資金又ハ勘定ノ如キ單ニ帳簿上ノ金額收支ニ止マルモノアリ、又極メテ廣汎復雜ナル事業事務ヲ伴フモノ例ヘハ朝鮮、臺灣等ノ總督府ノ如キアリ、又其ノ收支ハ一般會計ト年々收支密接ノ關係ニアルモノアリ、或ハ永ク獨立ノ狀態ニ在ルモノアリ。又歳入出ノ額ノ多少ヲ以テスレハ大正六年度豫算歳入ニ於テ國債整理基金 64,316萬餘圓、帝國鐵道收益勘定 16,825萬圓、帝國鐵道資本勘定 11,569萬圓、專賣局 11,764萬圓等ノ如キ洪大ナルモノアリ。

【所得稅】 大正五年度所得稅額ハ、第一種 2,666.5萬圓、第二種 64.4萬圓、第三種 2,419.1萬圓、合計 5,150.1萬圓ニシテ、前年度ニ比シ各種共ニ増加シ合計 1,357萬圓ヲ増加シタルカ、其ノ大部分 1,200萬圓ハ第一種法人所得ノ増加ニ係ルモノナリ、又之ヲ明治三十六年度以降五年毎ノ數ニ比較スルニ第一種所得稅ハ毎時顯著ノ

増額ヲ示スモ、第二種及第三種ハ明治四十一年度ヨリ大正二年度ニ及フ際大ナル減少ヲ示ス、但シ第三種ノ減少ハ大正二年稅法稅率改正ノ理由ニ因ル、尙第三種所得稅ハ二年度以後ノ事實ニ於テモ大正四年ニ於テ前年ヨリ減少シタル事例アリ、今大正五年ノ第三種所得稅額ヲ所得金額階級別ニ見ルニ、稅ノ累進率ニ依ルニ拘ラス千圓以下所得ノ者ニ依ル稅額最モ多額ニシテ、總額ノ 1/4強ニ當ル、次テ二千圓以下、三千圓以下等ニシテ右三階級ノ稅ヲ合シ 1,200萬圓ヲ超ニ即チ第三種所得稅額ノ半額以上ヲ占ム。納稅人員ニ就キテ見ルニ、大正五年度第三種所得稅納稅人員總數ハ 976,477人ニシテ、右ハ大正四年ノ減少ニ引續キ更ニ減少ヲ示ス、而モ稅金額ノ減少セサルハ少所得者減シ多所得者増加ノ結果ナリ、而シテ第三種所得稅ノ約半額強ヲ納付スル三千圓以下所得者ノ總員ハ 912,159人ニシテ全人員ノ 95%ニ當リ、又千圓以下ノ最少額者ハ 727,812人ニシテ全數ノ 76%ニ相當ス。

大正五年度第三種所得稅納稅人員ヲ府縣ニ就キテ見ルニ、其ノ最モ人員多キハ東京、大阪、愛知、兵庫、福岡等ニシテ次テ新潟、北海道、長野、京都、千葉、静岡、廣島、熊本、福島、三重、神奈川、岐阜、茨城、岡山等ノ順位ナリ、然ルニ之ヲ納稅額ニ就キテ見レハ東京ノ著シク多額ナルヲ最高トシ、次テ大阪、兵庫ニシテ愛知ハ其ノ次位ナルモ、兵庫トハ遙ニ逕庭アリ、次ニ福岡、京都ニシテ新潟其次ニ位シ、更ニ神奈川ハ人員多數ノ諸縣ヲ超越シテ其ノ次位ニ在リ、此ノ如ク人員ノ順位ト稅額ノ順位ト一致セサルモノアルハ地方ニ依リ多額ノ所得ヲ有スルモノアルト否トノ差ニ起因ス。

【營業稅】 大正五年度ニ於ケル國稅營業稅額ハ 2,294萬餘圓ニシテ、其ノ納稅人員ハ 385,741人ナリ、之ヲ前年度ニ比スルニ稅額 131萬餘圓、人員 14,982人ヲ増加セリ、而シテ明治三十六年度ヨリ同四十一年度ニ至ル際急速ノ膨脹ヲ現ハシタリシカ、大正二年ニ及ンテハ甚タシキ増加ナキモ、亦若干ノ増進ヲ示シ、次第二増加ノ傾向ニ在リシニ、大正四年俄然トシテ減額セリ、惟フニ是レ稅法改正ノ結果ニ基ク。

右大正五年度ノ數ヲ營業種類ニ就キ見ルニ、最モ人員多キハ物品販賣業ノ 247,447人ニシテ、總人員ノ約 2/3ニ當ル、從テ其ノ納稅額モ亦最モ多額ニシテ 754萬圓ニ達シ總稅額ノ 1/3ヲ占ム、次テ多キハ人員ニ於テモ稅額ニ於テモ製造業ニシテ、490萬圓、46,553人ナリ、次テ銀行業ハ稅額ニ於テ製造業ト大差ナキモ人員ハ其ノ十分ノ一ニモ達セス、金錢貸付業ハ稅額ハ銀行業ノ約半額ニシテ其ノ次位ナルモ、人員ハ遙ニ多ク製造業ニ次テ多數ナリ、其他ノ營業ハ一種類ニシテ納稅額百萬圓ニ達スルモノナシ、尙各種營業ノ稅額ヲ前年ト對照スルニ、多クハ前年ヨリ増加セルモ、金錢貸

付業、運送業、請負業ノ三種ノミ少シク減少ノ數ヲ現ス。次ニ大正五年度營業稅額ヲ地方別ニ見ルニ、東京府 583萬圓ノ特出セルヲ別トシ、大阪 298萬圓、兵庫 136萬圓、愛知 103萬圓ハ相次テ多額ニシテ皆百萬圓以上タリ、次ニ神奈川 90萬圓、京都 82萬圓、福岡 68萬圓、北海道 58萬圓、静岡 50萬圓、長野 44萬圓、新潟 43萬圓等多額ノ府縣ナリ、若シ夫レ人員ノ多少ヨリスレハ京都府ノ兵庫、愛知、神奈川ノ諸縣ヨリ納稅人員多數ナルカ如ク順位大ニ異ルモノアリ、是レ主トシテ各營業種類ノ配置如何ニ關係ス、例ヘハ保險業、銀行業ノ如キ比較的多キ地方ハ納稅人員少キニ拘ラス其ノ納稅額多シ。

【稅關收入】 關稅收入ハ大正二年度ヲ最高頂トシ戰後大ニ激減シタルハ前ニ述ヘタルカ如シ、然ルニ此ノ減少ハ大正四年度ヲ最低底トシ再ヒ上昇ノ傾向ヲ示スニ似タリ、噸稅及雜收入共稅關收入全部ヲ通シテ然ル所ナリ、其ノ大正五年度ニ於ケル額ヲ擧ケレハ關稅 3,591.8萬圓、噸稅 60.3萬圓、雜收入 22.4萬圓、合計 3,674.6萬圓ナリ、右大正五年度ノ合計ヲ稅關別トスルトキハ横濱 1,396.3萬圓、神戸 1,150.3萬圓、大阪 502.5萬圓、門司 385.9萬圓、臺灣 117.5萬圓、長崎 96.2萬圓、函館 25.6萬圓ナリ。

【國債】 大正五年度末現在國債額ハ、內國債 109,749.4萬圓、外國債 137,020.7萬圓、合計 246,770.1萬圓ニシテ、年度末現在借入金 19,497.4萬圓ハ此ノ以外トス、之ヲ前年ニ對照スルニ同年度中新ニ募債セルアリ又償還セルモノアリテ結局內國債 6,940.2萬圓ヲ増シ、外國債 9,093.5萬圓ヲ減シ、合計 2,153.2萬圓ヲ減少セリ。帝國ノ國債ヲ明治四十四年度以後最近六ヶ年ニ見ルニ隔年昇降ノ數ヲ示スノ狀ニ在リ、即チ四十四年度ノ最高ヨリ、翌大正元年ニ稍減少シ、二年度再ヒ増加シ、三年度減シ、四年度復タ上リ、五年度ニ至リ下リタリ、但シ右ハ内外債合計ニシテ外債ノミヲ以テスレハ大正四年度ニ於テモ減少シ、本年再ヒ減少シタリ、即チ今次ノ戰爭ニ入りテヨリ我外債ハ次第ニ減額ニ向ヒツ、アルナリ。

【特別資金及官業資本】 大正四年度末特別資金ハ十三種合計 18,575.2萬餘圓ニシテ前年ヨリ 793.0萬餘圓ヲ増加セリ、而シテ年々増加ノ傾向ヲ有ス。

大正四年度末官業資本ハ十二個所合計 118,330.2萬餘圓、內固定資本 113,322.6萬餘圓、運轉資本 5,007.6萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ 5,386.5萬餘圓ヲ増加セリ、是又累年増加ノ傾向顯著ナルモ、獨リ四十四年度ニ於ケル例外アルノミ、官業資本總額ノ大部分ハ帝國鐵道 105,038.6萬餘圓ニシテ、次テ製鐵所 4,441.0萬餘圓、專賣局 2,725.3萬餘圓、東京砲兵工廠 2,518.2萬餘圓、大阪砲兵工廠 2,181.2萬餘圓等多額ナリ。

【國庫預金、保管金及供託金】 大正四年度末國庫預金ハ普通預

金 5,350.0萬餘圓、中央金庫預リ郵便貯金 24,696.5萬餘圓ニシテ、前年ニ比シ前者ハ 1,025.6萬餘圓、後者ハ 3,277.2萬圓ヲ各割増セリ、是レ大正四年ハ特ニ金融緩慢各種銀行等預金ノ多キニ苦シミシト同一狀況ニ因ルモノナルヘシ、又保管金及供託金同年度末現在額ハ 661.6萬餘圓ニシテ是亦前年ニ比シ増加セリ。

【貸付金】 大正五年度末貸付金ハ 1,124.5萬餘圓ニシテ 前年度末ニ對シ本年度ニ於テ 15.8萬餘圓ヲ追加シ、61.8餘萬圓ヲ減少シタルヲ以テ、結局約 46萬圓ヲ減少セリ、本貸金中ノ最も主ナルモノハ水害凶作救済資金貸付金ナリ。

乙、地方財政

【府縣】 大正三年度決算ニ於ケル北海道及府縣自治體ノ歳入ハ合計 12,176.7萬圓ニシテ、前年ニ比シ 682.0萬餘圓ヲ増加シ、明治三十六年ニ對シテハ殆ント二倍ノ増加タリ、府縣收入中稅收入額ハ 6,794.2萬餘圓ニシテ總收入ノ約 55%ヲ占メ稅外收入ハ 45%ニ當ル、又稅收入ヲ細別スレハ國稅附加稅ハ 3,589.2萬餘圓ニシテ府縣特設稅ハ 3,205.0萬餘圓ナリ、更ニ稅ヲ細觀スルニ國稅附加稅中ノ大部即チ 3,097.1萬圓ハ地租割及反別割ニ屬シ、次テ戶數割及家屋稅ノ 1,634.8萬圓、雜種稅及水產稅ノ 1,185.1萬圓等多額ナリ、其他ノ稅ハ甚タ多カラス、加之累年ノ趨勢稅收入ノ増加頗ル微弱ナリ、反之稅外收入ハ増加比較的大ナリ、現ニ大正三年度ニ於テ前年ニ比シ増加ヲ示ス其ノ基源ハ主トシテ繰越金及國庫補助金ニ在リ。

府縣收入ヲ各府縣別ニ觀察スルハ極メテ有益ノ業タリト雖、之ヲ爲スニハ比例ヲ以テスルニアラサレハ各府縣ノ特徴ニ關シ正確ノ結論ニ達シ難シ、今單ニ重ナル收入ニ就キ府縣ノ著シキモノヲ掲ケレハ、大正三年度地租割及反別割收入ノ最も多キ地方ハ新潟縣ニシテ總收入ノ 40%以上ヲ占ム、次テ埼玉、静岡、茨城、福島、千葉等ノ各縣ハ皆百萬圓以上ノ收入ヲ地租割及反別割ニ依リテ徵收ス、次ニ戶數割家屋割ハ東京府ノ 167.3餘萬圓ト云フ特ニ高價ナルヲ最多トス、之ニ次キテハ大阪、新潟、静岡等ナルモ東京ノ高價ヲ距ルコト遠ニ遠シ、雜種稅及水產稅ノ收入多額ナルハ東京、北海道、愛知、福岡、大阪等ノ諸府縣ナリ、又繰越金ノ多カリシハ福島、新潟、埼玉、宮城等ノ諸縣ニシテ何レモ百萬圓以上ノ繰越金收入ヲ有セリ、次ニ大正三年度ニ於テ府縣債收入ノ特ニ多キハ栃木縣ノ 195.5萬圓ヲ最高トシ、富山縣ノ 153萬圓ニ次キ、青森、北海道次テ又多シ、而シテ同年度府縣債ノ收入ヲ得サリシハ近畿中國ヲ初メ全國二十三府縣ナリ、國庫補助金ノ收入多キハ東京府ノ百萬圓以上ナルアリ、之ニ次キテハ福島縣、富山縣ナリ、府縣中市町村分賦ニ依リ府縣收入ヲ得ルハ大正三年度ニ於テ僅ニ神奈川、新潟、京都、兵庫、廣島ノ五府縣ニ過キス。

次ニ大正三年度ニ於ケル府縣歳出ノ總額ハ 10,225.5萬圓ニシテ前年ニ比シ 635.1萬餘圓ヲ増シ 明治三十六年以來ノ増加ノ大勢歳入ト相似タリ、同年度中支出ノ多額ナル費目ハ土木費及同補助費 3,334.9萬圓ヲ第一トシ、警察費及同建築修繕費 1,703.1萬圓、教育費同補助費 1,472.3萬圓、勸業費及同補助費 1,007.0萬圓、府縣債費 621.2萬圓等順次ニ次キ、其他ハ五百萬圓ニ達スルモノナシ、

歳出ノ府縣別モ亦歳入ニ於ケルト同シク大正三年度ノ主ナル費目ニ就キ著シキニ二三ノ府縣ヲ掲記スレハ、先ツ土木費ニ於テハ福島 322.3萬圓ヲ最高トシ、新潟 205.6萬圓、埼玉 196.5萬圓、静岡 141.3萬圓、岩手 140.2萬圓、宮城 129.7萬圓、愛知 112.0萬圓、富山 109.6萬圓等何レモ多額ナリ、其他ノ府縣ハ百萬圓ニ上ルモノナシト雖、東京、三重、大阪、山形、福岡、栃木等亦頗ル土木費多額ノ府縣ナリ、次ニ警察費及同建築修繕費ハ東京 266.3萬圓、大阪 158.9萬圓等大都會ヲ包有スル地著シク多額ナリ、次テ多キハ兵庫、愛知、北海道、京都、神奈川、福岡、新潟、廣島等ノ諸府縣ナリ、教育費ハ土木費又ハ警察費ノ如ク特ニ多額ノ支出ヲナスモノナク 各府縣大差ナシ、大阪ノ 79.1萬圓ヲ最高トシ、以下福岡、東京、新潟、神奈川、兵庫、熊本、北海道等ノ各府縣何レモ 40萬圓以上ノ支出ヲナス、勸業費支出ノ多少順位ハ東京 68.8萬圓ヲ最多第一トシ、茨城、廣島、愛知、岡山、千葉、石川、新潟、鹿児島等ナリ、其他ノ費目ニ付キテハ之ヲ略シ最後ニ府縣債費ノ支出ナキ府縣ヲ舉ケレハ、岐阜、滋賀、兵庫、大阪、奈良、岡山、廣島、山口、福岡、佐賀、長崎、熊本、沖縄ノ十三府縣ナリ。

【郡】 大正三年度郡自治體ノ收入ハ、全國ノ總額 1,169.6萬餘圓ニシテ府縣ノ收入ノ十分ノ一ニ達セス、之ヲ前年ニ對照スルニ 52.3萬餘圓ヲ増加ス、又收入ノ種類ニ依リテ別チ見レハ 町村分賦額 737.0萬餘圓ニシテ總收入ノ 63%ヲ占ム、之ニ次テ繰越金 132.7萬餘圓、府縣補助金 101.8萬餘圓等多額ニシテ右以外ノ收入ハ極メテ少シ、而シテ前年度ニ對スル増加ハ主トシテ郡債、繰越金及府縣補助金ノ増加ニ依ル。

大正三年度郡ノ收入ヲ其ノ此制ナキ北海道及沖縄縣ヲ除キタル三府四十二縣ニ付キテ 略觀スルニ最も郡收入多キハ福岡 123.0萬餘圓ニシテ福島 64.5萬餘圓、愛知 50.7萬餘圓、新潟 50.5萬餘圓、兵庫 43.0萬圓、島根 38.8萬餘圓、長野 38.5萬餘圓、香川 38.1萬餘圓、青森 37.7萬餘圓等ノ諸縣順次ニ次キ、其ノ他ハ一縣全郡ノ收入 35萬圓以下タリ、而シテ其ノ最も少キハ埼玉 5.5萬圓、山梨 6.0萬圓、東京 8.0萬餘圓、和歌山 9.8萬餘圓等ニシテ他ハ 10萬圓以上タリ、而シテ府縣中町村分賦額ノ最も多キハ福岡縣 78.5萬餘圓ニシテ、次テ多キハ兵庫 43.3萬餘圓、福島 33.7萬餘圓、新潟 28.6萬餘圓、長野 28.1萬餘圓、島根 26.8萬餘圓、石川 25.4萬餘圓

香川 24.6萬餘圓、愛知 24.4萬餘圓等ナリ、次ニ繰越金ノ多少ハ主トシテ前年度ノ財政狀態如何ノ結果ナルモ 各府縣多少ノ繰越ナキハ無シ、其ノ大正三年度收入トシテ最も多キハ福岡 15.9萬餘圓、福島 9.9萬餘圓、愛知 8.5萬餘圓、新潟 7.6萬餘圓、香川 7.1萬餘圓等ノ諸縣ナリ。又府縣補助金ノ多キモノヲ列舉スレハ福島 12.0萬餘圓、愛知 11.3萬餘圓、福岡 10.9萬餘圓、青森 7.1萬餘圓、三重 5.6萬圓等ナリ、尙郡經濟ノ收入ハ財産ニ基クモノ甚タ少ク、全國四十五府縣ノ總額 19.4萬餘圓ニ過キス、而シテ右ノ内熊本縣最も多ク 8.7萬餘圓ヲ占ム、其他ハ遑ニ之ヨリ少ク、千葉 1.4萬圓ノ外ハ新潟、福岡、廣島等其ノ多キモノニ屬スルモノ一萬圓ニ上ルモノナシ。

次ニ郡ノ支出ハ大正三年度決算額 1,034.3萬餘圓ニシテ 前年ニ比シ 50.2萬餘圓ヲ増加シタリ、支出ノ種目ノ主ナルモノハ矢張り第一ニ土木費及同補助費 330.0萬圓ニシテ總支出ノ約 1/3ヲ占ム、之ニ次テ勸業費 244.2萬圓第二位タリ、是レ府縣ト趣ヲ異ニス、而シテ教育費 226.9萬餘圓ハ第三位タリ、以上三種ヲ合シ 801.2萬餘圓ニシテ郡總支出ノ約 8割ニ當ル、右ノ以外各科目ノ費用ハ甚タ少額ニシテ殆ント特掲スルニ足ラス。

右支出ヲ府縣ニ付キテ見ルニ、其ノ總額ノ多少順位ハ收入ニ於ケルト略同位ナルカ故ニ主ナル費目ニ就キテ概觀スレハ、先ツ土木費ヲ最も多ク支出スルハ福岡縣 52.5萬圓ニシテ、福島 33.4萬圓、青森 24.8萬圓、愛知 26.4萬圓、高知 15.0萬圓、新潟 14.9萬圓、島根 14.4萬圓等ノ諸縣相次テ多シ、而シテ同年度郡ノ土木費ノ支出ナキハ埼玉、東京、大阪、佐賀ノ四府縣ナリ、次ニ郡勸業費ノ支出多キ府縣ハ島根 13.3萬圓、兵庫 11.0萬圓、石川 10.8萬圓、茨城 10.7萬圓、福島 10.1萬圓、廣島 9.2萬圓等ナリ、又郡教育費ノ支出多キ府縣ハ福岡 25.3萬圓ヲ第一トシ、新潟 12.7萬圓、静岡 10.2萬圓、大分 10.1萬圓、香川 9.6萬圓、長野 8.4萬圓、山口 7.9萬圓、栃木 7.8萬圓、兵庫 7.7萬圓、京都 7.5萬圓、鹿児島 7.1萬圓等ナリ、而シテ右勸業費及教育費ハ各府縣共ニ皆其支出アリ、而モ比較的平等ノ支出ヲ見ルモ、衛生病院費ノ如キ一方ニ新潟縣 4.1萬圓、東京府 3.5萬圓、福島縣 2.4萬圓等比較的多額ノ支出ヲ有スルモノアル一方ニ全然其ノ支出ナキ府縣アリ、尙郡債費等ノ如キハ殊ニ各府縣ノ差等甚シ。

【市及區】 大正三年度末全國市及北海道沖繩縣ノ區 71個所ニ於ケル同年度收入總額ハ 9,754.1萬餘圓ニシテ、前年ニ對シ北海道旭川及福岡縣若松ノ二市區ヲ増加シタルニ拘ラス金額 1,254.2萬餘圓ヲ減シタリ、市區ノ收入ハ明治三十六年ノ 2,318.1萬圓ヨリ、同四十一年 5,934.7萬圓、大正二年 11,008.3萬圓等五個年毎ノ比較ヲ見ルトキハ逐次著シキ増加ヲ爲シ來レルモ、實ハ最近減少ハ本年始

メテ生シタル現象ニアラス、明治四十四年ノ 18,180.8萬圓ヲ最高限トシテ低下シ來リタルモノナリ、今大正三年度ノ收入ノ内譯ヲ掲ケレハ、稅收入 2,146.5萬餘圓、財産收入 238.8萬餘圓、使用料及手數料 2,531.7萬餘圓、公債金 1,256.0萬餘圓、繰越金 1,940.6萬餘圓、其他ノ收入 1,645.2萬餘圓ニシテ、稅收入ハ全收入ノ 21%ニ過キス、使用料及手數料收入ヨリ少シ、而シテ市區ノ收入中稅收入モ使用料及手數料モ總テ前年ヨリ増加ヲ示スモ而モ全體ニ於テ減少スルハ主トシテ繰越金ニ於テ著シキ減少アルニ由ル。

大正三年度ニ於ケル全國市區ノ支出總額ハ 8,298.1萬餘圓ニシテ 明治三十六年度以降五年毎ノ趨勢ハ、同四十一年度ニ約倍増シ、大正二年更ニ倍加シタルコト、並ニ最近明治四十四年ヲ最頂點トシテ稍下降ノ狀ニ在ルコト等總テ收入ノ際ニ於ケルト同一ナリ、今大正三年度支出ニ付キテ其ノ内譯ヲ檢スルニ、縣又ハ郡自治體等トハ大ナル差アルヲ見ル、即チ支出中ノ最大部分ヲ占ムルハ公債費 2,066.0萬餘圓ニシテ、總支出ノ 1/4ヲ超ユ、次ニ多キハ電氣及瓦斯事業費 1,899.8萬餘圓ナリ、右二種ヲ合シテ 恰モ全體ノ半額ニ當ル、夫ヨリ教育費 1,160.7萬餘圓、衛生費 1,130.4萬餘圓、土木費 494.6萬餘圓等ノ順序ニシテ右三種ノ多少順モ亦縣郡ト異ル所タリ、又財産造成費、管理費及積立金ニ 370.0萬圓ヲ支出シ、役所費トシテ比較的多額ノ 433.7萬餘圓ヲ支出シ、勸業費ノ僅ニ 23.8萬圓ノ少額ナル等モ亦市區ノ特徴ト認ムヘキカ如シ。

【町村】 大正三年度ニ於ケル全國町村歳入總額ハ 13,521.8萬圓ナリ、之ヲ既往ニ溯リ明治三十六年ヨリ五年毎ノ趨勢ヲ尋ヌルニ、市區ノ每五年二倍ノ増加ヲ示セルニ比シ大ニ遲緩ナリ、勿論町村ト市區トノ間ニ於テハ年々此ニ減シテ彼ニ加ハルモノ若干之レ有ルニ依リ數ノ正確ナル研究ヲ試ムル場合ハ之ヲ考慮スルコトヲ要スヘキナリ、而シテ明治四十四年度ノ最高頂ハ町村ニ於テハ其ノ額ヲ認メス、最近大正三年度最も高シ、前年ヨリ 350萬圓ヲ増加セリ、町村收入ノ内容ハ稅收入最も多ク其額 8,754.9萬餘圓ニ達シ總收入ノ恰モ 2/3ヲ占ム、他ハ財産收入 484.0萬餘圓、使用料及手數料 351.7萬餘圓、公債金 375.5萬餘圓、上級公共團體ヨリノ補助金 645.3萬餘圓、繰越金 1,325.2萬餘圓、其他收入 1,584.9萬餘圓等ナリ、前年ニ對シテハ多クハ之ヲ増シ殊ニ公債金ノ増加約 140萬圓ニ達ス、但シ町村收入中ノ最重點ヲ占ムル府縣稅附加稅タル戶數割及家屋割ノ減額ハ一異徵タリ、以上ノ收入科目ノ多少ヲ市區ノ收入科目ノ多少ト對照スルトキハ兩者ノ間ニ著シキ差異アルヲ看ル、即チ市區ノ收入ノ主要成分ハ使用料及手數料則チ企業ノ收入ニ在ルモ、町村ノ收入ハ主トシテ稅收入殊ニ附加稅ニ在リ。

大正三年度ニ於ケル全國町村ノ歳出總額ハ 12,485.2萬餘圓ニシテ前年ニ對シ 313.6萬餘圓ヲ増加ス、其ノ明治三十三年以來ノ傾向

ハ収入ニ就キ述ヘタルト相似タリ、今其ノ内譯ヲ支出額多少順ニ舉ケレハ、教育費 4,711.5萬圓第一ニシテ總支出ノ約 40%ニ當ル、次ニ役場費 2,342.8萬圓第二タリ、總支出ノ 18%ヲ占ム、次テ土木費 1,451.9萬圓、財産造成及管理費 1,141.6萬圓、諸税及負擔 808.4萬圓、衛生費 499.0萬圓、公債費 413.5萬圓等ノ順位ニシテ他ハ遙ニ之ヨリ少シ、右ノ各費目多少ノ順ハ亦縣郡又ハ市區等ノ他ノ公共團體トノ 差異ヲ示ス、而シテ土木費ト衛生費トノ順位多少ノ關係ハ町村ト市區トノ 特徴トシテ直ニ看取セラル、所ナリ。

【普通水利組合】 普通水利組合ノ大正三年度全國總收入ハ 666.4萬圓ニシテ郡經濟ニ比シ半額以上ニ當ル、前年ニ比シ少シク減少セリト雖明治三十六年ニ比シ 二倍以上ノ進歩ナリ、收入ノ内容ハ組合費トシテ徴收スル反別割地租割主要ナルモノニシテ約半數ヲ占ム、次ニ前年度使用殘ノ繰越金甚タ多額ナリ、公債金亦著シク多シ、以上三種ノ外ハ殆ント數フルニ足ラサルノ少額ナリ。

次ニ同年度支出總額ハ 573.0萬圓ニシテ其内容ハ事業費 364.7萬圓第一ニシテ總支出ノ 6割ヲ占ムルハ素ヨリ當然ノ科トス、次ニ多キハ公債費 104.3萬圓ナリ。

【水害豫防組合】 水害豫防組合ノ大正三年度收入總額ハ 167.2萬圓ニシテ前年ニ比シ少シク増加シタルモ普通水利組合ノ經濟ノ 1/4ニ過キス、又明治三十六年以後ノ發達モ彼ニ及ハサルモノアリ、恐クハ之レ事業ノ性質ノ然ラシムル所ナリ、本組合收入ノ内容ハ組合費トシテ徴收スルモノ、外ハ 國庫又ハ府縣ノ補助金却テ公債金及繰越金ヨリ多額ナリ、其他ノ收入ハ甚タ少シ。

同年度中ノ支出總額ハ 146.6萬圓ニシテ是又前年ヨリ増加ヲ示ス、其ノ内容ハ事業費最モ多額ナルハ言フ俟タス、總支出ノ 65%ヲ占ム、第二ハ公債費支出タルコト水利組合ト同シ。

水利組合及水害豫防組合ハ町村ト大ニ趣ヲ異ニシ 必スシモ人口ノ多少疎密又ハ土地ノ廣袤等ト一致シ難キモノアリ、各地方特殊ノ 狀況ニ依ル、故ニ之ヲ地方別ニ觀察スルノ要アリト雖繁ヲ避ケテ之ヲ省略ニ付ス。

【市町村基本財産】 現行市制町村制ノ規定ハ市町村自治體ノ經濟ハ先ツ其ノ財産ヨリ生スル収入ヲ以テ支辨スヘキコトヲ定メ、而シテ市町村ノ收益財産ハ總テ之ヲ基本財産トシテ 造成管理スヘキコトヲ命ス、右基本財産ノ大正三年度末現在ハ市及區有 3,726.0萬圓、町村有 12,488.3萬圓、即チ平均一市區 524,797圓、一町村 10,180圓ニ當ル、今日既ニ税ノ徵集ヲ爲サル所謂模範町村アリト雖、此ノ平均ヲ以テシテハ 前途尙遠達ナリト云フヘシ、而シテ大正三年度ノ數ハ前年ノ調査期タル 四年前ニ比シ町村ハ大ニ之ヲ増シ市區ハ著シク減少セリ、市區ノ減少ハ 何等カ法規ノ變更又

ハ財産評價上ノ差ニ出ツルニアラサルカ 疑ヲ存ス、財産ノ種類ハ土地最モ多シ、町村ニ於テハ約半額ヲ占メ 市區ニ於テハ半額以上タリ、之ニ次キテ多額ナルハ現金ナリ。

【地方債】 大正四年度末ニ於ケル北海道府縣以下水利組合ニ至ル地方公共團體ノ 公債ハ總額 33,433.1萬圓ニシテ、内 733.7萬圓ノ不要許可債ヲ除キタルモノ、種類ヲ舉ゲレハ、北海道地方債 77.6萬圓、府縣債 5299.5萬圓、郡債 192.8萬圓、市區債 25,648.6萬圓、町村債 768.7萬圓、水利組合格債 652.4萬圓、市町村組合格債 49.4萬圓ナリ。地方債モ亦明治三十六年ノ 7,051.4萬圓ヨリ今日ノ 3億以上即チ殆ント五倍ニ増加セリ、而モ此ノ增加ハ同四十一年頃ニ至ル迄ハ未ダ甚キキ 急進ニアラザリシカ、爾後勢漸ク峻急ヲ極メ、殊ニ明治四十四年大増進以後今日ニ 至レルナリ、而シテ地方團體ノ 歲計ハ近年緊縮ヲ加ヘ往々減少ヲ示スモノアルニ拘ラス、地方債ハ尙未ダ減少セサルノミナラス 寧ロ却テ増加シツ、アリ、地方債中ノ最モ大ナルハ 市區債ナリ、是レ市區ニ於テハ經營ノ事業最モ多キ 爲ナルヘシ、次テ多キハ府縣債ナリ、右二種ハ地方債ノ大部分ヲ占ム、累年増加ノ傾向盛ナルモ 亦此ノ二種トス、次ニ多額ナルハ町村債ナルモ 前二者ニ比シ遙ニ逕庭アリ、且ツ町村債ハ明治四十四年又ハ大正元年ヲ頂點トシ 最近少ク低減ノ傾向ヲ執ル、水利組合格債ハ 町村債ト殆ント相通シ、郡債ハ其ノ額モ増加ノ度モ最モ微少ナリ。

大正四年度地方債ヲ使用ノ 目的別ニ見ルトキハ 教育費 976.6萬圓、衛生費 4,693.2萬圓、勸業費 14,870.1萬圓、土木費 9,410.1萬圓、舊債償還 2,677.1萬圓、其他 795.8萬圓ナリ、即チ勸業ヲ第一トシ土木衛生ニ次ク、而シテ 之ヲ公共團體ノ種類ニ就キテ見ルニ少シク 趣ヲ異ニスルモノアリ、即チ市債ニ於テハ勸業ヲ第一トシ衛生、土木ノ順ナルニ、府縣債ニ於テハ土木ヲ首位トシ教育、勸業、衛生ノ順序ナルカ如シ。

地方債ノ大部分ヲ占ムルモノハ 市區債ナル以上ハ之カ地方別ハ大都市ヲ包有スル府縣ニ 地方債多キハ想像ニ難カラス、試ニ多キモノヲ列記スレハ、東京 10,506.5萬圓、大阪 7,506.4萬圓、京都 2,116.6萬圓、神奈川 1,489.9萬圓 愛知 1,450.1萬圓、兵庫 1,334.6萬圓等ニシテ之ニ次テハ宮城 804.7萬圓、北海道 665.4萬圓等ナリ。

【罹災救助基金】 大正四年度末北海道及府縣ニ有スル罹災救助基金ノ總額ハ 5,202.8萬圓ニシテ、前年ニ比シ約 200萬圓ヲ増加シタリ、明治三十六年以降極メテ適順ノ増加ヲナシ 將ニ倍額ニ達セントス、大正四年中ノ救助費ノ支出ハ僅ニ 113,627圓ニ止マリ、近年ニ無キ少額ナリシカハ同年度基金ヨリ生スル 收入ノミヲ以テスルモ 227.2萬圓ナレニ對シ年度末此ノ如キ増加ヲ來セルナリ。

府縣中罹災救助基金ヲ最モ多ク有スルハ愛知縣ニシテ其額 291.1萬圓ナリ、次テ三重 261.1萬圓、岐阜 223.3萬圓、兵庫 188.9萬圓、新潟 186.7萬圓、廣島 180.4萬圓、岡山 168.5萬圓、大阪 145.8萬圓、千葉 140.8萬圓、福岡 133.2萬圓、愛媛 132.1萬圓、滋賀 130.3萬圓等ノ諸府縣ナリ。

【租稅滯納處分】 租稅滯納處分ハ國稅及府縣稅ノ 二者ニ係リ必スシモ地方財政ノ ミニ屬セサルモ便宜合シテ此處ニ概説ス。

大正四年度ニ於テ國稅ノ 滯納ヲ 處分決行徴收シタルモノ 5,682人、其ノ稅額 625,077圓ニシテ、税金缺損人員 4,678人、其ノ稅額 161,955圓ナリ、前年ニ比シ決行徴收シタルモノハ人員ヲ減シテ金額ヲ増シ、缺損ハ人員金額共ニ著シク減少シタリ、明治三十六年トハ稅法稅目等ノ 差アルカ故ニ一概ニ比較ノ 正シカラサルモノアルモ同四十一年以來ノ傾向常ニ滯納處分總體ノ 人員ヲ遞減シ、金額亦大體ニ於テ缺損ヲ減シツ、アルハ收稅成績ノ 良好ニ向ヒツ、アリト解シテ差支ナカルヘシ、國稅滯納處分ヲ稅目ニ 就キテ見ルニ總體ノ 人員ハ地租最モ多キモノノ 缺損ニ屬スルモノハ甚タ少シ、反之所得稅ハ缺損ノ人員多シ、營業稅ハ徴收シタル 者モ缺損モ共ニ多シ、又稅額ハ處分決行徴收シタルモノモ 缺損ニ歸シタルモノ

XXXI. 爵位勳章及褒章

【爵位】 大正五年末有爵者ノ數ハ 933人ニシテ中公爵 17人、侯爵 38人、伯爵 100人、子爵 380人、男爵 398人ナリ、前年ニ比シ侯 1子 7男 5合計 13人ヲ増加シ公、伯爵ハ同數ナリ、右ノ數ヲ明治三十四年ノ 778人以來累年ニ見ルニ、大正元年ニ於テ前年ヨリ 6ヲ減シタル外常ニ必ス増加ス、殊ニ明治四十年ニ於テ約百名ノ増加ヲ見タルハ三十七八年戰役ノ 論功行賞ノ 結果タリ、各爵中増加ノ最モ高キハ男爵ナリ、即チ明治三十四年ニ對スル 有爵者ノ總増加 155人中 117人ハ男爵ナリ。大正五年末有爵者ヲ位階別ニ見ルトキハ、從四位最モ多ク其數 195ナリ、次テ正五位 157、正四位 123ニシテ、之ニ次テハ正三位 117、從三位 106ナリ、其他ハ百人ニ達スルモノナシ、而シテ有爵者ノ 無位ナル者 63人アリ、右ノ内公爵 4人アルハ比較的多シ、右ノ外朝鮮貴族侯 6伯 3子 22男 34合計 65人アリ、其位階ハ從三位以下從五位ニシテ無位者亦 2人アリ。

大正五年末有位者ノ總數ハ 81,909人ナリ、明治三十四年末 27,711人ニ對シ倍ニ增加ニシテ毎年必ス増加シ來レリ。本年末ニ於ケル數ヲ各位階ニ別テ見ルニ、正八位 23,734人最モ多ク、上級ニ進ムニ從テ遞減シ從一位ノ 3人ヲ最少トシ正一位ノ 者一人モ之レナシ、但シ最下級ノ位タル從八位ノ數ハ 1,808人ニシテ恰モ從四位ノ 人員ト正五位ノ 人員トノ 中間ニ在リ、前記總數中女子ノ 有位者 222人アリ、又右ノ内華族ノ 有位者ハ男 1,558人、女 31ナリ、

モ共ニ 酒稅最モ多額ナリ、次テ鑛業稅、營業稅、所得稅ノ 順位ナリ、而シテ營業稅ハ結局徴收シタルモノ、方多キモ鑛業稅ハ缺損ニ屬スルモノ、方著シク多額ナリ。

府縣稅ノ大正四年度中滯納處分ヲ行ヒタルモノハ 其ノ處分決行徴收シタルモノ人員 218,787人、其ノ金額 253,309圓、缺損人員 257,380人、其ノ金額 241,407圓ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ徴收シタルモノハ人員ニ於テ増加ヲ示スノ 外他ハ悉ク減少セリ、而シテ其ノ累年ノ 狀況ニ付キテハ此所ニ概括的大勢ヲ捕捉シ難シ。

大正四年度國稅滯納處分ノ 税金缺損ニ屬スルモノ、人員ヲ府縣ニ就キテ見ルニ、其ノ最モ少キハ千葉 1人、香川 2人、奈良 3人、富山、岐阜各 4人、埼玉、福井、山口各 5人等ナリ、而シテ最モ多キハ北海道 824人、大阪 512人、長崎 488人、兵庫 461人等ナリトス。

同様ノ數ヲ府縣稅ニ付キテ見ルニ其ノ少キハ鳥取 172人、埼玉 502人、山形 829人、和歌山 936人、富山 944人等ニシテ、其ノ多キハ北海道 36,891人、東京 26,936人、大阪 21,568人、長崎 19,369人、福岡 18,903人等ナリトス。

同年朝鮮人ノ 有位者 822人ハ右ノ 外ナリ。

【勳章】 大正五年末勳章ノ 佩用個數ハ 1,088,163個、其ノ 佩用人員ハ 947,703人ナリ、前年ニ比シ個數 137人員 203ノ増加ナリ、今先ツ其ノ 佩用人員即チ二個以上ノ勳章ヲ 併用スル者ノ 場合其ノ最高級ノ勳章階級ヲ取リテ計算セル人員ニ就キテ 勳章等級別ヲ見ルニ、大勳位佩用人員ハ菊花章頸飾 4、菊花大綬章 10、計 14人ナリ、次ニ勳一等佩用人員ハ桐花大綬章 18、旭日章 109、瑞寶章 84、寶冠章 19、計 230ナリ、次ニ勳二等佩用人員ハ旭日章 172、瑞寶章 305、寶冠章 8、計 485ナリ、次ニ勳三等佩用人員ハ旭日章 851、瑞寶章 1,543、寶冠章 4、計 2,398ナリ、夫ヨリ勳四等佩用人員ハ旭日、瑞寶、寶冠ノ三種ヲ合シテ 6,714、勳五等ハ同シク 10,796、勳六等ハ同シク 22,200ト爲リ以上六等乃至四等三階級ヲ合シ人員 39,710ナリ、之ニ次キ勳七等佩用人員 133,830ニシテ別ニ金鷄勳章功七級ノミノ 佩用者 126人アリ、而シテ金鷄勳章六級以上ノ 有動者ハ悉ク皆他ノ 上級勳章併用者ナルカ 故ニ各級ノ 佩用人員ニ現ハレス、功七級ニ於テノミ 佩用人員トシテ 126人之レアルナリ、最後ニ勳八等佩用人員ハ 770,910人ナリ、是等ノ 佩用人員ヲ單ニ種類別ニ掲ケレハ旭日章ハ勳一等以下合計 614,222人、瑞寶章ハ同シク 331,282人、寶冠章 2,041人、金鷄勳章 126人ナリ右ノ内旭日佩用者ト瑞寶佩用者トヲ比較スルトキハ 兩者ノ間各等級ニヨ

リ少カラザル差異ヲ認ムヘシ、即チ兩勳章總數ニ於テ前記ノ如ク恰モ 2ト 1トノ比ニ近キ大差ヲ有シナカラ、各等級ニ於テハ多ト少ト全ク地位ヲ轉倒スルモノアリ、先ツ勳八等ハ旭日佩用者 493, 246人、瑞寶佩用者 275,954人ニシテ兩者ノ間隔總數ト殆ソト相等シキ比例ニアリ、然ルニ勳七等ハ旭日佩用者 101,918人、瑞寶佩用者 31,696人ニシテ旭日ノ多キ割合 3ト1ノ比ヨリモ甚シ、反之更ニ一階上級ナル勳六等ニ至リテハ兩者多少ノ關係全然轉倒シ旭日佩用者却テ瑞寶佩用者ヨリ少ク 10,794人ト 11,336人トノ數ト爲ル、是ヨリ上級總テ此ノ現象ヲ繼續シ、最後ニ勳一等ニ至リ再ヒ旭日佩用者ノ數瑞寶佩用者ノ數ヲ超過シ 109人ト 84人トノ數ヲ示スニ至ル、其ノ理由亦モ強チ觀察セラレサルニアラサルモ、玆ニハ單ニ各等級ノ數ニ差ノアル所ヲ掲ケ置クニ止ムヘシ。次ニ佩用個數ヲ勳章ノ種類ニ別ツトキハ、桐花大綬章以上 43個ヲ除キ、旭日章 638,592、瑞寶章 376,879、冠章 2,041、金鷄勳章 70,308ナリ、右ノ内實冠章及金鷄勳章ヲ姑ク別トシ旭日瑞寶ノ二種ニ付キテ見ルニ旭日章著シク多數ナリ、併ナカラ之ヲ勳章ノ各等級別ニ於テ見レハ其ノ著シク多數ナルハ八等及七等ニシテ次テ六等亦少シク多數ナル外五等以上ニ於テハ却テ瑞寶章多シ。

大正五年中各種勳章ヲ新ニ受領シタル人員ハ 102,852ニシテ前年ニ比シ著シク多數ナルノミナラス、最近十年間未タ嘗テ有ラサル多數ナリ、否日露戰役後ノ論功行賞タル明治三十九年ノ 981,461ニ次クノ多數ナリ、是レ素ヨリ大正三四年戰役ノ論功行賞ノ結果ナリ從テ五等及六等ノ少シク瑞寶多キ外ハ各等悉ク旭日章多數ナリ、而シテ等級別ニ見ルトキハ下級ノモノ多數ナル亦言フ俟タス。旭日勳章ノ年金ヲ受領スル者大正五年末ニ於テ尚 5,660人アリ、其ノ年金額 304,896圓ナリ、明治三十四年以來ノ數ヲ見ルニ年々其ノ數ヲ減少ス。

XXXII. 議員選舉

【貴族院多額納稅者議員】貴族院多額納稅者議員ハ明治二十三年以來每七年ノ選舉ニシテ其ノ最近ハ明治四十四年第四回目ノ選舉ニ係ル、同年選舉ノ際ニ於ケル互選權ヲ有スル者ハ 673人ナリ、内華族 10人アリ、華族ノ互選權者ハ每期増加ヲナス。次ニ三府四十二縣各十五名ノ直接國稅總納額ハ四十四年選舉ノ際 3,476,819圓ニシテ前期ニ比シ 2百萬圓以上ノ増加ナリ、從テ一人平均納稅額 5,166圓モ二倍以上ノ増加ナリ、是レ主トシテ稅法稅率ノ變更ニ基クモ一人ノ最高納稅額ノ増加殊ニ劇シキ事情等ヨリ見ルトキハ所謂大富豪ノ益大ヲ爲スノ狀ヲ察スルニ足ランカ、各府縣中納稅額最も多キハ大阪、新潟、兵庫、東京、神奈川等ニシテ、最も少キハ福井、鹿兒島、大分、群馬、栃木等ナリ、而

金鷄勳章ノ年金ヲ受領スル者大正五年末現在 66,957人、其金額 8,567,000圓ナリ、前年ニ比シ 1,715人、272,900圓ヲ増加セリ、金鷄勳章ハ戰功ニ限り賞賜セラル、モノナルカ故ニ日露戰役ノ恩賞アリシ明治三十九年ヲ最高トシ年々死亡及褫奪ニ依リ減少シ來リタルニ、最近戰役ノ行賞ニ依リ再ヒ増加ヲ示シタルハ即チ本年ノ數ナリ、此處ニ掲ケタル人員ト前ニ掲ケタル佩用個數ト其數ニ少差アルハ調査方法ノ差異ヨリ出ツルノ結果ナリ、何レヲ信ト斷シ難キヲ以テ暫ク二者共ニ掲ケルコトニセリ。

大正五年中外國人ニ帝國ノ勳章ヲ贈與シタル數ハ 140ニシテ、前年ニ比シ 38ヲ増セリ、其ノ等級ハ三等最も多シ、之ヲ國別ニ見ルニ露西亞 75、佛蘭西 42、著シク多數ナリ。帝國國民ニシテ外國ノ勳章ヲ受領シ其ノ大正五年中佩用ノ允許ヲ受タル數 347ナリ、前年ニ比シ著シク多キノミナラス明治四十四年ノ異例ニ多カリシ外最近年ノ多數ナリ、之ヲ國別ニ見ルトキハ露國 177、支那 116、佛蘭西 21、英吉利 20等ナリ。

【褒章】勳章ヲ除クノ外褒章以下ヲ下賜スルハ今日ノ制度ニ於テ中央政府即チ賞勳局ヨリスル、地方廳ニ於テスルトノニアリ、其ノ大正五年中賞勳局ニ於テ爲セル表彰受領人員ハ總計 1,639人ニシテ前年ニ比シ僅ニ 31人ノ増加ナリ、内褒章ヲ受ケタル者德行ニ依ル者 25、公益ニ盡セルニ依ル者 29ニシテ其他ノ 1,585ハ悉ク公益ニ盡セルニ依リ賞杯ヲ受領シタルモノナリ。次ニ地方廳ノ表彰ニ係ルモノハ大正四年中 417,246アリ右ノ内 364,892ハ金拾圓未満寄附者ニ對スル表彰ナリ、之ヲ除クノ外、490ハ人命救助ニ對シ、207ハ德行ノ嘉ホヘキモノニ對シ、51,657ハ公益ニ盡セルニ對スル褒賜ナリ、而シテ内大部分ハ賞杯下賜ニシテ、褒狀下賜セラレタルモノ人命救助 47、德行 2、又金員ヲ下賜セラレタルモノ人命救助 382、德行 87ナリ。

シテ大阪ト福井トノ兩極端ノ差ハ十五名ノ總納額ニテ 286,812圓一人平均納稅額ニテ 19,121圓ナリ。【衆議院議員】現行衆議院議員選舉法ニ依リ行ハレタル總選舉ハ明治三十五年以來七回ニシテ、大正六年四月ニ行ハレタルモノヲ以テ最近トス、其當時ノ數ヲ示セハ議員 381人、有權者 1,422, 118、内棄權者 114,951、又投票數ノ内有效 1,300,551、無効 6,320ナリ、議員數ハ從來七回ノ總選舉中、三十七年ノ選舉ノ際ヨリ北海道ニ三人ヲ増シ、四十五年ノ選舉ノ際ヨリ沖繩縣ニ二人ヲ増シタル以來變動ナシ、一府縣平均 8.1人ニ當ル。有權者ノ數前回は比シ 12萬餘ヲ減少セリ、是レ恐クハ所得稅法中第三種所得ノ稅率變更ノ結果ナラン、以上ノ數ヲ比例ニ就キテ見ルニ、人口千ニ對スル

有權者ハ 257ニシテ四十一年ノ選舉以來次第ニ低率ヲ示ス、又議員一人ニ對スル人口ハ 144,973人ニシテ年々人口ノ増加スルト共ニ一人ノ議員ノ代表スル人員ノ増加スルハ當然ナリ、又有權者ハ議員一人ニ對シ 3,733ナリ、前年ニ比シ又四十一年以來減少ノ傾向ニ在ルハ前述ノ如シ、選舉權者百中投票數ト棄權數トハ 91.9ト 8.1トノ比ヲ示ス、前回即チ大正四年ノ選舉ニ比シテハ稍棄權ノ率ヲ増シタルモ其他ノ何レノ選舉ヨリモ少シ、最も棄權率ノ多カリシハ四十一年ノ選舉ナリ。

各府縣別ニ就キテ見ルニ其ノ議員ハ市部郡部ヲ合シ東京府ノ 16名ヨリ沖繩縣ノ 2名ニ至ル、議員一人ニ對スル人口ハ北海道ノ 315,850人ヲ最高トシ、沖繩縣ノ 276,560人之ニ次ク、但シ右ハ何レモ特別ノ事情ニアルモノトセハ其他ノ府縣中ノ多キハ東京 150,650、大阪 178,823、京都 162,862、鹿兒島 160,889、愛知 159,723、宮崎 155,695等ニシテ、少キハ香川 109,828、鳥根 109,800、滋賀 113,266、富山 115,171等ナリ、又有權者ノ數ハ必スシモ人口ト並行セス即チ議員一人ニ對スル有權者ノ多キ府縣ヲ舉クレハ滋賀 6,067、愛知 5,168、福島 4,855、岡山 4,782、三重 4,730等ニシテ少キハ香川 2,054、鹿兒島 2,298、山梨 2,360、長崎 2,378、北海道 2,451、青森 2,527、高知 2,622等ナリ、右ハ市部及郡部ノ選舉區ヲ分別セサルノ數ナルヲ以テ不徹底ノ譏アルヘク、又人口ハ所謂乙種推計人口ヲ用キタルモノニシテ絕對ニ信フ措キ難キノ點アルモ、大體各府縣ノ差異特徴ヲ見ルニ足ラン、殊ニ以上掲載シタル府縣中ニテモ北海道ト沖繩トハ之ヲ除外スルモ滋賀縣ト鹿兒島縣トハ全然反對ノ極端ヲ示スカ如シ、即チ一ハ議員數ニ對シ人口少クシテ有權者非常ニ多ク、一ハ人口甚タ多クシテ有權者稀少ナリ。

大正六年四月ノ選舉ニ於テ棄權歩合ノ最も多キ府縣ハ北海道 15.3%ヲ首トシ、次テ鹿兒島 14.6%、大阪 13.3%、岡山 13.1%、東京 12.4%、熊本 11.7%、廣島 11.4%、沖繩 10.7%、岩手 10.4%等ニシテ、其ノ少キハ鳥根 4.1%、静岡 4.4%、群馬 4.6%、岐阜 5.0%等ナリ、府縣ニ依リ此ノ如キノ差ハ競争ノ激烈ノ程度ニヨルカ、投票所ニ對スル距離ノ便宜ニヨルカ其ノ何ノ故タルヲ知ラズト雖、鹿兒島、北海道、東京、大阪、沖繩、熊本、岩手、廣島等ハ前回ノ選舉ニ於テモ多ク、皆 10%以上ノ棄權アリタル地方ニシテ群馬、鳥根、静岡ハ前回ニ於テモ棄權者少キ地方ナリ。

大正六年選舉ノ際ニ於ケル議員ノ年齢別ハ三十五歲未満 9、四十五歲未満 32、四十五歲未満 59、五十歲未満 88、五十五歲未満 99、六十歲未満 52、六十歲以上 42ナリ、即チ五十歲以上五十五歲未満最も多數ナリ、前回は比シ六十歲未満ノ階級 8人ヲ減シタルノ事實ハアルモ、大體ニ於テ年少者減シテ年長者増スノ傾向認メラル、即チ從來每回ノ選舉ニ於テ其ノ最多數ハ必ス 四十五歲以上五

十歲未満ノ階級ニ在リシニ、今回ノ選舉ニ於テ始メテ五十歲以上五十五歲未満ノ階級最多數タルニ至リタルモ亦一徵候ナリ。

大正六年ノ選舉ニ於ケル議員ノ職業ハ 73人ノ無職業者ヲ別トシ農業 79、辯護士 56、會社員 53、新聞雜誌記者 28、商業 19、醫師藥劑師 15等ニシテ他ハ皆十人以下ナリ農業ノ多數ナルハ初期以來繼續セル事實ナルモ其數ハ漸次減少ノ徵アリ、辯護士ノ數ハ殆ソト一定ス、會社員ノ數ハ四十五年ノ選舉以來激增セリ、新聞雜誌記者モ亦増加ノ著シキモノナリ、但シ前回ニ對シテハ 3名ヲ減シタリ、商業ハ今回ノ選舉ニ於テ最も減少ノ大ナルモノナリ、反之醫師及藥劑師ハ今回依然トシテ前年ノ 2名ヨリ 15名ニ膨脹セリ。

【府縣會議員】府縣會議員選舉ノ現行法ノ下ニ全國殆ソト同時ニ行ハレタルハ大正四年ノ事實アルノミ、但シ佐賀、鳥根ノ二縣ハ同年ニ於テ行ハサリシカハ各近年ノモノヲ以テ補ヒ、其ノ總數ヲ掲ケレハ北海道、沖繩ヲ除キ、議員數 1,701、内市部 241、郡部 1,460ナリ、有權者總數 2,834,078ニシテ、其最も多キ府縣ハ愛知 111,618ヲ第一トシ、兵庫 93,904、新潟 85,682、長野 83,566、廣島 83,636等ニシテ、少キハ鳥根 19,325、山梨 24,176、香川 25,135、青森 27,953、奈良 28,138等ナリ、有權者中有效投票數 1,896, 210、無効投票數 27,858、棄權者 460,027ナリ。

【郡會議員】郡會議員ノ選舉モ亦現行法現ノ下ニ行ハレタルモノ大正四年ノ數アルノミ、其ノ議員ノ全國四十五府縣ノ總數ハ 12, 789人ニシテ其ノ有權者數 2,267,488ナリ、右有權者中投票シタルモノ、有效票 1,448,263、無効票 31,357、投票セサリシ者 745,442ナリ。

【市町村會議員】市町村會ニ關スル數ハ上記各會ト異リ實際行ハレタル選舉ノ際ノ數ニアラス、各年末ノ數ヲ掲ク、右ニ依レハ大正五年末全國市會ハ、會數 68、議員數 2,322、有權者數 297,956ナリ、前年ニ比シ會數及議員數ヲ増シタルニ拘ラス有權者ヲ減少セリ、前年ノ前々年ヨリ減シタルハ營業稅率改正ノ結果タルヲ想像シ得ヘキモ本年ノ減少ハ其理由ヲ知ラス。

町會ハ大正五年末會數 1,276、議員數 21,027、有權者 639,094、何レモ前年ニ比シ増加セリ。

村會ハ大正五年末會數 10,331、議員數 129,989、有權者 3,683, 240ナリ、前年ニ比シ會數 10、議員數 95ヲ減シ、有權者 41,828人ヲ増セリ、村會數ノ減少ハ勿論村ノ合併又ハ町ニ變更ノ爲メナリ右ノ外町村組合會大正五年末ニ會數 75、議員數 978、有權者數 21,890アリ、町村總會會數 1、有權者數 7アレトモ共ニ年々減少ノ傾向ヲ示ス。

北海道ノ區別及一二級町村制ニ依ルモノ沖繩縣及東京、長崎、鹿兒島等ノ島嶼町村制ニ依ル區及町村ハ前記以外ナリ、其數區會 6、

議員 171、有権者 9,455、又町會ハ會數 28、議員數 524、有権者 10,253、村會數 261、議員 3,124、有権者 145,759ナリ、而シテ北

XXXIII. 官吏公吏及恩給

【官吏】 大正五年末現在、國庫ヨリ俸給ヲ支辨スル帝國文官ノ數ハ勅任 750、奏任 8,519、判任 72,102、計 81,371、其ノ年俸 45,818,642圓ナリ、之ニ更ニ雇傭人員 143,512、年俸 23,778,748圓ヲ加フルトキハ合計 224,883人、69,597,390圓ト爲ル、而シテ陸海軍武官及地方費支辨ノ官吏ハ此ノ以外トス、又臨時雇傭及門衛等並ニ休職官吏ハ之ヲ含マス、右文官ノ總數ヲ累年比較シ見ルニ殆ント逐年増加セサルナシ、但シ明治三十七八年減少ノ數ヲ見ルモ之レ當時陸軍省ニ關スル調査ヲ缺キシカ爲正當ノ比較ト爲シ難シ、其他ハ獨リ最近大正二年ニ於テ俸給額ノ減シタルアルノミ、是大正二年行政整理ノ結果ナルカ、此ノ年ニ於テサヘ人員ハ減少セス、甚タ少數ナカラ寧ロ増加ヲ示セリ、尙ホ當時ノ狀況ヲ各階級ニ立入リテ見ルニ奏任及雇傭ハ人員金額共ニ減少シタルモ、判任ハ却テ増加シタリ、勅任ハ數ニ於テハ僅少ナルモ人員ヲ増加シ金額ヲ減少セリ、是レ大正二年整理ノ結果ノ數ニ現ハレタル眞想ナリ。

大正五年末文官ヲ其ノ人員ノミニ付キテ各省別ニ見ルニ、勅任官ノ最も多キハ文部省ニシテ、之ニ次クハ司法省、朝鮮總督府等ナリ、奏任官ノ多數ナルハ府縣第一ニシテ、之ヲ除キテハ司法省、文部省、朝鮮總督府、皆千人以上ナリ、判任官ハ府縣ニ於テハ地方費支辨ノモノアルヲ以テ之ヲ別トシ其ノ以外ニ於テ多キハ逓信省第一ナリ、次テ大藏省、朝鮮總督府、内閣等ナリ、雇傭ノ最も多キモ亦逓信省第一ニシテ、之ニ次テハ内閣、臺灣總督府、朝鮮總督府、司法省ナリ、此クテ文官總人員ノ多キモノ、順位ハ矢張り逓信、内閣、臺灣、朝鮮、司法等ノ各省府ナルモ、俸給ノ多少ハ右ト同シカラス、其最も多キハ内閣ニシテ、次ニ朝鮮總督府、臺灣總督府ニシテ、逓信省ハ第四位ナリ、朝鮮臺灣ノ多キハ其殖民地タルノ關係平均俸給多額ノ故ニ出テ、内閣ノ多キハ特ニ多數ノ雇傭員ハ鐵道従業員ニ係ルヲ以テ他官省ノ雇傭員ニ比シ比較的多額ノ俸給ヲ受クルニ基ツク。

大正五年末現役在職武官ノ數ハ、陸軍ハ准士官以上人員 16,446 其年俸 14,940,763圓、海軍ハ候補生下士ヲ含ミ人員 17,809、其年俸 9,036,365圓ナリ、是亦年々増加ノ兆アルモ、大正二年ニ於テ少シク減少セルアルハ文官ト同シ、右ノ内將官ハ陸軍 176、海軍 91、上長官及士官ハ陸軍 14,286、海軍 4,247、准士官ハ陸軍 1,984、海軍 1,250ナリ、又海軍ニハ下士 12,064、候補生 157アルモ陸軍ノ是等ノ數ヲ缺如ス。

大正五年末文武官吏ノ休職、待命、停職ノ數ハ高等官 928、判任官

海道ニ町村組合會 1、議員 10、有権者 22アリ。

712、計 1,640ナリ、前年ノ少カリシニ反シ約 400人ヲ増加セリ、是又近年ニ於テ大正二年最も多キモ明治四十二年ニ於テ更ニ多キ數ヲ示スアリ、而モ其ノ多キハ主トシテ判任官ナリ。

右大正五年末ノ休職數ヲ細分スルニ、文官 789、武官 851、内陸軍 552、海軍 299ナリ、而シテ武官ハ高等官ノ數判任官ノ三倍以上タリ、反之文官ハ判任官却テ高等官ノ二倍ニ當ル、文官ヲ各省別ニ見ルニ高等官ハ司法省ノ 122最も多ク、内閣ノ 39、府縣ノ 29、文部省ノ 21、外務省ノ 16等相次テ多シ、其他ハ 6人以下タリ、判任官ノ休職多キハ内閣ノ 233ヲ首位トシ、府縣ノ 100之ニ次キ、農商務省ノ 53、逓信省ノ 32、關東都督府ノ 25等ナリ。

【恩給及扶助料】 大正五年末現在政府ヨリ恩給又ハ扶助料ヲ受クル總人員ハ 260,422人ニシテ、其ノ年額 25,112,081圓ナリ、之ヲ恩給ト扶助料トニ分掲スレハ、恩給 153,770人、19,102,810圓、扶助料 106,652人、6,009,271圓ナリ、明治三十四年ニ對スル増加ハ恩給ハ恰モ七倍ニシテ扶助料ハ之ヨリ稍少シ、殊ニ急劇ノ増加ヲナシタルハ恩給ハ明治三十九年ニシテ、扶助料ハ同三十八年ナリ、各前年ニ比シ二倍強ト爲レリ。大正五年末現在ノ數ニ就キ内譯ヲ見ルニ恩給ハ文官人員 26,192人、金額 4,739,542圓、陸軍軍人人員 100,290人、金額 10,895,759圓、海軍軍人人員 27,288人、金額 3,467,509圓ナリ、右三種中前年ニ對スル増加ハ海軍軍人最も多ク、陸軍軍人之ニ次ク、又明治三十四年以來ノ數ニ於テハ陸軍軍人恩給最も増加著シキモ、是明治三十九年日露戰役後ノ影響海軍ヨリ陸軍ノ大ナリシ所以ト察セラルヘクシテ、同年以後最近ニ至ル増加割合ハ陸軍ヨリ海軍却テ大ナリ、此間獨リ文官恩給ハ同様に少數ツ、ノ増加ヲ執リ來レルモ、大正二年ノ前年ニ對スル増加ハ比較的大ナリトス。次ニ扶助料ノ大正五年末内譯ハ文官 9,296人、630,516圓、陸軍軍人 90,431人、4,908,574圓、海軍軍人 6,925人、470,181圓ナリ、扶助料ハ恩給トハ頗ル趣ノ異ナルモノアリ、即チ扶助料モ其ノ總額ハ年々若干ノ増加ヲ示シツ、アルモ、其ノ内容ニ立入リテ見ルトキハ其ノ首要部ヲ占ムル陸軍軍人扶助料ハ明治三十八年前年ニ對スル三倍ノ劇増以來四十一年マテ増進シ、四十二年稍減シテ四十三年再ヒ最高額ニ登リタル後年々遞次減少シツ、今日ノ數ニ至リタルコト是ナリ。

尙恩給及扶助料ヲ合シタルモノヲ勅奏判ノ階級別ニ見ルニ、大正五年末ノ數勅任ハ文官 667人、611,726圓、陸軍軍人 324人、446,120圓、海軍軍人 213人 313,554圓、奏任ハ文官 5,434人、1,686

,859圓、陸軍軍人 19,022人、5,458,741圓、海軍軍人 2,945人、1,123,810圓、判任ハ文官 23,213人、2,723,117圓、陸軍軍人 39,606人 3,257,411圓、海軍軍人 15,437人、1,549,435圓、別ニ判任待遇ノ國庫支辨ノ巡查看守 6,153人、321,806圓アリ、而シテ上記勅奏判ノ外卒陸軍 131,702人、6,640,591圓、海軍 15,618人、950,891圓ナリ更ニ恩給及各種ノ扶助料並ニ是等ノ基ク法令別等ハ此ニ掲グルノ繁ヲ省キ悉ク當該表ニ讓ル、

大正五年中新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受領シタル人員及其金額ハ勅任 119人、149,860圓、奏任 1,934人、710,196圓、判任 5,851人、604,789圓、並卒 4,534人、247,487圓、合計 12,438人、1,712,332圓ナリ、更ニ之ヲ文武官別トスレハ勅任ハ文官 73人、73,918圓、陸軍 20人、29,656圓、海軍 26人、46,286圓、奏任ハ文官 450人、148,135圓、陸軍 1,139人、360,694圓、海軍 345人、201,369圓、判任ハ文官 1,976人、247,567圓、陸軍 1,639人、149,692圓、海軍 1,662人、176,868圓 巡查看守 572人、30,602圓、及卒陸軍 3,140人、151,007圓、海軍 1,375人、96,102圓ナリ、右ハ必スシモ同年中恩給及扶助料ノ増加額ニアラス、何トナレハ死亡其他ノ事由ニ依リ權利ノ消滅シタルモノアレハナリ。

恩給及扶助料ノ外、軍人恩給法、官吏遺族扶助法其他ノ法令ニ依リ一時賜金ヲ受領シタル者、大正五年中人員 1,837人、金額 184,607圓ナリ、内文官 210人、8,901圓、陸軍軍人 1,041人、135,933圓 海軍軍人 149人、25,150圓、巡查看守 437人、14,623圓ナリ。

【宮内官吏】 大正五年末宮内官吏ノ現在員ハ 2,820人、其年俸額 1,618,446圓ナリ、此ノ總數ハ大正二年以前ハ等外及雇傭ヲ含ムト三年以降之ヲ含マサルトノ關係アルカ爲メニ正當ノ比較ナシ難キモ、前年ニ對シテハ人員金額共ニ著シキ増加ヲ示ス、而シテ其ノ五年末ノ内譯ヲ掲クレハ、勅任 94人、193,380圓、奏任 347人、471,090圓、判任 2,379人、953,976圓ニシテ、勅任ハ明治四十三年及大正二年ノ兩年年俸多ク近年減少シ來リシカ、五年大ニ増加セリ、奏任ハ大正元年人員ヲ増加セシニ拘ラス、年俸ヲ減少シ、翌二年反對ニ人員ヲ減シテ年俸最高ニ達シ、爾來減少シ來リシカ五年ニ至リテ人員年俸共ニ大正元年及二年ニモ優リ最多ニ上レリ、判任官ハ其ノ人員ハ明治四十四年ニ一度前年ヨリ減少セルコトアルモ、年俸ハ逐年必ス増加シ終ニ今日ニ至レリ。

【公吏】 大正五年末ニ於ケル府縣以下地方自治體ニ於ケル公吏員ノ數ハ府縣名譽職參事會員及吏員 8,650、郡名譽職參事會員及吏員 3,991、市參事會員及市町村吏員 280,437、合計府縣郡市町村ノ地方自治行政ニ従事スル總人員ハ 293,078人ナリ。

府縣名譽職參事會員ノ數ハ法令ニ依リ定ムル所ナルヲ以テ前年ト異ナルナク、各府縣ニ於テハ 7名若ハ 10名ナリ、府縣有給吏員ノ數ハ前年ニ比シ 34人ヲ増シ、各府縣ニ依リ人員ノ差等著シ、多キハ岡山縣ノ 647、愛媛縣ノ 452、秋田縣ノ 427、栃木縣ノ 426等ヨリ、少キハ佐賀縣ノ 35、熊本縣ノ 44、京都府ノ 49、宮城縣ノ 52等ニ至ル、而シテ之ニ支拂フ俸給年額亦最多ノ石川 111,055圓、栃木 104,847圓、大阪 104,506圓等ヨリ、最少佐賀 10,444圓、熊本 11,468圓ノ間ニ在リ。

郡名譽職參事會員ノ數 2,681モ亦前年ト大差ナシ、僅ニ 4ヲ減シタルノミ、郡名譽職常設委員ハ之ヲ置クモノ寧ロ稀ニシテ其數 7縣 35人アリ、前年ニ對シ 1人ヲ減シタルノミ、郡有給吏員ハ 1,275人ニシテ前年ヨリ 29人ヲ増セリ、制度上之レナキ北海道、沖繩ノ二ヲ除キ四十五府縣ニ割當ツルトキハ一府縣平均 28.3人、一郡平均 28.3人ナリ、但シ府縣別ニ見レハ全然之ヲ有セサル栃木、山梨等ノ諸縣アリ、多キモ福岡縣ノ 131、宮崎縣ノ 86、石川縣ノ 78等ヲ出テス、是等有給吏員ノ俸給年額ハ全國總計ニ於テ 301,902圓ナルヲ以テ、一吏員平均年俸 238圓弱ニ當ル。

大正五年末全國市區町村吏員ノ總數 280,437人中市（區ナ含ム）吏員ハ市長以下總テヲ合シ 13,525人ナリ、前年ニ比シ 218人ヲ増シタリ、吏員ノ内譯市長 67、助役 76、名譽職參事會員 418、收入役 74、副收入役 9、名譽職常設委員 1,073、名譽職、區長及代理 1,111、有給區長及代理 25、書記 4,668、雇傭其他 6,004ナリ、市長ノ前年ニ比シ 1名ヲ減シタルハ其ノ缺員ノ市アルカ爲ナリ、而シテ是等ノ吏員中有給者ノ俸給年額總計 3,774,218圓ニシテ、前年ヨリ増スコト 22,522圓ナリ、之ヲ有給吏員總數 10,924人ニ割リ當ツルトキハ一人平均年俸 345圓強ナリ。

大正五年末ニ於ケル全國町村吏員ノ總數ハ 266,912人ナリ、前年ヨリ 8,764人ヲ増加セリ、且ツ町村ハ市ノ新設及其ノ合併ニヨリ年々町村ノ數ヲ減スルニ拘ハラズ、吏員ノ數ハ明治三十四年ノ數以後必ス増加セリ、右大正五年末ノ吏員ヲ種類ニ依リ掲クレハ名譽職町村長 9,677、有給町村長 1,822、名譽職助役 8,480、有給助役 3,204、收入役 11,220、副收入役 30、名譽職常設委員 52,840、名譽職區長及代理 138,585、書記 36,586、雇傭其他 4,468ナリ、前年ニ比シ有給町村長及副收入役ノ數同數ニシテ、收入役及雇傭其他ノ數少シク減シタル外、他ハ悉ク増加セリ、右ノ内有給吏員ノ合計ハ 56,330人ニシテ其ノ俸給年額 8,875,294圓ナリ、仍テ一人平均年俸 158圓弱ニ當ル。

統計表目錄

I. 土地

1 經緯度	2
2 周圍及面積 (全國)	3
3 道府縣別面積	3
4 郡市町村數及役所役場數 (全國、地方別) 自明治三十五年末至大正五年末	4
5 民有地反別 (全國) 自明治二十一年末至大正六年末	5
6 民有有租地地目別反別及地價 (全國、地方別) 自明治二十一年末至大正六年末	6
7 民有免租地及民有年期地地種別反別 (全國、地方別) 自明治二十六年末至大正六年末	8

II. 氣象

8 氣象總覽 (測候所別) 大正五年	10
9 中央氣象臺外十四測候所累年及最近一ケ年ノ月別氣象	14

III. 人口

甲、人口ノ靜態

10 帝國人口總數及男女別 自明治五年至大正三年末	20
11 本籍人口年齡別 其ノ一 (全國) 自明治二十六年末至大正二年末	22
12 本籍人口年齡別 其ノ二 (全國) 自明治二十六年末至大正二年末	23
13 本籍人口男女年齡各歲別 (全國) 大正二年末	24
14 本籍人口男女有配偶者無配偶者 (全國) 自明治十九年末至大正二年末	25
15 本籍人口男女有配偶者無配偶者年齡五歲階級別 (全國) 大正二年末	25
16 本籍人口、現住戶數及現住人口 (地方別) 大正二年末	26
17 現住人口 (地方別) 自大正三年末至大正六年末	27
18 現住人口階級別市町村數及其ノ人口 (全國) 自明治二十一年末至大正二年末	29
19 市區現住人口及現住戶數 自明治三十一年末至大正二年末	30
20 人口壹萬人以上ノ町ノ現住人口及現住戶數 大正二年末	31
21 人口壹萬人以上ノ村ノ現住人口及現住戶數 大正二年末	33

乙、人口ノ動態

22 婚姻、離婚、生產、死產、死亡 (全國) 自明治五年至大正三年	34
23 婚姻、離婚、生產、死產、死亡 (地方別) 大正三年、大正二年	35
24 種類別婚姻 (全國、地方別) 自明治三十八年至大正三年	37
25 婚姻者各自ノ年齡別 (全國) 自明治三十八年至大正三年	39
26 種類別離婚 (全國、地方別) 自明治三十八年至大正三年	40
27 夫婦關係繼續期間別離婚 (全國) 自明治三十八年至大正三年	42
28 生產、死產男女及身分別 (全國) 自明治三十八年至大正三年	42
29 生產男女及身分別 (地方別) 大正三年、大正二年	43
30 死亡者男女別 (地方別) 大正三年、大正二年	45
31 死亡者男女月別 (全國) 自明治四十三年至大正三年	46
32 死亡者男女年齡五歲階級別 (全國) 自明治四十三年至大正三年	46
33 死亡者男女年齡各歲別 (全國) 大正三年、大正二年	47
34 乳兒(滿一歲以下)男女別死亡 (地方別) 自明治四十二年至大正三年	48
35 死亡原因別 (全國) 自明治四十三年至大正三年	50
36 死亡者男女及職業別 (全國) 自明治四十三年至大正三年	52
37 死亡者死因月別 (全國) 大正三年、大正二年	53
38 死亡者死因年齡別 (全國) 大正三年、大正二年	55

39	死亡者男女及死因別 (地方別) 大正三年、大正二年	57
40	現住人口五萬以上ノ市區及町別婚姻離婚出生死亡 大正三年、大正二年	65
41	生命表 (全國) (明治四十一年乃至大正二年)	66
42	朝鮮臺灣樺太及國境外ニ於ケル道府縣在籍人ノ婚姻、離婚及生産、死亡 自明治三十八年至大正三年	68
43	渡航地及目的別外國旅券下附人員 (總數、渡航地別) 自明治四十三年至大正五年	69
丙、在外本邦人及在留外國人		
44	外國在留本邦人男女別 大正五年六月末	70
45	外國在留本邦人男女及職業別 大正五年六月末	74
46	本邦在留外國人戶口 (全國、地方別) 自明治三十六年末至大正五年末	80
47	本邦在留外國人國籍別 大正五年末	80
48	本邦在留外國人職業別 (全國、地方別) 自明治四十一年末至大正五年末	81
49	本邦在留各國大使館公使館及領事館人員 自明治四十年末至大正五年末	81

IV. 農 業

50	主要農產物作付反別 (全國) 自明治十一年至大正五年	82
51	主要農產物作付反別 (地方別) 米、麥、粟、蕎麥 大正五年他 大正四年	84
52	主要農產物收穫高 (全國) 自明治十年至大正五年	86
53	主要農產物收穫高 (地方別) 米、麥 大正五年他 大正四年	88
54	主要農產物作付反別一反歩ニ付收穫高 (全國、地方別) 米、麥 大正五年他 大正四年	90
55	養蠶戶數、掃立枚數、產繭高及其價額 (全國) 自明治三十二年至大正五年	92
56	養蠶戶數、掃立枚數、產繭高及其價額 (地方別) 大正五年	92
57	主要果實收穫高 (全國、地方別) 自明治四十一年至大正四年	94

V. 家畜及家禽

58	牛、馬、山羊、綿羊、豚總數及牝牡別並鷄鶩總數 (全國、地方別) 自明治十一年至大正四年	96
59	牛ノ種類及牝牡、種牡牛ノ種類、乳牛 (全國) 自明治十一年末至大正四年末	98
60	馬ノ種類及牝牡、種牡馬ノ種類 (全國) 自明治十一年末至大正四年末	99
61	牛ノ種類及種牡牛ノ種類、乳牛 (地方別) 大正四年末	98
62	馬ノ種類及種牡馬ノ種類 (地方別) 大正四年末	99
63	牛ノ出產、斃死及屠殺頭數 (全國) 自明治三十二年至大正四年	100
64	馬ノ出產斃死及屠殺頭數 (全國) 自明治三十二年至大正四年	101
65	搾乳場、乳牛(二歲以上)搾乳高 (全國、地方別) 自明治三十八年至大正四年	100
66	屠場、屠殺頭數及價額 (全國) 自明治二十七年至大正四年	102
67	屠場、屠殺頭數及價額 (地方別) 大正四年	102
68	家畜市場ニ於ケル家畜ノ交易其ノ一 (全國) 自明治三十八年至大正三年	103
69	家畜傳染病ニ係ル牛馬豚犬發病頭數 (全國) 自明治二十四年至大正四年	104

VI. 山林及狩獵

70	森林及原野面積 (全國、地方別) 自明治三十二年度末至大正四年度末	105
71	保安林所有者及種別 (全國、種別、地方別) 自明治三十二年度末至大正四年度末	106
72	森林植栽反別及伐採價額 (全國、地方別) 自明治三十二年度至大正四年度	108
73	森林被害面積及價額 (全國) 自明治三十二年度至大正四年度	109
74	狩獵免狀下付數 (全國、地方別) 自明治三十二年度至大正四年度	109

VII. 漁業及製鹽

75	漁船數 (地方別) 大正四年末	111
76	水產物ノ品目及數量、價額 (全國) 自明治三十八年至大正四年	112
77	水產物品目別價額 (地方別) 大正四年	114

78	水產製造物ノ品目及數量、價額 (全國) 自明治三十八年至大正四年	118
79	水產製造物品目別價額 (地方別) 大正四年	120
80	水產養殖場數、面積及收穫物價額 (全國) 自明治三十二年至大正四年	123
81	製鹽 (全國、專賣支局別) 自明治三十九年度至大正四年度	123

VIII. 鑛 業

82	鑛種別鑛區及坪數 (全國、鑛種別) 自明治三十二年末至大正四年末	124
83	鑛種別產生鑛區數 (全國) 大正四年末	126
84	鑛種別砂鑛區及其坪數 (全國、鑛種別) 自明治四十三年末至大正四年末	126
85	鑛夫現在人員及其勞役延人員 (全國) 自明治三十二年至大正四年	126
86	鑛物產額及價額 (全國) 自明治三十七年至大正四年	127
87	鑛物產額 (地方別) 大正四年	127
88	鑛山變災死傷人員 (總數、鑛山別、原因別) 自明治三十二年至大正四年	130

IX. 工業及賃金

89	諸官廳直轄工場 (總數) 自明治三十八年度末至大正五年度末	131
90	工場數、使用人員、賃金就業日時及其比例 (全國) 自明治三十三年至大正四年	132
91	工場數、使用職工種類別 (全國) 自明治四十四年至大正四年	134
92	工場數及使用人員 (地方別) 大正四年	137
93	各種工業戶數 (全國) 自明治三十四年至大正四年	138
94	各種工業平均一日從業者 (全國) 自明治三十四年至大正四年	139
95	各種工業生產高 (全國) 自明治三十四年至大正四年	141
96	各種工業戶數 (地方別) 大正四年	143
97	各種工業生產高 (地方別) 大正四年	146
98	製絲戶數及蠶絲生產高 (全國、地方別) 自明治三十三年至大正四年	150
99	綿絲紡績事業 (全國) 自明治三十三年至大正四年	150
100	綿絲紡績事業 (地方別) 大正四年	152
101	織物生產高 (全國、地方別) 自明治三十三年至大正四年	152
102	織物生產高種類細別 (全國) 大正四年	154
103	西洋紙製造工場 (全國、地方別) 自明治四十年至大正四年	154
104	肥料營業者及販賣價額 (全國) 自明治三十九年至大正四年	155
105	發明特許、實用新案登錄、意匠登錄、商標登錄出願數及特許登錄數 (總數) 自明治三十九年至大正四年	155
106	發明特許及實用新案登錄種類別 (總數) 大正四年	155
107	諸備平均賃金 自明治四十四年至大正四年	157
108	諸備賃金 大正四年	158
109	各種賃金指數 自明治三十三年至大正四年	160

X. 外國貿易

110	輸出輸入物品總價額 自明治元年至大正五年	161
111	内外國產別及特別輸出輸入物品價額 自明治三十一年至大正五年	163
112	輸出輸入物品價額國別 自明治四十五年大正元年至大正五年	164
113	輸出輸入物品價額物品種類大別 自明治四十一年至大正五年	166
114	輸出額百萬圓以上ノ品目別價額 自明治四十五年大正元年至大正五年	166
115	輸入額百萬圓以上ノ品目別價額 自明治四十五年大正元年至大正五年	168
116	輸出品目別數量及價額 大正五年	169
117	輸入品目別數量及價額 大正五年	173
118	內國產輸出品國別 自大正三年至同五年	179
119	外國產輸入品國別 自大正三年至同五年	192

表號	頁
120 內國產輸出及外國產輸入物品價額月別 自明治四十年至大正五年	199
121 輸出輸入物品價額港別 自明治四十五年大正元年至大正五年	198
122 船籍別外國往來船舶積載輸出輸入物品價額 自大正三年至同五年	200
123 輸出輸入金銀貨及金銀地金總價額 自明治五年至大正五年	202
124 輸出輸入金銀貨及金銀地金國別 自明治四十五年大正元年至大正五年	202

XI. 內國商業及會社

125 商業會議所 (全國、商業會議所別) 自明治二十四年至大正四年	205
126 株式會社組織ノ取引所 (全國、取引所別) 自明治三十一年至大正四年	206
127 會員組織ノ取引所 (全國、取引所別) 自明治三十一年至大正四年	207
128 米穀取引所賣買高月別 (全國) 自明治二十七年至大正四年	208
129 米穀取引所各月公定相場 (全國、取引所別) 自明治二十七年至大正四年	208
130 物價其一 (東京市、大阪市) 自明治二十年至大正四年	212
131 物價其二 (樞要ナル都市別) 大正四年	214
132 資本金高別會社數及其ノ拂込資本金 (全國) 自明治三十八年末至大正四年末	216
133 營業種類大別會社數、其ノ拂込資本金及積立金 (全國) 自明治三十八年末至大正四年末	218
134 營業種類細別會社數、其ノ拂込資本金及積立金 大正四年末	220
135 地方別資本金高別會社數及其ノ拂込資本金 大正四年末	222
136 地方別營業種類大別會社數其ノ拂込資本金及積立金 大正四年末	224

XII. 產業組合及同業組合

137 各種產業組合 (全國、地方別) 自明治三十三年至大正四年末	226
138 重要物產同業組合及同聯合會 (全國、地方別) 自大正元年末至同四年末	228

XIII. 電氣事業及瓦斯事業

139 電氣事業數 (全國) 自明治三十六年末至大正四年末	230
140 電氣事業ノ原動力別發電力 (全國) 自明治三十六年末至大正四年末	230
141 事業數及其ノ發電力並原動力別發電力 (地方別) 大正四年	232
142 事業別發電所數、發電機箇數及其容量 (全國) 自明治四十年至大正四年末	233
143 電線互長及電線延長 (全國) 自明治三十六年末至大正四年末	233
144 營利電氣事業營業決算期末事業數、資本金及電燈電動機取附箇數 (全國) 自明治三十六年至大正四年	234
145 電氣供給府縣別 大正四年十二月三十一日	234
146 電氣供給事業者別 大正四年	234
147 電氣事業故障災害件數 (全國) 大正四年	238
148 瓦斯事業 (全國) 自明治十三年至同四十三年	238
149 瓦斯供給府縣別 自明治四十四年末至大正五年三月末	238
150 瓦斯供給事業者別 大正五年三月三十一日	240

XIV. 交通

151 道路延長 (全國、地方別) 自明治三十五年末至大正元年末	242
152 橋梁數及其ノ構造種類別 (全國) 自明治三十五年末至大正元年末	242
153 鐵道開業線路及未開業線路 (全國) 自明治五年至大正四年度末	243
154 鐵道停車場、線路、車輛數及走行哩 (總數) 自明治三十一年度末至大正四年度末	244
155 軌道及營業哩、列車走行哩、乘客數及貨物噸數 (經營者別) 大正四年度	244
156 國有鐵道職員 (總數部局別) 自明治四十一年度末至大正四年度末	248
157 私設鐵道及輕便鐵道職員 (總數) 自明治四十一年度末至大正四年度末	249
158 國有鐵道聯絡船舶運輸 大正四年度	249
159 鐵道資本金及營業收入支出 自明治三十五年度至大正四年度	249

表號	頁
160 鐵道事故件數及死傷人員 自明治三十四年度至大正四年度	250
161 電氣鐵道線路、車輛及乘客數 (總數及經營者別) 自明治二十八年至大正四年	250
162 馬車鐵道線路及車輛、馬匹、乘客數 (總數、地方別) 自明治十六年至大正四年	252
163 人車鐵道及汽動車鐵道線路車輛、乘客數 (總數、地方別) 自明治四十年至大正四年	252
164 諸車 (全國、地方別) 自明治三十一年度末至大正五年度末	253
165 河川	254
166 港灣數 (地方別) 大正五年十月一日	255
167 官、公、私設航路標識 (全國) 自明治六年末至大正四年末	256
168 入港船舶數及噸數 大正四年	257
169 噸數階級別汽船、帆船(噸數船)船數及其ノ噸數 (全國) 自明治三十二年末至大正四年末	258
170 石數階級別帆船(石數船)船數及其ノ積石數 (全國) 自明治三十二年末至大正四年末	260
171 登簿汽船及登簿帆船、船質船齡 (全國) 自明治三十四年末至大正四年末	262
172 登簿船異動 (全國) 自明治三十二年至大正四年	262
173 帆船 (石數船) 大正四年十二月三十一日	263
174 小船 (全國、地方別) 自明治三十二年度末至大正五年度末	264
175 造船所數、船渠數及製造船舶 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年	265
176 造船獎勵認許證下付船舶及獎勵金 (總數、造船所別) 自明治二十九年至大正四年度	266
177 海技免狀受有者 (總數) 自明治三十二年末至大正四年末	266
178 遭難船月別及種類別 自明治三十二年至大正四年	267
179 遭難船遭難地別 (總數、地方別) 自明治三十二年至大正四年	268
180 遭難船死傷人員及遭難種類別 自明治三十二年至大正四年	269
181 遭難船被救助及救助人員 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年	269
182 地方海員審判所取扱件數及人員 (總數、審判所別) 自明治三十一年至大正四年	270
183 地方海員審判所裁決件數及人員 (總數、事件種類別) 自明治三十一年至大正四年	270
184 高等海員審判所取扱件數人員及審判別 (總數) 自明治三十一年至大正四年	271
185 高等海員審判所裁決件數人員事件種類別 自明治三十一年至大正四年	271
186 命令航路=屬スル汽船會社資本金船數及運輸 自明治三十二年度至大正四年度	272
187 土木費費途別 自明治三十二年度至明治四十五年大正元年度	272
188 土木費中道路橋梁河川費ノ通常費及災害費別 (全國) 自明治三十四年度至明治四十五年大正元年度	274
189 土木費負擔者別其ノ一 (全國) 自明治三十二年度至明治四十五年大正元年度	274
190 土木費負擔者別其ノ二 (全國) 自明治三十二年度至明治四十五年大正元年度	274

XV. 通信及郵便爲替貯金事業

191 郵便及電信電話局所、函站職員 (總數) 自明治三十五年度末至大正四年度末	276
192 通常郵便線路 (總數) 自明治三十五年度末至大正四年度末	276
193 郵便及電信電話局所 (地方別) 大正五年三月三十一日	277
194 內外國通常郵便物 (總數、地方別) 自明治三十五年度至大正四年度	278
195 外國通常郵便物 (總數、五大洲別、國別) 自明治三十五年度至大正四年度	278
196 內外國小包郵便物 (總數、地方別) 自明治三十五年度至大正四年度	280
197 電信線路 (總數) 自明治三十五年度末至大正四年度末	280
198 內外國發著電報 (總數、地方別) 自明治三十五年度至大正四年度	281
199 外國有料發著電報國別 (總數、五大洲別、國別) 自明治三十五年度至大正四年度	282
200 電話線路 (全國) 自明治三十五年度末至大正四年度末	282
201 電話加入人員及加入區域內外通話度數 (全國、地方別) 自明治三十七年度至大正四年度	283
202 內國郵便爲替振出口數、金額及拂渡口數、金額 (總數、地方別) 自明治三十五年度至大正四年	284
203 外國郵便爲替 (總數、國別) 自明治三十五年度至大正四年度	286
204 郵便貯金、預度數、拂出度數、預人員及預金額 (總數) 自明治三十五年度至大正四年	287
205 同 (地方別) 大正四年	288

206	保管證券受入及拂渡度數人員、額面金高 (總數)	自明治三十五年度至大正四年度	289
207	保管證券受入及拂渡人員額面金高(地方大別)	大正四年度	289
208	郵便振替貯金受拂高 (總數、地方大別)	自明治三十八年度至大正四年度	290
209	郵便取立金受拂口數及金額 (總數、地方大別)	自明治三十五年度至大正四年度	291
210	年金恩給拂渡高給與金口數及金額 (總數)	自明治四十四年度至大正四年度	291
211	年金恩給拂渡高口數及金額 (總數及地方大別)	自明治四十三年度至大正四年度	292
212	郵便電信電話收入 (決算)	自明治四十三年度至大正三年度	292

XVI. 貨幣及度量衡

213	造幣局受領金銀銅地金	自創業至大正五年度	294
214	貨幣鑄造及發行高	自創業至大正五年度	294
215	貨幣鑄造及發行高種類別	自創業至大正五年度	295
216	度量衡器檢定箇數及合格數	自明治三十八年度至大正四年度	296
217	度量衡器需用高	自明治三十八年度至大正四年度	297
218	度量衡器第一種取締成績	自明治三十八年度至大正四年度	298

XVII. 銀行及金融

219	銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (全國、銀行別)	自明治三十二年至大正四年度	300
220	銀行預金、借入金及再割引手形 (全國、銀行別)	自明治三十二年至大正四年度	300
221	銀行貸出金、割引手形及荷爲替手形 (全國、銀行別)	自明治三十二年至大正四年度	302
222	銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高 (全國、銀行別)	自明治三十二年至大正四年度	302
223	銀行諸手形 (全國、銀行別)	自明治三十二年至大正四年度	303
224	日本銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金	自明治三十二年至大正四年度	304
225	日本銀行兌換銀行券發行高準備及交換高 (總數、月別)	自明治三十二年末至大正四年度末	304
226	日本銀行預金	自明治三十二年至大正四年度	304
227	日本銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別	自明治三十二年至大正四年度	306
228	日本銀行割引手形	自明治三十二年至大正四年度	306
229	日本銀行預ヶ金公債證書及金銀在高	自明治三十二年至大正四年度	306
230	日本銀行諸手形	自明治三十二年至大正四年度	307
231	日本銀行割引手形種類別	自明治三十二年至大正四年度	308
232	橫濱正金銀行支店出張所、拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金	自明治三十二年至大正四年度	308
233	橫濱正金銀行銀行券發行高及準備並月別	自明治四十年末至大正四年度末	309
234	橫濱正金銀行預金、借入金及再割引手形	自明治三十二年至大正四年度	310
235	橫濱正金銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別	自明治三十二年至大正四年度	310
236	橫濱正金銀行割引手形	自明治三十二年至大正四年度	312
237	橫濱正金銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高	自明治三十二年至大正四年度	312
238	橫濱正金銀行諸手形 (總數、地方別)	自明治三十二年至大正四年度	312
239	橫濱正金銀行割引手形種類別	自明治三十二年至大正四年度	315
240	日本勸業銀行拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金	自明治三十二年至大正四年度	315
241	日本勸業銀行債券發行高、償還高及年末殘高	自明治三十二年至大正四年度	316
242	日本勸業銀行預金	自明治四十三年至大正四年度	316
243	日本勸業銀行貸付金及割引手形	自明治三十二年至大正四年度	316
244	日本勸業銀行年賦償還貸付金	自大正二年至同四年度	317
245	日本勸業銀行定期償還貸付金	自大正二年至同四年度	317
246	日本勸業銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高	自明治三十二年至大正四年度	317
247	日本勸業銀行手形及種類別	自明治四十三年至大正四年度	318
248	農工銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	318
249	農工銀行本店及拂込資本金積立金、入金、出金、純益金、配當金及交付金 (地方別)	大正四年度	318

250	農工銀行債券發行高、償還高及年末殘高 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	318
251	農工銀行預金及借入金 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	320
252	農工銀行貸付金及割引手形 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	321
253	農工銀行年賦償還貸付金 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	320
254	農工銀行年賦償還貸付金抵當貸信用貸別 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	322
255	農工銀行定期償還貸付金年限別 (全國)	自明治三十三年至大正四年度	322
256	農工銀行定期償還貸付金業體別 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	322
257	農工銀行定期償還貸付金抵當貸信用貸別 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	323
258	農工銀行短期貸付金業體別 (全國)	自明治四十三年至大正四年度	323
259	農工銀行預ヶ金有價證券及金銀在高 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	323
260	農工銀行手形及割引手形種類別 (全國)	自明治四十三年至大正四年度	323
261	北海道拓殖銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金	自明治三十三年至大正四年度	324
262	北海道拓殖銀行債券發行高、償還高及年末殘高	自明治三十八年至大正四年度	324
263	北海道拓殖銀行預金及借入金	自明治三十三年至大正四年度	325
264	北海道拓殖銀行貸付金、割引手形及荷爲替手形	自明治三十三年至大正四年度	325
265	北海道拓殖銀行年賦償還貸付金	自大正二年至同四年度	326
266	北海道拓殖銀行定期償還貸付金	自大正二年至同四年度	326
267	北海道拓殖銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高	自明治三十三年至大正四年度	326
268	北海道拓殖銀行諸手形	自明治三十五年至大正四年度	327
269	北海道拓殖銀行割引手形種類別	自明治三十九年至大正四年度	327
270	臺灣銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金	自明治三十二年至大正四年度	327
271	臺灣銀行銀行券發行高及準備並月別	自明治三十三年末至大正四年度末	328
272	臺灣銀行預金、借入金及信託金	自明治三十二年至大正四年度	328
273	臺灣銀行貸出金及貸付金年末殘高抵當別、割引手形及荷爲替手形	自明治三十二年至大正四年度	330
274	臺灣銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高	自明治三十二年至大正四年度	330
275	臺灣銀行諸手形	自明治三十二年至大正四年度	331
276	臺灣銀行割引手形種類別	自明治三十二年至大正四年度	332
277	朝鮮銀行內地支店及入金、出金、純益金	自明治四十四年至大正四年度	332
278	朝鮮銀行內地支店預金	自明治四十四年至大正四年度	332
279	朝鮮銀行內地支店貸付金	自明治四十四年至大正四年度	333
280	朝鮮銀行內地支店預ヶ金、金銀在高	自明治四十四年至大正四年度	333
281	朝鮮銀行內地支店諸手形	自明治四十四年至大正四年度	333
282	朝鮮銀行割引手形種類別	自明治四十四年至大正四年度	333
283	日本興業銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金	自明治三十五年至大正四年度	334
284	日本興業銀行債券發行高、償還高及年末殘高	自明治三十五年至大正四年度	335
285	日本興業銀行預金、借入金及信託金	自明治三十五年至大正四年度	334
286	日本興業銀行貸付金及割引手形	自明治三十五年至大正四年度	336
287	日本興業銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高	自明治三十五年至大正四年度	336
288	日本興業銀行手形	自明治三十八年至大正四年度	336
289	日本興業銀行割引手形種類別	自明治三十八年至大正四年度	336
290	普通銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	337
291	同 (地方別)	大正四年度	337
292	普通銀行營業組織別 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	339
293	普通銀行預金、借入金及再割引手形 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	338
294	同 (地方別)	大正四年度	340
295	普通銀行貸出金、貸出金年末殘高抵當別、割引手形及荷爲替手形 (全國)	自明治三十二年至大正四年度	340
296	普通銀行貸付金及貸付金年末殘高抵當別 (地方別)	大正四年度	342
297	普通銀行預ヶ金、有價證券及金銀在高 (全國、地方別)	自明治三十二年至大正四年度	343

298	普通銀行諸手形 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年	344
299	普通銀行割引手形種類別 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年	345
300	貯蓄銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (全國) 自明治三十二年至大正四年	346
301	貯蓄銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 (地方別) 大正四年	347
302	貯蓄銀行預金、借入金及再割引手形 (全國) 自明治三十二年至大正四年	348
303	貯蓄銀行預金、借入金及再割引手形 (地方別) 大正四年	348
304	貯蓄銀行貯蓄預金及預金者職業別並預金利子 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年	350
305	貯蓄銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別、割引手形及荷爲替手形 (全國) 自明治三十二年至大正四年	351
306	貯蓄銀行貸付金及貸付金年末殘高抵當別 (地方別) 大正四年	352
307	貯蓄銀行預金、有價證券及金銀在高 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年	353
308	貯蓄銀行諸手形 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年	354
309	貯蓄銀行割引手形種類別 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年	355
310	貯蓄銀行供託高 (全國、地方別) 自明治三十二年未至大正四年末	356
311	擔保附社債信託事業會社數及資本金、積立金 自明治三十五年未至大正四年末	357
312	擔保附社債信託契約年末現在 自明治三十八年至大正四年	357
313	擔保附社債信託契約高 大正四年	357
314	手形交換所手形交換高 (全國) 自明治三十三年至大正五年	357
315	同 (月別) 大正五年	358
316	銀行預金利子高低 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	360
317	銀行貸付金利子高低 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	361
318	銀行手形割引相場高低 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正五年	362
319	外國爲替相場 (全年平均、月別) 自明治三十一年至大正五年	363

XVIII. 保險

320	保險會社 (內國) 資本金、積立金、收入金、支出金及事業ノ狀況 自明治三十四年度至大正四年度	366
321	在本邦外國保險會社事業供託金、收入、支出及事業ノ狀況 自明治三十七年度至大正四年度	370

XIX. 官廳使用現業員共濟組合

322	組合數、組合人員及收入金、支出金並救濟金給與人員總覽 自明治四十年度末至大正五年度末	372
323	其一印刷局現業員共濟組合職名別男女組合員數 自明治四十二年度末至大正五年度末	373
324	收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十二年度末至大正五年度末	373
325	其二鐵道院現業員共濟組合種類別組合員數 自明治四十年度末至大正五年度末	373
326	收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十年度末至大正五年度末	374
327	其三專賣局現業員共濟組合職名別男女組合員數 自明治四十一年度末至大正五年度末	374
328	收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十一年度末至大正五年度末	375
329	其四海軍造船造兵事業現業員共濟組合職名別男女組合員數 自明治四十五年大正元年度末至大正五年度末	375
330	收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十五年大正元年度末至大正五年度末	375
331	其五爲替貯金局及通信官署現業員共濟組合職名別男女組合員數 自明治四十二年度末至大正五年度末	376
332	收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十二年度末至大正五年度末	376

XX. 教育及慈惠

333	罹災救助基金救助費目別 (全國、地方別) 自明治三十五年度至大正四年度	377
334	救濟人員 (全國、地方別) 自明治三十五年至大正四年	378
335	救濟人員救濟事由別年末現員 (全國、地方別) 自明治三十五年至大正四年	380
336	救助金 自明治三十五年至大正四年	38
337	養育棄兒及養育費 (全國、地方別) 自明治三十五年至大正四年	382
338	行旅病人及行旅死亡人 (全國、地方別) 自大正二年至大正四年	383

XXI. 災害

339	水災、潮災及暴風雨被害 (全國、地方別) 自明治三十六年至大正三年	384
340	火災月別 (全國) 自明治三十二年至大正四年	386
341	火災度數及罹災戶數 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年	387

XXII. 衛生

342	醫師、齒科醫、藥劑師、產婆、病院、藥種商及製藥者 (全國、地方別) 自明治二十年未至大正四年末	388
343	九種傳染病患者及死亡者 (全國) 自明治二十年至大正五年	390
344	九種傳染病患者、死亡者 (地方別) 大正五年	390
345	九種傳染病患者季別 (全國) 自明治二十年至大正五年	392
346	第一期種痘人員 (全國、地方別) 自明治四十三年至大正四年度	393
347	第二期種痘人員 (全國、地方別) 自明治四十三年至大正四年度	394
348	種痘人員 (總數) 自明治二十年至大正四年度	395
349	賣藥方數及稅額 (總數) 自明治三十二年至大正四年度	395
350	水道 (全國、地方別) 自明治二十一年至大正四年度	396

XXIII. 教育

351	學齡兒童 (全國) 自明治三十四年度至大正四年度	397
352	學齡兒童就學、不就學ノ別 (全國) 自明治三十四年度至大正四年度	398
353	學齡兒童 (地方別) 大正四年度	398
354	學齡兒童(既ニ就學ノ始期ニ達シタル者)就學不就學ノ別 (地方別) 大正四年度	399
355	不就學學齡兒童 (地方別) 大正四年度	400
356	學齡兒童中盲及聾啞者 (全國、地方別) 自明治三十四年度至大正四年度	401
357	小學校及小學校學級 (全國、地方別) 自明治三十四年度至大正四年度	402
358	小學校教員男女及資格別 (全國) 自明治三十四年度至大正四年度	403
359	小學校教員男女及資格別 (地方別) 大正四年度	404
360	小學校兒童 (全國、地方別) 自明治三十四年度至大正四年度	406
361	幼稚園園數、保姆、幼兒 (全國、地方別) 自明治三十五年度至大正四年度	407
362	盲啞學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國、地方別) 自明治三十五年度至大正四年度	408
363	師範學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國、地方別) 自明治三十一年未至大正四年度	410
364	高等師範學校、女子高等師範學校、臨時教員養成所校數、教員、生徒、卒業生(全國) 自明治三十一年未至大正四年度	411
365	小學校教員檢定合格者 (全國) 自明治三十三年度至大正四年度	411
366	師範學校、中學校、高等女學校教員檢定合格者 (全國) 自明治三十三年度至大正四年度	412
367	中學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國、地方別) 自明治三十二年未至大正四年度	412
368	高等女學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國、地方別) 自明治三十二年未至大正四年度	413
369	實科高等女學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國、地方別) 自明治四十五年大正元年度至大正四年度	415
370	專門學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國) 大正四年度	416
371	專門學校生徒、卒業生 (地方別) 大正四年度	417
372	高等學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國) 自明治二十八年未至大正四年度	417
373	帝國大學校數、講座、教員、學生生徒、卒業生 (全國) 自明治二十六年未至大正四年度	418
374	帝國大學學生生徒學科別 自明治三十六年度至大正四年度	419
375	實業補習學校校數、教員、生徒、修了者 (全國) 自明治三十二年未至大正四年度	420
376	實業學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國) 自明治三十二年未至大正四年度	421
377	徒弟學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國) 自明治三十二年未至大正四年度	423
378	實業專門學校校數、教員、生徒、卒業生 (全國) 自明治三十六年度至大正四年度	423
379	實業補習學校校數、教員、生徒、修了者 (地方別) 大正四年度	424
380	實業學校校數、教員、生徒、卒業生 (地方別) 大正四年度	427

381	徒弟學校校數、教員、生徒、卒業者 (地方別) 大正四年度	430
382	實業專門學校校數、教員、生徒、卒業者 (地方別) 大正四年度	431
383	諸學校本科入學志願者及本科入學者 (全國) 自明治三十八年度至大正四年度	431
384	各種ノ學校校數、教員、生徒 (全國、地方別) 自明治四十一年度至大正四年度	432
385	官公、私立別校數、教員、生徒 (全國) 自明治三十六年度至大正四年度	434
386	諸學校外國人教員、學生及生徒 (全國) 自明治四十四年度至大正四年度	436
387	宮内省所管學習院、同女學部、教員、學生及生徒、卒業者 自大正元年末至大正五年末	436
388	遞信省所管商船學校、教員、學生、卒業者 自明治四十五年度至大正五年度末	437
389	海外官費留學生 自明治四十四年度末至大正四年度末	437
390	市町村立小學校教員月俸平均 (全國) 自明治三十三年度至大正四年度	438
391	府縣、郡、市、町村公學費 (全國、學校別) 自明治三十三年至大正四年度	438
392	府縣、郡、市、町村公學收入 (全國、學校別) 自明治三十三年度至大正四年度	440
393	府縣、郡、市、町村公學資產 (全國、學校別) 自明治三十三年度至大正四年度	440
394	府縣、郡、市町村公學費及公學收入(地方別) 大正四年度	442
395	府縣、郡、市町村公學資產 (地方別) 大正四年度	443
396	教育資金 (全國、地方別) 自明治三十三年度至大正四年度	444
397	市町村立小學校教員加俸資金及同加俸 (全國、地方別) 自明治三十三年度至大正四年度	444
398	市町村立小學校公立實業補習學校教員及公立幼稚園保姆恩給基金及其收入支出(全國、地方別) 自明治三十三年度至大正四年度	445
399	出版圖書種類別 (總數、種別) 自明治三十三年至大正四年度	445
400	新聞紙及雜誌 (全國、地方別) 自明治三十三年至大正四年度	446
401	圖書館 (全國、地方別) 自明治四十年度至大正四年度	447

XXIV. 社 寺 及 教 會

402	神社及神職 (全國) 神社自明治三十五年末至大正五年六月末神職自明治三十五年末至大正四年末	448
403	神社及神職 (地方別) 神社自大正五年六月末神職自大正四年末	448
404	寺院及住職 (全國) 自明治三十五年末至大正四年末	449
405	寺院及住職 (地方別) 大正四年末	450
406	神佛道以外ノ宗教用會堂及講議所等 (全國、地方別) 自明治三十五年末至大正四年末	451
407	管長、教師及非教師、生徒 (全國、宗派別) 自明治三十五年末至大正四年末	452
408	神佛道以外ノ宗教宣布者 (全國、教派別) 自明治三十五年末至大正四年末	453

XXV. 警 察

409	警察官署及其職員 (全國、地方別) 自明治三十二年末至大正四年末	454
410	檢舉犯罪人及其警察犯處罰令犯諸犯則人員 (全國、地方別) 自明治四十二年至大正四年度	456
411	盜難 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年度	458
412	盜難月別 (總數、種別) 自明治三十二年至大正四年度	459
413	被殺害者 (全國) 自明治四十二年至大正四年度	460
414	災害其他ノ事故ニテ死セシ人員 (全國) 自明治四十二年至大正四年度	460
415	自殺者手段 (全國、地方別) 自明治三十二年至大正四年度	460
416	自殺者月別 (全國) 自明治三十二年至大正四年度	461
417	自殺者年齡及因由 (總數、因由別) 自明治三十二年至大正四年度	462
418	自殺者因由 (全國) 自明治三十二年至大正四年度	462
419	警察上賞與及賞詞 (全國、種別) 自明治三十二年至大正四年度	462
420	巡查、警部補退職料、遺族扶助料及其他給與 (全國、地方別) 自明治四十一年至大正四年度	464

XXVI. 裁 判 及 登 記

421	裁判所職員 (全國、裁判所別) 自明治二十三年末至大正四年末	466
-----	--------------------------------	-----

民事裁判		
422	區裁判所取扱件數總覽 (全國) 自明治二十三年至大正四年度	466
423	和解事件件數及其結果 (全國) 自明治二十三年至大正四年度	467
424	和解事件終局件數種類別(全國) 自明治二十三年至大正四年度	468
425	督促事件件數及結果其種類別 (全國) 自明治二十四年至大正四年度	469
426	第一審訴訟件數、其種別及結果 (全國、地方裁判所管轄區域別) 自明治二十三年至大正四年度	468
427	金額又ハ價額 = 見積リ得ヘキ第一審訴訟件數金額別 (全國) 自明治二十三年至大正四年度	472
428	第一審訴訟終局件數種類別 (全國) 自明治二十三年至大正四年度	472
429	戶籍 = 關スル抗告件數及結果 (全國) 自明治三十一年至大正四年度	473
430	區裁判所取扱強制執行件數、其終局件數及執達吏取扱強制執行件數並ニ終局人員及債權額(全國) 自明治二十四年至大正四年度	473
431	家資分散件數其人員及債權額並ニ復權申立件數 (全國) 自明治二十四年至大正四年度	474
432	非訟事件數及其終局件數ノ種別 (全國)自明治三十一年至大正四年度	475
433	地方裁判所取扱件數總覽 (全國) 自明治二十三年至大正四年度	474
434	第一審訴訟件數其種別及結果 (全國、地方裁判所別) 自明治二十三年至大正四年度	476
435	金額又ハ價額 = 見積リ得ヘキ第一審訴訟件數金額別 (全國) 自明治二十三年至大正四年度	477
436	第一審訴訟終局件數種類別 (全國) 自明治二十三年至大正四年度	478
437	控訴件數、其種別及結果 (全國、地方裁判所別) 自明治二十三年至大正四年度	478
438	抗告件數及其結果 (全國) 自明治二十四年至大正四年度	480
439	破產宣告件數、破產種別ノ終局件數及復權申立件數 (全國) 自明治二十七年至大正四年度	480
440	控訴院取扱件數總覽 (全國) 自明治二十三年至大正四年度	481
441	控訴件數、其種別及結果 (全國、控訴院別) 自明治二十三年至大正四年度	482
442	上告件數、其種別及結果 (全國) 自明治二十三年至大正四年度	483
443	大審院取扱件數、其種別及結果 自明治二十三年至大正四年度	484
444	訴訟及和解事件、督促事件、終局件數其種類別 (全國) 大正四年度	485
刑事裁判		
445	刑事事件取扱總件數 (總數) 自明治四十二年至大正四年度	484
446	犯罪搜查事件及豫審終結被告人 (全國) 自明治四十二年至大正四年度	484
447	第一審總件數及總被告人及其終局未終局區分 (全國、地方裁判所管轄區域別) 自明治四十二年至大正四年度	486
448	控訴裁判所控訴受理件數終局、未終局及終局被告人人員 (全國裁判所別) 自明治四十二年至大正四年度	488
449	上告裁判所上告受理件數、終局、未終局及申立人 (全國) 自明治四十二年至大正四年度	489
450	第一審刑法犯有罪被告人罪名別 (全國控訴院管內別) 自明治四十二年至大正四年度	490
451	第一審刑法犯有罪被告人刑名別 (全國、控訴院管內別) 自明治四十二年至大正四年度	490
452	第一審刑法犯有罪被告人罪名及刑名別 (全國) 大正四年度	491
453	第一審刑法犯被告人ノ累犯加重、減輕及免除 (總數罪名別) 自明治四十二年至大正四年度	492
454	第一審特別法犯有罪被告人罪名及刑名別 (總數) 自明治四十二年至大正四年度	492
455	刑事略式事件 (總數) 大正四年度	492
456	刑事略式手續法第三條第六條ノ規定ニ依ル第一審事件 (總數) 大正四年度	493
457	違警罪即決事件 (總數、犯罪別) 自明治四十二年至大正四年度	493
458	各審ニ於ケル判決確定區分被告人 (總數) 大正四年度	493
459	刑法犯有罪確定被告人罪名別及其比例 (總數) 自大正二年至同四年度	494
460	刑法犯有罪確定被告人刑名及其比例 (總數) 自大正二年至同四年度	494
461	刑法犯有罪確定被告人終局區分 (總數) 大正四年度	495
462	刑法犯有罪確定被告人犯罪地 (地方別) 大正四年度	496
463	刑法犯有罪確定被告人犯罪原因、年齡、配偶關係、教育、信教、資產、生計、月別及職業 大正四年度	498
464	刑法犯有罪確定被告人受刑度數 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正四年度	506
465	刑法犯被告人ニ對スル刑ノ執行猶豫及其取消 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正四年度	508
466	特別法犯有罪確定被告人罪名別及其比例 (總數) 自大正二年至大正四年度	509

467	特別法犯有罪確定被告人刑名別及其比例 (總數) 自大正二年至同四年	509
468	特別法犯有罪確定被告人終局區分 (總數) 大正四年	510
469	特別法犯被告人ニ對スル刑ノ執行猶豫及其取消 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正四年	510
470	體刑執行及財產刑執行未執行被告人 (全國、檢事局別) 自明治四十二年至大正四年	511
登記		
471	登記件數及登錄稅 (全國、地方裁判所管轄區域別) 自明治三十八年至大正四年	510
472	土地ノ事由別登記件數 (全國) 自明治三十八年至大正四年	512
473	建物ノ事由別登記件數 (全國) 自明治三十八年至大正四年	513
474	家督相續及賣買ニ因ル土地及建物ノ登錄稅額 (全國) 自明治三十八年至大正四年	514
475	商事會社、產業組合、漁業組合ノ事由別登記件數 (全國) 自明治三十八年至大正四年	514

XXVII. 監 獄

476	監獄及職員(全國、監獄別) 自明治三十二年至大正四年末	515
477	在監人員 (全國、監獄別) 自明治三十二年至大正四年末	516
478	月末在監人 (總數、種別) 自明治三十二年至大正四年	517
479	入監出監人員 (總數) 自明治三十二年至大正四年	518
480	受刑者ノ入監出監 (全國、監獄別) 自明治三十二年至大正四年	518
481	罪名別在監受刑者 (全國) 自明治四十一年至大正四年末	522
482	罪名別在監受刑者ノ比例 (總數) 自明治四十一年至大正四年末	522
483	刑名別在監受刑者 (全國、監獄別) 自明治三十二年至大正四年末	524
484	刑期別懲役在監受刑者及其比例 (總數) 自明治四十一年至大正四年末	524
485	罪名別新受刑者 (全國、監獄別) 自明治四十一年至大正四年	526
486	罪名別新受刑者ノ比例 (總數) 自明治四十一年至大正四年	530
487	刑期別新受刑者 (全國、監獄別) 自明治四十二年至大正四年	532
488	刑期別懲役新受刑者(總數) 自明治四十一年至大正四年	532
489	新受刑者入監時ノ年齡、飲酒嗜好ノ有無、資産ノ關係 (總數、罪名別) 自明治三十二年至大正四年	534
490	新受刑者ノ出生關係、教育ノ有無 (總數) 自明治四十二年至大正四年	536
491	新受刑者ノ養育者 (總數) 自明治四十二年至大正四年	536
492	新受刑者ノ累犯 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正四年	536
493	作業別在監人ノ一日平均作業者及工錢 (總數、作業別) 自明治四十二年至大正四年	538
494	在監人罹病者及其轉歸 (總數、病名別) 自明治四十二年至大正四年	540
495	在監人罹病者 (總數、監獄別) 自明治四十二年至大正四年	541

XXVIII. 陸 軍

496	壯丁身幹度實數 (全國、地方別) 自明治三十四年至大正五年	543
497	壯丁身幹尺度比例 (全國、地方別) 自明治三十五年至大正五年	544
498	壯丁普通教育程度 (全國) 自明治三十四年至大正四年	546
499	各學校教員學生生徒 (總數、學校別) 自明治三十四年末至大正四年末	547
500	憲兵隊人員 (總數、部隊別) 自明治三十四年末至大正五年末	547
501	憲兵取扱犯罪人員 (總數、種類別) 自明治三十四年至大正五年	549
502	衛戍監獄出入人員 (總數) 自明治三十四年至大正五年	548
503	衛戍病院、坪數及職員 (總數) 自明治三十四年末至大正五年三月末	549
504	患者數、治療日數及其轉歸 (總數、部隊別) 自明治三十三年至大正四年	550
505	兵種別患者數、治療日數及其轉歸 (內地部隊及諸學校) 大正四年	552
506	患者數、治療日數及其轉歸(病名別) 大正四年	552
507	新患者所管別 (病名別) 大正四年	554
508	新患者兵種別 (病名別) 大正四年	554
509	新患者月別 (總數、部隊別、病名別) 自大正二年至同四年	555

XXIX. 海 軍

510	軍艦 (總數、艦名別) 自明治三十四年末至大正五年末	556
511	水雷艇 (總數、艇名別) 自明治三十四年末至大正五年末	557
512	海軍軍人 (總數、官職別) 自明治三十四年末至大正五年末	558
513	官衙人員 (總數、官衙別) 大正五年末	558
514	徵兵及募兵 (總數、所管別) 自明治三十四年至大正五年	559
515	各學校教員、學生生徒 (總數、學校別) 自明治三十四年至大正四年	560
516	艦船修理費 (艦名別) 自竣工至大正三年度及大正四年度	560
517	監獄出入人員 (總數) 自明治三十四年至大正五年	563
518	患者所轄別 (總數、所轄別) 自明治三十五年至大正四年	564
519	患者兵種別 大正四年	564
520	患者病名別 大正四年	565
521	新患者及死亡者病名兵種別 大正四年	566
522	新患者及死亡者病名月別 (總數、病名別) 自明治三十五年至大正四年	567

XXX. 財 政

523	歲入歲出 (特別會計歲入歲出ヲ除ク) 自明治十九年度至大正六年度	568
524	歲入經常部 (實數、比例) 自明治十九年度至大正六年度	569
525	歲入臨時部 (實數、比例) 自明治十九年度至大正六年度	570
526	歲出經常部 (實數、比例)(所管別) 自明治十九年度至大正六年度	571
527	歲出臨時部 (實數、比例) (所管別) 自明治十九年度至大正六年度	572
528	歲出總額 (實數、比例) (所管別) 自明治十九年度至大正六年度	573
529	歲入經常部 (款項別) 自大正二年度至同六年度	574
530	歲入臨時部 (款項別) 自大正二年度至同六年度	575
531	歲出經常部 (款項別) 自大正二年度至同六年度	575
532	歲出臨時部 (款項別) 自大正二年度至同六年度	583
533	特別會計歲入歲出 (所管別) 自大正二年度至同六年度	588
534	所得稅納稅人員所得ノ種類第三種所得金額別 (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正五年度	590
535	所得稅ノ原ツク所得ノ種類並第三種所得金額別 (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正五年度	592
536	所得稅所得ノ種類並第三種所得金額別 (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正五年度	594
537	營業稅納稅人員營業種類別 (總數、地方別) 自明治三十六年度至大正五年度	596
538	營業稅稅額營業種類別 (總數、地方別) 自明治三十六年度至大正五年度	596
539	稅關收稅額 (全國、稅關別) 自明治二十三年度至大正五年度	598
540	國債未償還高種類別 (全國、種別) 自明治四十四年度至大正五年度	600
541	國債元利仕拂高 (全國) 自明治三十三年度至大正四年度	600
542	特別資金及官業資本現在高 (全國) 自明治三十六年度末至大正四年度末	602
543	特別資金及官業資本種類別 大正四年度末	602
544	國庫預金、保管金及供託金 自明治三十五年度至大正四年度	603
545	貸付金 (全國) 自明治二十三年度至大正五年度	602
546	貸付金種類別 大正五年度	603
547	國庫支辨ニ依ル府縣經費 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正三年度	604
548	府縣收入 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正三年度	606
549	府縣支出 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度至大正三年度	608
550	郡收入 (決算) (全國、地方別) 自明治三十九年度至大正三年度	610
551	郡支出 (決算) (全國、地方別) 自明治三十九年度至大正三年度	612
552	市及區收入決算 (全國、市區別) 自明治三十六年度至大正三年度	614
553	市及區支出 (決算) (全國、市區別) 自明治三十六年度至大正三年度	616

表號

554 市及區基本財產 (全國、市區別) 自明治三十一年度末至大正三年度末 618

555 町村收入 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度末至大正三年度末 620

556 町村支出 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度末至大正三年度末 622

557 町村基本財產 (全國、地方別) 自明治三十一年度末至大正三年度末 624

558 普通水利組合費收入 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度末至大正三年度末 625

559 普通水利組合費支出 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度末至大正三年度末 626

560 水害豫防組合費收入 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度末至大正三年度末 627

561 水害豫防組合費支出 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度末至大正三年度末 628

562 地方債種類別 (全國) 自明治三十四年度末至大正四年度末 629

563 地方債目的別 (全國) 大正四年度末 629

564 地方債目的別 (全國、地方別) 自明治四十三年度末至大正四年度末 630

565 福災救助基金 (決算) (全國、地方別) 自明治三十六年度末至大正四年度末 631

566 國稅(稅種別)及府縣稅北海道地方稅滯納處分 (全國) 自明治三十六年度末至大正四年度末 632

567 國稅及府縣稅北海道地方稅滯納處分 (地方別) 大正四年度末 632

XXXI. 爵位勳章及褒章

568 有爵人員 (總數、位階) 自明治三十四年末至大正五年末 635

569 有位人員 (總數、族稱別) 自明治三十四年末至大正五年末 635

570 勳章佩用個數及人員 (總數、種類別) 自大正三年末至同五年末 636

571 各種勳章新受領人員 (總數、類別) 自明治三十四年至大正五年 636

572 旭日勳章年金受領年末現在人員及金額 (總數) 自明治三十四年末至大正五年末 636

573 金鷄勳章年金受領年末現在人員及金額 (總數) 自明治三十四年末至大正五年末 638

574 勳章贈與外國人 (總數、國別) 自明治三十四年至大正五年 639

575 外國勳章佩用允許人員 (總數、國別) 自明治三十四年至大正五年 640

576 褒章、褒狀、賞杯、金員、表彰受領者 (總數、賞勳局ノ部) 自明治三十四年至大正五年 640

577 褒狀、賞杯、金員、表彰受領者 (總數、地方廳ノ部) 自明治三十四年至大正四年 641

XXXII. 議員選舉

578 貴族院議員多額納稅者議員互選者 (全國、地方別) 自明治二十三年六月至同四十四年六月 643

579 衆議院議員及選舉有權者 (全國、地方別) 自明治三十五年八月至大正六年四月 644

580 衆議院議員年齡別 (全國、地方別) 自明治三十五年八月至大正六年四月 645

581 衆議院議員職業別 (全國、地方別) 自明治三十五年八月至大正六年四月 646

582 府縣會議員及選舉有權者並投票數 (地方別) 大正四年 647

583 郡會議員及選舉有權者並投票數 (地方別) 大正四年 648

584 市町村會議員及選舉有權者 (全國、地方別) 自明治三十四年末至大正五年末 648

XXXIII. 官吏公吏及恩給

585 文官勅奏判別人員及年俸 (總數、官廳別) 自明治三十四年末至大正五年末 650

586 文官勅奏判別人員部局別 大正五年末 652

587 在外公館官吏細別 (總數) 自明治三十四年末至大正五年末 654

588 武官人員及年俸 (總數、階級別) 自明治三十四年末至大正五年末 655

589 高等官判任官休職人員 (總數、文武官別) 自明治三十四年末至大正五年末 655

590 恩給及扶助料受領年末現在總人員及金額 (其一) 自明治三十四年末至大正五年末 656

591 恩給及扶助料受領年末現在總人員及金額 (其二) 大正五年末 657

592 新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受領シタル人員及其金額 大正五年 658

593 一時賜金受領人員及金額 自明治三十四年至大正五年 659

594 宮內官吏勅奏判別人員及年俸 (總數) 自明治三十四年末至大正五年末 659

595 宮內官吏勅奏判別人員部局別 大正五年末 660

表號

596 府縣名譽職參事會員及府縣吏員人員及年俸 (全國、地方別) 自大正二年末至同五年末 660

597 郡名譽職參事會員及郡吏員人員及年俸 (全國、地方別) 自大正二年末至同五年末 661

598 市町村吏員及市參事會員 (全國、地方別) 自明治三十四年末至大正五年末 660

XXXIV. 北海道

599 地積總覽(全道) 自明治四十四年末至大正四年末 664

600 年期地 (全道) 自明治三十七年首至大正四年末 664

601 移住者 (總數) 自明治五年至大正四年 664

602 移住者職業別 (總數、地方別) 自明治三十一年至大正四年 665

603 土人人口 (全道、國別) 自明治二十一年末至大正五年末 666

604 土人出生死亡 (全道、國別) 自明治二十一年至大正五年 666

605 道外移出入物品價額 自大正二年至同四年 666

XXXV. 朝鮮

606 面積及府郡面 (總數、地方別) 自明治三十九年末至大正四年末 668

607 現住戶數及現住人口 (總數、地方別) 自明治三十九年末至大正四年末 668

608 現住內地人朝鮮人年齡別 (總數) 自明治四十年末至大正三年末 670

609 現住內地人朝鮮人本業有業者戶口 (總數) 自明治四十四年末至大正四年末 670

610 現住內地人朝鮮人婚姻、離婚及出生、死亡 (總數、地方別) 自明治四十年至大正四年 670

611 耕地反別農業戶口 (總數) 自明治四十二年末至大正四年末 671

612 主要農產物作付反別 (總數) 自明治四十二年至大正四年 672

613 主要農產物收穫高 (總數) 自明治四十二年至大正四年 672

614 桑畑反別養蠶製絲戶數及繭生絲產額 (總數) 自明治四十二年至大正四年 673

615 水蔘收穫額及紅蔘製造高 (總數) 自明治四十二年至大正四年 673

616 東洋拓殖株式會社所有地面積及移民戶數並割當反別 (總數) 自明治四十一年末至大正四年度末 673

617 內地人農事經營者 (總數、地方別) 自明治四十四年末至大正四年末 674

618 家畜及家禽現存數 (總數) 自明治四十二年末至大正四年末 674

619 搾乳場乳牛搾乳高 (總數) 自明治四十二年至大正四年 674

620 屠場及屠畜 (總數) 自明治四十三年至大正四年 675

621 林野面積 自明治四十四年六月末日至大正五年五月末日 675

622 漁業戶口 (總數) 自明治四十四年至大正四年 675

623 管內在住者漁獲高種類別 (總數) 自明治四十五年大正元年至大正四年 675

624 稻業及休業鑛區數 (總數) 自明治四十一年末至大正四年末 676

625 鑛物產額 (總數) 自明治四十一年至大正四年 676

626 工場 (總數、種類別) 自明治四十四年至大正四年 677

627 輸出入物品總價額 自明治三十九年至大正五年 676

628 輸移出物品價額國別 大正五年 678

629 輸移出物品種類別 大正五年 678

630 輸移入物品種類別 大正五年 680

631 輸移出入金銀貨及地金國別 (總數、種別) 自明治三十九年至大正五年 681

632 內外國貿易船出入 (總數、國別) 自明治四十年至大正五年 681

633 市場 (總數) 自大正二年至同四年 682

634 鐵道停車場、線路、車輛、列車走行哩及車輛走行哩 (總數、線路別) 自明治四十年度至大正四年度 682

635 鐵道乘客數及貨物延噸哩 (總數、線路別) 自明治四十年度至大正四年度 682

636 航路標識數 (總數) 自明治四十年至大正四年度 683

637 登簿船舶數 (總數) 自明治四十三年度末至大正四年度末 683

638 郵便局所數 (總數) 自明治四十一年度末至大正四年度末 683

639 郵便 (總數) 自明治四十二年度至大正四年度 683

640	電信 (總數) 自明治四十二年度至大正四年度	683
641	電話 (總數) 自明治四十二年度至大正四年度	684
642	內外郵便爲替 (總數) 自明治四十二年度至大正四年度	684
643	郵便貯金 (總數) 自明治四十二年度末至大正四年度末	684
644	郵便貯金預入及拂戻高 (總數) 自明治四十二年度至大正四年度	685
645	銀行 (總數、銀行別) 自明治四十二年至大正四年	685
646	各種銀行預金種類別 (總數、銀行別) 自明治四十二年至大正四年	685
647	各種銀行貸出金種類別 (總數、銀行別) 自明治四十二年至大正四年	686
648	各種銀行爲替受拂高 (總數、銀行別) 自明治四十二年至大正四年	686
649	病院、醫業、藥業、產婆、看護婦等 (總數) 自明治四十四年度末至大正四年度末	687
650	九種傳染病患者死亡者 (總數) 自明治四十一年至大正四年	688
651	種痘 (總數) 自明治四十一年至大正四年	688
652	內地人諸學校、教員、生徒 (總數) 自明治四十四年度末至大正四年度末	689
653	朝鮮人諸學校、教員、生徒 (總數) 自明治四十四年度末至大正四年度末	689
654	內地人諸學校生徒出入 (總數) 自明治四十四年度至大正四年度	690
655	朝鮮人諸學校生徒出入 (總數) 自明治四十四年度至大正四年度	690
656	裁判所職員及辯護士 (總數、法院別) 自明治四十三年末至大正四年度末	691
657	民事訴訟事件 (總數、法院別) 自明治四十四年度至大正四年	691
658	民事第一審訴訟事件種類別 大正四年	691
659	地方法院及同支廳ニ於ケル第一審民事訴訟以外ノ民事事件件數 (總數) 自明治四十四年度至大正四年	692
660	登記事件件數 (總數、地方法院別) 自明治四十四年度至大正四年	692
661	刑事訴訟事件起訴、不起訴及豫審件數 (總數) 自明治四十四年度至大正四年	692
662	刑事訴訟事件取投件數 (總數、法院別) 自明治四十四年度至大正四年	692
663	刑事第一審罪名判決人員 (總數) 大正四年	693
664	監獄出入人員 (總數) 自明治四十三年至大正四年度	693
665	朝鮮總督府歲入歲出 自大正二年度至大正六年度	694

XXXVI 臺灣

666	周圍及面積	698
667	廳別面積 大正四年十一月一日	699
668	現住人口 (總數) 自明治三十三年末至大正四年度末	698
669	現住人口 (地方別) 大正四年度末	698
670	一萬人以上住居スル市街ノ現住人口 大正四年度末	700
671	現住人婚姻及離婚 (總數、地方別) 自明治三十三年至大正四年度	700
672	現住人生產及死產 (總數、地方別) 自明治三十三年至大正四年度	700
673	現住人死亡 (總數、地方別) 自明治三十三年至大正四年度	702
674	現住人死亡者月別 (總數) 自明治四十四年度至大正四年度	702
675	現住人死亡者死因年齡別 (總數) 大正四年	702
676	渡航者及歸航者 (總數) 自明治三十三年至大正四年度	703
677	埤圳 (總數) 自明治四十一年度末至大正五年度末	703
678	田畑 (總數) 自明治三十三年末至大正四年度末	703
679	各種農產物作付面積 (總數) 自明治三十三年至大正四年度	704
680	各種農產物收穫高 (總數) 自明治三十三年至大正四年度	704
681	泥藍及藍錠 (總數) 自明治三十三年至大正四年度	705
682	家畜現存數 (總數) 自明治三十六年度末至大正四年度末	705
683	屠畜 (總數) 自明治三十六年度末至大正四年度末	706
684	森林原野 (總數) 自明治四十年度末至大正四年度末	706
685	甘蔗 (總數) 自明治三十五年度至大正四年度	706

686	製糖所及製糖 (總數) 自明治三十六年度至大正四年度	706
687	製糖價額 (總數) 自明治四十年度至大正四年度	707
688	茶畑作付面積及製茶戶數、製造高並價額 (總數) 自明治四十年度至大正四年度	707
689	樟腦及樟腦油產出高 (總數) 自明治三十三年度至大正四年度	708
690	樟腦賣渡數量及價額 (總數) 自明治四十年度至大正四年度	708
691	製鹽 (總數) 自明治三十五年度末至大正四年度末	708
692	漁獲物價額 (總數) 自明治四十年度至大正四年度	709
693	鑛種別鑛區及坪數 (總數、鑛種別) 自明治三十三年末至大正四年度末	709
694	鑛物產額 (總數) 自明治三十三年至大正四年度	710
695	臺灣、內地(樺太ヲ含ム)間移出物品別價額 大正五年	710
696	臺灣、內地(樺太ヲ含ム)間移入物品別價額 大正五年	711
697	臺灣、朝鮮間移出移入品價額 自明治四十三年至大正五年	713
698	臺灣、內地(樺太ヲ含ム)間移出移入金銀貨、地金及紙幣 自明治三十五年度至大正五年	713
699	輸出及輸入物品價額國別 大正五年	713
700	輸出品目別數量及價額 大正五年	714
701	輸入品目別數量及價額 大正五年	715
702	輸出輸入物品價額各港別 (總數、內外國產別) 自明治三十四年度至大正五年	716
703	輸出輸入金銀貨地金及臺灣銀行券 (總數、種別) 自明治三十四年度至大正五年	718
704	關稅收入額 (總數、港別) 自明治三十四年度至大正五年	718
705	官設鐵道線路、停車場、車輛並列車及車輛走行哩 (總數) 自明治三十三年度至大正四年度	719
706	官設鐵道旅客及貨物 (總數、鐵道線路區間) 自明治三十三年度至大正四年度	719
707	官設鐵道營業收入及支出 (總數) 自明治三十九年度至大正四年度	720
708	官設鐵道死傷人員 (總數) 自明治三十三年度至大正四年度	720
709	私設鐵道線路、列車走行哩、車輛走行哩旅客及貨物 (總數、會社別) 自明治四十三年至大正四年度	720
710	船籍別船舶 (總數) 自明治四十一年末至大正四年度末	721
711	郵便及電信電話局所函 (總數) 自明治三十三年度末至大正四年度末	721
712	郵便線路內外國通常郵便物及小包郵便物 (總數) 自明治三十三年度末至大正四年度末	721
713	內國郵便爲替 (總數) 自明治三十六年度至大正四年度	722
714	郵便貯金 (總數) 自明治四十年度末至大正四年度末	722
715	電信線路及內外國發着電報 (總數) 自明治三十三年度末至大正四年度末	722
716	電話線路及通話度數 (總數) 自明治三十六年度末至大正四年度末	723
717	各種銀行 (總數) 自明治四十年度至大正四年度	724
718	醫院、醫師、醫生、藥劑師、產婆、藥種商及製藥者 (總數) 自明治三十三年末至大正四年度末	724
719	傳染病患者及死亡者 (總數) 自明治三十三年至大正四年度	724
720	種痘人員 (總數、內地人臺灣人ノ別) 自明治三十三年至大正四年度	725
721	原料阿片 (總數、種別) 自明治三十三年度至大正四年度	725
722	阿片烟膏製造高 (總數、種別) 自明治三十三年度至大正四年度	726
723	阿片烟膏吸食特許者及販賣數量及價額 (總數) 自明治四十年末至大正四年度末	726
724	小學校 (總數) 自明治三十九年度末至大正四年度末	727
725	公學校及蕃人公學校 (總數) 自明治三十九年度末至大正四年度末	727
726	中學校、高等女學校、國語學校、醫學校教員及生徒 (總數) 自明治三十九年度末至大正四年度末	728
727	私立學校及書房 (總數) 自明治三十九年度末至大正四年度末	728
728	警察官署及警察官 (總數) 自明治三十九年度末至大正四年度末	729
729	盜難詐欺取財及橫領罪被害件數 (總數) 自明治三十九年度至大正四年度	729
730	犯罪即決人員 (總數) 自明治四十四年度至大正四年度	730
731	火災度數及罹災家屋 (總數) 自明治三十九年度至大正四年度	730
732	火災月別 (總數) 自明治三十九年度至大正四年度	730
733	法院數及職員 (總數) 自明治三十三年末至大正四年度末	731

表號	頁
734 民事第一審訴訟件數 (總數、地方法院別) 自明治三十六年至大正四年	731
735 民事第一審訴訟結果事件種類別 (總數) 自明治三十六年至大正四年	732
736 民事第二審訴訟件數 (總數、地方法院別) 自明治三十六年至大正四年	732
737 民事第二審訴訟結果事件種類別 (總數) 自明治三十六年至大正四年	732
738 登記件數登錄稅手數料 (總數) 自明治三十九年至大正四年	732
739 刑事第一審罪名別受理及處理件數 自明治四十二年至大正四年	732
740 刑事第二審罪名別受理及處理件數 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正四年	733
741 刑法犯及特別法犯刑名及刑量別犯人 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正四年	734
742 在監人員 (總數) 自明治三十九年末至大正四年末	735
743 受刑者出入 (總數) 自明治三十九年至大正四年	735
744 臺灣總督府特別會計歲入歲出 自大正二年度至同六年度	736

XXXVII. 樺太

745 面積 (地方別)	739
746 選定地種別 (總數) 自明治三十八年至大正四年	739
747 農業戶口及耕地反別 (總數) 自明治四十一年度至大正四年度	739
748 貸付地 (支廳、地目別) 大正四年現在	739
749 夏季、冬季現住戶數及現住人口 (總數、地方別) 自明治四十一年六月末至大正四年六月末	740
750 出生 (總數、地方別) 自明治四十年至大正四年	742
751 死亡 (總數) 自明治四十年至大正四年	742
752 農產物作付反別及收穫高 (總數) 自明治四十二年至大正四年	742
753 牛馬豚鷄鶩現存數 (總數) 自明治四十二年末至大正四年末	743
754 林野面積 (總數) 自明治四十三年末至大正四年末	743
755 水產製造物價額 (總數、種別) 自明治四十三年至大正四年	743
756 鑛區及砂鑛區別面積 (總數) 自明治四十四年至大正四年	743
757 鐵道線路列車行走哩旅客貨物收入支出及損益 (總數) 自明治四十一年度至大正四年度	744
758 各港出入汽船及船客、貨物 (總數、著名ナル港別) 大正三年、大正四年	744
759 通信官署職員郵便線路及郵便物引受 (總數) 自明治四十一年度末至大正四年度末	744
760 特殊取扱引受通常郵便物 (總數) 自明治四十二年度至大正四年度	744
761 電信線路、發信、著信及中繼信 (總數) 自明治四十二年度至大正四年度	745
762 電話線路及通話度數 (總數) 自明治四十一年度至大正四年度	745
763 各種銀行預金、貸付金、爲替、荷爲替、割引手形及取立金 (總數) 自明治四十二年至大正四年	745
764 病院 (總數) 自明治四十一年至大正四年	746
765 醫師、藥劑師、產婆、藥種商及鍼灸治(總數) 自明治四十一年至大正四年	746
766 傳染病患者及死亡者 (總數) 自明治四十一年至大正四年	746
767 種痘人員 (總數、回期別) 自明治四十四年至大正四年	746
768 小學校、教員及兒童 (總數) 自明治三十九年度末至大正四年度末	747
769 樺太廳特別會計歲入歲出 自大正二年度至同六年度	747

XXXVIII. 關東州

770 關東州州內面積、人口及屬島數 大正四年末	749
771 現住戶數及現住人口 (總數、地方別) 自明治三十九年末至大正四年末	748
772 現住人口有配偶者無配偶者 (州內州外) 自明治四十二年末至大正四年末	749
773 現住人口職業別 (州內州外) 自明治四十二年末至大正四年末	748
774 現住人結婚及離婚 (州內州外) 自明治四十年至大正四年	750
775 現住人生產死產及死亡 (州內州外) 自明治四十年至大正五年	750
776 現住人死亡者死因年齡別 (總數、病類別) 自明治四十一年至大正四年	750
777 關東州渡航者及歸航者 (州內) 自明治四十年至大正四年	751

表號	頁
778 本邦人渡航者、歸航者ノ職業 (總數) 明治四十年至大正四年	752
779 田畑面積 (總數、地方別) 自明治四十年末至大正四年末	752
780 農產物作付反別及收穫高(州內) 自明治四十年至大正四年	752
781 乳牛及搾乳高 (州內州外) 自大正二年至同四年	753
782 家畜現存數 (州內州外) 自明治四十一年末至大正四年末	753
783 水產製造物價額 (州內州外) 自大正二年至同四年	753
784 製鹽 (州內) 自明治四十一年至大正四年	754
785 石炭探掘高 (州外) 自大正二年度至同四年度	754
786 輸移出入物品價額 (總數、國別) 自明治四十年度至大正四年度	754
787 各港輸移出入物品價額 (州內) 自大正二年至同四年	755
788 入港船籍別 (總數、船籍別) 自明治四十一年至大正四年	755
789 電燈線路需用口數及發電量 (州內州外) 自明治四十二年度至大正四年度	756
790 瓦斯事業 (州內州外) 自明治四十二年度至大正四年度	756
791 鐵道線路、旅客、貨物、手小荷物及車輛 (州內州外) 自明治四十年度至大正四年度	756
792 郵便電信局所、郵便線路及引受通常郵便物、小包郵便物(總數、局所別)(州內州外) 自明治四十二年度末至大正四年度末	757
793 郵便爲替及郵便取立金 (州內州外) 自明治三十九年度至大正四年度	757
794 郵便及振替貯金 (州內州外) 自明治三十九年度至大正四年度	757
795 電信線路及電報通數 (州內州外) 自明治四十年度末至大正四年度末	758
796 電話線路及通話度數 (州內州外) 自明治四十年度末至大正四年度末	758
797 銀行諸手形 (總數) 自明治四十年至大正四年	758
798 各種銀行預金 自明治四十一年至大正四年	759
799 各種銀行貸付金 自明治四十一年至大正四年	759
800 病院 (州內州外) 自明治四十二年至大正四年	760
801 傳染病患者及死亡者 (州內州外) 自明治四十一年至大正四年	760
802 種痘人員 (州內州外) 自明治四十四年至大正四年	760
803 水道 (總數) 自明治四十三年度至大正四年度	760
804 幼稚園及小學校教員生徒 (州內州外) 自明治四十一年末至大正四年末	761
805 諸學校 (總數) 自明治四十二年末至大正四年末	761
806 公學堂 (州內) 自明治四十年末至大正四年末	762
807 盜難、詐欺、恐喝及馬賊、海賊被害件數 (州內州外) 自明治四十年至大正四年	762
808 火災 (總數) 自明治四十年至大正四年	762
809 民事件數及控訴件數 (總數、件名別) 自明治四十年至大正四年	763
810 刑事件數及控訴件數罪名別 (總數、罪名別) 自明治四十年至大正四年	763
811 處刑人員 (總數、刑名別) 自明治四十年至大正四年	764
812 在監人員 (總數) 自明治四十一年末至大正四年末	765
813 在監人出入 (總數、種別) 自明治四十一年至大正四年	765
814 新受刑者罪名別 (總數、罪名別) 自明治四十一年至大正四年	766
815 關東都督府特別會計歲入歲出 自大正二年度至同六年度	766

計數出所目錄

表號

I 土地

1. 內務省元地理局ヨリ報告ノ材料
2. 伊能忠敬著實測錄大圖. 內務省元地理局實測. 朝鮮. 臺灣各總督府年報. 樺太廳報告
3. 伊能忠敬著實測錄大圖. 內務省元地理局實測. 參謀本部ヨリ報告ノ材料
4. 統計局調査
- 5-7. 大藏省ヨリ報告ノ材料

II 氣象

- 8-9. 文部省ヨリ報告ノ材料

III 人口

10. 日本全國人口表. 民籍戶口表. 日本帝國人口靜態統計
- 11-21 民籍戶口表. 日本帝國人口靜態統計及統計局ニ於テ調製シタル諸材料
22. 日本全國人口表. 民籍戶口表. 日本帝國人口動態統計
- 23-40.42. 日本帝國人口動態統計. 日本帝國死因統計
41. 統計局調査
- 43.44.45.49. 外務省ヨリ報告ノ材料
- 46-48. 內務省ヨリ報告ノ材料

IV 農業

- 50.52.55. 內務省勸農局府縣物產表. 農商務統計表
- 51.53.54.56.57 農商務統計表及農商務省ヨリ報告ノ材料

V 家畜及家禽

- 58-69. 農商務統計表

VI 山林及狩獵

- 70-74. 農商務統計表

VII 漁業及製鹽

- 75-80. 農商務統計表
81. 大藏省專賣局年報

VIII 鑛業

- 82-88. 農商務統計表

IX 工業及賃金

89. 各所管廳ヨリ報告ノ材料
- 90-109. 農商務統計表
但シ各年表中酒類酒精. 酒精含有飲料. 醬油ニ關スル事項ハ大藏省ヨリ報告ノ材料

X 外國貿易

- 110-124. 大日本外國貿易年表及同月表

XI 內國商業及會社

- 125-136. 農商務統計表

XII 產業組合及同業組合

- 137.138. 農商務統計表

XIII 電氣事業及瓦斯事業

- 139-147. 遞信省電氣局電氣事業要覽

表號

- 148-150. 農商務省商工局瓦斯事業概覽

XIV 交通

- 151.152.165.166. 內務省土木局統計年報及北海道廳統計書
- 153-163 鐵道院年報
- 164.174. 地方廳ヨリ報告ノ材料
- 167.169-173.175.177-186. 遞信省海事統計類纂
168. 大日本帝國港灣統計
176. 遞信省年報
- 187-190. 內務省ヨリ報告ノ材料

XV 通信及郵便爲替貯金事業

- 191-198.200.201.203.212. 遞信省ヨリ報告ノ材料
199. 遞信省通信統計要覽
- 202.204.205.206-211. 遞信省爲替貯金局統計年報

XVI 貨幣及度量衡

- 213-215. 大藏省年報及同省ヨリ報告ノ材料
- 216-218. 度量衡統計要覽及中央度量衡檢定所ヨリ報告ノ材料

XVII 銀行及金融

- 219-313. 大藏省理財局編纂銀行及擔保附社債信託事業報告及大藏省ヨリ報告ノ材料
- 314.315.319. 大藏省ヨリ報告ノ材料
- 316-318. 官報ヨリ拔載

XVIII 保險

- 320.321. 農商務省保險年鑑

XIX 官廳使用現業員共濟組合

322. 印刷局. 鐵道院. 專賣局. 海軍省. 遞信省ヨリ報告ノ材料
- 323.324. 印刷局ヨリ報告ノ材料
- 325.326. 鐵道院ヨリ報告ノ材料
- 327.328. 專賣局ヨリ報告ノ材料
- 329.330. 海軍省ヨリ報告ノ材料
- 331.332. 遞信省ヨリ報告ノ材料

XX 救育及慈惠

333. 大藏省ヨリ報告ノ材料
- 334.-338. 內務省統計報告

XXI 災害

339. 內務省土木局年報
- 340.341. 內務省統計報告

XXII 衛生

- 342.346-348. 內務省統計報告
- 343-345. 內務省ヨリ報告ノ材料
349. 方數ハ大藏省ヨリ報告. 糖額ハ衛生局年報
350. 內務省統計報告及衛生局年報

XXIII 教育

- 351-386.390-398.401. 文部省統計年報
387. 宮內省ヨリ報告ノ材料
388. 遞信省ヨリ報告ノ材料

表號

- 389. 文部省、外務省ヨリ報告ノ材料
- 399-400. 内務省統計報告
- XXIV 社寺及教會
- 402-403. 内務省統計報告
- 404-408. 文部省統計年報
- XXV 警察
- 409-420. 内務省ヨリ報告ノ材料及内務省統計報告
- XXVI 裁判及登記
- 421. 司法省(職員課)ヨリ報告ノ材料
- 422-444. 司法省民事統計年報
- 445-470. 司法省刑事統計年報
- 471-475. 司法省登記統計年報
- XXVII 監獄
- 476-495. 司法省監獄統計年報
- XXVIII 陸軍
- 496-503. 陸軍省ヨリ報告ノ材料
- 504-509. 陸軍省統計年報
- XXIX 海軍
- 510-522. 海軍省ヨリ報告ノ材料及海軍省年報
- XXX 財政
- 523-582.584-546.562-567 大藏省ヨリ報告ノ材料
- 583. 大藏省ヨリ報告ノ材料及大藏省年報
- 547-561. 内務省統計報告
- XXXI 爵位勳章及褒章
- 568-569. 宮内省ヨリ報告ノ材料
- 570-575. 賞勳局報告ノ材料
- 576-577. 賞勳局ヨリ報告ノ材料及内務省統計報告
- XXXII 議員選舉
- 578-583. 内務省統計報告
- 584. 内務省ヨリ報告ノ材料
- XXXIII 官吏公吏及恩給
- 585-593. 各官廳ヨリ報告ノ材料
- XXXIV 北海道
- 599-602.605. 北海道廳統計書
- 603-604. 北海道廳ヨリ報告ノ材料
- XXXV 朝鮮
- 606-626.633-664. 朝鮮總督府統計年報
- 627-632. 朝鮮貿易年表
- 665. 大藏省ヨリ報告ノ材料及官報
- XXXVI 臺灣
- 666-670.672-740.742.743. 臺灣總督府統計書
- 671. 臺灣人口動態統計
- 741. 臺灣犯罪統計
- 744. 大藏省ヨリ報告ノ材料及官報

表目

表號

- XXXVII 樺太
- 745-769. 樺太廳治一斑及通信統計書
- XXXVIII 關東州
- 770-815. 關東都督府統計書
- XXXIX 奉天
- 816-860. 奉天都督府統計書
- XL 吉林
- 861-905. 吉林都督府統計書
- XLI 龍江
- 906-950. 龍江都督府統計書
- XLII 山東
- 951-995. 山東都督府統計書
- XLIII 河南
- 996-1040. 河南都督府統計書
- XLIV 江蘇
- 1041-1085. 江蘇都督府統計書
- XLV 浙江
- 1086-1130. 浙江都督府統計書
- XLVI 安徽
- 1131-1175. 安徽都督府統計書
- XLVII 江西
- 1176-1220. 江西都督府統計書
- XLVIII 湖北
- 1221-1265. 湖北都督府統計書
- XLIX 湖南
- 1266-1310. 湖南都督府統計書
- L 廣東
- 1311-1355. 廣東都督府統計書
- LII 廣西
- 1356-1400. 廣西都督府統計書
- LIII 雲南
- 1401-1445. 雲南都督府統計書
- LIV 貴州
- 1446-1490. 貴州都督府統計書
- LV 四川
- 1491-1535. 四川都督府統計書
- LVI 陝西
- 1536-1580. 陝西都督府統計書
- LVII 甘肅
- 1581-1625. 甘肅都督府統計書
- LVIII 山西
- 1626-1670. 山西都督府統計書
- LIX 察哈爾
- 1671-1715. 察哈爾都督府統計書
- LX 綏遠
- 1716-1760. 綏遠都督府統計書
- LXI 熱河
- 1761-1805. 熱河都督府統計書
- LXII 遼寧
- 1806-1850. 遼寧都督府統計書
- LXIII 吉林
- 1851-1895. 吉林都督府統計書
- LXIV 奉天
- 1896-1940. 奉天都督府統計書

統計表

表號	表名	頁數
389	文部省、外務省ヨリ報告ノ材料	1
399-400	内務省統計報告	2
402-403	内務省統計報告	3
404-408	文部省統計年報	4
409-420	内務省ヨリ報告ノ材料及内務省統計報告	5
421	司法省(職員課)ヨリ報告ノ材料	6
422-444	司法省民事統計年報	7
445-470	司法省刑事統計年報	8
471-475	司法省登記統計年報	9
476-495	司法省監獄統計年報	10
496-503	陸軍省ヨリ報告ノ材料	11
504-509	陸軍省統計年報	12
510-522	海軍省ヨリ報告ノ材料及海軍省年報	13
523-582.584-546.562-567	大藏省ヨリ報告ノ材料	14
583	大藏省ヨリ報告ノ材料及大藏省年報	15
547-561	内務省統計報告	16
568-569	宮内省ヨリ報告ノ材料	17
570-575	賞勳局報告ノ材料	18
576-577	賞勳局ヨリ報告ノ材料及内務省統計報告	19
578-583	内務省統計報告	20
584	内務省ヨリ報告ノ材料	21
585-593	各官廳ヨリ報告ノ材料	22
599-602.605	北海道廳統計書	23
603-604	北海道廳ヨリ報告ノ材料	24
606-626.633-664	朝鮮總督府統計年報	25
627-632	朝鮮貿易年表	26
665	大藏省ヨリ報告ノ材料及官報	27
666-670.672-740.742.743	臺灣總督府統計書	28
671	臺灣人口動態統計	29
741	臺灣犯罪統計	30
744	大藏省ヨリ報告ノ材料及官報	31